

【憧憬◇ドリーム】



Miyabi

1 捨てられなかった20ページ

ブリキのクルマ、ゼンマイカー、ペダルカー、ミニカー、プラモデル、ラジコンカー、クルマの本、雑誌、カード、コミック、カタログ...etc

クルマ好きの少年なら誰でも、過去にた〜っくさんのクルマのアイテムを持ってましたよね...?

寝る間を惜しんで作ったプラモ...

目を輝かせながら何度も開いた、好きなクルマの雑誌など...

ところが...

あんなにあったクルマのおもちゃ類は、今はどこに...?

気に入ったはずのグッズも、成長と共にしだいに飽きて捨ててしまいました...

捨てたのは、おもちゃだけではない...

『大場モーター』さんでクルマを修理している男達を眺めていると...

「将来俺も整備士になるゾ!!」と...

夢見ていたことを思い出しました...

そう、子供の頃に描いた将来の夢も捨てていたので...

大人になることは夢をあきらめることは、どこかで聞いたセリフです...

確かにそうかも知れない…。

年齢と共に、世の中の現実打ちのめされて、少年の頃の夢を忘れてしまうのでしょうか…。

たった一つ…。

捨てないで保存していたものがあります…。

日本メールオーダー社刊、『モーターカー』の冊子…。

小学5～6年の頃、毎月一冊ずつファイルに綴じていく雑誌でした…。

その『モーターカー』誌で、世界各国の過去現在のクルマを知ることができたので…、

私にとっては、クルマ博士みたいな本でした…。

ほとんど捨てたのに…、

P.1261～P.1280のページだけは、大切にっておきました…。

それには理由があります…。

2 ウルトランのお尻は好きですか

目を閉じて想像して下さい…。

ウルトラマンが、手足を真っ直ぐに伸ばして飛行するポーズを…。

その姿で、最も格好いいのは…、

『ウルトラマンのお尻』だ、と思ってるのは私だけでしょうか…???

優秀なスポーツ選手は、今も昔も、素晴らしい肉体美を備えてることは誰もが認めることです…。

鍛え上げられた筋肉、均整のとれた身体…。

男女問わず、永遠の憧れですね…。

これは、スポーツカーのスタイリングにも当てはまります…。

ポルシェ、フェラーリ、ランボルギーニ…。

スーパーカーをはじめ古今東西、人気があるクルマは流線型…!!!

日本車でも、トヨタ2000GTやフェアレディZ等の人気は、何十年たっても廃れないのは…、

やはり、肉体美が光っているからだと思います…。

私の場合、ロングノーズ&ショートデッキのスタイルが特に好きです…。

さらにリアがス〜ツときてキュッ…、

意味解りますか…??

つまり、いかにも速そうな後ろ姿…、

そう、『ウルトラマンのお尻』みたいな、シェイプアップがイイのです…。

ある日の午後のことでした…。

多賀城市内を自転車でぶらぶらしていると、勇ましいエキゾーストノートがこだましました…。

音の主を捜しましたが、そのクルマは車高があまりにも低すぎてよく見えません…。

信号が替わると、周囲の車両の間から…、

真紅のスポーツカーが姿を現しました…!!!

ロングノーズ&ショートデッキ…。

いかにも速そうな流線型で、誰が見てもスポーツカーと判るでしょう…。

まさにスポーツカーを絵で描いたようなクルマです…。

小学6年の私がしびれるのに多分、1秒とかからなかったはず…。

後ろ姿がまたカッコイイ～。

ボンキュッポンのウルトラマンのお尻です…。

そのお尻に見とれているうちに、クルマはどんどん離れていく…。

私は、無我夢中でペダルを踏みましたが…、

とうとう見えなくなってしまいました…。

あのスポーツカーは、いったい何という名前だろう…!?

あんなカタチ見たことない…。

いや、どこかで見たような…。

そうだ、『モーターカー』誌に載っていたはずだ…!!

私は急いで帰宅しました…。



3 ユリちゃんとNコロ

「おかあさん、ただいまー。」

「おとうさん、おかえりなさい。ごはん、できましたよー。」

「おいしいねー。」

「あらそうー。」

クルマが好きな人なら、きっと子供時代にクルマに関する思い出があると思います…。

私の場合は、忘れることができない…、

幼なじみのユリちゃん…。

そして…、

初めて乗ったクルマ、『ホンダN360Ⅲ』…。

「ビイイイイインンンンン～! ビイイイイインンンンン～!」

ホンダのサウンドって、まるでエレクトーンを奏でてるみたいだな…って私はずっと感じてました…。

ユリちゃんの家はすぐ裏にあって、幼少の頃毎日のように私は遊びに行っていました…。

ユリちゃんは、目がくりくりっとしていて…、

真っ黒なおさげ頭…。

何歳も年下なのに、私よりはるかに活発…。

ままごと遊びではいつもお姉さんのように、遊びの主導権を握っていました…。

「しゅっぱつ、しんこー。」

「しゃしょうはユリで、うんてんしゅはマーくんねー。」

「がたーん。ごとーん。」

「きっぷはいかがですかー。」

マイカーにようやく手が届く時代でしたが、我が家はまだその頃クルマを所有してませんでしたので、家族で出かけるときはいつも電車かバス…。

そんなある日…、

裏のユリちゃんの家からあの音が聞こえてきたのです…。

「ビイイイインンンン〜! ビイイイインンンン〜!」

『ホンダN360III』です…。

ユリちゃんのお父さんが月賦で購入したホンダに、私はユリちゃんと一緒に、あちこちにドライブに連れて行ってもらいました…。

ある時は山に、あるときは海に、ユリちゃんと共に乗せてもらえるのが本当に好きでした…。

そんな楽しい日々に、終わりがやってきました…。

近所が騒がしいのです…。

ユリちゃんが、タクシーにひかれた…!

大騒ぎになりました…。

「うんてんしゅさんはわるくないの…。
とびだしたユリがわるいの…。
だから、うんてんしゅさんをいじめないでね…。」

クルマが大好きだったユリちゃんの、最後の言葉だったそうです…。

それから間もなく、ユリちゃんの家族はどこかの町へ引っ越していきました…。

そして…、

「ビイイイインンンンン～! ビイイイイインンンンン～!」

大好きなホンダ『N360Ⅲ』の音は、もう聞こえなくなりました…。



4 国産車はプラモ・外車はミニカー

ユリちゃんの死でショックを受けた私は...

しばらく誰とも交わず、1人遊びばかりしてました...

元々内向的な性格がますます強くなったのも、幼なじみとの悲しい別れが原因かも知れません...。

小学生の私が1人で遊ぶ玩具は、やはりクルマでした...

ある日、父が生まれて初めてプラモデルを与えてくれました...

『ホンダクーペ』を父と一緒に作ったのを覚えています...

次に、自分で選んで1人で完成させたのが『フェローMAX』...

よく1人で作れたね...と、誉められたのが嬉しかった...

プラモを購入したら完成するまで、寝る間も惜しんで作り続けたものです...

自分でクルマを完成させる、その面白さとリアルさに夢中になりました...

ミニカーも数多く手に入れました...

小さいけれど、金属ボディの質感は良いものです...

『トミカ』もいいけど、忘れられないのは米国産『世界一速いミニカー』というシリーズ...

クルマと道路がセットになったもので、道路は立体的に繋げることができました…。

ミニカーを勢いよく走らせると、円弧状の道路をクルリと1回転したのです…。

小学校の近辺には、文房具店がありました…。

小遣いをもらう毎に、そこでプラモとミニカーをよく買ったものです…。

本当に、クルマバカだったのです…。

6年間で部屋中いっぱいになる程、プラモとミニカーは買って遊びました…。

クルマの形、構造、名前等はプラモとミニカーが大事な教材でした…。

学校の勉強は頭に入らないのに、クルマのことはすぐ覚えられたのは不思議ですね…。

ところで、当時のプラモデルは国産車が圧倒的に多かったようです…。

きっとこれはコンピューターがなかった頃、外車は型を起こしづらかったからではないでしょうか…？

『タミヤ模型』の田宮社長が自らポルシェを購入、分解して寸法を測り、ポルシェのプラモの型を起こした話は有名ですね…。

日本製のプラモデルは、当時も今も技術は世界一なんです…。

一方、日本製のミニカーはどうも華が無い気がします…。

当時の私は、何故か『トミカ』よりも、外国製ミニカーばかり買ってました…。

実際、見たこともない外車ばかりで、異国情緒がプンプンして夢が膨らみました…。

それから、外国製ミニカーの彩色…!

どれもこれも、毒々しいメタリックの贅沢なカラーが魅力的でした…。

何かガイシャって感じ…。

こうして小学生の私は、緻密な日本製プラモデルという教材で国産車を、味わいある外国製ミニカーという教材で外車を学びました…。



5 アメリカンドリーム

アメ車っていうと、どんなイメージですか...!?

『サイズでかい・排気量でかい・ガス大食いしそう・サスがフワフワ・真っ直ぐしか走らなそう・性能低そう・アタマ悪そう...』

こんなところでしょうか...。

最近のアメ車は良くできているのに、未だにイメージが悪いのはどうしてでしょうか...。

かつて高度経済成長時代において、我々日本人が特に影響を受けたのは、豊かなアメリカでした...。

TVに映し出される海の向こうの国の、生活水準の高さに驚いたものです...。

大きな家に、大きなフカフカのソファ...。

でかい冷蔵庫の中には、これまたでかいミルク...。

大きな犬...。

そして...、

バカでっかいクルマ、ステーションワゴン...。

ピックアップトラック...。

TVを通じて見たアメリカ...。

夢のような生活…。

経済的に繁栄した豊かな国は、当時の日本にとって憧れでした…。

コーラ、ハンバーガー、ジーンズ…。

間もなく、アメリカの文化は我々の生活にも押し寄せてきました…。

クルマは…？

子供の頃の私がアメ車がカッコイイと思ったのは、『奥様は魔女』等の海外TVドラマを見てでした…。

特に『白バイ野郎ジョン&パンチ』、『特別狙撃隊SWAT』等のアクションものは好きでした…。

ホコリまみれになりながら、カースタントでボッコボコになっても力強く走り続けるTVドラマの中のアメ車…。

特に60～70年代のマッスルカーは、カッコ良かったですね…。

強いアメリカの象徴…。

丈夫でタフなアメ車に、私は男らしさを感じました…。

『でかい・ガス大食い・サスフワフワ・真っ直ぐしか走らない・性能低い・アタマ悪そう…』

いいんです…。

アメ車はそれで...

当時の日本車よりは、ずっとマシでした...

日本では、オイルショックに公害問題でこの頃のクルマはひどくつまらない代物になりつつあったからです...

やがて、日本中の子供達を巻き込んだ、あのブームがやって来ました...



6 1/28のサーキットの狼

「カウンタックとフェラーリBB、どっちがすごいか!」

「カウンタックだよ!羽根みたいなドアだから」

「フェラーリBBだよ!最高302キロだから」

...こんな白熱した議論のやりとりしませんでしたか...?

30年ほど前に...

日本中に突如巻き起こった『スーパーカーブーム』...

その火付け役は、1975年から『少年ジャンプ』誌に連載が始まった...

池沢さとし氏の『サーキットの狼』です...

当然のようにクルマ好き小学生の私たちは、毎週マンガをむさ掘るように読んだものです...

『サーキットの狼』...

ロータスヨーロップを操る主人公、『吹風裕矢』...

暴走族の中で、彼は一匹狼...

腕の立つ者と、運転技術を競いあう...

若いエネルギーを、クルマに注ぐ日々...

やがてライバル達と共に、公道からサーキットへ舞台を移していく…。

そんな筋書き…。

今なら…、

どうして、暴走族が高価なクルマに乗れるのか…!?

ポルシェのナチマークは、ヤバいんじゃない…!?

…等、気になる点もいろいろありますが…。

その頃小学生の私には、そんなことよりもカッコ良さに、ただただクギ付けでした…。

マンガの影響で、スーパーカーの絵を切り取って下敷に挟んだり、真似て描いたり…。

友達にせがまれて、ノートによく描きましたね…。

スーパーカーが載ってる雑誌も、よく買いました…。

たくさんのクルマの名前や性能を覚えて、クラスの仲間からスーパーカー博士と呼ばれたりしました…(笑)。

ところで…、

『サーキットの狼』のプラモデルも作った記憶がありますが、あれは一回り小さかったんです...。

ロータスヨーロッパ、ポルシェ、ミウラ、カウンタック等が、シリーズで販売されておりました...。

クルマの模型の一般的なサイズは1/24です...。

ちなみに、小学生の私の小遣いで買える位の値段だったので、1/24サイズはよく作りましたね...。

その上のサイズ1/20は、誕生日やクリスマスに買ってもらいました...。

1/16になるとプラモデルの箱がかなり大きくなり、恐れ多くて親にねだりづらかったです...。

さて、『サーキットの狼』シリーズのプラモデルは、確か1/28だったと思います...。

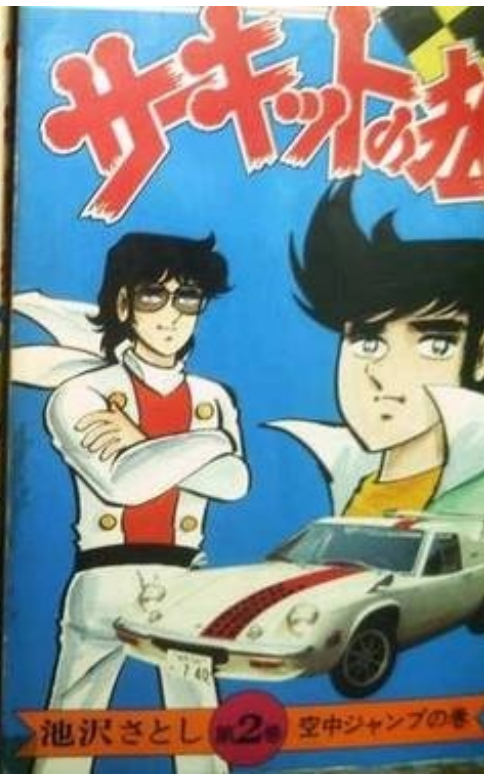
組み立ては比較的簡単でしたが、完成後はこじんまりしていて、他社の1/24のクルマと並べると違和感がありました...。

『サーキットの狼』プラモは、どうして小さかったのか...？

子供向けだから...？

コストを抑えて儲けるため...？

30年以上経った今でも納得できません...(笑)。



7 スーパーカーショーの謎

「好きなスーパーカーは？」と、聞かれたら何と答えましたか...？

...30年前に。

ランボルギーニカウンタック、フェラーリBB、ポルシェ930ターボ、ロータスヨーロッパ、デトマソパンテラ、マセラッティボラ、ミウラ、デイトナ...。

先に、実物を見てから知ったスーパーカーはありますか...？

おそらくどのクルマも、漫画や写真で覚えましたよね...？

当時小6の私の場合は、『サーキット狼』で初めて知りました...。

そして、この漫画をきっかけに巻き起こった『スーパーカーブーム』は社会現象となり、さまざまな雑誌や本にもスーパーカーがとり上げられました...。

まだDVDやネットもない頃...。

ビデオも一般家庭に普及していませんでした...。

そんな時代ですから、スーパーカーを見るには書物が頼りだったのです...。

そこに...少年の心をわしづかみするイベントが間もなく各地で催されました...!

いわゆる、『スーパーカーショー』です...!

カメラ片手に、よく親に連れて行ってもらいました...。

『スーパーカーショー』…、

それは、当時のクルマ好き少年の「楽園」のような世界…!

入園料を払ってから、ワクワクしながら会場に足を踏み入れると…、

そこに、漫画や雑誌でしか見たことがなかった、夢のスーパーカーが展示している…!

ランボルギーニ、フェラーリ、ポルシェ…、どれもピカピカに磨いてあります…。

じっくりクルマを見たり、写真を撮ったりしました…。

あるショーでは、カウンタック1台だけなんて時もありました…。

でも、それでも嬉しかったんです…。

それだけスーパーカーの実物が、お目にかかれる機会は少なかったからでしょう…。

今考えても不思議なのは、デパートの屋上でスーパーカーショーが催されたこと…。

地元の仙台では、藤崎デパートやエンドーチェーンの屋上に、クルマたちがやってきてびっくりしました…。

だって、どうやって屋上に運んだのでしょうか…!?

ショーで撮ったスーパーカーの写真は、友達同士で見せ合っては、あーだのこーだのやりましたね…。

「スーパーカーばかり遊んでないで、勉強しなさいッ!!」

学校の成績が悪いことを気にした母は、ある日私を学習塾に連れて行きました…。

そこで、先生にこう告げたのです…。

「息子は頭が悪いので、小6ではなく小4の授業から教えてやって下さい」…と。

母の言葉を聞いた私は、自分はホントにバカなんだ…と、かなり落ち込みました…。



8 初恋!? 赤いスポーツカーとの出会い

母親の命令で、学習塾に通うことになった小6の私…。

週2度の塾に行く日は、朝から憂鬱でした…。

私の少年時代は受験戦争真っ只中の頃で、いい学校に入るには勉強しなさい…と、

競争のように勉強させられたものです…。

塾には自転車で通いました…。

こぎながら、学校のほかにさらに今から勉強するのかと思うと、ペダルの足取りも重くなりました…。

ただし、少しですが楽しみもありました…。

東北学院大学工学部付近を通過するときだけは別です…。

何故なら…。

時折、あの赤いスポーツカーに会えるからです…!!

初めて見たのは国道でした…。

やがてこの付近でも遭遇することがあったので…、

あのクルマは、きっと多賀城市内の人が乗っているに違いないと思いました…。

今日は見られるかな...?

時刻はpm5:30頃...

あたりは、もう薄暗くなりかけています...

鎮守橋から踏み切りを渡り、多賀城市役所前に近付いた頃...

「ブロロロロロロ.....!!!!」

勇ましい音が近づいてきました...!

そのこだまするエキゾーストノートを聞いただけで、胸が熱くなります...!

背後から迫ってきたその赤いクルマは...

離れていても車高が非常に低く、まるで這いつくばっているかのように見えます...!

正面から見ると、まるで深海魚が口を開けて襲いかかってくるような顔つきです...

もっと言うと、気持ち悪い...!

「ブロロロロロロ.....!!!!」

真横から見ると、コックピットが病的に低い...!

ドライバーはまるでバスタブに浸かっているかの如く寝そべって運転している...!!

人間の体が地面すれすれだ...!

自転車から見下ろして、特に異様に感じるのは、運転手のアタマの位置が低く過ぎて足もとにあるように見える...!

こんなクルマあり...!?

後ろ姿は、すごくカッコイイ...。

ボンキュッボンのウルトラマンのお尻です...。

そのお尻に見とれているうちに、クルマはどんどん離れていく...。

いつも私は、このクルマに見とれていました...。

そして、いつも後ろ姿を追いかけてペダルを踏みました...。

やがて見えなくなるまで、いつまでも目で追いました...。

「ブロロロロロロ.....!!!!」

...あ～行ってしまった...。

その後は、イヤな学習塾に、また重い足取りで踏み出しました…。

いつか、いつか…。

大人になったらあの赤いスポーツカーに乗りたい…!!

私は心の中で誓いました…。

10数年後に、その夢は現実となりました…。

追いかけていた、まさにそのクルマそのものが私の所有物になりました…。

しかし、そこまでに至る間に様々なドラマが巻き起こりました…。

そして、何よりその時間は…、

若い故に起こる、様々な葛藤や悩みの日々だったのです…。



9 タツヤ君とスーパーカー

「弓道部に入ったら？
あなた集団苦手だから。」

中学生になった私に、弓道部を勧めたのは母でした…。

性格を見抜いていたのでしょうかね…。

確かに、根っから個人プレーの男ですから...(笑)。

その弓道部に、タツヤ君がいました…。

彼とはウマが合ったらしく、すぐ友達になりました…。

部活も一緒…。

放課後も、日曜は1日中一緒に遊びました…。

2人ともスーパーカーが大好きでした…。

会えばお互いにプラモを作ったり、ラジコンを走らせたり、クルマの絵を描いたりしました…。

「僕はポルシェターボ!
それに、ランチャストラトスもカッコいいな!
大人になったら絶対乗るんだ!」

タツヤ君の言葉です…。

父から借りたカメラ片手に、スーパーカーショーにも2人で行きました…。

ディーラーの新車展示会も、2人で行きました…。

自分で撮ったクルマの写真を見ながら、2人で語り合ったのが昨日のようです…。

ある時は、自宅の部屋でプラモのスプレー塗装をして、2人一緒にしかられたりしました…。

またある時は、2人で放置車を見つけては、工具片手にパーツを盗み取ったりもしました…。

とにかくクルマの事になると、夢中になり2人で競うように熱くなって語り合っ楽しんでました…。

ただし、気掛かりなこともありました…。

実は、タツヤ君は生まれつき心臓が悪いのです…。

時折、体調を崩して学校を休むことがありました…。

そんなハンディを感じさせない位、タツヤ君は明るく元気で、しかも負けず嫌いな男の子でした…。

ある時、私がサイクリング車を持つと、タツヤ君もうらやましくて、ねだって買ってもらいました…。

ペダルを踏めば、好きな場所へ自由に走れるのが2人は楽しくなりました…。

多賀城市から1時間以上かけて、仙台市内にも2人で度々走りに行きました…。

そのうち、ぎりぎり日帰りで行って来れる、より遠方まで走るようになっていました…。

クルマの興味が次第に薄れてきた私達は、いつの間にかサイクリングの面白さに夢中になっていました…。

そこで…、

夏休みになったら、2人で1泊2日のサイクリングに行こうと…、

極秘の計画を立てることにしました…。



10 タツヤ君とサイクリング

ある夏休みの早朝....、

私は家族に気付かれぬように、そっと起床しました....。

ランドナー(小旅行用サイクリング車)に、フロントバッグを固定するのももどかしく....、

全速で、ペダルを踏み出しました....。

タベはよく寝付けず、目覚まし時計を何度も見ました....。

何故なら....、

今日は、タツヤ君とサイクリングだからです...!

しかも牡鹿半島～金華山へ...!

1泊2日の、かつてない長距離です...!

中3の我々だけでの外泊は、もちろん校則違反なのですが...!

待ち合わせ場所で、タツヤ君と合流しました....。

いよいよ、2人で極秘に計画していた旅が始まったのです....。

多賀城市から松島方面までは順調そのもの....。

2人は早朝の国道を、どんどん進みました....。

松島の景色の良い所で、朝食をとりました…。

「中3になってから、両親が勉強しろ勉強しろと、喧しくなってきたよな～。」

「あ～あ、受験なんてイヤだなあ…。」

そんな話を、お互いしました…。

やがて石巻に入り、さらに牡鹿半島のコバルトラインに差し掛かると道の様子は一変します…。

キツイ登りの連続です…。

2人はギア比を一番軽くして、ひたすら回します…。

坂を一つ越えて、また一つ…。

また坂を越えても、まだまだ登りが続きます…。

気が付くと、タツヤ君はかなり苦しそうです…。

自転車を降りて、彼を待ちました…。

彼が追い付いたらまた先に登り、また止まっては彼を待ちます…。

キツイ坂道の連続、そして真夏の照り付ける太陽…。

想像していた以上に、厳しいサイクリングになりました…。

下り坂は、楽ちんです…。

頬に当たる風の、気持ち良いこと…。

でも、つかの間の下りを楽しんだ後は、また坂、坂、坂です…。

タツヤ君は、相変わらず苦しそうな顔をしていました…。

でも、私に遅れまいと必死についてきます…。

私は、ハッと思いました…。

そういえば…!?

タツヤ君が生まれつき心臓が悪かったのを、思い出したからです…。

大丈夫かな、タツヤ君…。

でも、金華山行き最終の船の時刻が迫っています…。

2人は今まで味わったことのない、厳しい山越えを必死にもがきながら耐えました…。

やがて、予定よりかなり遅れて鮎川港に到着した私達は…、

ギリギリで、金華山行きの船上の人となりました…。

タツヤ君と私は、離れていく牡鹿半島を振り返りながら、感動していました…。

自分の足で、自分の足でここまで来れたんだ…!

その瞬間、私達は山坂の疲労なんかは吹き飛んでいました…。

夏休みが終わり…、

新学期の私達のクラスでは、2人旅がばれて噂になっていました…。

間もなく、担任教師からこっぴどく怒られました…。

私は、坊主頭にされました…。

生徒だけの宿泊は、しかられましたが…、

それ以上に、心臓の悪いタツヤ君を伴ったことが、まずかったようでした…。

でも、あの日の感動は、一生忘れることができない私の心の財産になっています…。

今でも時々、牡鹿半島を通る度に、タツヤ君と自転車で走ったことを思い出します…。

その後、高校受験を数ヶ月後に控えた中3の秋...

衝撃が私を襲いました...

それは...!?



11 夢をドブに捨てた少年の日

「はい、これ...。
タツヤ君の好きな、ランチアストラトス...。
早く元気になって、また遊ぼうよ...。」

タツヤ君は、生まれつき心臓に欠陥を抱えていました...。

これまでも、数日くらい学校を休むことがありましたが、今回は長引いていました...。

私は、差入れのミニカーを親友に手渡ししながら言いました...。

「僕は結局、親の反対を押しきって...、
仙台工業高校にすることにしたよ...。」

もの心ついた頃から、クルマが好きだった私...。

将来はスーパーカーに乗りたいとか、レーサーになりたいと夢見ていました...。

受験に工業高校を選んだのは、就職に整備士やクルマの業界もいいかなと考えたからです...。

「僕も、君と同じ高校を受けたいな。」

「そうだね...。
同じ高校に入って勉強したり、また一緒に遊ぼうね...。」

大学病院を後にした私は、タツヤ君のむらさき色の唇がいつまでも頭から離れませんでした...。

もしかしたら、夏休みの無謀なサイクリングが彼の病状を悪化させたのではないか...

私は罪悪感にさいなまれました…。

それからもう一つ…。

あれだけ熱中していたスーパーカーでしたが…、

中3になって、ようやく現実的ではないことに気付きました…。

雑誌には時々、スーパーカーの所有者のプロフィールが載ります…。

そこには、誰一人としてサラリーマンはいませんでした…。

スーパーカーに乗れるのは、会社の経営者や医者などの高額所得者ばかりでした…。

そもそも、外車すら滅多に目にしない当時の東北地方です…。

ましてや、スーパーカーなど夢のまた夢…。

「サーキットの狼」は、所詮マンガの世界です…。

サラリーマンで狼になった人など、いないのです…。

貧乏な家庭に育ち、田舎町の中学校で成績は真ん中より下の私…。

『大人になったらスーパーカーに乗る』…、

その願望は、現実の前にもろくも崩れ去ったのです…。

来春の高校受験を控え、私はそれまでにない位に勉強しました…。

学習塾の日も多くなり、勉強時間が増えました…。

やがて少しですが、成績が上がりました…。

「ブロロロロ…!!」

相変わらず、塾の時間にはあの赤いスポーツカーを見掛けます…。

「やっぱり、あのクルマもお金持ちが乗ってるのかな…。」

小6の時に見つけた、得たいの知れないあの赤いスポーツカー…。

目撃する度に、ますます親近感が沸きました…。

でも…、

現実の厳しさを知るにつけ、やはり自分には遠い存在でしかなかったのです…。

結局…、

タツヤ君と一緒に高校へ通うことは、ありませんでした…。

彼との最後の会話は…。

「…また…、
…一緒に…、
…自転車で走ろう…、」。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。

病気にうち勝てず…、

タツヤ君はその短い生涯を閉じて、一人寂しく天国へと旅立っていきました…。

タツヤ君のお母さんに、ありがとうありがとうと何度も頭を下げられました…。

次の年…、

私は、それまで大事にしてきたものを全て処分しました…。

スーパーカーの雑誌、本、スーパーカーショーで撮った写真、プラモデル、ラジコン、ミニカー、サーキットの狼…。

クルマと共に、親友タツヤ君との思い出も捨てました…。

でも、どうしても捨てることが出来ずに残したものが残りました…。

「モーターカー」誌のP.1261～P.1280の1冊です…。

なぜなら…、

そこには、あの赤いスポーツカーの記事が載っていたからです…。



12 キットカーはきっと勝つ

高校受験に集中する為、スーパーカーの玩具や書籍類を処分した私でしたが...

1つ、どうしても捨てられない物がありました...

それは...

あの赤いスポーツカーのことが載っていた、日本メールオーダー社刊『モーターカー』誌の一冊です...

赤いスポーツカーとは...

小学6年のとき見掛けて以来、私が憧れていたクルマのことです...

不思議なことにあのクルマのことは、どんなスーパーカーの雑誌にもとり上げられたことがなく...

私の周りに知ってる友人もいません...

それもそのはず...

『モーターカー』誌によると、実はあの赤いスポーツカーは...

滅多にお目に掛かることがない、イギリスの『バックヤードビルダー』による『キットカー』だったからです...!

『バックヤードビルダー』とは...?

文字通り、裏庭工場です…。

非常に規模が小さな町工場で、手造りによりクルマを少量生産するメーカーのことをいいます…。

会社の規模から、エンジンやミッションの自社開発は困難です…。

その代わりに量産メーカーのパーツを流用し、工夫を凝らしたオリジナルボディや独自のシャーシーに組付けて造ります…。

一方、『キットカー』とは？

なんだか、手作りの安っぽいイメージがありますが…、

実は、イギリスでは購入者が自分で組み立てたクルマは、税金が割安になる制度があって…、

それで、以前から数多くの『キットカー』が生まれているのだそうです…。

『バックヤードビルダー』が造る、少量生産の『キットカー』…。

小規模でもアイデアを生かすことにより、大手メーカーに負けないような名車がしばしば生まれているのです…。

当時その『バックヤードビルダー』メーカーを支えていたのは、主にクラブマンレースの素人レーサーだったそうです…。

クラブマンレースとは、1950～70年代のイギリスで盛んに行われていた入門用の草レースのことです…。

そのクラブマンレースに勝つ為に、小さな町工場でユニークなスポーツカーが次々に誕生していききました…。

小排気量で軽量なスポーツカー…。

自分だけのオリジナルのクルマを自分で完成させ、ナンバーを登録する…。

さらにそのクルマに乗ってサーキット場まで行き、ナンバープレートを外しゼッケンを貼ってそのままレースに出場…。

レース終了後は、乗って帰宅する…。

イギリスの古き良き時代に、こんなクルマの楽しみ方があったんです…。

クルマ好きの私には、とっても羨ましく思います…。

一般庶民にとって、アストンマーチンやジャガーといった高級スポーツカーは乗れなくとも…、

バックヤードビルダーのクルマならば、手に入ったかもしれません…。

しかも、流用しているパーツは量産車のものであれば、メンテナンスが楽ですしランニングコストも少なく済むはずです…。

そんなクルマなら…、

スーパーカーの購入が無理な者でも、情熱さえあれば…、

もしかしたら、将来所有できる可能性があるのではないかと…。

あの赤いスポーツカーなら、手に入れられそうな予感がしたのです…。

中3の私は「モーターカー」誌を何度も繰り返し読みながら…、

一度捨てたはずの夢を、一本の細い糸でつなぐような心境でいたのを覚えています…。

いつか、いつか、きっと…。

元々『バックヤードビルダー』からスタートしたので有名なのは、ロータスです…。

他には、ジネッタ、パイパー、ダヴリアン、フェアソープ、ユニパワー、etc…。

そして…、

小6から追いつけた、あの赤いスポーツカーの正体は…。

『MARCOS(マーコス)』 …!!

『マーコス 1600GT』 だったという事が判りました…!!!

『マーコスGT』 …。

当時「マルコス」と呼ばれていたこのクルマも、元々クラブマンレースに勝つことを目的として生まれたメーカーです…。

社長は、元イギリスフォーミュラチャンピオン、「ジェム・マーシュ」…。

設計者は、元航空機の技術者、「フランク・コスティン」…。

この2人の名前を合わせて付けたのが、『マーコス』社です…。

赤いクルマは、「マーコスGT」だった…!

私は胸が熱くなりました…。

さらに『モーターカー』誌には、次のような衝撃的な記事がありました…。

『マーコスGT』は、『木』を使ったスポーツカーとして知られている…!?

まさか、あの赤いクルマが『木』で出来ているのか…!?

にわかには信じられませんでした…。



みであった。フォードV6エンジンにかえてボルボの
4気筒エンジンを搭載する試みがあり、このエンジンは大
量のラジエーターが必要となるので、それをおさめるた
にノーズの底面を下に突きだしたところ、それが空気
抵抗をかえて、ノーズを持ち上げる力を減少させたの
だった。

右はミニ マルコスで細々と生きのこる
上の開発と並行して、合板製モノコック構造から鋼
製ボディフレームへの移行がおこなわれた。マルコス
の鋼製フレーム構造は理論的に決められたもので



13 木で出来た飛べない飛行機 マーコス

小6の時に初めて遭遇した時から、あの赤いスポーツカーに憧れていた私…。

「いつか、きっと乗ってやる…。」

その夢も、サラリーマンではおそらく無理ではないか…。

実現させるには、大人になって社長になろう…。

幼ごころとはいえ恥ずかしながら、私はあのクルマに乗ることを目的に将来の設計を決めていたようです…。

やがて赤いスポーツカーは、イギリスのバックヤードビルダーの一つ、『MARCOS(マーコス)』社の…、

『マーコス1600GT』であることが判明しました…。

そして、何と驚くことに『マーコスGT』は…、

『木』で出来ているらしいのです…!?

何故、こんなクルマが生まれたのか…。

それを確かめるには、『MARCOS(マーコス)』社の歴史を紐とく必要があります…。

『マーコスGT』の設計者は、元航空技師の「フランク・コスティン」です…。

第2次大戦中彼は「デ・ハビランド」社にて、ドイツ国内に唯一爆弾を落とすことが出来た名爆撃

機「モスキート」の設計に携わった経歴を持ちます…。

戦後は「ロータス」社に席を置き、数々のレース用「ロータス」の設計に参加…。

彼は、本格的に航空力学をクルマに応用した人物として知られています…。

「フランク・コスティン」が携わった市販車では、「ロータスエリート」が有名です…。

このクルマは彼のアイデアにより、一切の金属フレームを用ない全て一体化したFRPコンポジット構造で出来ている画期的なもので、「ロータス」の名を一躍有名にしました…。

さらに彼は「デ・ハビランド」社時代に培った『合板』技術と、趣味のボート造りから軽くて丈夫な『合板』の可能性を確信し、それをクルマにも応用しようと練っていました…。

「ロータス」社を去った後、彼は早速クルマを試作します…。

「コスティン」が『合板』で造ったクルマに興味を持ったのが、「ジェム・マーシュ」です…。

「ジェム・マーシュ」はイギリスフォーミュラの元国内チャンピオンで、引退後は「オースチン・セブン」をレース用に仕上げるカスタムカーの会社を経営していました…。

「マーシュ」と「コスティン」の2人は、軽くて丈夫な『合板』を材料にしたクラブマンレースに勝てるクルマを造ることで意気投合…。

「マーシュ」が資金を出して「コスティン」が製造し、間もなく『マーコス1号車』が誕生しました…。

『マーコス』とは、2人の名前を合わせたものです…。

『木』で造ったクルマと聞けば誰しも不安に思われがちですが、そもそもかつての飛行機はどれも『木』で出来ていました…。

『木』といっても、正確には『プライウッド合板』いわゆる『ベニア板』です…。

『ベニア板』は、『木』の繊維が縦横互いに組み合わせてあり、単体でも強度は高いのです…。

『マーコス1号車』は外皮こそFRPですが、中身は360枚以上の『合板』を巧みに組み合わせてエポキシ樹脂で固めた完全モノコック構造でした…。

現在のようなハイテク素材がまだ生まれてなかった時代に、「コスティン」が考案した『飛べない飛行機』は、想像以上に丈夫で驚異的に軽量に仕上がりました…。

ある文献によれば、「コスティン」設計による『合板構造』は強度に優れ、ねじりも少ないとあります…。

しかも、その基本構造の考え方は、カーボンファイバーを使用した現在のフォーミュラカーとかなり近いのだそうです…。

1960年、「コスティン」の弟で「コスワース」社の創始者「マイク・コスティン」の口利きによって、フォードコスワースエンジンを搭載したこの『マーコス1号車』は最初の顧客「ビル・モス」の手により、クラブマンレースに就いて登場しました…。

『マーコス1号車』の走りは素晴らしく、1961年だけでも「ビル・モス」のドライブにより20勝以上の勝利を記録…。

クラブマンレースでは無敵の存在となりました…。

「マーシュ」は間もなく『マーコス』社を設立しました…。

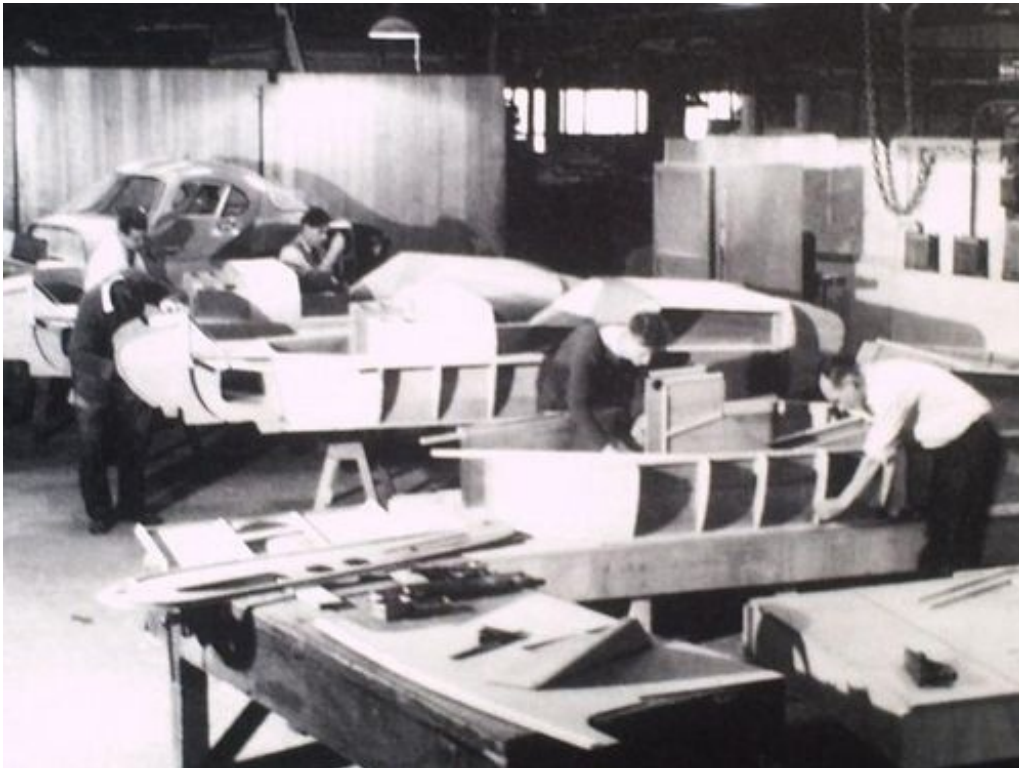
『マーコス1号車』はレースでは無敵だったものの、そのスタイルはお世辞にも美しいといえないもので、醜いアヒルの子と呼ばれていました…。

しかし他車にはない『合板構造』という最大の特徴を武器に、『マーコス』はイギリス草レース界を席卷していきます…。

日本にも第2回日本グランプリに出場、その姿を見せたことがあります…。

アマチュアレーサー達の手に次々と渡る『マーコス』の顧客には、のちに「ロータスF1」を駆ることになる当時まだ無名の「ジャッキー・オリバー」や、アマチュア時代の「ジャッキースチュワート」もマーコスで腕を馴らしていたそうです…。

知名度が上がったのを足掛かりに、社長「マーシュ」は『マーコス』活躍の場を、レース界から次の舞台へと狙っていました…。



14 森から生まれ森に消えた 幻のマーコス

イギリスのバックヤードビルダーの一つ、『マーコス』社の…、

『マーコス1600GT』…。

その名前を聞いたことはあっても、姿を見た人はほとんどない幻の名車です…。

何故、こんなクルマが生まれたのか…。

引き続き、『マーコス』社の歴史です…。

間もなく『マーコス』社は、奇才といわれた「デニス・アダムス」&「ピーター・アダムス」兄弟を迎え入れます…。

彼らは「コスティン」設計のクルマに手を加えて、より『マーコス』を魅力的にしようと試みます…。

これをきっかけに「コスティン」は『マーコス』社を去ります…。

1964年、『マーコス』社の傑作といわれる『マーコス1800GT(後の1600GT)』がデビューします…。

基本構造は相変わらず「コスティン」の『合板』でしたが、ボディデザインは「アダムス」兄弟らしい大胆で堂々としたものに仕上げられました…。

この新しい『マーコスGT』はこの年の「ロンドンモーターショー」の話題を独占、その斬新なカタチは「未来からやって来た」、「70年スタイル」と絶賛を浴びました…。

ジャーナリストからは、「醜いアヒルの子から生まれた白鳥」と呼ばれたそうです…。

ちなみに1964年(干支は龍)は、私が誕生した年ですので親近感を覚えます…。

『マーコス1800GT』は内装も豪華で、まさに高級GTカーに相応しいものでした…。

また性能も素晴らしく、『合板構造』を生かした800kgに満たない軽い車体と、凝ったサスが抜群のロードホールディングを発揮し俊足を誇りました…。

しかし、それまで『マーコス』社を支えていたクラブマンレースのアマチュアレーサー達は次第に『マーコス』から離れていきました…。

何故なら『マーコス1800GT』は、あまりに高価過ぎたからです…。

標準装備のモデルでさえ、この当時の「ジャガーEタイプ」より高いものでした…。

とても、一般の人が手にはいるクルマではなかったようです…。

購入者は豪華さと高性能よりも、そのいかにも速そうなクルマのデザインに魅力を感じて求めていったようです…。

そこで、ボディはそのままに装備を簡素化して、サスも一般的なものに、エンジンは「フォード」製に代えることで価格を抑えたモデルに切り替えました…。

それが、『マーコス1600GT』だったのです…。

実は、このクルマの本当の目的はアマチュアレーサーに売るのではなく、北米にありました…。

特に、アメリカ人が好むデザインにしたといわれています…。

北米進出を睨み…、

やがて『マーコス』社は、それまでの最大の特徴だった『合板』シャーシーを捨て去ります…。

1969年には全ての『マーコスGT』は、『スチール鋼管』を組んだシャーシーに変貌を遂げました…。

その理由はコストです…。

『木』製の車台はコストがかかり過ぎるから、量産向けの『鉄』製の車台に切り替えたのです…。

スチールシャーシーの『マーコスGT』は、契約と同時に納車できるよう大量に船に載せて北米に上陸します…。

ところが、ちょうどその頃厳しくなったクルマの安全基準に引っ掛かってしまい、『マーコスGT』はほとんど販売することなく戻ってきました…。

また、その時期は会社が大きな建物に移ったばかりで、財政難に陥ります…。

1971年、『マーコス』社は倒産に追い込まれます…。

波乱万丈の『マーコス』社は、ここで一時ピリオドを打ちました…。

「アダムス」兄弟がデザインした『マーコスGT』は、1964年から1971年まで6年間に渡り製造されました…。

『合板』モデルが505台、『スチール鋼管』モデルが413台です…。

合わせて僅か918台に過ぎず、イギリス国内でもめったにお目に掛かれない幻のクルマとなりました…。

『マーコスGT』は、この当時の日本にも持ち込まれています…。

輸入されたのは、計4台とありました…。

小6から追い掛けていたあの赤い『マーコス1600GT』は…、

何と、日本に4台の内の1台だった…!!

またしても、中3の私に起こった絶望的な事実でした…。



15 1964年(昭和39年)はどんな年

小学6年のとき遭遇して以来ずっと追い掛けていた、あの赤い『マーコス1600GT』は....、

日本に、たった4台の稀少な1台だった....。

しかも『マーコス』は当初の頃、シャーシーに『合板ベニア』を用いたマシンでレースで活躍した有名なメイクスだった....。

さらに、数ある『バックヤードビルダー』の中でも、『マーコス』はかなり高額で販売されていた....。

あのクルマのことを文献で調べる度に、私は絶望的な気持ちになっていきました....。

高校受験を目前にした当時の私にとって、一時は身近に思えたあの赤い『マーコス1600GT』ですが....、

実際には、現実離れた夢のスーパーカーであり、庶民にはやはり遠い存在だったのです....。

ところで、『マーコス1800GT(後の1600GT)』が発表されたのは、奇しくも私の誕生した年と一緒の1964年(昭和39年)です....。

『マーコス』と私が生まれた年の日本は、果たしてどんな年だったのでしょうか...?

そこを調べてみました....。

【1964年(昭和39年)の出来事】

1/24 日本政府、公共料金値上げの1年間凍結を発表

1/29 第9回冬季オリンピック・インスブルック大会（オーストリア）開幕 日本選手48人参加

2/7 ビートルズが初訪米

3/18 シャープ（当時は早川電機）がトランジスタを、ソニーがダイオードを用いた電子式卓上計算機を完成と発表

4/1 日本人の海外観光渡航自由化 ただし年1度、所持金500USドルまでの制限付き

5/27 富士スバルライン開通

6/16 「新潟地震」発生 死者26人

9/16 気象庁富士山レーダー完成

10/1 東海道新幹線開業

10/10 第18回東京オリンピック開催 94カ国 5541人の選手が参加

10/25 池田勇人首相、東京オリンピック閉会式の翌日に辞意表明 後継に佐藤栄作を指名

銀座に大勢の若者がたむろする「みゆき族」出現

ノースリーブニットウェア流行

羽田ー浜松町間にモノレール開通

平凡パンチ創刊 ガロ創刊

<歌謡曲>

恋のバカンス(ザ・ピーナッツ)

自動車ショー歌(小林旭)

幸せなら手をたたこう(坂本九)

アンコ樁は恋の花(都はるみ)

皆の衆(村田英雄)

<テレビ番組>

大河ドラマ

赤穂浪士

忍者部隊月光

ひょっこりひょうたん島

愛と死をみつめて

逃亡者

題名のない音楽会

そっくりショー

クルマ好きならご存じだと思いますが、西風先生の『GTロマン』という漫画があります…。

その中に、『ミニマーコス』というクルマが登場します…。

正確には後継車の『ミニジェム』なのですが、この漫画は世間の人々に『マーコス』の名前を広めた貴重な作品だと思います…。

この回のストーリーでは、2台のロータススーパー7の傍若無人ぶりに手を焼くクルマ仲間達に代わり、『ミニマーコス』がヒルクライムレースでスーパー7に勝つヒーローとして描かれています…。

このミニマーコスとは、「モーリス・ミニ(BMC ミニ)」のコンポーネントパーツを使って作るキットカーです…。

1966年に登場した『ミニマーコス』は、主力の『マーコス1600GT』が豪華で高価になりすぎた為に離れたアマチュアレーサー達を繋ぎ止める目的で生まれました…。

『ミニマーコス』は、「フランク・コスティン」に学んだFRPとモノコック技術を生かし、極めて軽量しかも空力に優れているのが特徴でした…。

ユニークなのは、『ミニマーコス』は100%キットカーだったということです…。

すなわち、完成車の『ミニマーコス』は1台も無いのです…。

全て、バラバラのパーツ販売のみだったのです…。

「モーリス・ミニ(BMC ミニ)」については説明は必要ないと思いますが、愛すべきイギリスの国

民車です…。

この新車あるいは中古の「モーリス・ミニ」を1台用意したら、主要パーツを外します…。

それを『ミニマーコス』のボディに移植すれば、自分だけのスポーツカーが出来上がりという訳です…。

これがイギリスの若者に大ヒット…。

次々と様々に工夫を凝らしたオーナー自慢の『ミニマーコス』が作られました…。

『ミニマーコス』初期のモデルは、完成車で約500kg台の超軽量に仕上がったようです…。

仮に70psのエンジンを載せれば、1.5トン車の210psに相当する訳ですから、その走りは想像できると思います…。

この『ミニマーコス』は早くも1966年のル・マンに出走、最下位ながら英国車で唯一完走を果たしています…。

「ミニ」のパーツを生かしたキットカーは古今東西様々あったようですが、その中でも『ミニマーコス』は成功した一つとされています…。

本来主役だったはずの『マーコス1600GT』は、短い生涯で幻の名車となりましたが…、

一方の『ミニマーコス』は、『マーコス』社倒産後も「ジェムマーシュ」社長がキット販売を続け…、

『マーコス』社復活後の1992年まで、『ミニマーコス』は細々ながらも長い間マニアの手に渡りました…。

この様な経緯から『マーコス』といえば『ミニマーコス』の知名度が高いのです…。

(Courtesy Photo Berou-Le Mans)



.....and how it looked afterwards

17 懐かしのクルマ広告クイズ

『マーコス1600GT』が発売になった頃は、どんな世の中だったのでしょうか…?

今回は、昭和40年発行の『CARグラフィック』誌1965.9号に掲載された、ある国産車の広告をクイズ形式で再現します…。

それでは問題です…。

「次の広告のキャッチフレーズから、製造メーカーと車名を当てて下さい。」

【第1問目】

「〈軽〉です ○○○です」

「サラリーマンの乗用車・6つの条件」

条件1:自動車税は年4500円を越さないこと

条件2:めんどろな車検がないこと

条件3:車庫を必要としないこと

条件4:高速ドライブに強いこと

条件5:乗り心地がソフトであること

条件6:維持費が家計の負担にならないこと

■最高速度…100km/h

■燃料消費量…28km/l

●スタンダード…¥357,000

●デラックス…¥382,000

空冷2サイクル・360cc・20馬力・軽免許

【答え】

富士重工

『スバル360』

...当たりましたか？

この時代のサラリーマンにとって、クルマは高値の花だったのでしょう...

それから軽自動車には、まだ車検制度が無かったのでしょうか...？

スバル360は可愛いですよ...!

それでは次の広告です...

【第2問目】

「馬力当たり重量8.55kg」

「飛燕のワザ」

0→発進

0→100m 7.0sec

0→200m10.9sec

0→400m17.0sec

125馬力の強力エンジン。

これに対して車体重量は1馬力当たりわずか8.55kg

欧州のコルチナ・ロータス、アルファ・ロメオにも匹敵する数値です。

この身軽さが、発進に...

一瞬の追い抜きに鋭い加速を展開します。

最高速も180km/と国産ずいー。

車に考えられるあらゆる極限性能が楽しめます。

□性能=SS1/4マイル17.0秒 最高速度180km

□エンジン=OHC・6気筒・2000cc・125馬力。

ウェーバー・スリー・キャブ付

価格=901,000円

【答え】

プリンス自動車工業株式会社
『プリンススカイライン2000GT』

...すぐ判りましたか？

高性能をこれでもかとアピールしていたんですね...。

当時ウェーバー3連装はびっくりしたでしょうね...。

スカG伝説の始まりですね...!

それでは次の広告です...。

【第3問目】

「日本初の《ハードトップ》
個性で乗るグランド・ツーリング登場!」
センターピラーのない流麗なスタイル。
ダイナミックな性能。
パーソナル・カーにふさわしい豪華さ。
エンジンは1600cc90馬力。
ミッションは前進4段フロアシフト。
0→400m18.6秒の鋭い加速と、最高速度160キロを生む高性能車です。

豪快な高速ツーリングが、痛快なヒル・クライムが、思いっきり楽しめます

〈新発売〉

1600cc・90馬力・4人乗り

最高級グランド・ツーリング

【答え】

トヨタ自動車工業株式会社

『コロナハードトップ1600S』

...難しかったでしょうか？

国産初のハードトップはコロナだったんですね....。

上質をアピールするところがトヨタらしいですね....。

それから、この時代は必ず最高速度が発表されていたのですね....。

それでは最後の広告です....。

【第4問目】

「速く

確実に

安全に!」

エンジン技術の最高峰をゆく

4キャブ・DOHC

全輪独立懸架の確実なロードホールディング

強くバランスのよいボディーで

すぐれた安全性と耐久力

606cc・57馬力/8500rpm・最高速度145km/h・加速18.7秒/0～400m

全国統一現金正価513,000円

【答え】

本田技研工業株式会社

『ホンダS600』

...これはすぐ答えが判りましたよね...

4キャブDOHCは後にも先にもホンダSだけです...

まるでバイクのスペックですね...

頑張れば高性能車が庶民にも手に入りそうな価格が魅力だったのでしょよね...

馬力当り重量8.55KG



飛燕のワザ

125馬力の強力エンジン。これに対して車体重量は1馬力当りわずか8.55kg。欧州のボルチナ・ロータスアルファ・ロメオ・ジュリアTISにも匹敵する数値です。この身軽さが、発進に瞬時の道抜きに鋭い加速を展開します。最高速も180kmと国産ずいー。車に考えられるあらゆる極限性能が楽しめます。

■性能=SS1/4マイル7.0秒。最高時速180km

■エンジン=OHC・6気筒・2000cc・125馬力。ウェーバー・スリーキャブ付

■ルーム感覚=タコメーター。木製ナルチ・タイプ

18 人生の分岐点がキター!

人生には必ず、幾度となく分岐点があります…。

皆さんも多分そうだと思いますが、私の場合は生まれて最初の大きな分岐点が高校進学でした…。

文字通り人生の進路を決める訳ですから、いつの時代も目指す学校の選択は難しいものです…。

私が入学したのは…、

地元では就職高校で有名な、『仙台工業高校』の『機械科』でした…。

クルマや機械が好きな私が、本当に入りたかった高校に進学出来た訳です…。

この仙台工高では機械全般の他に、クルマのメカニズムに関する授業もあるので、将来クルマの業界へと夢みていた私にとって願ってもないような授業内容の学校でした…。

それから、もう一つ楽しみにしていたのが…、

クラブ活動です…。

工業高校らしく、『自動車部』というクラブがあったのです…。

クルマに実際に乗れたり、触れたりいじったりすることで、自動車のメカの勉強が出来る自動車部がある…!

もの心ついた頃からクルマが大好きだった私が、このクラブに関心を持たないはずがありません…。

入学して間もないある日…、

クラブ活動見学にて『自動車部』を拝見した際、直ぐにでも入部しようと考えていました…。

はやる気持ちを抑えながら、放課後さっそく『自動車部』に顔を出しました…。

ところが、機械科実習棟の奥にある『自動車部』の部屋の前には、すでに新入生達が大勢集まっていた…。

そこにはナンバーが付いてないカローラや、錆びだらけの古そうなクルマが数台並んでいました…。

そして数人の先輩らが自慢げにそれに乗ってみせたり、ボンネットに顔をのぞき込んでエンジンを整備しているのです…。

その時の私は…、

(こんなに部員がいたら、自分がクルマに触れる時間は少ないのではないか…?)

…といった気持ちでした…。

あれほど楽しみにしていた筈のクラブでしたが…、

私は何故か入部せず、『自動車部』を後にしてしまいました…。

そしてその帰り足で、あるクラブに立ち寄ったのです…。

次の瞬間、私は目の前の光景にクギ付けになっていました…。

「カッコいいな...!!」

私の心に、最初に去来した印象はこれでした....。

そこでは....、

土木科実習棟と建築科実習棟に挟まれたエリアで、数人の選手がきれいな直立不動の姿勢でプレイしていました....。

生まれて初めて見たそのスポーツの、その格好良さに私はまさに心を奪われてしまったのです...。

間もなく、1人の上級生が私に声を掛けました....。

「君、ウチのクラブに入ってみないかい？」

「は、はい...!!
入ります...!!」

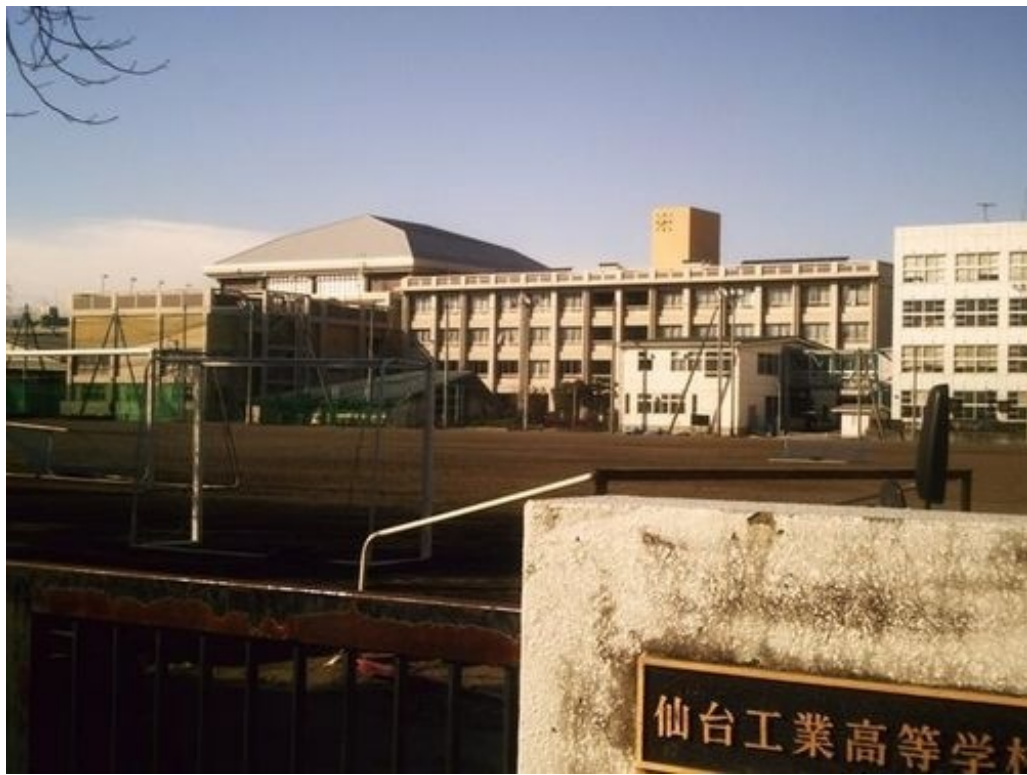
呆れたことに、躊躇もせず即答してしまったのです....。

ほんの数十分前まで、『自動車部』に入ると決めていた私の気持ちを、急激に変えたクラブ活動....。

あれほど好きだったクルマより、私の心を瞬間的に揺すり動かしたスポーツ....。

それは....、

『アーチェリー』でした....。



19 スポ根!!

私の生まれた昭和39年は、東京オリンピック開催の年です…。

その影響でしょうか…。

しばらくの間、日本中がスポーツブームに沸いていました…。

テレビをつければ「巨人の星」、「アタックNo.1」さらに、「柔道一直線」、「金メダルへのターン」など…、

アニメもドラマも、スポーツ根性もの…、

略して『スポ根』もの、ばかりが放映されていました…。

そんなスポ根番組を見てきたのが、私達の世代です…。

(いつか自分も、スポーツ選手になりたい…。)

実は、この私の心の底にも、スポーツへの憧れがあったのです…。

私が入学した仙台工業高校には、当時の宮城県の高校には珍しい『アーチェリー』部がありました…。

その弓を射つ先輩の、姿の格好良いこと…!

(自分もアーチェリーをやりたい…!)

(こんなスポーツをやってみたかったんだ…!)

...と、そんな気持ちになって、アーチェリーを生まれて初めて見たその日に入部を即決した私でした...

新入部員は私を含めて12人が入部しました...

もちろん全員がアーチェリーは初めてです...

唯一、私だけが中学で弓道をやっていたのです...

弓道は的中より作法を重んじており、勝敗より精神鍛練を目的に行われる武道です...

茶道や花道に近いものです...

一方、アーチェリーはオリンピックの種目にもある、純粋なスポーツです...

基本動作はおろそかに出来ませんが、ルール内であればどんな射ち方でも自由です...

的中した得点によって、誰でも納得してハッキリと勝敗が決まるスポーツです...

弓道に比べて、矢を射つ本数も多く競技時間も長いので....、

見た目とは違って、思ったよりも結構キツイのがアーチェリーなのです...

そんなアーチェリーを入部したばかりの1年生が、直ぐやらせてもらえるはずがありません...

当然の様に「基礎トレ」が待ってました...

毎日毎日、来る日も来る日もトレーニングです...

学校の周りをランニング5周、腕立て100回、腹筋各100回、うさぎ飛び、ワニ歩き、肩ぐるま、壁立て逆立ち、etc....。

キツくて数人が退部していましたが、私達仲間は必死に耐え続けました....。

何故か....。

それはきっと、子供の頃のスポ恨の影響でしょう....。

スポ恨ドラマのシナリオは....、

鬼コーチのキツイ練習に耐え続ける主人公....。

やがて選手に抜擢される....。

数々の試合で体と精神が鍛え上げられる....。

力と技が磨かれる....。

最後にそれまでの苦労が報われ、汗と涙で輝かしい勝利を掴む....。

(ドラマの主人公のように、自分もなりたい...!)

そんな気持ちで取り組んでいた、アーチェリー部1学年の春でした....。



20 恐怖の素引き練習

アーチェリーの練習方法の一つに、『素引き』というのがあります…。

『素引き』とは、矢をつがえないで弓を引くことです…。

弓をフルドローまで引いたら、また元の状態まで戻すのです…。

ただそれだけの動作なのですが、これが結構キツイ…。

1回だけならともかく、『素引き』を何十回と連続して繰り返すのは、容易ではないのです…。

例えるなら重量挙げです…。

掴んだバーベルを、何度も上げ下げするようなものです…。

ここで、アーチェリーの基本動作を少しご説明致します…。

左腕は『押し手』と呼びます…。

左手を弓のグリップに添えたら、ひじを伸ばしておきます…。

弦を引く腕は、『引き手』と呼びます…。

右手の3本指の第1関節に、弦を掛けます…。

次に、弓を少し引いたままで、弓を肩の高さまで持ち上げ、押し手の肩をしっかりと固定しておきます…。

押し手は的方向に押し込むように、また引き手は右ひじを背中に回すようにして弓を引くのです…。

アーチェリーの基本動作は、コツを掴めば難しくはありません…。

しかし、初心者はどうしても腕の筋肉に頼って引こうとします…。

ですから、初心者が『素引き』を何十回も連続するのは、かなりシンドイのです…。

当時の私達1年生に待っていたのは、仙台工業高校アーチェリー部伝統の、『恐怖の素引き練習』でした…。

弓を構えた1年生全員が一行に並んで、先輩の号令を合図に一齐に『素引き』をします…。

全員同時に弓を引いたまま10秒間静止させられるのですが…、

その間に、先輩達はフォームが悪い部分を、矢の先で容赦なくつつ突くのです…。

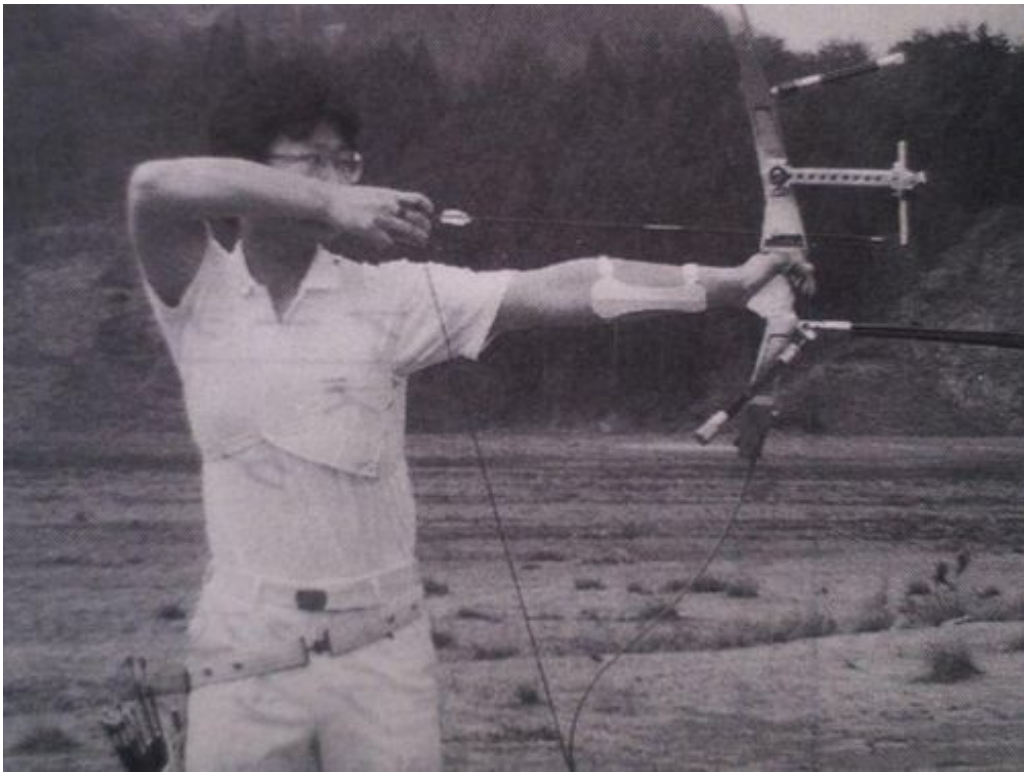
私は中学で弓道を経験しているので、練習用の弓の中で一番強い36ポンドを与えられました…。

そんなまるで軍隊のような『素引き』を50回も繰り返せば…、

腕はパンパン、指はちぎれそうな位痛くなります…。

こうして私達1年生は、基礎トレと『恐怖の素引き練習』に耐える日々が続きました…。

しかし、やがて気付いた時には弓を上手に引きこなせるようになっていたのです…。



21 アーチェリー一式ください

夏が近いてきた頃です…。

仙台工業高校アーチェリー一部1年生の私達の間には、ある疑問が浮かび上がっていました…。

それは…?

『アーチェリーの道具一式は、いくらするのか!?!』

という疑問です…。

先輩に尋ねても、はぐらかすばかりで正確な答えを教えてくれないのです…。

アーチェリーは、弓も矢も使い手に合わせてサイズを選択する必要があるため、必ず弓具を一式揃えるのです…。

そして、その答えは…!?

間もなく明らかにされました…。

ある日、先輩が…、

私達を、『アーチェリー専門店』に連れて行ったのです…。

弓具一式の見積もりをする為に…!

当時、その『アーチェリー専門店』は、仙台に開店したばかりでした…。

私達はその場で、矢を1ダース注文しました…。

そして次に…、

矢以外のアーチェリー用品の値段が、いよいよ表沙汰にされたのです…!

「180,000円だナ!」

「えッ…!?!?!」

そこで提示されたのは、私が想像していた価格の3倍を越す数字だったので…。

(お、お金、どうしよう…!?!?!?)

参考までに…。

【アーチェリー用品・弓具一式】

〈1〉ボウ(弓本体)…1台

〈2〉アロー(矢)…12本※

〈3〉ストリング(弦)…2～5本※

〈4〉スタビライザー(安定装置)…センターロッド1本、ダブルロッド2～3本、Mロッド1本、Vバー1個、TFC2～3個

- 〈5〉 サイト(照準器)...1台
- 〈6〉 レスト(矢を乗せる板)...2～3個※
- 〈7〉 クッションプランジャー(矢のたわみを調整する装置)...1個
- 〈8〉 クリッカー(矢の引き量を一定にする板)...1枚
- 〈9〉 タブ(指にはめて弦を挟む皮)...2～3個※
- 〈10〉 ボウストリング(弓と手をつなぐ紐)...1～2本※
- 〈11〉 アームガード(腕当て)...1枚
- 〈12〉 チェストガード(胸当て)...1枚
- 〈13〉 トーナメントクイバー+ベルト(腰に下げる矢を入れる筒)...1台
- 〈14〉 グランドクイバー(弓置きスタンド)...1台
- 〈15〉 ボウストリンガー(弦を張る際に使用する紐)...1本
- 〈16〉 フィストメルゲージ(弓と弦の間を計るインチ定規)...1枚
- 〈17〉 スコアブック(得点を記載する手帳)...1冊※
- 〈18〉 ボウケース(弓具一式をしまうカバン)...1台
- 〈19〉 スコープ(望遠鏡)+三脚(のぞきに使用)(ウソ)...1台
- 〈20〉 その他...ユニフォーム、白いスラックス、白いシューズ、レインコート

※消耗品



「ボク、お金が無いから。
もう、アーチェリー部を辞めるよ。」

そう言い残して、また1人仲間が去っていきました…。

夏休みを目前にして、私達は複雑な思いでいました…。

何故なら、アーチェリーはやりたいが…、

必要な道具が、高額だったからです…。

約15～20万円もする弓具一式を、秋の新人戦まで揃えなければならない…。

仙台工業高校アーチェリー部に入って間もなく直面した、この事態に…、

当時の私達は、来る日も来る日も悶々としていました…。

そんなある日…、

アーチェリー部の部長が、私達を前にこう告げたのです…。

「夏休みは、アルバイトをしてお金を稼いで下さい。
僕達も、そうやって弓を買いました。」

それを聞いて、私はちょっと動揺しました…。

夏休みにアルバイト…!?

でも確かに、アーチェリーを続けるには自分でお金を稼ぐしかない…。

よし、やるか…!

この件を両親に打ち明けると…、

数日後には、お袋が…、

昔務めていた会社に頼んで、アルバイトの口を見つけてくれたのです…。

それは…。

仙台港にある、『Y重車輛』という会社でした…。

この企業は、『小松製作所』の下請けで…、

主に、大型建設機械の修理・メンテナンスを担っています…。

クルマやメカが好きな私には、願ってもないようなアルバイトが舞い込んできたのです…!

夏休みに入る数日前…、

生まれて初めてのアルバイトに対する期待と不安で、よく寝れませんでした…。

でも、とにかく働くしかない…。

とにかくやるしかない…!

そこには、自分自身を励ます私がありました…。

そしていよいよ、夏休みの1日目…、

『Y重車輛』での…、

アルバイトが始まったのです…!

当日の朝、会社の事務所へ入ると…、

挨拶もそこそこに、私は上下ツナギ服と安全靴、それにヘルメットを着用させられました…。

生まれて初めてのアルバイト…。

記念すべき初仕事…。

そこで私に与えられた仕事とは、果たして…!?



23 汗と油まみれの夏休み

「ボクちゃん、それさっさと終らせろよ!」

「は、はいッ...(汗)!」

「次は、こっちのブルだぞ!」

「は、はいッ...(汗)!」

「それから、午後はグレーダーが入って来るがらな!」

「は、はいッ...(汗)!」

高1の夏休み、生まれて初めてのアルバイトは....、

大型建設機械の洗車でした....。

仙台港にある『Y重車輛』は、小松製作所の下請けで....、

重機のメンテを専門とする中小企業です....。

広い敷地には、巨大な工場が幾棟かあって....、

その中で、ヘルメットと作業服姿の男達が皆忙しそうに働いてます....。

私を与えられたのは....、

建機の前後左右を水で洗い流す、屋外設備の操作です....。

ところが、洗車する建設機械は泥が酷くこびり付いているものが多く…、

特にキャタピラーの内側は、何年も固まった土泥が…、

水では、なかなか落ちないのです…。

そこで次に、スコップで削り落とす手作業となります…。

これが、ちょっとやそつではビクともしないのです…。

スコップで、力まかせに何十回もえぐり続けること数十分…、

クタクタになります…。

真夏の炎天下、私は滝のように流れる汗をかきながら…、

次から次へと入って来る大型建設機械に、ひたすら向かっていきました…。

洗車が無い日はスクラップの部品の山の片付けや、倉庫整理の手伝いに借り出されました…。

1日の作業が終わると、体中が汗と油まみれで真っ黒でした…。

でも…。

(これが、働くということなんだな…!)

そんな、大人の仲間入りをした実感があったのです…。

何日か経って作業に馴れてきた頃です…。

私は、与えられる仕事に少し不満を感じ始めていました…。

何故なら…、

工場前を通る度に見える…、

大型建設機械を修理している様子が、気になっていたからです…。

ある日の朝です…。

私は入社すると、直ぐに上司に会って…、

こんなことを切り出しました…。

「ぼ、僕も修理がしたいです…!!!」

この思い掛けない私の願い事を聞いた、Y重車輛の部長は…、

腕を組んで、しばし考えていました…。

そこに、ある人物が現れたのです…。



24 重い仕事の重み

「キュイ〜ン、キュルキュルキュル〜!」

「シュツ、シュツ、シュツ!」

昭和56年、当時高1の私の夏休みは....、

来る日も来る日も晴天ばかり続き、それはそれは暑い年でした....。

でも、汗の吹き出る屋外の洗車作業を解放された私は....、

直射日光から逃れられる、部屋の中の仕事に変えてもらいました....。

面倒を見てくれたのは、エンジン課のS課長でした....。

「ボクちゃん、メカが好きなの?
ちょうど、人が欲しかった所だ。
オレンとこに来いよ!
だが、使いものになんながったらすぐ追い出すがらナ!」

そこで、私が選択する余地はありませんでした....。

勇気を出して配置換えを進言した私は....、

かくして、希望通り修理の作業に回されました....。

しかもエンジン課の手伝いとは、願ってもないチャンスです...!

生まれて初めてのアルバイト先『Y重車輛』は…、

大型建設機械を中心に重機のメンテを専門とする会社…。

そこの、エンジン修理の仕事が出来る…!

私は、今まで以上に真剣に作業に取り組む決意をしました…。

何故なら、クルマの整備士は物心ついた時からの夢だったからです…。

(エンジンをいじってみたい…!!)

そんな作業が、たとえ短期間でも実現する訳ですから、嬉しくない筈がありません…。

ところが、私に与えられた作業はというと…?

【大型建設機械ディーゼルエンジンのオーバーホールの流れ】

重機によじ登って、外装のパネルにワイヤーをくくり付ける…。

スパナを使って、全てのボルトを抜き取る…。

クレーンで、外装を持ち上げる…(重い!)

エンジンを下ろすのは、社員の手で行います…。

下ろされたエンジンはクレーンでエンジン課の工場に運ばれ、作業台に載せられます…(重い!)

また私の出番です…。

1つ1つボルトを丁寧に抜き取り、しかもボルトを無くさない様に管理...(重い!)

クレーンを使って、ヘッドとブロックを慎重に外します...(重い!)

後は、バラバラに分解します...

クランクシャフト、ピストン、バルブ、ライナーetc...(重い!)

とにかく、大型建設機械に搭載されたディーゼルエンジンは、呆れる程でっかくて相当の重量があるのです...

オーバーホールというのは、簡単に言えば分解掃除なのです...

バラバラにして、きれいにして組み立て直す...

ところが、重機となるとエンジンのパーツ1つ1つが、どれも重いから大変なのです...

ずっしりと手応えのある部品は、カーボンやスラッジがこびり付いてどれも真っ黒です...

その部品の1つ1つを洗浄し...

ピカピカになるまでバフ掛けします...

「キュイ〜ン、キュルキュルキュル〜!」

シリンダー類は、古いガスケットをスクレーパーで削り落とし...

更に、オイルストーンで磨いで面を出します...

「シュツ、シュツ、シュツ!」

そんな地道な作業の連続でしたが....

私は、来る日も来る日も....

とにかく、無我夢中で働きました...。



「ボクちゃん、少し休憩したらどうダ!？」

「へ、平気です...。」

私の高1の夏は、『Y重車輛』のアルバイトに精を出す日々でした...。

夏休み1日目から最終日まで、日曜とお盆を除く毎日をここで働き続けたのです...。

ブル、ショベル、グレーダーといった大型建機を、1台与えられると...、

外装外し→エンジンばらし→パーツの洗浄→研磨の作業が連続で続きます...。

どの作業も、私にとって生まれて初めての経験でしたが...、

精一杯こなしました...。

だいぶ慣れてきたある日...、

エンジン課のS課長が言いました...。

「高校出たら、
ここに就職したらいいんじゃないか？」

私は苦笑しながら答えました...。

「そ、そうですね...、
でも、乗用車の整備士を考えてるので...。」

「そうが。
これからは電子制御の時代だゾ、
コンピューターの事も勉強しておぐといいゾ!」

私にそんな助言をくれました…。

S課長は根っからのエンジニアです…。

私はオーバーホール作業を通じて、様々なノウハウとエンジンメカニズムの面白さを…、

彼から教わる事が出来ました…。

『Y重車輛』にいる間…、

S課長は私を叱ったり、時には可愛がってくれました…。

私はいつしか、彼の人間性に引かれていたのです…。

「明日は、コレの試運転だゾ。」

「やった…!」

試運転というのは…、

オーバーホールが完了したエンジンを、工場内の作業台に据え付けたままで始動することです…

。

エンジンの組み付けは、やらせてはもらえませんでした...、

私が洗浄と研磨したパーツ1点1点が組み付けられて完成したエンジンが...、

まるで新品に見違う程きれいになりました...。

その大型ディーゼルエンジンの巨大な物体が...、

目の前で動き出す訳ですから、たまりません...。

それに...、

試運転の時は何もしないで見物してるだけです...、楽チンなんです...。

「ボクちゃん、
コイツに、灯油を汲んでけろ!」

S課長は手渡した灯油を軽油に混ぜて、エンジンに供給させました...。

ディーゼルに少量の灯油を加えると、始動し易くなるのです...。

こうして、燃料と電源をセットされたディーゼルエンジンは...、

数人の男達に見守られながら...、

作業台の上で、間もなく息を吹き返しました...。

「カン!

カン!

カン!

カン!

カ、カカン!

ガタガタン!

バラ
バラバラバラバラバラバラバラバラバラバラバラバラバラバラバラバラ~!!!!!!]

大型ディーゼルエンジンは、、、

その巨体を大きく揺すりながら、大きな雄叫びを上げました…。

エンジニアにとって、きっとこの瞬間が至福の時ではないでしょうか…。

汗水垂らしながら何日も費やした作業の苦労も、一瞬にして吹っ飛びます…。

やかましいディーゼルの騒音も、まるで嬉しくて歌っているかの様です…。

大型ディーゼルエンジンの爆音、唸り、振動、吸気音、排気音が、、、

エンジン課の工場内に反響し、こだまする…。

建物も共鳴して揺れ動き、、、

床から地響きにも似た鼓動が、私の足の裏から伝わってくる…。

その強烈な印象と興奮は、、、

私の魂に、深く刻み込まれたのです…。

「バラ
バラバラバラバラバラバラバラバラバラバラバラバラバラバラバラバラバラ~!!!!!!!!!!!!!!」

耳をつんざくエンジンの轟音を、真近で感じながら....、

自分は、内燃機関という物体から....、

一生離れられないかも知れない、と確信しました....。



「ん〜?

アンチャン、随分と若いなや!？」

「ぼ、僕....、

高1なんです...。」

連日の猛暑が続いた、昭和56年の夏休みは....、

『Y重車輛』のアルバイトに明け暮れていました...。

その夏休みが終わる頃には....、

S課長の出張に、ついていく事もありました...。

この日は、エンコして動かなくなったブルの手当てに来たのです...。

到着するなり、私は建機によじ登って....、

慣れた手付きで、外装を取り外しました...。

エンジンが剥き出しになったところで....、

S課長にバトンタッチです...。

そんな私の仕事ぶりに、依頼主の不安も消えたようです...。

「12mm!

それからマイナス、
小さい方!」

機械に潜り込む彼に、スパナを手渡しながら....

私は、S課長のカッコ良さに憧れていました....

(自分も大人になったら、S課長の様なプロになりたい...!)

そんなイメージを抱いてました....

やがて....

『Y重車輛』のアルバイト、最後の日を迎えました....

いつもの様に、1日の作業を終えた私は....

事務所で給与を受け取ると....

直ぐに、S課長に挨拶に行きました....

「ボクちゃん、1ヶ月よく頑張ったナ。
ツナギと安全靴は持って帰れ。
そして、来年の夏休みにまだ来いな。」

煙草をふかしながら....

私を、彼は最後まで見送ってくれました....

頭を下げ....

自転車に乗って、ペダルを漕ぎ出す私....。

それまで居た職場が、だんだん遠くなっていくのに伴って....

涙が....

ポロポロあふれ出てきました....。

何故ならば....

仕事をやり遂げた達成感と....

お世話になったS課長はじめ、『Y重車輛』の人々に....

感謝の気持ちで、胸が一杯だったからです....。

そして何より、一回り成長した自分自身に感動したのかも知れません....。

思い返せば、アルバイトをする前は不安だらけでした....。

(仕事をするとは、どんなことなのだろう...?)

大人達の中で....

果たして自分はやっていけるだろうか...?)

と、そんな気持ちでいました....。

それが、アルバイトを終えた今では....。

(人間は、どんな状況でも諦めてはいけない...!

やれば出来る...!

最後まで頑張れる...!

何でも挑戦しないと、結果は現れないんだ...!)

そんな一丁前なセリフが浮かぶほど、自信に満ちていました...

生まれて初めてのアルバイトで稼いだお金は、何度も袋から出して眺めました...

就寝時には枕元に置き、夜にまた起きて再確認したりしました...

(自分で稼いだお金...!?

本当に自分で掴んだお金なんだ...!!

これで...

晴れて当初の目的だった『アーチェリーの弓具一式』が、購入出来る...!!)

その時の私は、何とも言えない充実感に包まれていました...



27 部活! アーチェリー

授業が終わると同時に、私はいつもの様にアーチェリー部の部室に直行しました…。

間もなく上級生も現れ、解錠しながら言いました…。

「今日は時間を計りながら、試合形式で点付けするゾ!」

仙台工業高校1年の秋、私はアーチェリーというスポーツで汗を流す毎日でした…。

我々1年生は11名おり、それぞれマイボウ(自分専用の弓具一式)を入手、既に本格的な練習を重ねていました…。

着替えを終らせると、私達はアーチェリーケースを片手に屋外に向かいます…。

練習場に着くと、我々1年はまず標的を準備します…。

アーチェリーの標的はアーチェリー用に造られた丈夫な畳床(たたみどこ)を重ねて使用します…。

1標的3枚を7~8脚並べるのですが、毎度の事とはいえ、この畳床を背負って運ぶのが結構重たいのです…。

間もなく標的の設置が終り、次に自分達の弓の準備に取り掛かります…。

アーチェリーの道具は、分解してケースに収納して保管します…。

それを組み立てるのです…。

まず、ハンドル(グリップがある金属製本体)に上下のリム(しなる部分で木とグラスファイバーを重ね合わせたもの)をセットします…。

次にストリンガー(弦を張る為の道具)を使って弓にストリング(弦)を張ります…。

この状態が弓の基本形ですが、これに更に付属品を加えるのです…。

クッションプランジャー(矢の発射位置や、たわみ量を変化させる装置を)をねじ込みます…。

サイト(照準器)を装着します…。

スタビライザー(狙っている時弓に安定感を持たせ、射った時の衝撃を緩衝させる)を大小合わせて3~4本取り付けます…。

弓をグラウンドクイバー(地面に置く為のスタンド)に掛けて、ようやく完成…!

後は、準備体操してから体に装備具を身に付けます…。

チェストガード(胸当て)、アームガード(腕当て)、タブ(引き手の指に掛ける革)、ボウリング(押し手とグリップをつなぐ紐)をそれぞれ付けます…。

それに、クイバー(腰に下げる矢を入れる筒)にアロー(矢、アルミニウム製が主流だったが、後にカーボン製が登場した)を6~9本入れて、よ~うやく準備完了となります…。

ターゲット・アーチェリーの正式競技は、90m・70m・50m・30mの距離を各36本ずつ、合計144本射つのが『シングル・ラウンド』といいます…。

一方、当時の高校の試合形式は、その内の50m・30mの距離を各36本ずつ、合計72本射つ『ハーフ・ラウンド』が主流でした…。

私の高校では幸せなことに、50m・30mが校内で射つ事が出来ました…。

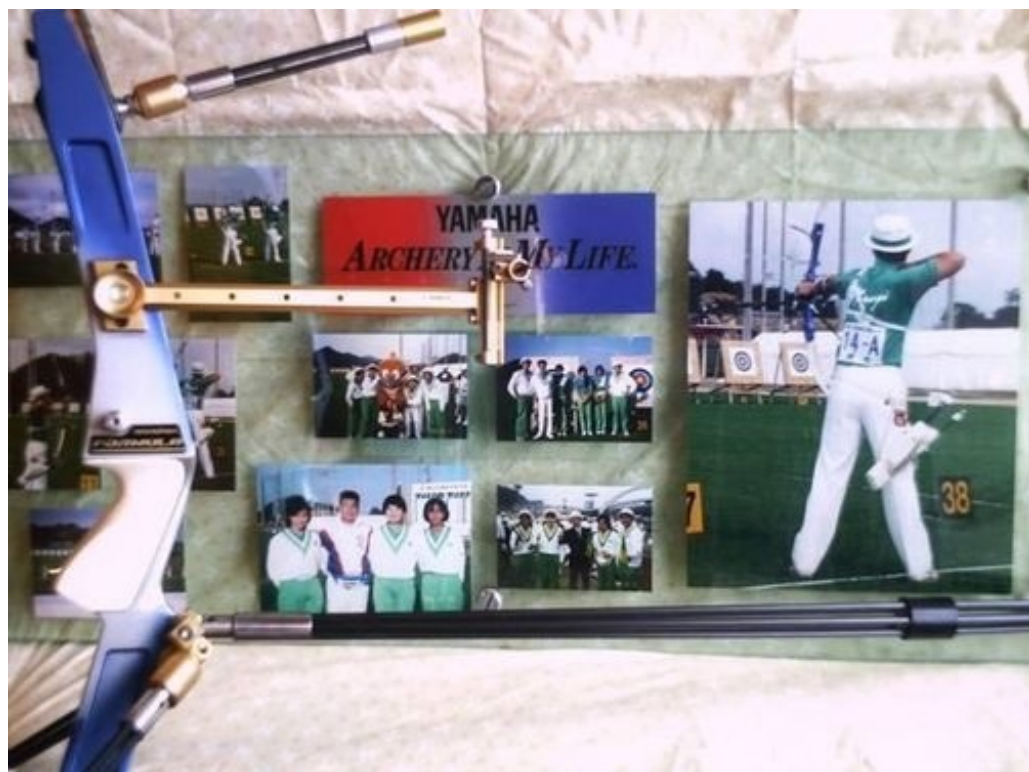
「♪ピッ、ピーッ!」

笛が鳴りました…。

さあ、これから試合形式で点付け練習が始まります…。

「ドキドキドキ…!」

弓を片手にシューティング・ラインに立った私、標的を睨んでいざッ…!



28 薄い板の重み・アーチェリー上達の壁

アーチェリー用品の1つに、『クリッカー』という部品があります…。

これは、厚さ1mmにも満たない金属製の板切れで造られた、小さなパーツです…。

『クリッカー』には、その軽さとは裏腹に、実は近代アーチェリー競技には無くてはならない、非常に重要な重みがあるのです…。

この『クリッカー』とは、ハンドルのウィンドウに取りつけられ、矢を射つ度に使用されます…。

まず、矢を『クリッカー』に挟みます…。

矢を弦につがえます…。

いよいよ弓を引きます…。

狙いを定めながら弓を引くのですが、『クリッカー』に挟まれた矢は、弓を引ききった辺りで矢の先に達します…。

矢の先ギリギリに残した状態で制止…。

的の中心に狙いが定まったら、さらにジワジワと弓を引いていきます…。

すると、矢の先端で『クリッカー』が「カチンッ!!」と落ちるのです…。

それを合図にして毎回矢を放てば、常に矢に対して弓の発射した時のエネルギーが加わる訳ですから、理論的には一定になった的中精度が高まるという事になるのです…。

単純です…。

弓を引いて、『クリッカー』が鳴ったら矢を放す…。

簡単…!

簡単…!

アーチェリーは何て簡単なんでしょう…。

…と、どっこい、現実にはそう簡単にはいかないのが『クリッカー』なのです…。

そもそも、弓を引きながら的を狙うという事だけでさえ、実際やってみると意外と難しいのです…。

さらにそこに『クリッカー』を落とす動作が加わると、もっとややこしい事になります…。

的を狙うには弓を制止させなければならないのに、『クリッカー』を落とすには止めずに弓を引き続けなければならないからです…。

さらに、矢の長さも重要です…。

矢が、長すぎても短すぎてもダメです…。

自分に最適な引き尺を、慎重に選択する必要に迫られます…。

弓を引くフォームが僅かでも変化すると、矢の引き尺にも著しく影響を与えるのです…。

引き尺が変わると使用している矢の許容範囲を越える事もしばしば発生します…。

そうすると、矢のサイズ(弓の強さにふさわしい矢の硬さ)は変更せざるを得なくなり、新しく矢を購入する状況に陥ります…。

たった1枚の『クリッカー』を使いこなせなくて、矢を何ダースも造り直したり…。

上手く射つことが出来なくて、ドツボにハマってしまいアーチェリーが嫌いになって人は過去にゴマンといるのです…。

かくいう私も20年アーチェリーに取り組んで、『クリッカー』に悩まされた一人ですが…。

『クリッカー』はアーチェリー上達に、誰も避けて通れない壁の一つなのです…。



29 知られざるアーチェリーの2分間

【ターゲット・アーチェリー公式試合1エンドのようす】

(ドキ・ドキ・ドキ・ドキ...!)→『心臓の鼓動』

「♪ブーッ!!」→『競技開始の合図』

「カシャ、カチャ、チャッチャッ〜!」→『両手に弓とスコープを持ってシューティング・ラインまで歩く際、腰に下げたクイバーに入った矢同士が触れ合う音』

(チラッ...!)→『シューティング・ラインを跨ぎ、自分の立つ位置を確認』

(ジロリ...!)→『自分の射つ標的を確認』

「ズズッ、ズムン!」→『両足を踏みしめて、スタンスをしっかりと決める』

「ク、クッ、クイッ!」→『覗きながらスコープを標的に向けて微調整する』

「シュシュ!スルスルッ、クイッ!」→『左手で弓のグリップを掴み、右手の指でボウスリングを締める』

「カシャ、ス〜ッ!」→『右手の指でクイバーの中から矢を1本選び抜き取る』

「グイッ!」→『左手の指でクリッカーを起こす』

「シュルシュル〜ッ!」→『クリッカーを上げた隙間に右手で掴んだ矢の先端を入れ、レストに載せたまま滑らせる様に矢を通す』

「プチンッ!」→『矢の尻部を弦に挟めた音』

「スッ!」→『左手を弓のグリップに正確に沿わせスタンバイ』

「ムンズ!」→『タブを装着した右手の3本指を弦に正確にフックさせスタンバイ』

(ジ〜ッ...!)→『弓を構えたまま標的を睨み精神集中』

(ドキ・ドキ・ドキ・ドキ...!)→『高鳴る心臓の鼓動』

「♪ブーッ!!」→『発射開始の合図、制限時間2分3射』

【第1射目】

(ドキ・ドキ・ドキ・ドキ...!)→『更に高鳴る心臓の鼓動』

「ヒョイッ!」→『弓を持ち上げる』

「グ、グィ〜〜〜〜!」→『照準器を標的方向に向けたまま、弓を一気に引く』

「キリキリ、キリ〜!」→『押し手は左肩を標的方向に押し続け、引き手はひじを後ろ方向に回し続ける』

(ジワ〜ッ...!)→『標的の中心に照準器の真ん中の点を漂わせながら、ひたすら弓を押し続け引き続け、クリッカーが落ちる瞬間に身構える緊張の時間』

「カチンッ!」→『クリッカーが落ちた音』

「バシュッ!!!!」→『遂にリリース、矢が放たれた音』

「ボォ〜ン!」→『弓の残音が反響する、矢が飛んでいった後も姿勢はフォロースルーをとり続ける』

「シューーッ!」→『空気を切り裂きながら飛翔する矢の音』

「ボンッ!」→『矢が標的に刺さる音』

(フウ〜ッ...。)→『ここでやっと息を吐く』

「カシャ、ス〜ッ!」→『右手の指でクイバーの中から2本目の矢を抜き取る』

「グイッ!」→『左手の指でクリッカーを起こす』

「シュルシュル〜ッ!」→『クリッカーを上げた隙間に右手で掴んだ矢の先端を入れ、レストに載せたまま滑らせる様に矢を通す』

「プチンッ!」→『矢の尻部を弦に挟めた音』

(チラッ...!)→『スコープを覗き的中個所を確認する』

「クイッ、クルクルクルッ!」→『照準器を調整する』

【第2射目】

(ドキ・ドキ・ドキ・ドキ...!)

「ヒョイッ!」

「グ、グイ〜〜〜〜〜!」

「キリキリ、キリ〜!」

(ジワ〜ッ...!)

「カチンッ!」

「バシュッ!!!!」

「ボォ〜ン!」

「シューーッ!」

「ボンッ!」

(フウ〜ツ...。)

「カシャ、ス〜ツ!」

「グイッ!」

「シュルシュル〜ツ!」

「プチンッ!」

(チラッ...!)

「クイッ、クルクルクルッ!」

【第3射目】

(ドキ・ドキ・ドキ・ドキ...!)

「ヒョイツ!」

「グ、グイ〜〜〜〜〜!」

「キリキリ、キリ〜!」

(ジワ〜ツ...!)

「カチンッ!」

「バシュッ!!!!」

「ポォ〜ン!」

「シューーッ!」

「ボンッ!」

(フウ〜ツ...。)

「カシャ、カチャ、チャッチャ〜!」 → 『腰に下げたクイバーに入った矢同士が触れ合う音、両手に弓とスコープを持ってシューティング・ラインから外れ、後方に戻る』

「♪ブーッ!! ブーッ!!」 → 『2分間の制限時間終了の合図』

「ザッザッザッザッ〜!カシャ、カチャ、チャッチャ〜!」 → 『腰に下げたクイバーに入った矢同士が触れ合う音、スコア記入と矢を抜き取る為に標的に向かって歩いていく』



「横浜高3年の、山本博(やまもとひろし)君が3連覇だったゾ!!」

キョトンとする私達に向かって、主将(仙台工業高アーチェリー部3年T部長)は口泡を飛ばしながらまくし立てました…。

その夏のインターハイを見学してきた彼は、当時からその名を轟かせていた山本博選手の活躍に刺激を受けたのでしょうか…。

「いいかァ!!」

彼の射ち方を教えるから良く見てろヨ!!」

ヒョイ、グィ〜ッ、バシンッ!!

ストンッ!!

「山本君はこうだッ!!」

押し手のリスト(左手首)を上下に動かしながら説明を続けました…。

「グリップをだな、射った瞬間この様に下げるンだよ!!

こんな形に、あ、いや、こうだったかな?」

ポカンと口を開けたまま、主将の手首をただ凝視する私達でした…。

私の高校時代はネットはもちろん、DVDもビデオすらまだ無かった頃です…。

当時、とくにマイナー競技であるアーチェリーの情報は、恐ろしく少なかったのです…。

指導方法は専門書の写真を片手に、先輩が後輩に教えるくらいが関の山でした…。

ですから当時の私達は皆、射型も射ち方も1人1人バラバラまちまちで勝手きままだったのです…。

当然ながら、技術レベルに相当する低い得点しか出せませんでした…。

今振り替えるとこの日の主将は、その眼に焼き着かせてきた山本選手の姿を、ヘタクソ後輩に少しでも伝えようと必死だったのです…。

T主将が見た、当時の山本博選手は、今でいうならば「アーチェリー王子」といったところでしょうか…。

インターハイを1年、2年、3年と連続で制するなど、普通では考えられないような偉業です…。

山本選手のレベルは、高校生のそれを遥かに超えていたのです…。

当時の彼の射ち方は、フォロースルーでリストを極端に落とすクセがありました…。

これはモントリオールオリンピックチャンピオンのダレル・ペイス選手(米国)の影響だったようです…。

この数年後に、私が山本選手と試合で競う事になるなどと、思いもよらないことでした…。

この日のT主将の独宴会は、日が暮れるまで続きました…。

「ほれッもう一度、よく見てろッ!!
グリップをだな、射った瞬間この様に下げるンだよ!!
こんな形に、あ、いや、こうだったかな?」

T主将…。

インターハイの覇者から盗んだ技を、我々に熱心に指導してくれた忘れられない先輩でした…。

やがて、引退する前に彼はこう告げました…。

「仙台育英に勝ってインターハイに行ってくれ!!
頼んだゾ!!」

【山本 博（やまもと ひろし）】

1962年生まれ 神奈川県出身 横浜高校、日本体育大学卒

現在 日本体育大学女子短期大学部体育科准教授

1984年 ロサンゼルスオリンピック 銅メダリスト

2004年 アテネオリンピック 銀メダリスト

アテネオリンピックで、41歳で銀メダルを獲得した「中年の星」と脚光を浴びましたが、アーチェリー界では高校時代から既に優秀な選手として活躍していたのです…。



31 アーチェリー・クイズの時間です

『アーチェリー・クイズ』!!

皆様こんにちは～!

生活にまるで役に立たないカルトな話題をクイズ形式でお伝えする、『アーチェリー・クイズ』のお時間がやって参りました～。

私、司会のラジオミヤビー・アナウンサーです～。

このクイズに全問正解出来た方には～、ナント!

観光船に乗る「南三陸牡鹿半島と金華山の旅」をご招待致します～!

どうぞ皆様、張り切って挑戦して下さい～!

それでは、早速クイズを始めたいと思います～。

【第1問】

アーチェリー競技で使用される道具についての問題です…。

「男子用の弓でカーボン矢を射った時の、飛び出す矢のスピードはどのくらいか?」

①新幹線の速さ

②ジェット機の速さ

③光の速さ

【答え】

①の、『新幹線の速さ』が正解です!

アーチェリーの矢の初速は想像以上に速く、時速で表すと200km/hを越すといわれています。

公式試合では、男子90m・70m・50m・30mの各距離を女子70m・60m・50m・30mの各距離を射ちますが、実際には120～130mは飛ぶといわれています。

【第2問】

次は、素人の方からよく訪ねられる質問です…。

「日本国内で、アーチェリーを使って狩猟をしてもよいか？」

①どこでも構わない・出来る

②許可を申請すれば出来る

③海以外は出来ない

【答え】

③の、『海以外は出来ない』が正解です!

日本ではアーチェリーによる狩猟は法律により禁止されています。

但し、魚をとるのは例外のようです。

なお、欧米ではアーチェリーのハンティングは盛んです。

何故なら、弓矢ならライフル銃の様な銃声が出ないため、至近距離から獲物を仕留められるメリットがあるからです。

もともと狩猟様に生まれたのが「コンパウンド・ボウ」で、偏芯滑車と長い弦の仕組みで弓を引くと力が半減します。

これなら、弓を長く引いたまま獲物を狙い続けることが出来るのです。

本日の『アーチェリー・クイズ』はこれで終了～。

皆様また来週お会い致しましょう～!

ルトラテック。
ほにあるのは、
ツクだ。

2017年、2018年、2019年
2020年、2021年、2022年
2023年、2024年、2025年
2026年、2027年、2028年
2029年、2030年、2031年
2032年、2033年、2034年
2035年、2036年、2037年
2038年、2039年、2040年
2041年、2042年、2043年
2044年、2045年、2046年
2047年、2048年、2049年
2050年、2051年、2052年
2053年、2054年、2055年
2056年、2057年、2058年
2059年、2060年、2061年
2062年、2063年、2064年
2065年、2066年、2067年
2068年、2069年、2070年
2071年、2072年、2073年
2074年、2075年、2076年
2077年、2078年、2079年
2080年、2081年、2082年
2083年、2084年、2085年
2086年、2087年、2088年
2089年、2090年、2091年
2092年、2093年、2094年
2095年、2096年、2097年
2098年、2099年、2100年



トヨタ自動車株式会社
015-885-0101
015-885-0102
015-885-0103
015-885-0104
015-885-0105
015-885-0106
015-885-0107
015-885-0108
015-885-0109
015-885-0110
015-885-0111
015-885-0112
015-885-0113
015-885-0114
015-885-0115
015-885-0116
015-885-0117
015-885-0118
015-885-0119
015-885-0120
015-885-0121
015-885-0122
015-885-0123
015-885-0124
015-885-0125
015-885-0126
015-885-0127
015-885-0128
015-885-0129
015-885-0130
015-885-0131
015-885-0132
015-885-0133
015-885-0134
015-885-0135
015-885-0136
015-885-0137
015-885-0138
015-885-0139
015-885-0140
015-885-0141
015-885-0142
015-885-0143
015-885-0144
015-885-0145
015-885-0146
015-885-0147
015-885-0148
015-885-0149
015-885-0150



ULTRATEC
3/4 TITAN
USA



12月21日
12月22日
12月23日
12月24日
12月25日
12月26日
12月27日
12月28日
12月29日
12月30日
12月31日

ARCHERY
12月21日
12月22日
12月23日
12月24日
12月25日
12月26日
12月27日
12月28日
12月29日
12月30日
12月31日

32 続・アーチェリー・クイズの時間です

『アーチェリー・クイズ』!!

皆様こんにちは～!

一週間のご無沙汰でした～、私、司会のラジオミヤビー・アナウンサーです～。

生活にまるで役に立たないカルトな話題をクイズ形式でお伝えする、『アーチェリー・クイズ』のお時間がやって参りました～。

このクイズに全問正解出来た方には～、ナント!

観光船に乗る「南三陸牡鹿半島と金華山の旅」をご招待致します～!

どうぞ皆様、張り切って挑戦して下さい～!

それでは、早速クイズを始めたいと思います～。

【第3問】

国内のアーチェリー競技に出場の選手についてです…。

「ゴルフやボーリングの様に、アーチェリーにもプロの選手はいるのでしょうか?」

①プロ制度は無い

②昔はプロ制度があったが、現在は無い

③アーチェリーの選手は全員プロ

【答え】

②の、『昔はプロ制度があったが、現在は無い』が正解です！

1970年台に日本中がレジャーブームだった頃、アーチェリーもその波に乗って普及に向かって動き出そうとしていました。

その時期に全日本プロ協会が発足しました。

間もなく、プロの認定試合(インドアの大会)が開催されました。

その結果、5期に渡りアーチェリーのプロが男女数十人ほど誕生しましたが、プロが活動できる試合は年に僅かしかなかったり、スポンサーも付かないなど事実上意味のないプロだったようです。

協会が解散した後も、認定プロは一般の試合に出場出来ないなど物議を呼びました。

なお、米国に於いてはコンパウンド・ボウを使用したプロが数多く活躍しており、賞金を掛けた試合が全米各地で盛んに開催されています。

【第4問】

最後は、アーチェリー競技の歴史からの問題です…。

「古代オリンピックでは、アーチェリー競技に使用された標的は何だったのでしょうか？」

- ①ハト
- ②ウサギ
- ③人間

【答え】

①の、『ハト』が正解です！

どなたですか、人間と答えた方は!?

さて、アーチェリーはマラソンと並び、古代オリンピックの種目だった大変歴史のある競技なのですが、その的にナント！

生きたハトを使って何羽射止めたかを競っていたようなのです。

でも、あまりにむごいということでアーチェリー競技そのものがオリンピック種目から外されてしまいます。

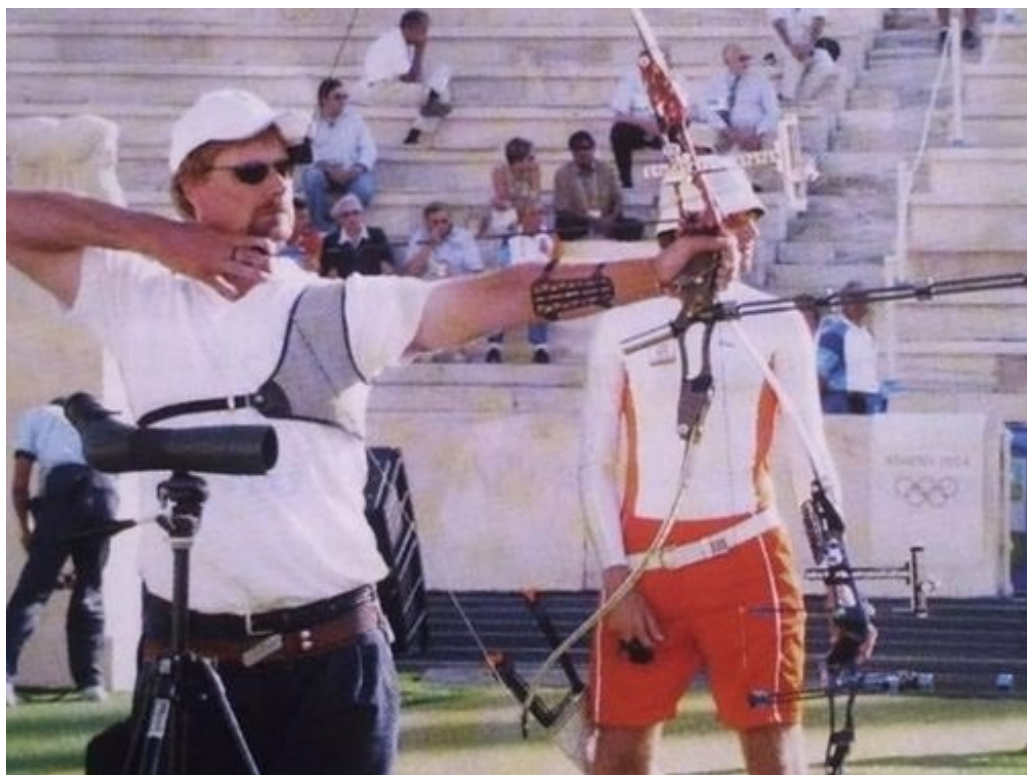
近代オリンピックになって、1972年ミュンヘン・オリンピックの時からアーチェリーの種目は復活しました。

もちろん、現在はバット(干し草をプレスしたもの、日本では畳)に貼った紙の標的ですが。

皆様と一緒に楽しんでまいりました、『アーチェリー・クイズ』はこれで終了～。

またいつかお会い致しましょう～!

サイナラ、サイナラ、サイナラ、サイナラ～。



33 先輩が教えてくれたこと

『誰もが心に残っている、青春時代のあの日…。

キラキラと眩しかった真夏の太陽…。

スポーツと汗、アーチェリー…。』

高2の夏ともなると、すっかり高校生活に溶け込んでいた頃です…。

あれほど心が動かされた部活のアーチェリーでしたが、思うように当たらなくなっていた私は、すっかり情熱が冷めてしまいました…。

集中出来ずにミスは連発するし、スコアがさっぱり伸びないので、毎日の練習もやる気が湧かないのです…。

その原因の一つに、ある先輩の影響がありました…。

後輩思いで熱血派だった主将Tさんが卒業し、3年生から選出されたのが新主将のAさんでした…。

「後で俺にちょっと付き合えヨ！」

また始まったあ…と、思いながらも何故か私はAさんに誘われるのが嫌ではなかったのです…。

Aさんが主将になったら、アーチェリー部もおしまいだな…!?

…こんな噂が飛び交うほどAさんはちょっと問題児だったのです…。

この日も、部活が終わるか終わらない内に、Aさんは私を伴って街に繰り出しました…。

2人はゲームセンターで遊んだり、喫茶店でお茶したり、当時出店したてのファーストフードでハンバーガーを食べたりしました…。

Aさんと私、先輩と後輩…。

2人はまるで性格が違う同士なのに、どういう訳かウマが合いました…。

好奇心が強く新しい物好きなAさんは、従順でウブな私に、少しだけ背伸びした大人の遊びを教えてくださいました…。

しかし困ったことに、Aさんの遊びは次第にエスカレートしてきたのです…。

公園で隠れてタバコを喫煙してみたり、2人でパチンコ遊びもしました…。

自販機で缶ビールやチューハイを買い、珍味をつまみながら酔っぱらった事もありました…。

勿論こんな事がもし見つかったら、停学処分は免れません…。

でも、私服の高校だったので大学生のふりをして、遊びに行き易かったのです…。

いけない事をしていると自覚しながら、私はついついAさんの誘いに付き合ってしまった…。

「明日は自転車で宮城野原に行くゾ!
スコープ(アーチェリーで使う望遠鏡)も忘れずに持って来いよ!」

またAさんのお誘いです…。

何故スコープを片手に宮城野原まで行くのか、私は判りませんでした…。

宮城野原には県の陸上競技場があります…。

現在「楽天イーグルス」本拠地になった野球場や、自転車競技場など数多くの運動施設が並んでいる所です…。

土曜の午後、練習をサボった私は、Aさんの中ば強制的に宮城野原に同伴させられました…。

そこで間もなく目にしたのは、男子校の私が生まれて初めて見る、ある憧れの光景…。

女子高生のテニスをする姿でした…!!

1つしかないスコープを先輩と奪い合いながら、コートの中をまるでモンシロチョウの様にヒラヒラと舞う、白いスカートの女性を目で追いかけてました…。

やがて、私にもスコープを覗くチャンスが訪れました…。

緊張しながらレンズを覗くと、そこには太ももがドアップで目に飛び込んでくるではありませんか…!!

さらに白いパンティがチラリと見えて、私は思わず失神しそうになりました…!!!!

『誰もが心に残っている、青春時代のあの日…。

キラキラと眩しかった真夏の太陽…。

スポーツと汗、アーチェリーのスコープで「のぞき」…。』

「先輩...!
また来週も見に行きましょう...!!」



34 アーチェリー部のピンチ

仙台工業高2年の夏、我がアーチェリー部は危機的ムードが漂っていました…。

3年のA先輩が主将になってからというもの、部の緊張感がすっかり無くなってしまったからです…。

何故なら、アーチェリー部の主将自らが練習しないからです…。

時々顔を出して後輩の指導に当たりますが、3年は忙しいからといいつつ街の中に遊びに行ってお消えてしまうからです…。

3年生は他に2名おりましたが、こちらも責任感の無いような先輩達でアテになりませんでした…。

こうしてアーチェリー部は、我々2年生が事実上中心となって活動していましたが、実際には真面目に毎日練習しているのは数名だけです…。

しかも毎日が無計画な自主練習ですから、アーチェリーに対する情熱も冷めがちになります…。

入学した頃は10名以上いた同輩も、だんだん幽霊部員化してきて、やがて毎日練習している常連はとうとう5名だけになってしまったのです…。

そんな状況に加えて深刻だったのは、1年生の新人がたった2名しか入部しなかったのです…。

このままで、これからアーチェリー部は大丈夫だろうか…？

そんな不安がいつしか、部員達に去来していました…。

「じゃ!!

俺これから忙しいから、後はヨロシク!!」

主将Aさんはこう告げるなり、私達の抱える不安も知ってか知らずか判りませんが、後輩達の前から今日も去っていきました…。

さて、私はというと…。

やっぱり、サボる日が多かったのです…。

昨年の中頃はキツイ基礎トレに明け暮れ、シゴキに必死に耐えていた私達です…。

それが主将がチェンジしただけで、自由できままがまかり通ってしまう、軟弱アーチェリー一部に変身したのです…。

その劇的变化に私はちょっと戸惑いながらも、つつい部を後にしてしまいました…。

そしてまた、Aさんと遊びに行きました…。

この様に既に終わったような部活の状況、且つ責任感が無いような主将Aさんでしたが…、

この後間もなく…、

仙台工業高アーチェリー一部始まって以来の、画期的な練習が導入されることとなります…。

しかもその型破りの練習の仕掛け人が、あの主将Aさんなのですから、世の中何があるか判らない
ものです…。



「A先輩、それ何すかッ!？」

昭和57年、仙台工業高2年の夏のことです…。

主将のA先輩は、私達の目の前に姿を現したかと思うと…、
頭と腰に何やら見慣れない機械を身に付けたまま弓を射ち始めたのです…。

「これがウォークマンさ!
ナウいだろ!」

A先輩は、そう言って、また1本矢を放ちました…。

「音楽を聴きながらアーチェリーをすると、メンタルトレーニングになるのさ!」

自慢気に説明しながら、また射ちました…。

ポカンとして聞いていた私達に、A先輩はこう告げました…。

「今度の土曜は良い処に連れてってやるゾ!
一辺にはムリだから、今回はお前とお前とお前だ!
スコープも忘れるなよ!」

私は、思わずクスッと笑いそうになりました…。

またテニスを覗きに行くのかと思ったからです…。

ところが、当日向かった先は…、

意表を突く場所だったので…。

「あら、A君いらっしゃい。
思ったより早かったじゃない～。」

「こんちわっス!
ホラ、お前らも挨拶しろよ!」

「コ、コンチワ～ッス!!」

電車とバスを乗り継ぎようやく着いた先は…、
何と、仙台市土樋にある『東北学院大学』体育会洋弓部のアーチェリー場でした…。

土曜日の午後…、

頭上から降り注ぐ、優しい日差しが照らしたのは…、

青々とした新緑に囲まれた広瀬川の河川敷にある、アーチェリー練習用の射場です…。

アベックを乗せた貸しボートが浮かぶ、広瀬川を横目で眺めながら階段を下って…、

私達は、幾人かの男女が射っている後に陣取りました…。

この河川敷は横幅はさして広くはないものの、縦方向は何処までも伸びていて…、

アーチェリーには、うってつけの地形です…。

射場の傍らには高い土手がそびえ立ち、川岸側は樹木が生い茂っています…。

つまり土手と樹木が両脇から挟んで、射ち手の横風を遮る形になっていました…。

「ここの射場は、自己新が出るので有名なんスよね!」

「そうね、ここは年中風がほとんど無いのよ～。
じゃあ、早速一緒に射ちましょうか～。」

私は大学の射場に入ったのも、大学生と一緒に練習するのも初めてのことでした…。

こうして私達は、学院大生達と合同練習をさせてもらったのです…。

つかの間であっても、大変有意義な時間を過ごすことが出来ました…。



36 ガクイン!! アーチェリーの技

ある土曜日の昼下がりに...

主将のA先輩に、連れていかれた先は...

『東北学院大学』体育会洋弓部の、アーチェリー場でした...

初めて踏み入れた、大学の射場...

緊張しながら学院大生らに混ざって練習する、私達へタクソ高校生...

「どれッ、射型を見てやるからなッ!

間もなく、学院大生の1人が私に付きっきりで、アーチェリーの技術指導に当たってくれました...
。

当時の『東北学院大学』洋弓部といえば、毎年インカレ入賞者を輩出する東北一の伝統校です...
。

中でもインカレ優勝を成し遂げ、世界選手権大会にも出場した『草野昌治(くさのまさはる)』選手は有名で...

卒業後に出した「RC男子シングル1,301点」の日本新記録は、その後何年も破られませんでした...。

注目のトップアーチャー草野選手を輩出した、「ガクイン」はその名を全国に轟かせていたのです...。

そんなレベルの高い大学の選手から、直接アーチェリーの指導を受けられるなんて願ってもないことです...。

「顔向けはこうで、アンカーはこうだッ!」

私はちょっと緊張しつつ終始無言で、なお熱心に技術指導を続ける彼の言葉に耳を傾けていました…。

いかにも体育会系といった面持ちの男子大学生からは、アドバイスが次々と投げかけられるので…、

この場から、しばらくは逃げられないような雰囲気です…。

一方、A先輩はというと…。

「それですねエー、その時にー!」

「エッ、そうなの!?
キャッ!!キャッ!!」

女子大生といかにも親しげに、一緒に雑談しながら射っています…。

あちらは、何んだかとっても楽しそうです…。

ひょっとすると、連日街に繰り出していたA先輩は…、

きっと、ここに毎日来ていたのかも知れない…!?

そう気付いた私でしたが、A先輩の高い社交性がとっても羨ましかったのです…。

自分の高校で練習せずに、学院大で射っていたなんて…。

でも、積極的に外部に飛び出す練習など、真面目な仙台工高ではおよそ考えられない出来事でした…。

こんな型破りのA先輩がいたからこそそのアクションだったのです…。

その後も、私達はことある度ごとに学院大学に足を運び、大学生の練習に参加させてもらいました…。

女子大生と練習がしたくて…(笑)。

練習熱心な大学生達から刺激を受けた私も…、

知らず知らずに練習熱心になっていきました…。

アドバイスを受け、手を加えていった射型そして射ち方も…、

次第に手応えを感じるようになっていきました…。

そしてその効果は、やがて自己記録の更新になって現れて来たのです…。

シューティング技術の向上が、直接スコアに結びつくスポーツ…、

勇気と努力をもってすれば、誰でも必ず実を結ぶアーチェリー…。

そんなある日、A先輩が私達に告げました…。

「今度の日曜は、全員で『月例会』に出るゾ!」



37 精神鍛えるには試合に沢山出ること

仙台工業高校アーチェリー部の私たちは…、

ライバル「仙台育英高校」に勝つことが、当面の目標でした…。

「育英」にさえ勝てれば、「インターハイ」に出場出来るのです…。

さて、どうすれば彼らに勝てるのか…？

「そりゃ、試合に沢山出て経験を積むことサ〜!」

「アーチェリーで大切なのは、
フォームは練習で鍛えられるけど、精神面は試合で鍛えるモンさ〜!」

これは、指導に当たってくれた東北学院大の大学生の助言でした…。

なるほど、確かにそうかも知れない…。

こうして私達は出場可能な、試合という試合に出来るだけ数多く参加する様になったのです…。

なかでも特に数多く出たのが、社会人が主催する「月例会」でした…。

「月例会」は、毎月1回行われている試合で…、

ユニークなのは、男女年齢も一緒に競うのですが、技量によってA・B・C3つのクラスに振り別けるのです…。

私たち高校2年生は、Cクラスでした…。

この「月例会」は毎回開催する場所が変わり、いろんな射場で試合を行いました…。

ある日は企業のグラウンドだったり、またある日は大学内だったりと様々な場所で射ちました…。

さらに、雨が降ろうが強風だろうが中止しないのです…。

悪天候で参加人数が極端に減っても雄志によって試合は必ず開催するのです…。

特に、真冬の屋外に雪が降る中を寒さをこらえ、かじかむ手で凍えながら射つのはさすがに辛いものがありました…。

ですが、焚き火に当たりながらの試合は、そこに参加した全員と仲間意識が生まれ、辛いのを飛び越えて何故か快感になっていきました…。

「月例会」の良い点は、大ベテランの社会人と射てることです…。

アーチェリーは当たってナンボですが、やはり高得点をマークする人は何歳になっても違うものです…。

若い選手は勢いで一時的に当たったりしますが、長い経験を積んだ選手は安定感があるものです…。

嬉しかったのは、2回目に出場した「月例会」でメダルを手にしたことです…。

「Cクラス3位」の銅メダルは、ちょっと恥ずかしい得点でしたが…、

生まれて初めてアーチェリーの試合で掴んだ入賞だったので、とても嬉しかったことを今でもよく覚えています…。

「アーチェリーで大切なのは、試合経験を沢山積むこと」…。

「試合で得点を出して、自信をつけていくこと」…。

「月例会」の様なローカル草試合でも、「ドキドキ」したり緊張してなかなか普段通りに射てないものなのです…。

さらに、どんな小人数の試合であっても、人に勝つのは容易なことではないのです…。

「ミスが悔しい!」

「あいつに負けて悔しい!」

「試合で優勝したい!」

「さらに高得点を出したい!」

「アーチェリーもっと上手になりたい!」

幾多の試合に出て悔しい思いを何度も味わう度に…、

いつしか…、

私の心に隠れていた、「負けず嫌い」の気性が顔を出し始めたのでした…。



38 ASAREN!! 高校アーチェリー

【昭和57年・私のある夏の一日】

am5:30

...起床・眠い目を擦りながら朝食を食べる

am6:15

...電車に乗る・下車したら徒歩で学校に向かう

am6:50

...仙台工業高校に到着する・仲間も集まってくる

am7:00

...射場にて・標的の設置・弓を組み立てる・アーチェリーの朝練習をする

am8:15

...練習をやめる・教室に入る

am8:30

...午前の授業開始・眠いので辛い・教科書を落す程うたた寝して先生に注意される

am10:15

...休憩時間・腹が減ったので早弁する

am12:00

...昼食・学食でランチを食べる

am12:30

...アーチェリー一部の部室でダンベル・トレーニングをする

pm1:00

...午後の授業開始・眠いので辛い・机によだれが垂れる位うたた寝して先生に注意される

pm3:15

...授業終了・腹が減ったので学校隣のストアでパンとジュースを買って食べる

pm3:45

...射場にて・ランニング後にアーチェリーの練習をする

pm6:30

...練習終了・後片付け

pm7:00

...下校・腹が減ったので学校隣の商店でカップラーメンとパンとアイスを食べる

pm7:30

...駅まで徒歩・電車に乗る

pm8:00

...帰宅・眠い目を擦りながら夕食を食べる

pm9:15

...宿題をする・腹が減ったのでおやつを食べる

pm11:00

...就寝・明日もアーチェリーの朝練習頑張ろう!!



「買うのオ？
買わないのオ？
どっちなのオ!？」

人生に於いて、最も影響を受けた人物は誰かと尋ねられたら、あなたは何と答えますか…。

私の場合は、今日登場する男性がその人です…。

私が高校入学と同時に始めたアーチェリー…。

偶然にもその同じ年に、東北唯一の「アーチェリー・プロショップ」が開店しました…。

仙台駅前にある、朝市と仙台アメ横などのバツタ屋が立ち並ぶ繁華街の、やたら人と人がごっがかえす中を掻き分け行った先のあるビルの3階にそこはあります…。

狭い階段を登り切らない内に、彼の罵声が聞こえてきました…。

8坪ほどのその店舗は、プロショップと言うより小さな倉庫といった雰囲気、そんなに大声を張り上げなくとも十分会話はできます…。

でも…。

この日は高校生らしき先客が、まるで廊下で立たされたかの様に直立不動で店主に説教されてい

ました…。

「アーチェリーはお金がかかるのォ!
点数出すには高くたって良い道具使わないと勝てないぞォ!」

間もなく、その高校生は納得したのか、しなかったのか判りませんが道具を買い去っていきま
した…。

金を支払う客が、しかられながら買い物するなど一般世間では有り得無いシーンが毎日の様に
繰り広げられるのが、このアーチェリー専門店なのです…。

「いらっしゃい!」

いよいよ私の番です…。

「あの、先輩が矢の長さを見てもらってこいと言うので…。」

緊張する私です…。

「ケースは持ってきたのォ?」

「ハイ…。」

「じゃ見てやるから組み立ててエ!」

店の隅には巻きワラが設置しており、至近距離なら射てるのです…。

パンチパーマの店主は、くわえタバコを灰皿に押し付けると、弓を構えた私の背後に立ちま
した…。

「射ってごらん!」

シュルシュル～、バンッ!!

「随分クリッカーが前だなァ!
この矢で試してごらん!」

どうやら、私の矢は長すぎた様なのです…。

「短くしたら1916じゃ硬過ぎだな、XX75の1816で新しく造り直しナ!」

「えっ…!?
この矢はもう使えないんですか…!?!」

「当たり前だろゥ!
どうする?」

「じゃ9本お願いします…。」

「馬鹿野郎!!
1ダースにしろゥ!!
毎日練習したら直ぐダメになるに決まってるだろゥ!!」

「判りました…。
12本お願いします…。」

(大変だ、またアルバイトしてお金稼がなくちゃ…。)

そんな頑固オヤジがいるのが、アーチェリー・プロ・ショップ(注)なのです…。

私はいつしか、そんな頑固オヤジに関心を寄せるようになりました…。

(注)その道具の多くを海外製品に頼っているのが、アーチェリー競技です…。

かなり特殊でしかも数多くのアイテムを必要とするので、一般のスポーツ店では取り扱うことが難しいのです…。

そこで、アーチェリーの専門店が頼りになるのです...。



40 夢の職業～アーチェリー・ショップ～

昭和56～58年頃、高校時代の私のアタマの中です…。

八百屋さん → 野菜を売る仕事だなあ。

魚屋さん → 魚を売る仕事、売れ残ったら自分で食べるのかな。

模型屋さん → プラモを売る仕事、でも文房具も売っているぞ。

自転車屋さん → 自転車を売る仕事、パンクを直したり修理もするなあ。

アーチェリー屋さん → ????

もしかして、アーチェリー・プロショップのヒトって、アーチェリーのプロなのかなあ…!?

そんな筈はありません、もちろん弓具を仕入れて販売する商売です…。

しかし東北唯一のアーチェリー専門店に出入りしてみて、他にそんな商売している店を見たことがない私は、当時つい誤解してしまいました…。

当時のアーチェリーの道具は、アメリカを中心とする輸入品が多く使用されていました…。

その中でも『矢(アロー)』は、今も昔も米国イーストン社のものがほぼ100%シェアを占めています…。

そのアローの選択は特に重要で、使い手の体型・腕の長さに合わせて矢の長(引き尺)さを決めます…。

さらに使用する弓の強さ(発射した時の威力)に合わせて、矢の硬さ(外形の太さや肉厚の厚さ)も決めるのです…。

例えば、矢の長さがほんの数ミリ差があっても違う所に飛んで行くほどシビアで、それにポイント(矢じり)の重さや、ノック(弦を掛ける尻)、ヴェイン(羽根)など好みで選ぶ訳ですから、1人1人の射ち手に合わせて作る事になる訳です…。

そこで、アーチェリー専門店の出番なのです…。

客の注文通りに、アローシャフトを切り、ポイントやヴェインを接着し、ネームを入れて出来上がり…。

アローは、12本まとめて作るのが一般的です…。

他には、ストリング(弦)の製作もあります…。

「いらっしゃい!」

今日も私は、頑固オヤジのいるアーチェリー・ショップに来ました…。

店内に入ると、ちょっと接着剤やシンナー臭いのですが、私はここの作業場兼販売所がすっかり気に入ってしまいました…。

私は、「アーチェリー用品の専門販売店」という職業があるという事に驚くと同時に、憧れてしまったのです…。

好きな趣味を仕事に出来るなんて、私にとって少なからず衝撃的でした…。

この頑固オヤジ、たった1人で商売をしている…。

1人でも社長なんだ…!

そう気付いた私は、この社長の事が何だかとっても気になり出したのです…。

アーチェリー専門店の社長、その人物とは…。



「新しいアローは、どうだったア？」

「Mさん、お陰でグルーピングする様になりました...。」

「だろォ!？」

スパイン合ったんだナ!

「Mさん、日曜の試合は乗せて下さい...。」

「いいヨ!

朝8時ここに集合ダ!

「は、はいお願いします...。」

いつしか私は、アーチェリー・ショップのM社長が大好きになってました...。

地元の試合に向かう際は、彼のクルマによく同乗したものです...。

ドコドコドコドコ...ブォォン!!

Mさんの愛車は、『スバル・レオーネ4WDバン』でした...。

当時4輪駆動車はまだ珍しく、東北の雪道をものもしない高い走破性を、彼を通じ知りました...

。

「この水平対抗エンジンが、また良いんだゾ!

「へえ、そうなんですか...。」

M社長もまた私と同じ、クルマが好きな人でした...。

東北唯一のアーチェリー専門店を経営する、M社長※とは…。

中京大体育学部卒…。

4年の時主将として、全日本学生大座戦で同大を準優勝に導く…。

相手は、モントリオール五輪銀の道永宏率いる同志社大だった…。

卒業後は西沢スキー(弓のメーカー)、都内のアーチェリー・ショップを経て、昭和56年に仙台市に店を開く…。

M社長の弓の腕前は…。

東北の試合では常にトップクラス…。

国体は15回以上出場…。

全日本ターゲット最高6位…。

全日本社会人フィールド優勝…。

フィールドの世界大会にも、日本代表として出場した…。

奥様は元ロス五輪補欠で、皆んなのマドンナNさんのハートを射抜いた…。

「それでは一、成績発表致しますー。
成年男子第1位、Mくんー。」

「あっ、また今日もMさんが優勝か...!
スゴいな...。」

アーチェリー用品の販売で生計を立て、しかも毎週の様に各地の試合に出場し活躍するM氏...

好きなスポーツに打ち込み、好きなことを仕事にしている...

自分も、あんな大人になりたいな...!

高校生の私にとって、憧れの彼の存在は大きかったです...

試合の帰り道、レオーネの車内で私は堪らず尋ねました...

「Mさん、僕もっと上手になりたいです...。」

「そうか、アーチェリーのこと大好きかア!？」

「は、はい...。」

「ホントに好きなら、誰より当てる方法を勉強してエ、
朝から晩までアーチェリーの事を一生懸命考えて、
誰よりも練習しないとダメだゾ!」

「は、はい...。」

「『雑誌アーチェリー』を創刊号から全部残らず読むんダ!
そして、好きな選手の真似するんダ!
自分の射型を写真に撮って比べるんダ!」

「は、はい...。」

こうして私は、朝から晩までアーチェリーの事ばかり考える様になりました…。

Mさんの人柄に惚れ、Mさんの生き方に憧れたあの頃の私でした…。

彼のアドバイスがきっかけで、ますます練習に力が入り、アーチェリーがますます好きになりました…。

やがて私は自己新を連発…。

そして遂に、高校の県大会で初優勝を成し遂げる事ができたのです…。

残るは最大の目標、『仙台育英に勝ってインターハイ出場』でした…。

※ミスター・アーチェリーことM社長について(補足)

彼とは高校時代に出会ってから、30年来のお付き合いをしています…。

社会人になってからも、彼と共に数多くの試合に出場…。

また、仲人をお願いしたことも…。

さらに、彼のもとで5年間ほど片腕となり働いたこともあります…。



バシュッ!!

シュルルル〜〜ッ... ボン!!

「ナイショ!」

バシュッ!!

シュルルル〜〜ッ... ボン!!

「ナイショ!」

バシュッ!!

シュルルル〜〜ッ... ボン!!

「チョイヤ!」

バシュッ!!

シュルルル〜〜ッ... ボン!!

「ナイショ!」

「56・57・55・57・56...、最後54出せば自己新だけどなあ...。」

バシュッ!!

シュルルル〜〜ッ... ボン!!

ヤッター...!!

635点出した...!!」

昭和58年、高校時代最後の夏…。

シーズンを迎えた私達は、いつになくアーチェリーの練習に燃えていました…。

最後にして最大の目標である、インターハイ出場を目指す為です…。

私達『仙台工業高校』は、創部以来一度として『仙台育英学園高校』※に勝ったことがなかったのです…。

団体も個人も優勝のタイトルは、いつも『育英』に奪われていました…。

目標のインターハイ出場を果たすには、ライバル『育英』に勝つ以外ないのです…。

「育英に勝って、インターハイへ行ってくれ!」

…これは1年生の当時、『T主将』が私達に託した言葉です…。

先輩方が達せなかった夢を是非とも叶えたいと、私達はアーチェリーに文字通り射ち込みました…。

『果たせ、悲願のインハイ出場!』

『打倒! 仙台育英!!』

こんな意気込みでした…。

バシュッ!!

シュルルル～～ッ… ボン!!

「ナイショ!」

バシュッ!!

シュルルル〜〜ッ... ボン!!

「ナイショ!」

バシュッ!!

シュルルル〜〜ッ... ボン!!

「チョイヤ!」

バシュッ!!

シュルルル〜〜ッ... ボン!!

「ナイショ!」

...この日もこうして、日が暮れても校舎から漏れる薄明かりを頼りに、私達の練習は続きました...

※(補足)

夏の全国高校野球で準優勝を遂げたことがある、『仙台育英学園高等学校（せんだいいくえいがくえんこうとうがっこう）』は、宮城県に所在する「学校法人仙台育英学園」が運営する私立高校です...



43 仙台育英に挑戦!

「...ン〜?

『仙台工高のMiyabi』って、誰だ〜!？」

昭和58年の夏、宮城県の高校アーチェリー界で....、

私は注目の選手になっていました....。

何故ならそれまで全く無名だったのに、3年生になってからいきなり高得点をマークするようになった遅咲きの選手だからです....。

そしてその勢いそのままに、私は春の県大会でついに個人優勝を遂げたのです....。

しかし、この時は都合により『仙台育英』のエースが不在....。

宮城県の高校生アーチェリー男子個人の真の王者は、果たして誰か...!?

さらに『仙台育英』のインターハイ連続出場を、どこの高校が阻止できるか...!?

全ての答えは、『高校選手権』の舞台で決着を付けることになったのです....。

そして、運命の日がやって来ました....。

熱く燃える、昭和58年の『宮城県高等学校アーチェリー選手権大会』...!!

会場となったのは、仙台市泉ヶ岳にある「青年の家」の県グラウンド....。

ここは豊かな大自然の素晴らしい環境がそのまま生かされた行楽地、青い空と新鮮な空気が満喫できて、私が最も大好きな場所です…。

当日の試合は、快晴で風もほとんど吹かない穏やかな天候…。

又とない絶好のアーチェリー日よりでした…。

当時の高校アーチェリーの競技方法は、50m・30mのハーフラウンド(それぞれの距離を3本ずつ12回射ち、36本×2距離=計72本の合計得点)で行われていました…。

『個人』は、72本の合計得点の高い者から順位を決めます…。

すなわち、「50m・30mを射って、一番当たった者が勝ち」

…アーチェリーは、単純で実に納得のいくスポーツなのです…。

また『団体』は、各学校の出場メンバー上位3名の合計得点で勝敗を決めます…。

…このたった3名の合わせた得点が、しばしば波瀾のドラマを生むのです…。



44 仙台育英に勝った日

ついに、ついに決戦の時がやって来ました…。

我が『仙台工業高校』が、『仙台育英学園』に勝負を挑むその時が…。

思えば連戦連敗、過去全く歯が立たなかった相手に…、

今日さえ勝てば、インターハイの切符が手に入るのです…。

「♪ピッピーッ!!」

「バシュッ!」「ボンッ!」(...緊張するなあ...)

「バシュッ!」「ボンッ!」(...あ、しまった...)

「バシュッ!」「ボンッ!」(...よし、いいぞ...)

アーチェリーの試合は、黙々淡々と行われます…。

が、射ち手の選手達は、表側には見えない葛藤が常に渦巻いているのです…。

特に今日は、各高校の3名の合計得点で勝敗を決めるので、誰も気を抜くことが許されないのです…。

(...緊張するう...)

(...足引っ張りたくない...)

(...何とか勝ちたい...)

試合は、次第に重たい雰囲気になっていました....。

この日の私達『仙台工高』のメンバーは、補欠も含めて4名全員が3年生....。

この日を目標に、励まし合いながら皆一緒に練習してきた仲間です....。

方や『仙台育英』も、オール3年生です....。

その『育英』のエースが不調で、この日スタートで出遅れ気味でした....。

これは、又とないチャンスです....。

「48」「46」「52」「50」....。

私は徐々に得点を上げて、『50m』終了時点で個人2位です....。

団体では、私達『仙工』より僅かに『育英』がリードしていました....。

こうして勝負の行方は、後半の『30m』競技に持ち越されました....。

(...ドキドキドキ...)

午後、いよいよ最後の距離に移りました....。

そのスタート直後に、『育英』の1人が大きく点数を落とす信じられないミスを犯します…。

私達はそのことを知らずに、ただひたすら『育英』に追い付こうと射っていました…。

ところが…。

「速報が出たゾ!

育英より上だ!

このままなら勝てるゾ!

この、顧問の先生の一言で…、

急にプレッシャーを感じた私達は、途中から固くなってしまいました…。

「バシュッ!」「ボンッ!」(...緊張するなあ...)

「バシュッ!」「ボンッ!」(...あ、しまった...)

「バシュッ!」「ボンッ!」(...ふう...)

この時ほど、緊張しながら射った試合はなかったと思います…。

そして…。

(...最後の1本...)「バシュッ!」「ボンッ!」(...お、終わった...)

「パチパチパチパチパチ...!!!!」

果たして、注目の団体戦は...!?

「それでは～、成績を発表致します～。
男子団体第1位、『仙台工高』～。」

ついに!

ついに!

『育英』を破った瞬間でした...!!

驚いたことに、3名合計得点で僅か2点差でした...。

「続いて～、男子個人第1位Miyabi君(仙台工高)、2位Y君(育英)、
3位D君(育英)～。」

「パチパチパチパチパチ...!!!!」

それは、昭和58年の熱い熱い夏の日のことでした...。



「パチパチパチパチ...!!」

客室車内に設置してあった電光掲示板に、「時速200km」の文字が表示されただけで私達は興奮し拍手したものです...。

～プウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオー———ン!!!!!!!～

(200系新幹線の警笛音)

この年、「全国高校アーチェリー競技大会」の開催地となったのは...、

「群馬県川場村」...。

私達は新幹線からローカル列車に乗り換え、さらにバスに乗り換えて...、

ようやく、宿舎(指定された旅館)に到着しました...。

その村に降り立つと...、

そこにはインターハイ開催を祝福する文字や、あちらこちらに沢山の花が飾り付けられおり...、

歓迎ムードいっぱいでした...。

「ついにインターハイに来たんだ...!」

生まれて初めて挑戦する全国大会...、

「いよいよそれが始まるんだな」といった、何とも言えない緊張感と興奮に包まれました...。

初日は、宿舎でゆっくりするだけです…。

そして明日は競技場まで出向いて、公開練習をします…。

スケジュールを見ると、時間が持て余し気味です…。

なんと、ここの旅館の主(あるじ)が気を利かせてくれて…、

建物のすぐ裏に古畳があるからと、至近距離の練習が出来ることになったのです…。

そして…。

「バシュッ!」「ボンッ!」 (...緊張するなあ...)

「バシュッ!」「ボンッ!」 (...あ、しまった...)

「バシュッ!」「ボンッ!」 (...よし、いいぞ...)

アーチェリーの練習は、誰も何もしゃべらず黙々淡々で行われます…。

「この旅館には、女子高生も一緒らしいゾ〜。」

「ウン、さっき僕達のためのバスから下りてきたよー!」

「ねえ、誰か彼女達を練習に誘わないかい...!？」

「えッ!？」

誰って、皆で誘ってみようよ～!」

こうして私達は、臨時の練習場に他の高校の選手を誘ったのです…。

声を掛けたのは、『松江女子商高(島根県)』の3人組みの女の子達でした…。

「えっ!？」

ホントに!？」

ここで私達も射てるンですか～!？」

私達同様、時間を持て余していた彼女達は、誘いに快諾…。

「仙台の男子高なの～!？」

ウン!

練習に混ぜて下さい～!!」

間もなく、男女合わせて6名のアーチェリーの練習が始まりました…。

「バシュッ!」「ボンッ!」 (...お、やったあ...)

「ナイシヨ～。」

「ハハハ...!」

「キャッ!」

「バシュッ!」「ボンッ!」(...この、娘...)

「ドンマイ〜。」

「ハハハ...!」

「キャッ!」

「バシュッ!」「ボンッ!」(...か、可愛いいな...)

「ナイショ〜。」

「キャッ!」

「ハハハ...!」

彼女3人が加わっただけで、先ほどまで暗かった練習が嘘のように明るくなりました...。

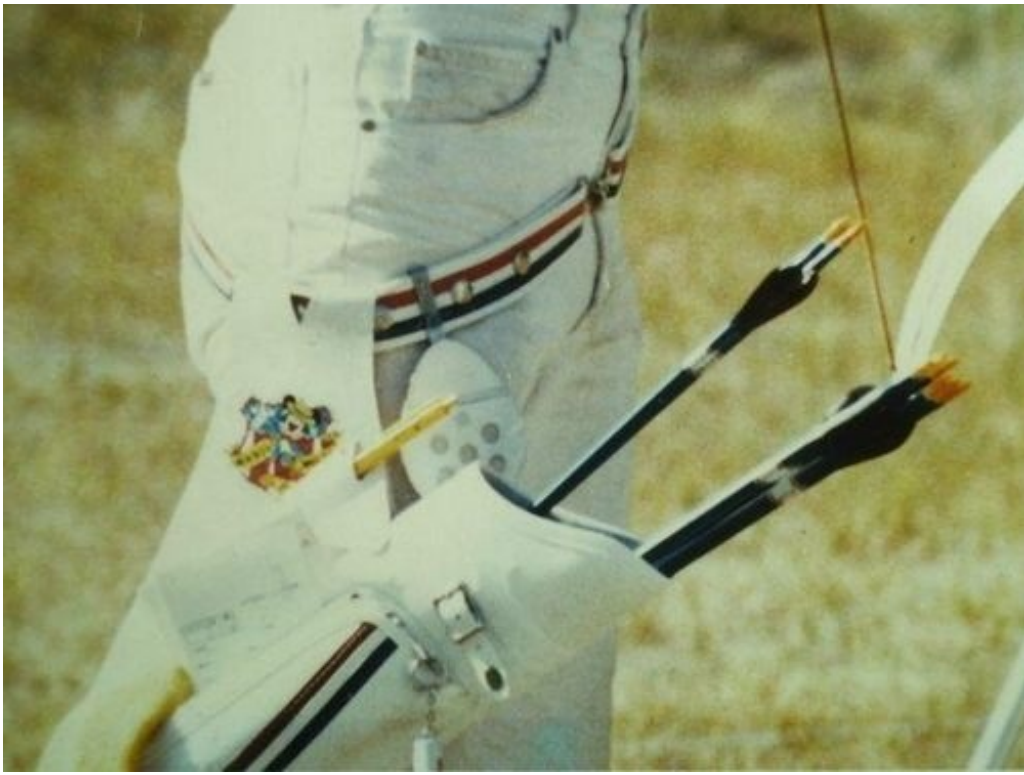
そしてやがて私達6名は、まるで昔から友達だったかのように仲良くなったのです...。

いつしか、射ちながらあるいは矢取りをしながら、お互いのことを伝え合う男女がそこにいました...。

だいぶ日は暮れましたが、楽しかった練習を止めるのが何だか忍びない気持ちでいました...。

でも、もう時間です...。

すると...!?



...キラッ!!!!

やや日焼けした顔に、真っ黒な髪の毛...

(『松江女子商高(島根県)』のKさんが、こっちを見ているッ...。)

...キラキラッ!!!!

真っ黒で、くりくりとしたつぶらな瞳...

(Kさんが、微笑みながらボクの方に近づいてくるッ...。)

...キラキラキラッ!!!!

南の地方を感じさせる、どこかエキゾチックな顔立ち...

(Kさんの可愛らしい顔が、ボクの顔に大接近してるッ...。)

「ねえ、Miyabiくん～。

私、あなたのことが大好きよ!」

(...!!!!!!!)

...キラキラキラキラッ!!!!

彼女の、その真っ赤な唇がみるみる迫ってくる....。

(...!!!!!!!!)

チク・タク・チク・タク・チク・タク・チク・タク... (時計の音)

(ガバッ!!) 「なんだ...!! ゆ、夢かぁ...。」

目を覚ました私は、同僚に気付かれない様に息を殺しながらそっと部屋を抜け出ました....。

うっすらと陽の差し始めた、「群馬県川場村」の夏の早朝....。

昭和58年の「全国高校アーチェリー競技大会」にやって来た....、

私達、『仙台工高』のインターハイのメンバー....。

そこで同じ宿に泊まっている、女子高生メンバーの1人の娘と意気投合した私....。

虫の鳴き声が飛び交う、旅館の裏庭に腰を下ろした私は....、

弓を組み立てながら、『松江女子商高(島根県)』のKさんが来るのを待ちました....。

その娘は....、

「Miyabiくん～。
おはよう～!」

「お、お早う...。」

こうして私は....

彼女と2人っきりでアーチェリーの練習という、夢の様な時間を過ごすことが出来ました...。

「バシュッ!」「ボンッ!」 (...いいところ見せたい...)

「ナイシヨ～。」

「ヤッタ...!」

「上手っ!」

「バシュッ!」「ボンッ!」 (...この、娘...)

「ドンマイ～。」

「ハハハ...!」

「キャッ!」

「バシュッ!」「ボンッ!」 (...か、可愛いいな...)

「ナイシヨ～。」

「キャッ!」

「ハハハ...!」

(...インターハイに来てホントに良かった...)

やがて楽しかった練習も、そろそろ止めなければならない時間になっていました...

私は、後ろ髪が引かれる思いで弓を下ろしました...

すると...

弓を片付けながら、あの娘が私に声を掛けてきました...

「ねえ、Miyabiくん～。
また明日も早起きして、2人だけでここで練習しない～？」

「い、いいよ...。」

「じゃあ～、約束ね！」

(また明日も、Kさんと練習するの楽しみだな...。)

宿に戻った私は...

何事も無かったかの様に、仲間と食事を済ませました...

今日は公開練習の日です…。

バスでインターハイの会場に向かった私達は…、

間もなく見たことの無い光景をまの当たりにしました…。

競技場に降り立った私達が見たのは…、

会場の左右目いっぱい並べられた、標的の洪水でした…。

47都道府県を代表する高校の一同に集まる大会ですから…、

その男女の選手分の標的が一行にずらりと設置されている様は、見事という他ありません…。

私達は、その会場の規模の大きさに腰を抜かさんばかりに驚いてしまったのです…。

「♪ブブブブブブー!!」(ブザーの音)

「バシュッ!」

「ボンッ!」

「バシュッ!」

「ボンッ!」

「バシュッ!」

「ボンッ!」

「バシュッ!」

「ボンッ!」

「バシュッ!」

「ボンッ!」

「バシュッ!」

「ボンッ!」

公開練習が始まると、選手達は一齐に弓を射ち始めました…。

淡々と矢を放つ音だけが、競技場に響き渡ります…。

当初は緊張していた私でしたが、練習が進むにしたがって気持ちが落ち着いてきました…。

ちょっと困ったのは、標的の数が多過ぎて自分の射つ的を間違いそうになることでした…。

地元のローカル試合では、こんなに標的が並ぶことは考えられないからです…。

適度な緊張感、適度な手応え、そして適度な疲労感を感じて公開練習を終えました…。

明日は、いよいよ試合の本番です…。

ところが、肝心の集中力が今一つ…。

インターハイに来たのに…、

私のアタマの中には、アーチェリーよりも女の子のことばかりが浮んでいました…。

(また明日の朝、Kさんと練習が出来るぞ...。)

その日の夜の天気予報は、台風接近の影響で「大雨」の報道がされていました...



ポツリ....

ポツリ....

ポツリ、ポツリッ....

「みんなー、話があるんだー。
ちょっと聞いてくれー。」

と、仙工高インターハイ・メンバーの一人が声を掛けました....

「いよいよ明日は本番だからー、その前に早起きして練習しようぜー。」

ガ〜ン!!!!

...それを聞いて、私は目の前が真っ暗になりました....

何故なら、明日の朝も『松江女子商高(島根県)』のKさんと2人きりで練習する約束だったからなのです....

ガッカリはしましたが、それよりアーチェリーの試合が大事です....

普段の練習では毎日何十本も射っているので、本番前に数多く射って肩を十分馴らしておくのは誰しも考えることです....

残念ながら、楽しみにしていたKさんと2人きりの練習は幻と消えました....

そして明日の試合のことを考えて、今晚は早めに就寝しました…。

ポツリ…。

ポツリ…。

ポツリ、ポツリッ…。

時折り小雨が降る「群馬県川場村」の早朝、我々3名が旅館の裏に集まると…、

間もなくKさん達の女子高生チームも、まるで申し合わせたかの様にやって来ました…。

私とKさんは、互いに挨拶を交わしただけでした…。

やがて男女6人は、数時間後にやって来る本番への緊張感からか、誰もが無言になりました…。

ただひたすら黙々と真剣にシューティングしていました…。

しかし、雨が次第に強くなってきたので、止む追えず練習は一時中断…。

結局、私達は大した本数も射てないまま退散することにしました…。

私は弓を片付けた後、Kさんに声を掛けようと立ち上がりましたが…、

チームメイトと談笑する彼女を見て、躊躇してしまいました…。

何とも中途半端な朝でした…。

サーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーツ。

「♪ブッブーーーー!!」(ブザーの音)

「バシュッ!」

「ボンッ!」

「バシュッ!」

「ボンッ!」

「バシュッ!」

「ボンッ!」

「バシュッ!」

「ボンッ!」

「バシュッ!」

「ボンッ!」

「バシュッ!」

「ボンッ!」

昭和58年8月の「全国高校アーチェリー競技大会」は、雨の降りしきる中ついに始まりました…。

台風の影響で雨は次第に強くなる生憎の天候でしたが、横風が無いのが幸いでした…。

当時のインターハイはハーフラウンド競技…、

すなわち、50m・30mの距離を各36本ずつ合計72本射った合計得点で順位を決めていました…。

前半は50m競技です…。

サーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーツ。

「バシュッ!」

「ボンッ!」

帽子を被っていても眼鏡に滴り落ちる水滴を拭いながら、私はシューティングに集中しました...
。

「バシュッ!」

「ボンッ!」

憧れていたインターハイ...。

かつて、先輩達が果たせなかった宿敵『仙台育英高』を射ち破って出場した、夢の舞台...、

そこに今、我々は立っている...!

「バシュッ!」

「ボンッ!」

雨天で調子を崩す仲間をよそに、私は前半の50m競技で高得点を重ねていました...。

やがて正面にある「得点ボード」に、何時の間にか私の名前が掲示されていたのです...。

その事を知らずに黙々と射ち続ける私、50m競技が終了しても無頓着でした...。

得点は297点...。

サ————ツ。

「途中経過の速報が出たゾ!

Miyabi君が個人で暫定4位だゾ!」

顧問の先生がそんなことを叫んだので、初めて「得点ボード」を見ました…。

びっくりしたことに、自分の名前が拳がっているではありませんか…。

この日、男子だけで120名以上出場しているので…、

てっきり周りの選手はもっと当たっていると思っていた私です…。

そんなに上位に居ただなんて、驚きました…。

キョトンとしている私に、更に動揺を誘う声が掛かりました…。

「Miyabiくん～。
スゴイじゃない～！
午後の30mも頑張って優勝狙ってネ～！」

…と！

私のマドンナ、『松江女子商高(島根県)』のKさんが祝福に掛けつけてくれたのです…！

「う、うん…。」

多分、この時の私はまるで金縛りにあったかの様にぎこちない返事だったと思います…。

サ————ツ。



カチン...!

コチン...!

カチン...!

アーチェリーの50mと30m競技には、80cmの的紙が使用されます...

標的の中心円は8cmの大きさの「10点」、そこから外側には「9点から1点まで」4cm刻みに得点帯が別れています...

この80cmの的紙の中心付近に、射った矢が多く当れば当るほど得点が高くなる訳です...

いざ50m離れて狙うと的紙が豆粒の様になり、中心付近は点の様にしか見えません...

一方、30mになれば約倍の大きさに見える訳ですから....

50mの得点より、30mの得点の方が遥かに上回るのが常識です...

ところが....

「頑張れよー!」

「キミなら出来る。
優勝だ。」

「勝ってくれ〜。」

「ガンバレ!」

生憎の雨天となった、昭和58年8月の「全国高校アーチェリー競技大会」は…、

いよいよ後半の、30m競技へと突入しました…。

私は前半の50m競技の段階で、暫定個人4位…。

思いがけない好成績で皆から声援を受け、入賞の期待を一身に背負った私です…。

カチン…!

コチン…!

カチン…!

正面にある「得点ボード」に、自分の氏名を発見した瞬間から…、

身体が急にぎこちなくなり、動作が不自然になったのを覚えています…。

サ——————ッ。(雨の音)

「♪ブブブ————!!」(ブザーの音)

カチン…!

コチン…!(ボードの上から4番目に名前が載っている…!)

「バシュッ!」

「ボンッ!」(し、しまった…。)

カチン…!

コチン…!(皆から入賞を期待されている…!)

「バシュッ!」

「ボンッ!」(や、ヤバい…。)

カチン...!

コチン...!(「Miyabiくんスゴイじゃない午後の30mも頑張って優勝狙ってネ〜!」だって...、
『松江女子商高(島根県)』のマドンナKさんも注目している...!
彼女に良いところ見せたい...!)

「バシュッ!」

「ボンッ!」(うわッ、しまった...。)

「オイMiyabi君、どうした?
49点じゃ、50mより悪いゾ!?!」

顧問の先生が心配して、声を掛けてきました...。

カチン...!

コチン...!(ボードの名前がだんだん下がってきた...!)

どういう訳か、午後はまるで金縛りにでも遭ったかの様に固くなって...、

シューティングが思うようにいかないのです...。

「バシュッ!」

「ボンッ!」(あッ、またやっちゃった...。)

あれほど伸び伸び射っていた50m競技、その同じ的紙が...、

倍も大きく見える30m競技なのに、50mを下回る得点を連発する私...。

カチン...!

コチン...!(ボードの名前が一番下になった...!)

射てば射つほど、矢は標的の真ん中を外し続けました…。

「バシュッ!」

「ボンッ! (一体、どうなってんの…。)

「Miyabiがんばれー!」

「固くなるな!」

「ドンマイ〜。」

「落ち着け!」

カチン…!

コチン…!(これじゃ『松江女子商高(島根県)』のマドンナKさんに顔出せないよ…!)

「バシュッ!」

「ボンッ! (うわッ、しまった…。)

サ——————ッ。(雨の音)

「♪ブッブー——!!」(終了ブザーの音)

「パチパチパチパチパチパチパチパチ〜!!」

結局私は、50mを辛うじて上回る301点で30mを終え、競技を終えました…。

4位のイスから降り落とされ、まるで坂を転げ落ちる様に転落していった私…。

よく覚えていませんが、最終成績は個人20何位だったと思います…。

何とも、ほろ苦いインターハイの思い出となりました…。

…でも。

「Miyabiくん～、お手紙でやり取りしましょね～!

ハイこれ住所よ。

私、手紙出すから、絶対お便り頂戴ね～。

待ってるね～!」

「う、うん…。」

…と!

私と、マドンナ『松江女子商高(島根県)』のKさんとは…、

その後も、文通で交流を続けました…!

2人は、誕生日やバレンタインそしてクリスマスにプレゼントを交換したり…。

いつしか、お互い家庭を持ち30年経った今でも…、

毎年の年賀状で、近況を知らせ合っています…。



「んでー、Miyabi君、希望する会社は決めたのかッ?」

担任教師からの問い掛けです…。

「先生それが…、まだなんです…。」

「うーん。

求人票を見て、明日にでも決めてきなさいッ!」

「は、はい…。」

昭和58年、仙台工業高校3年の私は進路に悩んでいました…。

我が校は、地元では屈指の就職率の高い学校なのです…。

幼い頃からクルマが好きだった私は、卒業したら自動車の業界へ就職するつもりでこの高校の機械科に入ったのです…。

ところが、部活のアーチェリーに夢中になり過ぎてしまい、気が付いたら就職活動はさっぱりになっていました…。

トヨタ、日産、三菱、ホンダ…etc

松下、東芝、日立、ソニー…etc

自動車メーカー各社の本社、代理店、関連企業を皮切りに、鉄鋼・機械関連の業界や、家電・弱電メーカー、そのほか沢山の企業から押し寄せる求人の数々…。

日本全体が右肩上がりの経済成長真っ只中で盛り上がっていたこの当時、仙台市立の伝統の工業高校の新卒者へ次々と求人が舞い込んでいたのです…。

就職課の窓口の傍らに置かれた求人票の綴じ録を開いた私は、その膨大な企業の数に圧倒され、些か投げやりになっていました…。

社会人になる…!?

働く…!?

…そんな自分は、全く実感が湧きません…。

同級生らは希望する就職先と面接を繰り返すなどで、次第に内定をもらい始めていました…。

ところが、私ときたら求人票の綴じ録を1回開いて眺めたまま手を引いてしまったのです…。

就職なんてピンとこないな…。

まだ18歳、誰もそんな年代なら進路に悩むのは当然でしょう…。

就職をやめて、進学を選択しようか…!?

そんなことを一人で悶々と考えてばかりいました…。

「バシュッ!」 「ボンッ!」

そうだ…!

大学へ行こうか...!?

若いから悩むのか、悩むから若いのか判りませんが、進路は人生の分かれ道ですね...



「こんにちは...。」

「Miyabi君、いらっしゃい!
久しぶりだな!」

この日、私は頑固オヤジMさんのアーチェリー・ショップに顔を出しました...。

私がアーチェリーに熱心になったのは、彼のアドバイスがきっかけでした...。

ウィィィィィィ〜〜〜〜ンンンン!!!!!! (アローシャフトをカットする音)

東北唯一のアーチェリー専門店、その作業場兼販売所はいつも接着剤やシンナーの香りが漂っています...。

「じ、実は就職か進学か迷ってまして...。」

「そうかァー!」

昭和58年、仙台工業高校3年の秋のことです...。

事実上引退試合となった夏のインターハイ以来、弓を一度も触ることなく過していた私は進路に悩んでいました...。

Mさんの人柄に惚れている私は、彼に人生のアドバイスを請うことにしたのです...。

パチン!

ビュッ、スーッ!(フレッチャーに挟んだヴェインにフレッチタイトを塗る音)

私は堪らず彼に尋ねました…。

「Mさんは何故、大学に行ったんですか…?」

「オレは北海道の高校を出ただけど、スキーが得意でね!

スポーツ選手になるのが夢だったんだ!

もっと上手くなりたくて、中京大体育学部に行ったんだ!」

「えっ!?」

アーチェリーじゃなかったんですか…!？」

「ウン、ところが大学行ったらスキーの上手いやツがゴロゴロいてサ!

これじゃ勝てないと判ったのサ、それで挑戦したのがアーチェリーだったのサ!」

「そ、そうだったんですか…。」

中京大学でアーチェリーを始めたMさんは、4年の時主将として全日本学生大座戦に出場、モントリオール五輪銀の道永宏率いる同志社大を相手に準優勝に輝きます…。

卒業後は西沢スキー(弓のメーカー)、都内のアーチェリー・ショップを経て、昭和56年仙台市に店を開きました…。

その後も全日本選手権、国体、世界大会代表など第一線で活躍…。

「Mさん、大学行って良かったですか...!?!」

「勿論!

大学でアーチェリーに出会ったから、スポーツ選手と商売の両方を実現することが出来たからナ!

」
「なるほど...。」

「Miyabi君、アーチェリー本当に好きかア!?
高校で十分満足したのかア!?!」

「え、ええまあ...。」

と答えた私でしたが、心の中にはインターハイで途中から崩れた悔しさが込み上げていたのです...

「お前の高校からなら、工業系の大学に学業推薦で行けるんじゃないかア!?!」

「す、推薦...!?!」

「大学に行って、思いっきりアーチェリーやったらイイんじゃないかア!!」

「...!!!!」

「バシュッ!」「ボンッ!」(弓の射った時の音が頭の奥で鳴り響く)

私の心は、もう迷うことは無くなりました...

進路は人生の分かれ道...

最後の決断は自分で決めるのが男ですね...。



春...

校庭の早咲きの桜が色づき始めた頃...

少しまだ冷たい風が、時折吹いては枝を揺すって...

顔を出したばかりの花びらを散らそうとする...

少年達が流した汗が染み込んだグラウンド...

油の臭いがする機械科の実験棟...

校舎の形と壁の色...

慣れ親しんだ教室...

灼熱の夏も、厳寒の冬も...

一射一射集中して放ったアーチェリーの射場...

先輩の一人一人の顔...

練習している皆と、後輩の姿...

この3年間、毎日ごく自然に視界に入っていた風景が...

明日から消える...

でも、記憶の中で思い浮べる学び舎は一生消えることは無いだろう...

「アベ〇〇君!」

「はい!」

「卒業おめでとうッ。」

「〇〇タケシ君!」

「はい!」

「卒業おめでとうッ。」

「サトウ〇〇君!」

「はい!」

「卒業おめでとうッ。」

「〇〇ユタカ君!」

「はい!」

「卒業おめでとうッ。」

♪ 仰げば 尊し わが師の恩～

教えの庭にも はや いくとせ～

おもえば いと疾し このとし月～

いまこそ わかれめ いざさらば～♪

「タカハシ〇〇君!」

「はい!」

「卒業おめでとうッ。」

「〇〇ジュン君!」

「はい!」

「卒業おめでとうッ。」

「イトウ〇〇君!」

「はい!」

「卒業おめでとうッ。」

♪互いに むつみし 日ごろの恩～

わかるる後にも やよ わするな～

身をたて 名をあげ やよはげめよ～

いまこそ わかれめ いざさらば～♪

「〇〇Miyabi君!」

「は、はい...!」

「卒業おめでとうッ。」

♪朝ゆう なれにし まなびの窓～

ほたるのともし火 つむ白雪～

わするる まぞなき ゆくとし月～

いまこそ わかれめ いざさらば～♪

昭和59年春、私は仙台工業高校機械科を卒業しました…。

この時代はクラスの殆どが就職、しかもその半数が県外就職…。

大学進学を選択したのは、私を含めてたった3名でした…。

あっという間の3年間でしたが…、

長い人生の中でも、かけがえの無い貴重な時間だったと振り返る、高校時代ですね…。



遂に...!

遂に...!

念願の叶う日が近づいて来た...!

それは、子供時代からの憧れ...!

「Miyabi君、何を考え事してンダァ!？」

大人って、いいな~とずっと羨ましく思っていました....。

でも、その年齢にやっと達したのです....。

「ちゃんと、確認してェ!!」

推薦入学で大学進学が決まってから、時間の空いてる日に通い始めたのです....。

費用は親に出してもらいました....。

感謝です…。

「遅いッ、遅いッ!!」

もの心ついた時から、クルマの玩具が大好きでした…。

プラモやミニカーを、沢山集めました…。

「ブレーキッ、ブレーキッ!!」

漫画サーキットの狼を、むさぼり読みました…。

カメラ片手に、スーパーカー・ショーも随分見に行きました…。

「大曲りだぞッ、もっと大きく切って!!」

そして…。

忘れもしない、小6のある日、衝撃的な『マーコスGT』との出会い…。

大人になったら、あのクルマに絶対乗ってやるんだ、と誓った私…。

…ガツンッ!!!!!!!

「あーあ!!
馬鹿たれッ!!
何でもっと切んないんだッ!!」

仙台工高の機械科に入ったのも、出たら整備士でも目指そうかと考えたからでした…。

それが大学に進む事になろうとは…。

「ハイ、今日の実技はこれで終わりッ!!
ハンコは無しだナッ!!」

「え`え`ッ…!？」

こうして、仙台市原町にある自動車教習所で悪戦苦闘する私でした…。



「はいッ、ご苦労さんッ！
今日の教習は、ここまでッ！」

「...(シュン)。」

普通免許の実技は、足踏み状態が続いていました....。

何故か、いつまで経っても第2段階を終了出来ないのです....。

同時期に入校した生徒は、とっくに路上を走っているというのに....。

もしかしたら、自分は自動車の運転に向いていないのかも知れないな...？

当時の私は、そんな心境で教習所へ通っていました....。

「ええと、前後を確認してからドアを開けて...、
腰降ろしたら、ドアを2段階に分けて閉じてえ...と。」

毎日私は自宅の座椅子を運転席に見立てて、シュミレーション練習をしました....。

「ええと、今度は座席を調節して...、
次にルームミラーを調節してえ...、
ええと、ええと...。」

手とり足とりの、なりきりドライビングはまだまだ続きます...(笑)。

「それから、左手でサイドブレーキが掛ってるか確認して...、
左足はクラッチ踏んで、また左手でギアがニュートラルか確認...、
ええと、次に左手はハンドルのこの辺りを掴む...、
右足はアクセルを半分踏んで...、
右手でキーを捻ってエンジンが掛るっと...。」

これでは...、

エアギターならぬ、エアドライビングですね...(笑)。

「エンジンが掛ったら...、
ええと、目視確認後に右手で方向指示機を上げて...、
左手はギアを1速に入れる...、
ええと、ええと...。」

始まって間もなく、座椅子シュミレーションは...、

混乱に混乱を重ねました...。

「ええと、ええと...、あッ!?
し、しまった...!!
シートベルトするの忘れてたッ...!!」

ガッカリしながら、始めからイメージやり直し…。

クルマの運転って、どうしてこんなに複雑極まりない厄介なものなんだろう…。

もの心ついた時からクルマの大好きな私でしたが…、

考えてみれば運転の具体的な知識に関しては、サッパリだったのです…。

これじゃあ自動車というより、手動車だな…。

などと、ボヤキをこぼす毎日でした…。

そんな悪戦苦闘の私に、意外な助っ人が現れたのです…。



「Miyabiちゃん、
明日は朝6時にね〜。」

「う、うん...。」

運転免許取得を目指して悪戦苦闘の私に...

助け舟を出してくれたのは、姉でした...。

翌朝、親父のカローラを駆った彼女は...

私を乗せて、颯爽と走り出したのです...。

「アタシもね、免許取るのにお父さんと練習したんだよ〜。」

「そ、そうだったんだ...。」

短大を卒業し、今年から幼稚園の先生になった姉は...

実に、おおらかな性格の女性です...。

「この辺りにしようかしら〜。」

「う、うん...。」

ノホホンとはしていますが...

いざという時には度胸があって、頼れる女性です…。

姉がクルマを乗り入れた場所は、仙台新港のある埠頭でした…。

第2段階でつまづく私を、不敏に思った彼女は…、

ここで運転の練習をさせようと、連れ出したのです…。

「まず、アタシの切り方よく見てネ～。」

「う、うん…。」

私はドキドキしながら、姉のハンドルさばきを見ていました…。

日曜の早朝、人影のない安全そうな場所です…。

「基本動作がマスターしてないうちは、
路上に出してくれないんだよ～。」

「そ、そうなんだ…。」

「じゃ、今度はMiyabiちゃんが運転ネ～。」

「えッ…!?!」

私は、心臓の鼓動が高鳴るのを覚えました…。

もし、人に見られたらどうしよう…？

警察に捕まったりしないかな…？

運転席に着いた私は…、

ドキドキしながら、ハンドルをぎこちなく握りました…。

そして間もなく私の操るカローラは…、

誰もいない埠頭の中を、ゆっくりと進んだのです…。

「そう、そう、その調子よ～。」

「……………(汗)。」



「ええと...、3秒前に方向指示機を上げて、次に目視確認し...、」

自動車教習所に通う昭和58年の私です...。

「交差点が近づいてきたら、もう一度目視確認して...、次にクルマを左端に寄せて...。」

姉のレクチャーのお陰で、クルマの運転そのものは何とか形になりました...。

第3段階に入って、いよいよ路上教習となったのです...。

しかし、運転技術以上に厳しく見られるのが「安全確認」でした...。

その「安全確認」が上手くいく時と、上手くいかない時があるのです...。

上手くいかない時は、焦っている場合ですね...。

焦るのは、相性の悪い教官との時間でよく起こると思いませんか...？

「確認ッ!

確認ッ!」

「...(汗)。」

「よく見ろッ!

よく見ろッ!」

「...(汗)。」

「Miyabi君、何でミラーでよく確認せんのだッ！」

「...(シュン)。」

また、こんな事も....。

「馬鹿ッ！」

遅い遅いッ！」

「...(汗)。」

「Miyabi君、何で止まってるクルマ見えたら直ぐ減速せんのだッ！」

「...(汗)。」

「出してッ！」

出してッ！」

「...(汗)。」

「馬鹿ッ！」

今度は速度出過ぎだッ！」

「...(汗)。」

「ハイ、歩行者いるゾ！」

クルマ寄せてッ、寄せてッ！」

「...(汗)。」

「信号ッ！」

信号ッ！」

「...(汗)。」

「馬鹿このオ!
何で黄色で通過すんだァ、止めろッつうのオ!」

ギュギュッギューツ!!!!

「馬鹿たれエ!
ここで止まってどうすんだッ、交差点の真ん中だベェ馬鹿このオ!」

「...(シュン)。」

「この時間はここまでエ!
ハイッ、ご苦労さんッ!」

やっぱりハンコは無しでした...

「...(シュン)。」

鬼の〇〇教官ってホントだなあ...、さっぱりハンコくれないなあ...

最近のことは知りませんが、この頃は実技は1日に2回乗れました...

この日の午後、2度目の実技に望みました...

すると...?

「ハイッ!

では早速始めますッ!

乗りなさいッ!

「ゲッ...!?!」

よりによって、またもや相性の悪い「鬼の〇〇教官」だったのです...!!!!

「馬鹿ッ!

遅い遅いッ!

「...(汗)。」

「馬鹿このオ!

何でちゃんと確認しないンダァ、しっかり見ろッっうのオ!

「...(滝汗)。」

「この時間はここまでエ!

ハイッ、ご苦労さんッ!

やっぱりハンコは無しでした...。

「...(シュン)。」



ガチャッ!(ドアを開ける音)

「ドキドキドキ...。」(落ち着け落ち着け...。)

バタンッ!(ドアを閉める音)

「ドキドキドキ...。」(シートベルト忘れるなよ...。)

カッチカッチカッチ!(方向指示機の音)

「ドキドキドキ...。」(いよいよ発車だ...。)

ブルルンッ〜!(教習車が発進する音)

「ドキドキドキ...。」(道順は、ええと...。)

昭和59年、自動車教習所もいよいよクライマックスの卒業検定です...

キ〜ッ!(赤信号で止まる音)

「ドキドキドキ...。」(教官の視線が気になるう...。)

ブルルンッ〜!(教習車が走行する音)

「ドキドキドキ...。」(エンスト気を付けろ...。)

カッチカッチカッチ!(方向指示機の音)

「ドキドキドキ...。」(交差点は慎重に慎重に...。)

クイッ!クイッ!(ギアチェンジの音)

「ドキドキドキ...。」(2速から3速へ...。)

カッチカッチカッチ!(方向指示機の音)

「ドキドキドキ...。」(止まっている車を上手く避けてと...。)

ブルルルンッ~!(教習車が走行する音)

「ドキドキドキ...。」(次の交差はみ、右だった筈...。)

カッチカッチカッチ!(方向指示機の音)

「ドキドキドキ...。」(この次は難関だ...。)

キ~ッ!(踏み切りで止まる音)

「ドキドキドキ...。」(焦るな焦るな...。)

キュルキュルキュルッ~!(窓を開ける音)

「ドキドキドキ...。」(右見て左見て、よし...。)

ブルルルンッ~、ガタガタンッ!(教習車が線路を横切る音)

「ドキドキドキ...。」(ふう~っ、次は信号の無い十字路だぞ...。)

ここまではノーミスで順調にいきましたが...

キ~ッ!(十字路の手前で止まる音)

「ドキドキドキ...。」(少し前に出してから、右左良く確かめて...。)

ブブブブッ～、ブブブブッ～!(2段階に分けて教習車を進ませる音)

「ドキドキドキ...。」(ふう～っ、クルマ来なくて良かったあ...。)

カッチカッチカッチ!(方向指示機の音)

「ドキドキドキ...。」(最後は得意の坂道だ...。)

ブルルルンッ～!(斜面を駆け上がる音)

「ドキドキドキ...。」(アクセル多めに開けて...。)

キ～ッ!(信号で止まる音)

「ドキドキドキ...。」(焦るな焦るな...。)

ギュウッ!(サイドブレーキを引く音)

「ドキドキドキ...。」(落ち着け落ち着け...。)

ブブッ、ブルルルンッ～!(坂道で再発進した音)

「ドキドキドキ...。」(ホッ!うまくいった...。)

ブルルルンッ～!(教習車が走行する音)

「ドキドキドキ...。」(ホッ!もう少しで教習所だ...。)

キッ!!!

キキキ～ッ!!!!(急ブレーキの音)

「ドキドキドキ...。」(あ～ッ、びっくりした!
何で横から飛び出してくるんだッ...!)

ブルルンッ〜!(教習車が走行する音)

「ガックリ...。」(もう少しのところだったのに...。)

キ〜ッ!(教習所に止める音)

「ガックリ...。」(シュン...。)

「ハイッ、ご苦労さんッ!
発表は後でッ!」(教官の声)

「ガックリ...。」(頑張ったんだけどなあ...。)

そして、いよいよ合格者の発表となりました....。

〇〇〇〇番 Miyabi

(あれッ!?)

名前があった!?

ヤッター!!

一発合格だあ〜!!)

こうして、私の普通自動車の免許取得は無事済んだのでした....。

氏名 _____ 昭和39年11月9日生

本籍 宮城県多賀城市

住所 石巻市

交付 平成16年10月19日 13135

平成21年12月09日まで有効

免許の条件等 眼鏡等

優良

番号 第 _____ 号

二種	昭和56年01月07日
他	昭和58年08月30日
二種	平成00年00月00日

種類	普通	普通	普通
	原付	原付	原付

運転免許証



宮城県公安委員会



57 免許取得後...初運転の日

「若葉マークを、この辺りに貼ってと...。」

ペタリ!

「前方よしっ、後方よしっ...!」

ガチャ!

「ドアは2段階に開け、2段階に閉めるっ...!」

ボタン!

ある晴れた土曜の午後、私は初運転の日を迎えました...

「座席とミラーを調節、ベルト着用っ...!」

カチン!

「サイドブレーキ、ギアのニュートラルを確認っ...!」

そう、免許をとって初めての単独運転です...

「いよいよ、キーを捻るっ...!」

キュルキュルキュル～、ブォン!!

「かかった!!」

ブルルブルルブルルブルル〜!

前日、父親にカローラの借用を頼んだのですが、心配そうな顔をしながらもキーを渡してくれました…。

ルルルルルル〜!

自宅の前は、急な坂道になっています…。

その坂がクセもので、坂道発進してから直ぐに交通量のある市道に合流するのです…。

ルルルルルル〜!

私は、歩行者もクルマも途切れるタイミングを狙って少し待ちました…。

ルルルルルル〜!

そして、間もなくクルマを出す決心をしたのです…。

「クラッチを踏んで、ギアを1段に入れてっ…!」

クイッ!

「ブレーキを放して、アクセルをやや強く踏んでっ…!」

ブウ〜ッ!!

「クラッチを少しづつ放してっ…!」

ブブブウウ〜ン!!

いよいよ、人生初のドライブが始まろうとしています…。

もの心ついた時から大好きだったクルマ…。

プラモデルやミニカーで遊んできた日々…。

スーパーカーショーの思い出…。

親友タツヤ君との友情…。

カローラのクラッチを繋ぐ瞬間、私の頭の中では様々なシーンが走馬灯の様に回っていました…

。

私にとって、少年時代に抱いていた夢の第一歩が「クルマの運転」でした…。

それは、ちっぽけな夢の一つですが…。

思えば、模型を眺めては「大人になったらこの手で操ってみたい」という憧れの18年間でした…

。

その夢が今、まさに実現しようとしているのです…!!

ブブブウウ〜ン!!

「…!?!」

何故か、親父のカローラは坂を上ろうとしません…。

次に私は少し多目にアクセルを開けてみました…。

ブブブウウウ～ン!!

「!?…!?」

ところが、それでもクルマは出ようとしません…。

そこで思いっきりアクセルを開けました…。

すると…!?

ブヴヴヴヴッ～!!!!

ギュギュギュッ～!!!!

ズルズルズルズルズルズル～ッ!!!!

エンジンが大きな唸り声を上げたかと思ったら後輪は砂利でスリップ、物凄い白煙を巻き上げてタイヤが鳴いたのです…。

その音に驚いた親父が、玄関から慌てて飛び出してきました…。

私は頭が真っ白になり、エンストさせても暫く放心状態のままハンドルを握り締めていました…。

「…?????」

カローラは坂道を発進する筈がありません、サイドブレーキを下ろしてなかったからです…(笑)。

数分後、心配顔の親父に見送られながら、今度は手順を間違えず無事スタート出来ました…。

こうして、私のほろ苦い初ドライブがスタートしたのです…。

これから向かう目的地は…？

さて、皆さんは初めてクルマを運転した日はどこへ行きましたか…？



ブルルルルルルル〜!!

国道45号線を走る、茶色のカラーラ…。

操っているのは私…。

そう、人生初の単独運転です…。

ハンドルを持つ手は、10時10分の位置でガチガチに緊張したまま汗ばんでいる…。

その時の私は、時折AMラジオから流れてくる音楽も全く耳に入らない位に無我夢中で運転していました…。

「チラッ…。」

信号待ちの度に、私は何回も助手席を見ました…。

覗いても、そこには私のポーチがあるだけです…。

おかしなことに、教官が助手席に居ない風景に少し戸惑っていたのです…。

生まれて初めての1人の運転に慣れてない為か、私は不思議な違和感を覚えました…。

でも何はともあれ、クルマの運転が出来るようになったのですから、私は幸福感に包まれていました…。

そして、人生初の単独運転で足を運んだ先は…!?

ブルルルルルルル〜!!

「あッ!?

Miyabi先輩だッ!?!」

「どれどれッ!?!」

「ホントだッ、Miyabi先輩がクルマ運転して来たゾ!?!」

土曜の昼下がりに、私はつい数日前までアーチェリーの練習に汗していた母校にやって来ました...。

ここは、卒業したばかりの仙台工業高校です...。

程なくして、射場の前にカローラを停車しました...。

アーチェリー一部の後輩達は、前ぶれなく現れた卒業生に釘付けです...。

彼らは矢取りを済ませるなり、こげ茶色のクルマを取り囲みました...。

「やあ...!」

「Miyabi先輩、こんちわっス!
免許とったんスか!?!」

「ま、まあね...。」

「やっぱ難しかったっスか!?!」

「いや、そうでもなかったね...。」

「さすがっスね!

Miyabi先輩!」

「ま、まあね...。」

本当は恥ずかしいくらい何時間もオーバーして、期間ぎりぎりに免許がとれたんです...(笑)。

「ところでMiyabi先輩、大学行ってもアーチェリー続けるンスよね!？」

「えっ!？」

う、うん...。」

後輩のこの質問に、何故か私は即答出来ませんでした...。

そして...。

「いいなァ、オレ達もMiyabi先輩みたいに大学入って、また弓射ちてェなァ!!」

「じゃあ、頑張ってね...!」

「ハイッ!!」

Miyabi先輩失礼しまス!!」

「またね...。」

「失礼しま〜ス!!」

こんなやりとりの後、十数名の後輩が見送る中を私はクルマを出しました...。

ブルルルルルルル〜!!



59 1983年(昭和58年)はどんな年

私が高校を卒業、自動車の運転免許を取得した年の日本は、果たしてどんな年だったのでしょうか...?

そこを調べてみました...。

【1983年(昭和58年)の出来事】

1/27 青函トンネル先進導坑貫通

2/1 老人保護法施行

2/21 山形市の蔵王観光ホテルで火災11人死亡

3/13 東北大医学部が日本初の体外受精による着床成功を発表

3/28 沖縄市営体育館でコンサート中の松田聖子に、暴漢が凶器を使い殴打

4/18 俳優萩原健一、大麻取締法違反で逮捕

4/28 歌手清水健太郎大麻取締法違反で逮捕

5/21 歌手坂本スミ子大麻取締法違反で書類送検

4/26 フレオ・イグレスias来日、武道館で公演、チケットは破格の8万円

5/26 日本海中部地震、津波が発生、遠足の児童ら死者・行方不明104人

6/13 訓練生の死亡・行方不明など、しごき訓練が問題となっていた戸塚ヨットスクールの校長戸塚宏、傷害致死容疑で逮捕

6/26 第13回参議院議員選挙、全国区は初の比例代表制

7/15 熊本地裁、初の死刑囚再審「免田事件」で無罪の判決、確定

7/15 任天堂「ファミリーコンピュータ」発売

7/22 山陰地方に豪雨、死者・不明119人

9/1 大韓航空機、サハリン上陸で「領空侵犯」としてソ連戦闘機により撃墜（乗客乗員269人全員死亡）

10/3 三宅島雄山大噴火、溶出流で阿古地区大被害、島外へ疎開

10/12 ロッキード事件丸紅ルート判決公判、田中元首相に懲役4年、追徴金5億円の実刑判決、他4人も有罪判決

12/18 第37回総選挙

12/27 第二次中曽根内閣発足

パソコン・ワープロが普及
東京ディズニーランド開園
NHK「おしん」ブーム
フォーカス現象

<歌謡曲>

さざんかの宿(大川栄策)

矢切の渡し(細川たかし)

めだかの兄妹(わらべ)

探偵物語(薬師丸ひろ子)

氷雨(佳山明生)

SWEET MEMORIES(松田聖子)

(め)組のひと(ラッツ&スター)

時をかける少女(原田知世)

<テレビ番組>

誰かが私を愛してる

赤かぶ検事奮戦記

徳川家康

金曜日の妻たちへ

積木くずし

おしん

世界まるごとHOWマッチ

わくわく動物ランド

ふぞろいの林檎たち

家政婦は見た!

東北自動車道にて…。

ブルルルルルルル〜!!

80km/h…。

85km/h…。

90km/h…。

95km/h…。(緊張…!)

100km/h…!!!!

「♪キンコン〜♪キンコン〜♪キンコン〜」(時速100キロを超過すると知らせるチャイム音)

「やったァ…!」

ブルルルルルルル〜!!

昭和58年、免許取得した私は時間さえあれば、家のクルマを借りて乗り回していました…。

初めて時速100キロのスピードを出した時は、緊張で手に汗握ったものです…。

親父のクルマは、昭和53年式『トヨタカローラ4ドアセダン1300Hi-DX』(3代目E50型・4速MT)でした…。

当時喧しくなりつつあった安全対策の為か、キラキラと光った大型の衝撃吸収メッキバンパーが装備されたカローラです…。

ボディカラーはメタリックブラウン、いわゆる『こげ茶色』です…。

この渋い色のせいか、ちょっとだけ高級感が漂っていました…。

縦置きに搭載されているエンジンは、人気があった「スターレット」と同じ4気筒OHVでした…。

タコメーターが無かったのでどの位回ったかは定かではありませんが、アクセルを目一杯踏むと音がやたら盛大に唸るエンジンで、苦しそうに声を上げる割にはよく粘るエンジンでした…。

父の『こげ茶色のカロラ』の走りは、ファミリーが日常の足として使うなら当時の国産車の水準では並で、高速道路を頻繁に利用したりフル乗車するのでなければ十分でした…。

何故なら、1,300ccで72馬力の動力性能は大したことはないが、重さは850kgほどの軽い車体だからです…。

現在でいえば軽自動車並のクルマです…。

しかし、今のクルマと違うのは運転に、やや体力が必要だったこと…。

当時のクルマは皆そうでしたが、FR駆動・マニュアルトランスミッション・ノンパワステが普通でしたね…。

ギアチェンジは忙しいし、坂道発進は緊張するし…。

たかだか155SR13サイズのタイヤでも、パワステ無しではハンドルを切り返すのにそれなりに腕力が必要でした…。

また、やたらとスピード感があり、時速80キロも出すと車体が不安定になってきて、いかにも速く走っている実感が伝わってきたものです…。

私は、この『こげ茶色のカローラ』を操るのが楽しくて、時間さえあれば1人でアテもなくどこまでも走って行き、とにかく運転に夢中になりました…。

ブルルルルルルル〜!!

右へ左へ、舵を切りながら抜けて行くウィンディングロード…。

ギアチェンジが上手く出来た時の優越感…。

少しだけ開けたウィンドウから入る走行風が、額に当たる心地良さ…。

「♪〜♪〜♪〜」

カセットテープの音楽を聴きながらの片手運転…。

『こげ茶色のカローラ』は、生まれて初めて私にクルマを走らせる喜びを教えてくれたのです…。



61 コーナリングの魔術師って？

「今だッ!! 四輪ドリフト～!!」とか....、

「パワードリフトについてこれるかな!？」や....、

「げえっ!? 幻の多角形コーナリング!!」などに....、

憧れませんでしたか...？

親父に借りた『こげ茶色のカローラ』の運転も、だいぶ慣れてきた頃です...

スピード感が麻痺してきたのか、私はだんだんとアクセルをより強く踏むようになっていました....。

キッ!! キュルキュルッ!!

「やったァ...!」

信号が青に変わるのを合図に、タイヤを鳴らして猛ダッシュで発進させたり....。

ブルルルルルルル～!!

「ドキドキドキ...!」

空いている直線道に入れば、制限速度を大幅に超過して飛ばしてみたり....。

クルマを走らせるのは確かに楽しいのですが、何か物足りなくなってきました…。

運転操作は、初心者にしては上手い方だとは思いますが...(笑)。

自転車なら苦勞して漕いで半日かかって辿り着くような距離でも、クルマなら鼻歌交じりで易とも簡単に到着出来ます…。

雨が降ろうが風が吹こうがへっちゃら…。

エアコンも装着しているし…。

でも、何かが想像と違う…?

コーナリングが違うのです…。

それは恐らく、その昔読んだ『サーキットの狼』の影響だと思います…。

漫画の中で彼らは、クルマをドリフトさせながら走っているのです…。

特に主人公の「吹風裕矢」は『コーナリングの魔術師』の異名を持ち、愛車を自由自在にコントロールさせてはカーブをアクロバティックにすり抜けていました…。

そんなことが一般道で出来る筈がないのは、百も承知です…。

でも腑に落ちないのです…。

いつか自分もクルマを運転したら、ドリフトさせながらカッコ良くコーナリングさせてみたいと思っていたのです…。

でも、それが出来ないのです…。

やっぱり素人には無理なのかな...？

ところが、ある日のことです...

松島の某道を走っていると、前の軽トラがやけに遅いのです...

この地域は未舗装で、緩やかな長いカーブの砂利道がいつまでも連続しています...

私は加速して、その軽トラを猛スピードで追い越しました...

間もなく、大きく左に曲がったカーブに差しかかり、私は左にハンドルを切りましたが、カローラは一向に曲がろうとしません...

そこで大きく舵を切ったところ、今度は砂利で滑った後輪が空転したかと思ったら、クルマ全体が半時計回りに回転し始めたのです...!

ズザザザァァァ〜!!!!

「ドリフトだぁ...!!!!」

結局、私を乗せたカローラは半分スピンした格好で止まり、カードレールにあと数センチのところで間一髪当たらずに済みました...

この事件をきっかけにして、私の心に火が点いたのです...

それからというもの、未舗装路でわざと派手にハンドルを切って後輪を滑らせる走りをしてみたり...

雨天で滑りやすいカーブを見つけては、軽くお尻を振ってみたり...

雪の日は特に楽しい...!

スパイクタイヤを履いた後輪を左右に振りながらのコーナリングは、スリルが味わえました...。

いずれも低い次元でしたが、私にとっては『こげ茶色のカロラ』がFR駆動だったことが基本を学ぶ良い経験になったのです...。



クルマの免許取得から3ヶ月後の、ある日曜日のことです…。

ブルルルルルルル～!!

「それでさあ…、…な訳さあ…!」

この日の私は、カローラに友人を乗せて短距離ドライブと洒落こんでいました…。

「へえ…、…なるほどねえ…!」

秋保町まで足を運んだ帰り道、車内で会話が弾んでいた私と友達です…。

この辺りの名所「秋保大滝」を見学したり、ドライブインで食事をしたり、気が向くままにクルマを走らせては降りて2人でぶらぶらしていました…。

いつになく上機嫌の私でした…。

何故なら、クルマのドライブが楽しくて仕方ない私は、友人にいいところを見せようと意識してカッコよく運転していたからです…。

キッ!! キュルキュルッ!!

わざとタイヤを鳴らしてみたり…。

ブルルルルルルル～!!

結構なスピードで飛ばしてみたり…。

この頃の私は、親父の『こげ茶色のカローラ』を私の手足の様に自在に操るれるまでになり、有頂天になっていました…。

(クルマは最高だな、行きたいところへ何時でも自由に行けて…!)

(教習所に通っていた時は、どうしてあんなに苦労したのだろう…?)

(今ではこんなに簡単に操作出来るじゃないか…!)

(時速80kmでもヘッチャラさ…!)

(ボクは何て運転が上手いんだろう…!)

…などと、私の心の中はうぬぼれ心で自己陶醉していたのでした…。

そんな気持ちのまま運転していると、どんな結果を招くのかも知らずに…。

とある、お土産屋に立ち寄った時です…。

友達が来た道に戻りたいと訴えるので、カローラに乗り込むなり私は急いで急発進させました…。

ブルルルルルルル～!!

店舗の前は上下1車線の県道で、緩やかなカーブになっています…。

私は道路にいきなりクルマの頭を突き出し、間もなくハンドルを切って右折しました…。

「...。」(ガタガタガタガタ～)

間もなく警察の事情聴取と現場検証が始まりましたが、私はその場に立ちすくんでただ震えていました...

電話ボックスから親父に連絡をとりましたが、自分でも何を話していいか判らないほどショックを受けていました...

幸いだったのは誰も怪我した人が入なかったこと...

クルマは私の方も相手の方も酷く凹んではいましたが、走行には支障が無かったので事故処理が済んで双方帰宅の途につくことが出来ました...

それからしばらくの期間、親父からクルマの使用許可は下りませんでした...(泣)。



大学...、だいがく...、ダイガク...、だ、大学!!!!

「M社長、お陰さまでボクこの春、大学進学が決まりました...。
『東北工業大学』の電子工学科に学業推薦で入学です...!」

「そオカア!
Miyabi君、良かったなァ!」

「は、はい...。」

アーチェリーショップの頑固オヤジに挨拶した後、私は仙台市内を歩きながら、これから突入する大学生活を想像し悦に浸っていました...。

(大学生かぁ...!)

ショーウィンドウに映った自分の顔を見ては、ほくそ笑みました...。

(この僕が大学に入れるなんて...!?)

多分、その時の私は顔が緩みっぱなしだったと思います...。

(この華やかな仙台駅前を毎日通うのかぁ...!)

何故なら、やがて来る大学4年間でバラ色の未来と想像していたからです...。

(大学、楽しみだなぁ...!)

『東北工業大学』は仙台市太白区八木山にある私立大学です…。

私が入った電子工学科は、当時の日本にとって躍進のエレクトロニクス分野が勉強出来る学科でした…。

この卒業生の多くは、大手の強電及び弱電の電気メーカーの開発部門に携わっているのです…。

でも、この時の私は勉強よりも自由な大学生活そのものに憧れていたのです…。

(大学生かぁ…!)

ふと、入学案内のパンフに目を通すと、キャンパスで勉強している男女の学生達の様子が描かれています…。

(女の子もいるんだぁ…!)

スポーツをしている写真も描かれています…。

(サークルも沢山あるんだなぁ…!)

アーチェリー部もありますが、他に気になるクラブも…。

(自動車部だ…!)

それに、ダートトライアル部もある、サイクリング部もいいなぁ…!)

3年前の春を思い出しました…。

高校に入学したら、絶対に自動車部に入ろうと心に誓っていた筈が、何故かアーチェリー部を選んだのです…。

アーチェリー競技は精神と体が鍛えられ、努力が身を結ぶ素晴らしいスポーツでした…。

でも大学に入ったら、今度こそ本当にやりたかったことをしよう…。

やっぱり自動車部…!?

そんな淡い期待も抱いていた私でした…。

ところが…。

自宅宛てに、電話がかかってきたのです…。

その相手は…。

「モシモシー!

Miyabi君ですかー!?

僕は、『東北工業大学』アーチェリー部の主務Sと申しますー。

実はお願いがあって電話しましたー。

Miyabi君、ウチの大学に合格したそうだよねー?

おめでとうー!

早速なんだけど、春合宿に参加してくれないかなー!?

もちろんOKだよねー!?)

(…!?!?!?)



「実は、主将が怪我をしまいー、
ウチの大学はこのままだと人数不足でー、
春の試合でチームが組めないんだよー!」

(主将が怪我...!?
人数不足...!?
チームが組めない...!?)

「だからMiyabi君ー、
アーチェリー部に入ってくれないかなー?」

(.....)

それは、突然の誘いでした...

昭和58年3月、東北工業大学へ入学が決まった直後の事です...

電話を掛けてきた相手は困ってせっぱ詰まった様子でしたが、私は暫しためらい即答を避けました...

何故なら、高校の3年間をアーチェリーに費やしたので、大学では他のサークルをと目論んでいたからです...

翌日になると、今度は東北工大アーチェリー部主将が自ら勧誘の電話をよこしてきたのです...

「あ～主将の4年Mと申しますが～、あ～Miyabi君かな～?
実はベットからコケて右腕を骨折してしまい～、そのお～、」

耳を疑ってしまう様なその事情に、私は思わずクスッと笑い出しそうになりました…。

しかし、次にM主将が発した言葉が私の胸に刺さったのです…。

「このままだと団体出場が出来ない事態になるんだ～！
これは、我が東北工大アーチェリー部の創部以来の危機なんだ～！
Miyabi君、頼む～！
救世主になってくれ～！」

(東北工大の危機…!?
救世主…!?
僕が…!?)

その、4年生のキャプテンが発する悲痛な叫びは、私の心を揺さぶりました…。

そこまで訴えられれば、男として黙ってられないのが人情と言うものです…。

これで腹は決まりました…。

「わ、分かりました…。」

こんなやりとりがあって、私とアーチェリーの腐れ縁がまた続くことになったのです…。

翌々日には、アーチェリー・ケースを片手に彼らの元へ向かっている私がありました…。

自宅から仙台市太白区八木山にある東北工大までは、電車とバスを乗り継いで1時間20分余りの距離があります…。

朝の時間帯の電車は特に仙台方面に向かう通勤・通学客で混雑していて、車内はギュウギュウのすし詰め状態です…。

人と人が混み合っただけでさえ身動きとれない公共機関の乗り物に、ガサ張るアーチェリー・ケー

スと大きめのスポーツバッグを抱えてひたすら辛抱する私でした…。

仙台駅に着いても、バス乗り場は各方面へ並ぶ人の列で大変込み合っています…。

どこを見渡しても、ヒト・ヒト・ヒト・ヒト・人で一杯です…。

人の洪水に嫌気が差しながらも、とにかく大学に向かうしかないのです…。

ようやくバスに乗り込んでも、狭い車内は学生達で満員になり揉みくちゃです…。

またもや、ガサ張るアーチェリー・ケースと大きめのスポーツバッグを抱えてひたすら辛抱する私でした…。

大学に赴く初日の朝にして、私はナーバスになっていました…。

やがて目的地に近づいてきて、乗客で密集するバスの窓から東北工大の建物が見えてきました…。

その瞬間、いよいよ大学生活に飛込むんだという期待と不安で、胸が一杯になっていきました…。

バスから下車すると、目の前には東北工大の近代的な意匠でデザインされた校舎が高くそびえ立ち、誇らしげにこっちを見下ろすかのように建ち並んでいます…。

私は高鳴る心臓の鼓動が聞えそうなくらい緊張しながら、まだ雪がそこここに残る東北工大キャンパスに足を踏み入れました…。

そして更に、その奥にあるアーチェリー場へ辿り着いたのです…。



シューティングライン付近とターゲットの前を除いた以外は、真っ白な雪で覆われた東北工業大学のアーチェリー場…。

そこに足を踏み入れると、私に気付いた幾人かの部員が、雪掻きの手を休めて近寄って来ました…。

「チワーすッ!!」

「コンチわース!」

「こんチワーす!!」

「こ、こんにちは…。」

3月半ばとはいえ、仙台市八木山の朝はまだまだ気温が低くて寒いのです…。

一斗缶にくべられた薪木の火に当たりながら、私達は初顔合わせの挨拶となりました…。

めらめらめら～、パチッ!

そこに間もなくホンダ・ステップバンが現れたかと思ったら、東北工大アーチェリー部のM主将がクルマから降りてきたのです…。

「あ～Miyabi君かな～？」

Miyabi君、よく来てくれたな～!」

「は、はい…。」

彼の右腕は包帯で巻かれた上に、肩から吊ってありました…。

チラリと見渡して集まった全員の人数を数えたら、負傷のM主将を除くとたった8名でした…。

当時、大学生の試合の団体戦は『エイト』と呼ばれる正選手8名と、補欠3名の合わせて11名で1チームと定められていたのです…。

つまり最低メンバーが8人揃わないと団体が組めない訳ですから、東北工大の場合は主将の怪我により正にピンチだったのです…。

「あ～4月に入学するMiyabi君は、ウチにとって救世主だ～!
あ～皆、新1年生に宜しく頼む～!」

「ハイッー!!!!!!」

「よ、宜しくお願いします…。」

めらめらめら～、パチッ!

「こ～～!!! う～～!!! だ～～!!! い～～ッ!!!
ファイッ!!! オーッ!!! ファイッ!!! オーッ!!! ファイッ!!! オーッ!!!」

M主将を軸にして円陣を組んだ私達は、勇ましいエールの掛け声を上げて気合を入れました…。

そして間もなく、50m及び30mの練習が始まったのです…。

「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」

東北工業大学のアーチェリー場は、電子科実習棟下の斜面と土木科資料棟との透き間にあります…。

横幅は10m足らずしかありませんが、全長は70m以上と縦に長くスペースが確保されていました…。

壁と壁に囲まれた、いわゆるウナギの寝床の形状です…。

最長距離90mを練習する際には、門を乗り越えて後ろのアパートの駐輪場から射つという文字通り離れワザが必要でしたが、それにしても学内で何時でも練習できるのは実に幸せな環境です…。

「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」

後方では1人、M主将が腕組みしながら私達を見ています…。

そして…。

「あ～Miyabi君、流石だなあ～!
いい射ち方しているな～!」

やがて先輩達が入れ替わりながら、私の射つ姿を見ては唸っていました…。

「ウ～ン!」

「ほう!」

「さすがだなー。」

注目されて照れくさい気もしましたが、それよりも数ヶ月ぶりに弓を射つことに喜びを噛み締めている私でした…。

「バシュッ!」「ボンッ!」

ところが、この後思いも寄らない事態が起こり出したのです…。



「バシュッ!」「ボンッ!」

「ん〜???

あ〜Miyabi君、今のは〜、
どこに射ったのかな〜?」

「は、は...!？」

この時点では、M主将に問われている意味が全く理解できない私でした…。

雪で覆われた東北工業大学のアーチェリー場で、先輩達と50mの練習を始めた直後、それは私の身に突如起こりました…。

「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「
ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」

「こうだ〜い!!!

ファイッ!!! オーッ!!!」

1エンド6本を射ち終わると、私達は勇ましい掛け声を上げながらターゲットに向かって小走りで
駆けて行きました…。

そして的紙に刺さった自分のアローを、1本ずつ丁寧に抜き取るのです…。

ところが、6本ある筈の矢が1本足りないのです…。

「おーい!

Miyabih君、お前のここに刺さってるゾ!」

「は、は...!？」

偶然1人の先輩が見つけた私の1本は、何と標的の数m手前の雪の中に突き刺さっていたのです...

。

私は、まるで狐につままれた思いでアローを受け取りました...

しかし、これはほんの序曲に過ぎなかったのです...

休憩を挟んでから、今度は30mの距離の練習に移りました...

「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」

至近距離になった分、発射したアローの威力が衰えないままターゲットに勢い良く刺さります...

。

そんな条件で、またあれが起こったのです...

「バシュッ!」「カッキィー————ン!!!!」

何と、私の矢の1本が的を支えている鉄製の脚に直撃してしまったのです...!

「...!?!?!?!?!?!?!」

そして、また...

「バシュッ!」「ガッ、ガ————ン!!!!」

今度はアーチェリー場側面の建物の壁に、火花を散らしながらの直撃です...!

「...!?!?!?!?!?!?!」

アルミニウム製のアローは、2本とも無残に先がへし折れてしまいました...

「あ～Miyabi君、
いったいどうしたのかな～？
カキーン病にでもなったのかな～？」

見るに見かねたM主将が同情して声を掛けてくれましたが、動揺を隠し切れない私でした…。

何故だか判りませんが、矢が突然思いもよらない方向に飛んで行くのです…。

それが起きない時もあります…。

でも、突如それが起こると…、

「バシュッ!」「カッキィー————ン!!!!」

「…!?!?!?!?!?!?!」

「またなのオー？」

「ハハハ～!!!」

「Miyabih君一、またやったのかー!？」

(シュン…。)

原因は掴めないまま、私はナーバスに…。

それに次々と破損させてしまったので、射てるアローが残り少なくなってしまいました…。

先輩達にからかわれてもじっと耐えていましたが、いよいよもって深刻な事態でした…。

このままではマズイ...。



「す〜っ。。。すぱっ。。。」もくもくもくもくもくもくもく〜〜〜

もくもくもくもくもくもくもく〜〜〜「ぱっ。。。すう〜っ。。。」

「ゴッ、ゴホゴホゲホッ...。」

昭和58年3月、東北工業大学の入学前に参加した、アーチェリ一部の春の強化練習...

そこで初めて入ったのが、彼らの部室です...

「あ〜いよいよ来週から〜、春合宿を6日間行おう〜!
あ〜Miyabi君も参加するように〜!」

「は、はい...。」

大学敷地内の奥隅に建つサークル棟の2階、そこにアーチェリ一部の部室があります...

タバコ臭とカビ臭が入り混じった室内は、どこもかしこもボロボロ...

壁もテーブルもそこいらじゅうが落書きだらけで...、9名が腰掛けているイスはどれ1つと同じものは無く、種類もカタチもバラバラ...

数冊の表紙が破れたマンガ本や週刊誌、それにエロ本も重なっている...

ゴミ箱には、ゴミが山積みになって溢れている始末...

でも...

何故かここは居心地良いのです…。

ミーティングが終わると、ほどなくしてM主将が口を開きました…。

「あ～ではそろそろ～昼飯にするか～!
あ～Miyabi君、みんなの分を買って来てくれ～!」

「は、はあ…!？」

「オレ、ノリ弁～!」

「俺もー!」

「シャケ弁の大盛り。」

「Miyabi、僕のバイク貸すから買ってこいヨー!」

「は、はい…。」

当然ながら、部室にいるメンバーで最も歳下は私…。

新1年生の後輩は、先輩の下働きをするのは当然のことなのです…。

こうして私は、当時は開店したばかりのホカ弁屋に買出しに行かされました…。

先輩の1人からヤマハ・パツソルのキーを受け取ると、ちょっと緊張しながらノーヘルで走り出しました…。

ビィィィィィーーン!!!!

「す〜っ。。。すぱっ。。。」もくもくもくもくもくもくもくもく〜〜〜〜

食事の後、先輩達は談笑しながらの喫煙です…。

もくもくもくもくもくもくもくもく〜〜〜〜「ぱっ。。。すう〜っ。。。」

窓を半分開けても、部室の中はタバコの煙で充満しています…。

「ゴッ、ゴホゴホゲホッ…。」

「あ〜Miyabi君は吸わないのかな〜？
真面目なんだな〜？」

「は、はい…。」

「Miyabi、お前もタバコ吸えヨー！
セブンスター美味めえゾー！」

「け、結構です…!!」

もくもくもくもくもくもくもくもく〜〜〜〜「ぱっ。。。すう〜っ。。。」

「あ〜ところでMiyabi君、どうしてウチの大学に入ったのかなかな〜？
多賀城市なら、地元には東北学院大学工学部があるだろ〜？」

「は、はい…。
実は、学院大に学業推薦してもらうには、成績が足りなくて…。」

「す〜っ。。。すぱっ。。。」もくもくもくもくもくもくもくもく〜〜〜〜

「それなら、仙台育英高みたいにスポーツ推薦で学院大に入れたんじゃないの〜？」

「は、はい...。

実は、アーチェリーを続けるかどうか自分でも迷っていたので...。」

「ふーん。」

何故、ここ東北工業大学に入ったのか...。

勉強したかったから...!?

アーチェリーをやりたかったから...!?

数名の先輩に問われたことで、改めて自問自答した私でしたがその明確な答えは浮ばなかったの
でした...。



♪ダンドゥビ ダダダン～!!

ダンドゥビ ダダダン～!! ♪

「おーい!!

朝だゾ、みんな起きろー!!」

「ふあああ～ツ。。。」

「はあ、ふう～。。。」

ラジカセから大音量で流れたのは、佐野元春の曲です…。

主将が持ちこんだカセットテープを目覚まし時計代わりに鳴らして、春合宿の朝の始まりです…

。

「それッ、ランニングだッ!!!」

眠い目を擦りながら合宿所の外へ出た私達は、一列に並んで駆け出しました…。

ダッダッ…、だっだっ…、ダッダッ…、だっだっ…、ダッダッ…、

「こうだ～い!!!

ファイッ!!!

オーッ!!!」

私達は勇ましい掛け声を上げながら、息が切れるような坂道ばかりが続く大学の外回りを1周します…。

そして、そのまま射場に到着した後は準備体操と柔軟体操…。

さらに標的の設置と、アーチェリーの道具を準備します…。

準備が整うと、ようやく朝食です…。

学食ルームに着く頃には、お腹はペコペコになっていました…。

食事を摂りながら、1人の先輩がこんなことを尋ねました…。

「そういえばMiyabi君、お前は酒は飲めるのかッ？」

「は、はあ…!？」

「春合宿の最後は、打ち上げがあるからなッ!
タップリ可愛がってやるからなッ!」

「は、はあ…!？」

東北工業大学アーチェリー部のメンバーは、4年が2名、3年が3名、2年が3名、そして新1年生の私が入って合計9名の少人数です…。

このメンバーに加わってまだ数日というのに、私は練習を通じて先輩達と既に打ち解けていました…。

再び射場に集まり、アーチェリーの練習が始りました…。

「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」

「10点・9点・7点・7点・6点・0点…。」

私は相変わらず、「カキーン病」に悩まされていました…。

何故か、突然アローが思いも寄らない方向に飛んで行ってしまうのです…。

万が一標的を外れてもアローが破損しないよう、何枚もの畳をターゲットの下側等にも設置したので心理的には楽にはなりましたが…。

「どれッ、Miyabi君の射ち方を見てやるよッ!

「お願いします…。」

「バシュッ!」「ボンッ!

「あッ、Miyabi君の矢が一瞬レストから浮き上がったゾッ!?

「え`え`っ…!?

どうやら「カキーン病」の正体は、レストアップだったようなのです…。

レストアップとは、弓を引いたときに矢を挟む引き手の指に力みが加わって、その反動で矢を載せる台から矢が離れてしまう現象のことなのです…。

「あッ、Miyabi君また今、矢が僅かに動いたゾッ!?
引き手の指に、力が入り過ぎてるんじゃないかッ!?

「は、はあ…!?

先輩の1人がアドバイスしてくれたものの、思う様にはいきませんでした…。

そしてまた1本、酷い「カキーン病」が起こったのです…。

「バシュッ!」「ガッ、ガーーーーーン!!!!」

「うわっ…!?!」

今度はアーチェリー場側面の建物の壁に、火花を散らしながらの直撃です…!

「…!?!?!?!?!?!?!?!」

アルミニウム製のアローは、無残に先がへし折れてしまいました…。

昼食後は、合宿所で30分ほど昼寝です…。

「ZZZ…。」



69 合宿の打ち上げコンパ

昭和58年3月、入学前に参加した東北工大アーチェリー部の春合宿も、今日が最終日です…。

いつもの様に午前の練習を終えると、主務のSさんが私に声を掛けてきました…。

「オイー、Miyabi!?
昼休みに買出しに行くから、お前も付き合ってくれないかなー!?
もちろんOKだよなー!」

「は、はい…!」

「ビイイイイインンンン〜!
ビイイイイインンンン〜!」

Sさんの愛車は、ガンメタ色のホンダライフ(初代)です…。

私を乗せるなり、ライフは軽快なサウンドを奏でながら八木山の坂を下っていきました…。

「今夜は合宿の打ち上げコンパだからなー!
いいかMiyabi、OBも来るから先輩達にちゃんと挨拶しろよー!
それから、年上の順に酒を注いで回るんだぞー!」

「は、はあ…。」

「いいかMiyabi、挨拶の仕方と回る順番を覚えておくからなー!
前もって練習しておけよー!」

「は、はい…。」

「それからMiyabi、これも必ず覚えておけよー!
いいか、相手から酒を注がれたら、直ぐ1口飲むことー!」

「は、はい...。」

学年が1つ上のSさんは、何かと面倒見のいい方です...。

私はこの後の数年、様々なシーンにおいて彼には世話になる事となるのです...。

缶ビール数ダース、日本酒、柿の種、ポテトチップスなどを購入、私達は買い出しを終えるなり合宿所に戻りました...。

「ビイイイイインンンン〜!

ビイイイイインンンン〜!

「あ〜皆、春合宿ご苦労だった〜!

あ〜いよいよ来週から春の大座決定戦が始る〜!

あ〜皆、今晚は存分に飲んでくれ〜!

あ〜それでは、乾杯〜!

「乾杯〜!!!!!!!!!!!!!!」

「かんぱーい!!!!!!!!!!!!!!」

「ワァ〜ッ!!!」

「おーっ!!!!!!」

「ハーッ!!!」

「ふうーっ!!!」

M主将の音頭によって、男達は待ってましたとばかりにビールを浴びだしました...。

こうして、私にとって人生初の飲み会すなわち春合宿の打ち上げが始ったのです...。

「ち、チワーッす...!
こ、この春入学の、電子工学科1学年Miyabiですッ...!
宜しくお願ひしますッ...!」

「ウム!」

「ど、どうぞ...。」

「ウム、頑張れよ!
お前も飲めッ!」

「は、はい...。(ゴクッ!)」

私が真っ先に挨拶にいったのは、最も年長者のOBでした...。

そしてまた1人に...。

「チワーッす、1学年Miyabiです宜しくお願ひしますッ...!」

「そうか! お前も飲め!」

「は、はい...。(ゴクッ!)」

OB→4年生→3年生→2年生といった順に、先輩の1人ずつに酒を注ぎながら、私は自己紹介して回りました...。

ここまではS先輩と打ち合わせした通りでしたが、やがて予想外のことが...。

「ヒ、ヒック...。
ち、チワ〜ッす、み、Miyabiで〜す、ヒック...。
よ、宜しく願いしま〜す...。」

「ご苦労さん、頑張れよッ!!」

「ヒック...は、はい...。(ゴクッ!)」

「オーイ、Miyabiー!!
しっかりしろー!!
大丈夫かー!!」

「ヒック...は、は〜い...だ、だいじょう...ぶで...す...、んがッ。」

3年生に回っている途中、私は次第に身体がいうことを利かなくなりました...

Sさんに声を掛けられても、私は正常に返答出来なくなっていました...

何故なら、注がれる度に口にしたビールで完全に酔ってしまったからなのです...

そして...

「んがッ...ん、ん、ん、ん、ん...ぐ、ぐぼぼぼッ!!!!
ゲボッ、げぼッ...!!!!」

「ワワッー!!」

Miyabiー!!

トイレ、トイレに行けッ、しっかりしろー!!」

「ゲボッ、げぼッ...、ん、ん、ん、ん...!!!!」

両手で口を抑えた私を、トイレに連れて行くSさんでした...。



「エ～であるからしてエ～、
電流制限用の抵抗器にかかる電圧は、 $3-1.8=1.2$ ボルトですねエ～。」

「...!?!?」

(解からない...。)

「エ～であるからしてエ～、
抵抗器には1.2ボルトの電圧が加わっていますから～、
電流は10ミリアンペアとすれば、抵抗値は $1.2/0.01=120$ オームですねエ～。」

「...!?!?!?!?」

(どうして電気って難解なんだろう...。)

「エ～であるからしてエ～、
120オームの抵抗器を使えば良いのですねエ～。」

「...!?!?!?!?!?!?!?」

(記号や公式ばかりでチンプンカンプン...。)

「エ～以上、

本日の講義はここまでエ〜。」

「...(シユン)。」

(解からない...。

全く理解が出来ない...。

マイッタなあ、こんなに難しいなんて...。)

誰しものが、自分自身の『内なる声』を聞きながら生きています...。

心の中で巻き起こる葛藤...。

迷い、もがき、苦しみ、これでいいのかと自問自答しながら...。

『内なる声』、それはきっと人生に迷っている者が嫌でも認識させられるワードではないでしょうか...。

東北工業大学に入学した私は、1日目の授業すなわち最初の講義からつまづきました...。

電気のことをサッパリ理解出来ないのです...。

(どうしよう...。

授業について行けない...。

電子科なんて入るんじゃなかった...。)

また次の日も...

「エ～であるからしてエ～、
抵抗器には1/4Wとか1/8W等と、最大電力が決められていますねエ～。」

「...!?!?」

(解からない...。)

「エ～であるからしてエ～、
この抵抗器にはどのくらいの電力がかかっているのでしょうかねエ～。」

「...!?!?!?!?」

(どうして電気って難解なんだろう...。)

「エ～であるからしてエ～、
抵抗器には0.012ワットの電力が発生するので、120オームの抵抗器を使えば良いのですねエ～。
」

「...!?!?!?!?!?!?!?」

(記号や公式ばかりでチンプンカンプン...。)

「エ～以上、

本日の講義はここまでエ〜。」

「...(シユン)。」

(解からない...。

全く理解が出来ない...。

マイッタなあ、こんなに難しいなんて...。

どうしよう...。

授業について行けない...。

電子科なんて入るんじゃなかった...。

大学なんて入るんじゃなかった...。)





「オーイ、Miyabiー!
調子どうだー!」

講義をサボってアーチェリー場で練習する私に、主務S先輩が3階の窓から声を掛けてきました...
。

「は、はい、カキーン病は収まりました...。
今のところ...。」

「あさってから王座決定戦だからなー、頑張ろうぜー!」

「は、はい...。」

私は矢をつがえたまま見上げて、そう返答したものの自信は全くありませんでした...。

が、団体戦は8名全員出場なので、何としても射たなくてはなりません...。

調子が悪いまま、不安を抱えながらのエントリーとなりました...。

「バシュッ!」 「ボンッ!」

そして、その不安は現実となってしまったのです...。

「こうだ〜い!!! ファイツ!!! オーッ!!!」

時折強い風が吹きつけ、咲き始めたばかりの桜の花を散らす4月、いよいよ東北地区の大学ナンバー1を決めるリーグ戦、『東北学生アーチェリー王座決定戦』が幕を下ろしました...。

「ピーッ!!!」 (ホイッスルの音)

「こうだ〜い!!! ファイツ!!! オーッ!!!」

グラウンドの左右目一杯に学生アーチャーが並び、一勢に矢を放ちます…。

「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」

「ガクイ〜〜〜ン!!!!!! ファイト!!!!!! オ〜〜〜ッ!!!!!!」

会場一杯に轟くひととき大きな雄叫びを上げるのは、この大会の常勝『東北学院大学』です…。

「ナイショ〜ッ!!!!!!」

彼等は、部員数の多さもさることながら、毎年多数の高校アーチェリー経験者が加わっているのです…。

「ファイト〜オ!!!!!!」

その『学院大』の中には、私と高校時代競った『仙台育英学園高』出身の者も幾人かいました…。

「ピーッ、ピッピーッ!!」(ホイッスルの音)

「矢取り〜ッ!!!」

「ハイ〜ッ!!!!!!」

しかしまあ、学生のアーチェリーの試合は何と賑やかなんでしょう…。

シューティングラインに立ってから、矢を取りに行くまで終始声を掛けます…。

それも各大学ごと、それぞれが声を出して気合いを入れ続けているのです…。

団体戦らしくて盛り上がるのですが、慣れないと気が散りそうなやかましさです…。

「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」

そんな騒然とした雰囲気、私は少し上づつた気持ちのまま射っていました…。

やがて、50m競技の後半に入ってから突如、「あれ」が起きたのです…。

「バシュッ!」(シーン)

「...!?!」

音がしません…。

射ったのに、ターゲットに到達した音が聞こえないのです…。

それもその筈、私のアローは、無惨にも地面に突き刺さっていたのです…。

「0点…。」

標的の得点帯から外れた矢は、当然ながら0点のスコアです…。

「Miyabi、気にするなよー!」

先輩の1人が気遣って励ましてくれても、私の動揺は隠せませんでした…。

(どうして…、どうして試合であの病気が出るんだ…!?)

「バシュッ!」(あッ、また...!?)

「バシュッ!」(あッ、また0点...!?)

「バシュッ!」(あッ、また外れた...!?)

泥沼という言葉がありますが、この時の私はまさに泥沼にハマッて身動きとれない状態でした...
。

冷静さを失った私は、外れないようにと慎重になり過ぎて益々固くなってしまいました...。

体が萎縮したままガチガチで弓を引けば、良いショットは益々出来無くなるのです...。

泥沼に両足がつかった私をあざ笑うかの様に、射ったアローはレストから外れて飛んで行く...。

その後も0点の続出で、アーチェリーを始めて以来の最悪のスコアを記録したのでした...。





「ゴオオオオオオオオー—ンンンン—！」

「間もなく終点のオ～仙台、仙台でございます～。
どなた様も～、忘れ物ございません様にお降り下さい～。」

「キ——————ッ、ガッタン！
プッシュー！」

「ドヤドヤドヤドヤドヤドヤドヤドヤ～!!!!」

「ふう...。」
(何で電車って、こんなに苦痛なんだ、ヒト・ヒト・ヒトでウンザリ...。)

「はあ...。」
(お次は、もっと嫌な寿司詰めバスか、乗りたくないなあ...。)

「ふう...。」
(街をブラブラでもして、今日も講義サボって休みにするか...。)

「ピコッ♪ピッ♪ピッ♪ピコッピコッ♪」
(今だッ! 行け行けッ! それッ...!)

「はあ...。」
(俺は一体何やってんだ...、しかし何で大学なんかに入ったんだろう...。)

「ふう...。」
(大学の講義は難しくてついていけないし...、アーチェリーは大スランプから抜け出せないし...。)

「ピコッ♪ピッ♪ピッ♪ピコッピコッ♪」
(今だッ! 行け行けッ! それッ...!)

「はあ...。」

(どうしたらいいんだろう、自分はどうしたいのだろう、自分でもよく判らないや...。)

「ピコッ♪ピッ♪ピッ♪ピコッピコッ♪」

(今だッ! 行け行けッ! それッ! あーあ...。)

「ふう...。」

(アーケードゲームに小遣い全部使っちゃった、仕方ないから今から大学に行くとするか...。)

「はあ...。」

(チエツ、つまんないなあ...。)

「Miyabiまた部室にいたのかー?

お前、講義ちゃんと出てんのかー?

単位足りないと、留年しちゃうゾー?」

「ふう...、Sさん僕なんかモウどうなってもいいんです...。」

「Miyabi、元気出せってー!

リーグ戦は残念だったけど、きっとまた上手く射てるようになるってー!」

「はあ...、アーチェリーってこんなに難しいものだったのかなあ...。」

「お前、大学に入れたから弓が存分に射てるんだろー?」

「ふう...、僕アーチェリー好きなのか嫌いなのか自分でも判らなくなってきました...。」

「Miyabi、頑張れってー!

高校の時は当たったんだから、絶対また復活してもっと面白くなってくるってー!」

「はあ...。」

「ところで、あの...、Sさんの建築科は楽しいですか、何で入ったんですか...?」

「そりゃ難しいさー!

でもそうだなー、やっぱり自分で設計した建物を見てみたいって夢があるから選んだのさー!
Miyabi、お前は高校時代は機械科だったんだろー?」

「ふう...、僕は数字や計算ばかりの電子より、やっぱり油まみれの機械の方が好きなんです...。
なのに何で電子科に入ったんだろう...。」

「Miyabi、頑張れってー!

若者は皆んな誰だって、これで良いのかって迷いながら、将来のこと悩みながら生きてるんだゾー!

せっかく大学に入ったんだから、きっとだんだん面白くなってくるってー!」

「はあ...。」

「Miyabi、今日俺んところ泊まっていけよー!

焼肉パーティやろうぜー!

汚いボロアパートだけどさ、ビール飲みながら話そうぜー!」

「えッ、いいんですか...!?!」

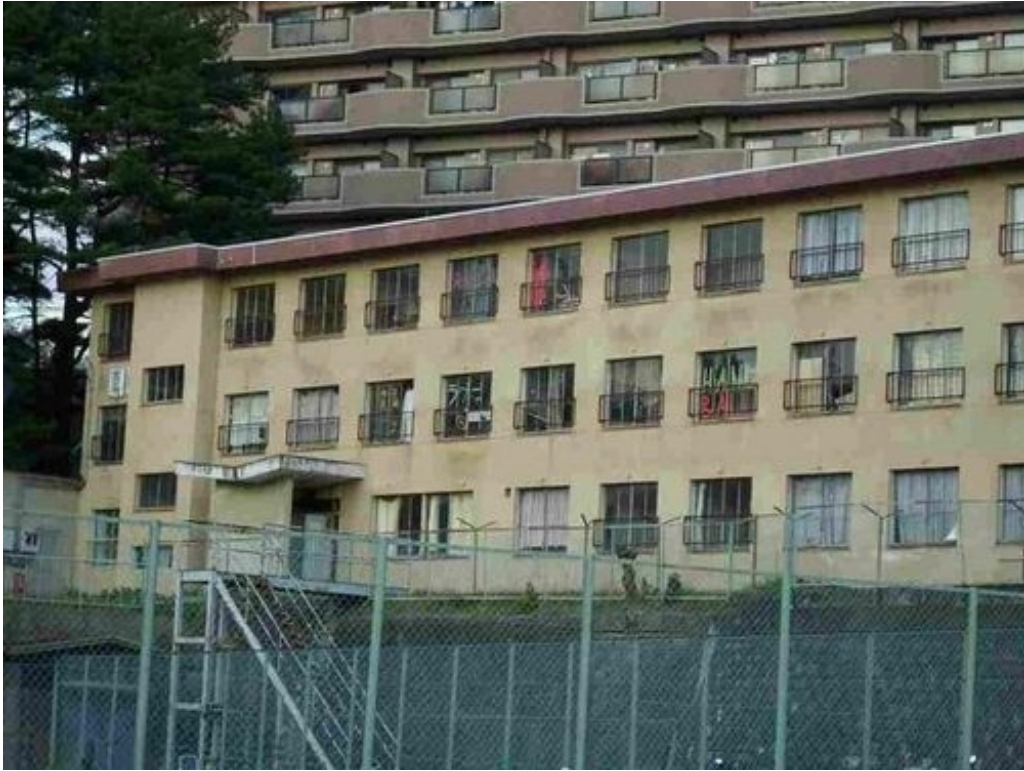
「たまに付き合えよー!」

「はあ...。」

「カンパーイ!」

「乾杯...!」

「♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪(カセットテープの音楽)」



「Miyabi君、グリップはこれでいいのかい？」

「ええと...、グリップは握るのではなく小鳥をそっと包むみたいに手を添えて...。
もうちょっと、そうそう、そんなカンジでOK...。
あっ、射ったら掴まないで指を離して、離して...!
そうそう、そんなカンジでOK...。」

「Miyabi～、今度はオレのフォームも見てくれないか～？」

「は、はいよ...、ええと...、顔向けがちょっと...。
もうちょっとアゴを引いて...、そうそう、そんなカンジでOK...。
ふう...。」

5月の連休が明けた頃です...

アーチェリー部の新1年生は、私以外に3名が加わりました...

その彼ら同輩に指導する私でした...

どんなスポーツにも共通する点ですが、やはり習い初めが肝心です...

上達するには近道は無いのです...

いかに基本に忠実に身につけるか、急がば回れですね...

「あれッ...!？」

他人にアーチェリーの基礎を教えるうちに、自分自身が基本から外れていたことに気付いたのです...

長く引きづっていたカキーン病も、その基本が崩れて起きたに違いありません...

そんなある日、アーチェリー・プロショップに顔を出したら、ホームビデオで撮影したある選手を観せられたのです…。

その選手とは…。

「Miyabiよく見ろッ!
彼が山本だゾッ!」

アーチェリー・プロショップの頑固オヤジが薦めたのは、当時「日本体育大学」3年の『山本 博(やまもと ひろし)』選手でした…。

「バシュッ!」「ボンッ!」

横浜高校時代はインターハイ3連覇、大学でもインカレ2連覇を果たし、当時3連覇目が掛かっていた彼は、押しも押されもせぬ無敵の学生トップアーチャーだったのです…。

それだけ有名なのに、彼が弓を射っている姿を私は見たことがありませんでした…。

「…!?!?!?」

初めて見る映像の彼に、私は釘付けになっていました…。

そして間もなく、何と『山本 博』選手をナマで見る機会が巡ってきたのです…。

東北で主催する学生の試合に「日体大」が出場、メンバーにあの『山本 博』選手も加わってやって来たのです…。

私は試合運営の手伝いでしたが、彼に接近できることに興奮を覚えたのです…。

大会中は『山本 博』選手が射つのが見逃すまいと、役員の仕事も忘れそうになる位に彼の様子が気になっていました…。

「バシュッ!」 「ボンッ!」

「…!?!?!」

ナマで見る『山本 博』選手…。

それは、衝撃的でした…。

アーチェリーの極意を表現すると…、弓を押し引いているのを一本の糸だとすれば、その糸の真ん中がプツンと切れて、左右に離れていくといったイメージでしょうか…。

「バシュッ!」 「ボンッ!」

「…!?!?!」

(柔らかい…!)

何て柔らかい射ち方なんだろう…!

彼の射ち方には、無駄な力が一切入って無い…!

僕もあんな射ち方が出来るようになりたい…!)

「日体大3年の『山本 博(やまもとひろし)』さんが3連覇だったよ...!!」

キョトンとする同輩の3人に向かって、私は口泡を飛ばしながらまくし立てました...

その秋のインカレを見学してきた私は、当時からその名を轟かせていた『山本 博』選手の活躍に刺激を受けたのです...

「いいかい...!!」

彼の射ち方を教えるから、良く見ててよ...!!」

ヒョイ、グィ〜ッ、バシンッ!! ストンッ!!

「山本さんは、こうだよ...!!」

押し手のリスト(左手首)を上下に動かしながら説明を続けました...

「グリップをね、射った瞬間この様に下げるんだよ...!!

こんな形に、あ、いや、こうだったかな...?」

ポカンと口を開けたまま、私の手首をただ凝視する彼らでした...

私の学生時代、ようやくホームビデオが普及してきたのですが、まだ価格が高くておいそれとは手が出なかった頃です...

当時とくにマイナー競技であるアーチェリーの情報は、恐ろしく少なかったのです...

指導方法は専門書の写真を片手に、先輩が後輩に教えるくらいが関の山でした...

この日の私は、その眼に焼き着かせてきた『山本 博』選手の姿を、ヘタクソ同輩に少しでも伝えようと必死だったのです...

私が見た当時の『山本 博』選手は、今でいうならばアーチェリー王子といったところでしょうか…。

高校時代はインターハイを3年連続で制し、さらに大学に入ってからインカレ3連覇など普通では考えられないような偉業です…。

『山本 博』選手のレベルは、一般大学生のそれを遥かに超えていたのです…。

翌年の昭和59年、『山本 博』選手はロサンゼルスオリンピックにて銅メダルを獲得…。

オリンピック初出場ながら、当時の強豪ダレル・ペイス選手やリチャード・マッキニー選手(ともに米国)と競り合っただけの堂々したメダル獲得だったのです…。

この日の私の独宴会は、日が暮れるまで続きました…。

「ほらっもう一度、よく見ててね…!!
グリップをね、射った瞬間この様に下げるんだよ…!!
こんな形に、あ、いや、こうだったかな…?」

すっかりアーチェリー王子に刺激された私は、射ち方を徹底的に模倣しました…。

シューティングラインを跨ぐ仕草に始まって、矢のつがえ方、弓の構え方等、何から何までちょっとした仕草も『山本 博』選手を意識してコピーしたのです…。

さらには、使用していた弓具も『山本 博』選手風にソックリにしました…。

弓本体はニシザワ製、サイトはシブヤ製、スタビライザーはエンゼル製、プランジャーは日本バイメタル製、etc…。

『山本 博』選手は、当時の私にとって正にアーチェリーの生きたバイブルとなったのです…。

忘れられないのが、ある日のJR仙台駅の出来事…。

雑誌を立ち読みしていた私に、誰かが後ろから声を掛けてきました…。

振り向いたら、何と『山本 博』選手だったのです…。

偶然アーチェリー・ケースを持っていた私を見つけて、話し掛けて来たのでこちらの方がビックリしてしまいました…。

実は彼のお母様が宮城県出身なので、ごく希にこちらにも来ることがあるのだそうです…。

そんな気さくな『山本 博』選手に、私はますます大ファンになりました…。

彼のレベルに少しでも近付きたい、アーチェリーの技術をより向上したいと、練習に一層力が入るようになったのです…。

【山本 博（やまもとひろし）】

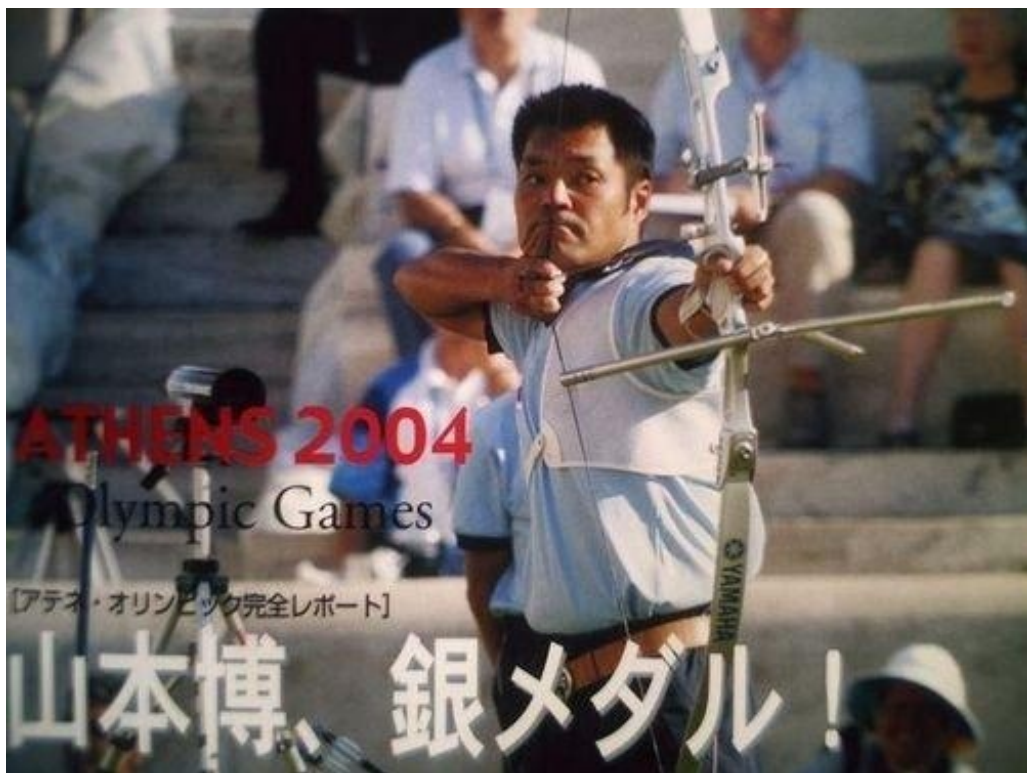
1962年生まれ 神奈川県出身 横浜高校、日本体育大学卒

現在 日本体育大学女子短期大学部体育科准教授

1984年 ロサンゼルスオリンピック 銅メダリスト

2004年 アテネオリンピック 銀メダリスト

アテネオリンピックで、41歳で銀メダルを獲得した「中年の星」と脚光を浴びましたが、アーチェリー界では高校時代から既に優秀な選手として活躍していたのです…。



ATHENS 2004

Olympic Games

[アテネ・オリンピック完全レポート]

山本博、銀メダル!

75 90mに矢が届かない!?

「バシュッ!」 「ボンッ!」

昭和58年の夏、私たち東北工大アーチェリー部は、夏の『個選』(インカレ出場を懸けた東北地区の個人選手権大会)に向けての練習に取り組んでいました...

『個選』は「オールラウンド」で競われるので、長距離の練習が必要なのです...

アーチェリーの正式種目である「オールラウンド」とは、男子は90m・70m・50m・30mの距離を、女子は70m・60m・50m・30mの距離をそれぞれ射つのです...

「バシュッ!」 「ボンッ!」

何といっても最長距離である90mは、最もシビアかつ最もアーチェリーの醍醐味を味わえる距離です...

90mともなると発射角度もきつくなるし、アローは大きな山なりを描いて飛ぶので、飛翔中に受ける風の影響も大きい為に的中率は極端に下がるのです...

だからこそ、狙い通りに当たった時の嬉しさは格別なものがあります...

「バシュッ!」 「ば、ばすっ!」

「あれっ...!？」

高校時代は50m・30m競技のみだったので、この日90mを初めて射ちました...

ところが...

サイトを目一杯下げても、私が射った矢は標的下の畳にしか辿り着かないのです…。

「バシュッ!」 「ば、ばすっ!」

畳…。

「バシュッ!」 「ば、ばすっ!」

畳…。

「バシュッ!」 「ば、ばすっ!」

また畳…。

それは何度射っても同じ結果でした…。

90mに矢が届かない...!?

私は諦めて弓をボウケースに仕舞い、バスに乗ってとある場所に向かいました…。

そこは、困ったときのアーチェリー・プロショップです…。

「M社長、どうして僕の弓は90m飛ばないんでしょうか...?」

「どれッ、調べてヤルからなッ!」

と言うと、頑固オヤジは私の弓の強さをバネ量りで量ったり、矢の引き尺を測ったのです…。

「あーッ、実質が全然出てねエなァ!」

「どういう意味ですか...?」

「Miyabi君の弓は68インチ40ポンドだろゥ、これを高校の頃は力任せに28インチ近くまで矢を引いてたんだ!」

「はい、でもだんだんと引き尺が短くなって行って、現在は26.5インチになりました...。」

「ダカラ、発射の威力が出ないから90mまで飛ばないんだゾ!」

「M社長、僕どうしたらいいんでしょうか...?」

「一回り小さい66インチの弓に買い直すんだナ!」

「え`え`っ...!？」

とにかく、90mに矢が届かないのではどうしようもありません...

現在なら軽くてよく飛ぶカーボン製のアローシャフトが主流なのでこんな問題は起きませんが、当時は重くて飛ばないアルミ合金製のアローシャフトしか無かった時代です...

矢の威力を高めるには、強い弓を引くのが手っ取り早いのですが、あるいは今回のように少しでも効率の良い弓と矢とのマッチングを選ぶ必要があったのです...

こうして私は高校3年間使用した、弓に別れを告げました...

そして新たに、弓を購入することとなったのです....。

あとでバイトして返す条件で親に出してもらった新しい弓は....、

『山本 博』選手を意識して、彼と同じブルー色の当時最新鋭『ニシザワTD-11 2880カーボン(66-40)』、弓本体だけで約15万円はしました...

さらに、スタビライザー等もブルー色で統一して、すっかり『山本 博』選手風にキメたのです...!

さて、肝心の90mの問題は...!?

「バシュッ!」 「ボンッ!」

ホッ...

どうやら弓と矢のマッチングはgoodのようです...

新しい弓で気分も上々、これで夏の『個選』に向けて長距離の練習に打ち込めそう...

ところが、この数ヶ月後に思いも寄らない事件が起こったのです...



「あ～次は課外連からの通達だが～、あ～近ごろ『部室荒らし』が蔓延っているらしい～!」

ある日のミーティングで、主将がアーチェリー部のメンバーに向かって話し始めました…。

「あ～何者かが部室に忍び込んで～、あ～盗みを繰り返しているらしい～!
あ～フェンシング部ではサーベルが～、あ～アメフト部ではメットやユニフォームが大量に盗られたそうだ～!」

思いがけないその内容に、私達は固唾を飲んで聞いていました…。

「あ～今日から部室の戸締まりをしっかりとるように～!
あ～以上だ～!」

「バシュッ!」「ボンッ!」

「オーイMiyabi、今日も巻きワラやっていくのかー?
頑張れヨー!」

「は、はい…。」

巻きワラといのは、至近距離で弓を射つ練習のことです…。

専用に造られた円筒状に束ねたワラに射つのですが、主に射ち方のチェックに使用します…。

「バシュッ!」「ボンッ!」

弓を新調してから、私はアーチェリー部の部室に設置された巻きワラで練習するのが日課になっていました…。

とにかく、弓がもっと上手になりたかったのです…。

「バシュッ!」「ボンッ!」

巻きワラの良いところは、雨が降っても日が暮れても射てること…。

矢取りに歩かない分、連続して沢山射てるので、外で射つより練習量が稼げることです…。

「バシュッ!」「ボンッ!」

そしてこの日も、私は独りで黙々と射ってから、夜7時頃に弓を置いて帰宅したのです…。

まさか、あんな事が身に降り掛かってこようとは知らずに…。

「あれっ…!?

変だな…!？」

翌日、部室に入ると…。

ある異変が起きていました…。

「なっ、無い…!?

弓が…!？」

何と、新しく購入したばかりの私のアーチェリーの道具、弓一式が忽然と消えてしまったのです…!!

「あ～Miyabi君～、夕べ帰る際に～、あ～間違いなく施錠したのかな～？」

「は、はい...。

ええと...た、たしか...。」

「オイMiyabi一、しっかりしろヨー!

お前、鍵を閉め忘れたんじゃないのかー!」

「はあ、それが記憶にないんです...。」

昨日まで何事もなかったアーチェリー部の部室に、突如起こった怪事件...

『山本 博』さんと同じ仕様の自慢の弓と装備品、さらに、1ダース以上あった矢も、ボウケースごと何者かに持ち去られたのです...。

まるで神隠しにでも遭ったかの様です...。

夢でも見ているか...?

しかし、ホントに無いのです...。

他の部員の道具は、アーチェリー場の倉庫に保管してあり無事でした...。

巻きワラの練習の為、ここに置いた私のミスです...。

(夕べ、どうして家に持ち帰らなかったんだろう...。)

そんな反省を繰り返しても、後の祭りです...。

私はあまりのショックに、頭に血が昇りカーツとなっていました...。

そして我を忘れて、そこら中を遮二無二とかき回し探しまくりました...。

部室の隅々やサークル棟の内外を、とにかく無我夢中で駆け回って探しました…。

慌てる私の様子を見て不憫に思ったのでしょうか、居合わせた先輩方も幾日か大学の周囲を探してくれました…。

しかし結局、手掛かりは掴めませんでした…。

私は、事件の日から頭の中にはあのブルー色の『ニシザワ』の姿しか浮かばなくなりました…。

それにしても、一体誰が何の為に…!?



「ピコッ♪ピッ♪ピッ♪ピコッピコッ♪」

(今だッ! 行け行けッ! それッ...!)

「はあ...。」

(俺は一体何やってんだ...、しかし何で大学なんかに入ったんだろう...。)

「ふう...。」

(大学の講義は難しくてついていけないし...、買ったばかりのアーチェリーは盗まれてしま
うし...。)

「ピコッ♪ピッ♪ピッ♪ピコッピコッ♪」

(今だッ! 行け行けッ! それッ...!)

「はあ...。」

(どうしたらいいんだろう、自分はどうしたいのだろう、自分でもよく判らないや...。)

「ピコッ♪ピッ♪ピッ♪ピコッピコッ♪」

(今だッ! 行け行けッ! それッ! あーあ...。)

「ふう...。」

(アーケードゲームに小遣い全部使っちゃった、仕方ないから今から大学に行くとするか...。)

「はあ...。」

(チエッ、つまんないなあ...。)

「Miyabiまた部室にいたのかー？」

お前、講義ちゃんと出てんのかー？」

単位足りないと、留年しちゃうゾー？」

「ふう...、Sさん僕なんかモウどうなってもいいんです...。」

「Miyabi、元気出せってー!

ところで、弓が盗難に遭ったことは家族に話したのかー?」

「はぁ...、買ってもらったばかりなのに、盗まれたからカネ貸してなんて親父にとってもじゃないけど言えないですよ...。」

「そうかー、

あっ、そうだー!

お前、俺んこのバイト先で働いたらどうだー?

夜の居酒屋だけど、人が足りないから俺が声掛けてやるぞー?」

「ふう...、僕も稼ぎたいんですけど...、仙台で夜バイトしたら多賀城に帰る終電に乗れませんよ...。」

「それもそうだなあー、

ンじゃ、いっそのこと多賀城でバイトしたらー?」

「はぁ...。」

あの日、部室で消えた私のアーチェリーの道具一式は、結局...、

永遠に返って来ることはありませんでした...。

一度は片付けた高校時代の弓やボロの矢をまた引っ張り出してはみたものの、それだけでは射つことは出来ません...。

仕方なく、部室に転がっている古い道具を寄せ集めたりして、暫くの間乗り切ることになりました...。

90mは矢が届かないので、標的の上の方をズラシて狙って山なりに飛ばす始末...。

そんな状態ですから、1年生の殆どの試合は見たくもない様な成績に終わったのです...。

年が明けて、昭和59年も相変わらずでした…。

「ピコッ♪ピッ♪ピッ♪ピコッピコッ♪」

(今だッ! 行け行けッ! それッ…!)

「はぁ…。」

(俺は一体何やってんだ…、しかし何で大学なんかに入ったんだろう…。)

「ふう…。」

(チエツ、つまんないなあ…。)

そんなある日、自宅に1本の電話が掛かってきたのです…。

「はい…、Miyabiですが…。」

「モシモシ〜?

Miyabiクンですかあ〜?

アタシね、〇〇〇といますう〜!

ねえ、Miyabiクン〜、アタシとお茶しない〜?

今から街に出てこない〜?

アタシね、Miyabiクンに〜、

とっても逢いたいんだあ〜!」

「…!?!?!?」

仙台市の繁華街、一番丁…。

専門店やショッピングの店舗が軒を連ねているこの通りは、平日の午前というのに行き交う人・人・人でどこもかしこもが賑わっています…。

歩行者用の信号が青に変わるのを待ちながら、中央分離帯にふと目をやると街路樹のケヤキ並木が左右目一杯にうねるように広がっています…。

若い女性の甘い囁きにつられて、私は誘われるがままに街に出てきました…。

待ち合わせの場所には、右手に鞆を左手にバインダーを抱えた短めの髪をした大人の女性がそこに立っていました…。

「あの…、Miyabiですが…。」

「Miyabiくんね～？

電話した〇〇〇ですう～！

こんにちは、よろしくねえ～！」

ちょっと緊張した上づつた声の私を、優しく諭すようにその人は微笑みました…。

そして軽く会釈を済ますなり、彼女は近くの喫茶店に私を招き入れました…。

「あの…、どうして僕のこと知ってるんですか…？」

「アタシね、Miyabiくんのこと～わかるのよ～！

東北工大の2年だよねえ～？

電子科なんだよねえ～？
大学はどう、楽しい～？
授業はどう、難しい～？」

そう尋ねられた瞬間、私は飲んでいたコーヒーがより苦く感じた様な気がした…。

「別に…、楽しくも何ともないよ…。」

「そうなんだ～、Miyabiクンそれでホントにいいの～？」

「…。」

「ねえ、Miyabiクン～？
海外を旅してみたいなんて、思ったことない～？
知らない国を1人旅なんて、どうかしら～？」

「そりゃ…、確かに憧れますけど…。」

「実は、Miyabiクンにそんなチャンスを～、
アタシがプレゼントしてあげたいのよ～！」

「えッ…??？」

間もなく私は彼女に手を引かれ、とある建物の中へと連れ行かれました…。

そこは、何の変哲もないビルの一室…。

部屋の中では、オフィスで幾人かの女性が急がしそうに電話をしています…。

私は1つの小部屋に案内された後、少し待たされました…。

やがて正面のビデオが始まり、美しい海などの観光地が映し出されていきました…。

映像の後半は、メンバーに入ると海外旅行に半額で行けるといった内容でした…。

次に、私の前に複数の男女が現れては、入れ替わり立ち替わり何やら語り始めました…。

「Miyabi君、これはチャンスですよ！
メンバーになると、いつでも海外旅行は半額ですよ！
これは、またとないチャンスですよ！」

「…。」

「Miyabiくん～、メンバーになると～、
英語の勉強にも絶対役立つのよ～！
とってもチャンスなのよ～！」

「…。」

「Miyabi君、メンバー登録は、
たった1日1杯のコーヒー代くらいだから、とっても安いんだよ！
これは、チャンスなんだよ！」

「…。」

「Miyabi君、チャンスですよ！」

「Miyabiくん～、チャンスなのよ～！」

「Miyabi君、チャンスなんだよ!」

「は、はい...。」

これを、マインドコントロールというのでしょうか...。

その時の私は、まるで彼らの思うがままに操ることが出来るロボットにでもなったかのようで、言うがままになっていました...。

そして気が付いた時には、月々〇万円×24回払いのクレジットを組んでいたのです...。

後日、自宅に英会話のビデオテープのセットが届きました...。

『○○○○○○○○、次の者はレポートを再々提出するように』

(あ～あ、又だあ...!
モウ、嫌だなあ...。)

ここは大学構内です...。

掲示板に自分の学籍番号を見つけて、溜め息を洩らす私でした...。

(全く...、コンピューターなんて面倒くさいモノ、誰が創ったンだあ...!?)

頭を掻きむしりながらフローチャートを書き直し、プログラミング室で入力を済ませて待つこと数分...。

出力された紙には...、

『m~.,0m:~?/:w.g?/da~?w?,?y~b1w/d.!.....?????Error (バ～カ!)』

(シュン...。)

午後の講義もそこそこに八木山を下りた私は、アーチェリー・ショップに顔を出しました...。

今までもそうでしたが、凹んだ時この社長に何度も励まされてきました...。

そして、この日もまた...。

「盗まれた弓は、残念だが諦めるんだナー、支払いは後からで構わないから、また新しいの買ったらどうダ!？」

「はあ…。

M社長、実は他にもいろいろあって僕スツカラカンなんです…。」

「そうかー、でも今のままだと長距離当たらないゾ、いいのか？」

「そうなんです…。

M社長、僕バイトしようと思ってるんです…。

稼いでから必ず弓買いますから…。」

「そうかー、きっと何とかなるサ、頑張れヨ!

ところでMiyabi君、次の土曜の夜は空けておけヨ!」

「はあ…?」

そんなやり取りをしていると、ドアの向こうから女性の声が聞こえてきました…。

「こんにちは～。

失礼しま～す。」

「おッ、いらっしゃイ!」

「…。」

入って来たのは、私は初めて見る人でした…。

くりくりとした愛らしい瞳の女の子です…。

「M社長さん、今日はクリッカーを付けにきました～。
宜しくお願いしま～す。」

「Yちゃん、頑張ってるナー!」

「...。」
(Yちゃんっていうのか...。
可愛いなあ...。)

現れたのは『宮城学院女子大学』に今年入学した、アーチェリー一部の1学年の女の子でした...。

「では、弓を用意しま～す。」

私は、しゃがんで組み立てるYちゃんの姿に、つい見とれてしまいました...。

「M社長さん、宜しくお願いしま～す。」

短めの黒髪に、キュートな小ぶりの顔...。

蛍光灯の光に照らされた彼女の肢体は、小柄だが幼さがまだ残る顔に釣り合わないグラマー...。

「んじゃ射型を見てやるからYちゃん、巻きワラに射ってみなッ!」

「は～い。」

連日の練習の為か、やや日焼けした肌はいかにも健康的な色です…。

「バシュッ!」「ボンッ!」

『宮学(みやがく)』1年の可愛い子ちゃんが、私の直ぐ目の前で弓を射っている…。

狙いすました眼差しと、弓を構えた彼女のその姿は、ハツラツとしてまるで光っているみたいに眩しいのです…。

「バシュッ!」「ボンッ!」

ふと、彼女の胸元に視線を移すと…。

(ド、ドキッ…!!)

淡いイエローの薄いTシャツ越しに、透けた下着が…!!

Yちゃん…。

私の目に焼き付きました…。

ウィィィィィ〜〜〜〜ンンン!!!!!! (アローシャフトをカットする音)

「よしッ、この矢の長さなら丁度良いゾ!」

「M社長さん、ありがとうございます〜す。」

常に接着剤やシンナーの香りが漂う、東北唯一のアーチェリー専門店...

その狭く薄暗い空間に突如、明るい声が響きました...

「きゃはは〜。」

M社長との会話に声を弾ませているのは、ひまわりの花でも咲いた様に辺りを照らす、無邪気で天真爛漫な女の子...

宮城学院女子大1年のYちゃんです...

私は1人黙ってましたが、間もなくM社長が紹介してくれたのです...

「Yちゃん、彼は東北工大2年のMiyabi君だ、高校時代は1番だったんだゾ!」

「え、ホントですか〜。

私、アーチェリー上手になりたいんです〜。

先輩、私たちの大学に教えに来てもらえませんか〜。」

「えッ...!？」

私はYちゃんの思いがけない問いに、言葉に困ってしまいました...

そして何より、Yちゃんが真正面から真剣な目で私を見つめるので、ドキリとなったのです...

「私たち、東北学院大に勝ちたいんです～。」

それにしても、屈託のないストレートで何と素直な人なのだろう…。

「え、まあ…。」

それに比べて自己表現が苦手な僕は、何て情けないんだろう…。

結局、この日はそれだけでした…。

せっかくの可愛いYちゃんからのお誘いでしたが、この時の私には引き受ける自信が無かったです…。

何故なら、数日前の練習のことですが…。

「こうだ～い!!! ファイツ!!! オーツ!!!」

「バシュッ!」 「ボンッ!」 「バシュッ!」 「ボンッ!」 「バシュッ!」 「ボンッ!」

「矢取り～、これで今日の練習試合を終える～!!!」

「では、得点を発表する～!!!」

1位、2年〇〇〇、620点～!!! (パチパチパチ～!!!)

2位、2年◇◇◇、612点～!!! (パチパチパチ～!!!)

3位、3年×××、598点～!!! (パチパチパチ～!!!)

…5位、2年Miyabi、585点～!!!」

「えッ…!?!」

何と、この日の上位は2年の同輩たちが占めたのです…。

つまり、大学からアーチェリーを始めて1年ちょっとの伸び盛り連中に、5年目の私が負けてしまったのです…。

何という屈辱…。

このままでは、高校からやってきた意味がありません…。

何とかしなくては…。

土曜日の夕方、再びアーチェリー・ショップを尋ねるとM社長が待っていました…。

「よしッ、それじゃMiyabi君、一緒に行くとするかッ！」

「は、はい…？」

M社長のレオーネ4WDに揺られること15分、仙台市内のとある場所に着きました…。

この日は、私にとってショックの連続となりました…。

そこは、仙台市の『身体障害者センター』という施設でした…。

M社長のあとを付いて入ると、中には温水プールや、スポーツジムといった設備がありました…。

そして一番奥に体育館が現れたのです…。

「バシュッ!」 「ボンッ!」 「バシュッ!」 「ボンッ!」 「バシュッ!」 「ボンッ!」

足を踏み入れると、そこでは十数人の男性がアーチェリーの練習をしていました…。

彼らをよく見ると、車椅子だったり下半身に義足を着けています…。

そうです、下半身が不自由でもアーチェリー競技は出来るのです…。

彼らの様な障害者アーチャーと会ったのは、私はこの時が初めてでした…。

「ヤア!」

「こんばんは!」

「M社長さん、待ってたよー。」

「こっちも後で頼むよッ。」

親しそうにM社長と会話する彼らは、顔を見るなりアーチェリーの道具の購入や修理を依頼していました…。

「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」

体育館なので30mまでしか射てないのですが、よく見ると…!?

何と、60cm標的や40cm標的を使っているではありませんか…!

この小さなターゲットを狙えば、仮想50mの練習になるそうです…。

さらに驚いたのは、アローを沢山クイバーに入れていること…。

彼らは1エンド度に数多く矢を放ってから、まとめて矢取りをしていました…。

足が不自由なので、なるべく矢取りの回数を少なくする工夫でした…。

でも考えてれば、その方が短時間で数多く射てるので練習量が増すのです…。

「バシュッ!」「ボンッ!」「ガシャッ!

アローが接触する程小さくグルーピングする、かなりの腕前の人もいます…。

彼らの練習を見学して目から鱗が落ちると同時に、自分が恥ずかしくなっていました…。

身体の不自由な彼らからすれば、私のような健常者はもっと精一杯できる筈なのに努力を怠っている…。

もっと上手になりたい、もっと練習したい…。

81 ステップアップ

「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」

(クッソーっ!

大学から弓を始めて1年ちょっとの連中に、負けてたまるかっ...!)

「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」

(『Miyabi先輩、私にアーチェリーの指導してもらえませんか〜。』だって...!?

宮学のYちゃんに笑われないように、絶対上手くならねばっ...!)

「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」

(もっと一杯射って、絶対もっと当てて、試合で成績上げてやるぞっ...!)

「オーイ、Miyabiー!

調子どうだー!」

講義をサボってアーチェリー場で練習する私に、主将のSさんが3階の窓から声を掛けてきました....。

「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」

「ンー!?

オイMiyabiー、何なんだーその練習はー!?)」

「は、はい....。」

彼が不思議に感じたのは無理ありません、何故なら....。

この日の私は、30mの距離なのに一回り小さなインドア用のターゲットに射つ練習をしていたのです....。

しかも、1エンドに12本も立て続けに休まず矢を放つ、キツイ連射です…。

「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」

M社長が紹介してくれた、身体障害者のアーチャー達…。

私は、彼らの練習を見学して上達する為のヒントを得たのです…。

それまでの練習は丁寧に射つことばかりで、長時間掛かる割には射つ本数今一つでした…。

しかし、本当に試合で勝つにはもっと内容を濃くしなければなりません…。

「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」

そこで、短時間でなるべく数多く射つキツイ練習に取り組んだのでした…。

他人が3本射つ時間に6本を、6本射ってるあいだに9本を、といった具合に…。

よりキツく、より過酷に…。

「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」

「よしっ、自己新だっ…!」

やがて、その結果はスコアに如実に現れていきました…。

特に30mの距離は、私の最も得意な距離となりました…。

「30mなら、誰にも負けないぞっ...!」

試合に出場しても、これまでにない意気込みで射てるようになりました…。

相変わらず90mは、山なりに矢が飛んで的の中は今一つでしたが…。

しかし長距離で出遅れても、最後の30mで追いつき追い越すといった得意パターンが確立しつつありました…。

昭和59年…。

夏の個選でも、やはり90mは大幅に点数を落としましたが、70m→50m→30mと短距離に進むに従って得点を伸ばしていき…、

「バシュッ!」 「ボンッ!」

「よしっ、自己新だっ...!」

個人4位ながら、初のインカレ出場のキップを手に入れるまでに成長出来たのでした…。

「それでは一、『インカレ』に出場するMiyabi君の健闘を祈ってー!!
フレーツ、フレーツ、Miyabiー!!」

「フレー、フレー、Miyabi!!!! フレー、フレー、Miyabi!!!!」

「パチパチパチパチ〜!!!!」

「...。」(赤面)

昭和59年の某晩、私は『インカレ』(全日本学生アーチェリー個人選手権大会)出場へと旅立ちました...

なにしろ、我が『東北工業大学アーチェリー部』では何年か振りの『インカレ』選手とあって先輩をはじめ数人の部員が、仙台駅まで見送りに来てくれたのです...

しかも、深夜のホーム上でエールを送られるという持てなしを受け、嬉しいやら照れるやら...

やがて列車の扉が開き、私は乗り込むと直ぐにドアの窓越しに仲間達に向かって手を振りました...

プオオオ〜ン!!! (仙台駅を発車する普通列車『八甲田号』の警笛)

ガッタン!!!

「Miyabi頑張れよー!!」

「がんばれよっ!!!!」

「...。」(赤面)

ガッタン～ガッタン～ガッタン～ガッタン～ガッタン～ガッタン!!!

「Miyabi——、頑張れよ——!!」

「がんばれよ～～～っ!!!!!!」

「...。」(赤面)

プオオオオ～ン!!!

お金の無い学生には有り難い鈍行列車ですが、始発の青森からの乗客で既に満杯です...

ただでさえ狭い車内に、スポーツバッグとアーチェリーケースの大きな荷物が...

止む終えず入り口の傍らに放置することとしました...

さらに新聞紙を布団代わりに敷いた男性客を起こし、席を譲ってもらうとようやく落ち着きました...

あす、早朝には東京駅に着きます...

いよいよ学生アーチャーの頂点、『インカレ』に挑戦...!

そこには期待と不安が入り交じって、ちっとも眠気が起こらない私がありました...

仕方なく、薄暗く減灯された列車内をぼんやりと見つめながら、座席から伝わってくるレールの

振動や騒音に耐え、到着するのをただひたすら待ちました…。

ガッタン～ガッタン～ガッタン～ガッタン～ガッタン～ガッタン!!!

東京都世田谷区の『都立駒沢オリンピック公園』で開催の『全日本学生アーチェリー個人選手権大会』、ここへ全国の学生達80数名が選抜されて集まって来ました…。

目玉は、何んといっても日体大3年『山本 博(やまもとひろし)』選手です…。

この年の8月、彼は『ロサンゼルス・オリンピック』に出場して個人銅メダルを獲得、堂々の帰国を果たした直後でした…。

会場に着くなり、私は早速『山本 博』選手が気になりました…。

そして、自分の練習そっちのけで彼の射っている姿に見入ってしまいました…。

でも、こうして『インカレ』という舞台で初めて憧れの選手と競えることに、何とも言えない感動を覚えました…。

「♪ブッブーーーー!!」(ブザーの音)

「バシュッ!」 「バシュッ!」 「バシュッ!」 「バシュッ!」 「バシュッ!」

「ボンッ!」 「ボンッ!」 「ボンッ!」 「ボンッ!」 「ボンッ!」

昭和59年10月の『全日本学生アーチェリー個人選手権大会』が、ついに始まりました…。

ここ『駒沢公園』の多目的広場は、四方が壁に取り囲まれているので横風が殆ど無く、とても射ちやすい会場です…。

当時の『インカレ』は、2日間で行われる『ダブルラウンド競技』でした…。

すなわち、(1日で90m・70m・50m・30mの距離を各36本ずつ計144本)×2日=合計288本を射った得点で順位を決めるという、気の遠くなるような長丁場の試合でした…。

スタートは90m競技です…。

「バシュッ!」「バシュッ!」「バシュッ!」「バシュッ!」「バシュッ!」
「ボンッ!」「ボンッ!」「ボンッ!」「ボンッ!」「ボンッ!」

各大学のユニホームに袖を通した男達が、次々と矢を放っていきます…。

アーチェリー競技の中で、最も競技時間が長い『ダブルラウンド競技』…。

弓の強さに長時間耐えられるスタミナと、これまた長時間途切れない集中力が必要なのです…。

私の苦手とする90m、射ったアローはまるで天井サーブの如く高い山なりに飛んで行ってようやく標的に到達します…。

「バシュッ!」
「ボンッ!」

緊張して力みが入り、的を大きく外す0点も含め得点が伸びず、苦しいスコアが積み重なりました…。

「バシュッ!」
「ボンッ!」

結局190点チョイの酷い得点で、下から数えた方が早い燦々たるスコアで初日の90mを終えま

した....。

初日の90m第1位は、やはりダントツで『山本 博』選手でした、流石です....。

83 インカレの手土産は？

昭和59年10月の『インカレ』(全日本学生アーチェリー個人選手権大会)第1日目…。

東京都世田谷区の『都立駒沢オリンピック公園』に集まった全国の弓自慢の学生らは、長時間に渡る『ダブルラウンド競技』に耐え、歯を食いしばって必死に射ち続けていました…。

「バシュッ!」「バシュッ!」「バシュッ!」「バシュッ!」「バシュッ!」
「ボンッ!」「ボンッ!」「ボンッ!」「ボンッ!」「ボンッ!」

男子個人は、大方の予想通り日体大3年の『山本 博(やまもとひろし)』選手の独断場となりました…。

8月の『ロサンゼルス・オリンピック』で銅メダルを獲得したばかりの彼は、他を圧倒する得点差で初日の90m・70m・50mの各距離を、全てトップの成績で終えました…。

私は、短距離に移る毎に少しづつ調子が上がっていったものの、90mの出遅れが大きく響いて芳しくない順位でお茶を濁していました…。

しかし、得意の30mではまるで水を得た魚の如く10点を連発、自分でも不思議なくらい何故かよく当たっていました…。

「バシュッ!」「ボンッ!」
「バシュッ!」「ガシャッ!!」(的に刺さっている矢に、射った矢がぶつかる音)
「バシュッ!」「ガシャッ!!」(的に刺さっている矢に、射った矢がぶつかる音)

「10・10・9」、また「10・10・9」、またまた「10・10・9」…。

「10・10・10」(やった...!)

そして何と、初日の30mだけは『山本 博』選手を上回ったのです…!

かなり下位の選手が、30mのみ『山本 博』選手を越した…!?

これは珍事件です...!

翌第2日目は、またしても『山本 博』劇場でした...。

90m・70m・50mの各距離を、全てトップの成績で終えました...。

ところが、この時の彼はどうも短距離の調子が今一つだったようです...。

私は、スタートの90mはまたも最悪でしたが、やはり短距離に移るに従って調子が上がり、得意の30mでは10点を連発、面白い位によく当たりました...。

「バシュッ!」「ボンッ!」

「バシュッ!」「ガシャッ!!」(的に刺さっている矢に、射った矢がぶつかる音)

「バシュッ!」「ガシャッ!!」(的に刺さっている矢に、射った矢がぶつかる音)

「10・10・9」、また「10・10・9」、またまた「10・10・9」...。

「10・10・10」(やった...!)

残念ながら、最後の最後にほんの2点差で『山本 博』選手に交わされてしまったものの、私は30mダブルの東北新記録をマークしたのです...!

全体としてみれば低い順位の私でしたが、30mのみとはいえ『山本 博』選手を追い越し追い越されたという体験は、満足すべきものがありました...。

こうして『インカレ』は終わったのです...。

『インカレ』から帰った私の、その後はというと....。

言うまでもなく、より一層アーチェリーに熱心に取り組む様になりました....。

そして得意とする短距離は、より自信がついたのです....。

間もなく、地元の試合で躍進する私がありました....。

宮城県のローカル試合、そして学生の草試合で優勝しだしたのです....。

試合の勝ちパターンは、スタートで出遅れても粘って得点を上げていくスタイルが得意になりました....。

特に30mは、誰にも負けない自信がありました....。

誰が呼んだか、『30mのMiyabi』というニックネームが付きまして....。

さらに、冬期に開催される『インドア競技』が得意になりました....。

昭和59年12月、岩手県で開催された『東北インドア選手権大会』では、招待選手の『松下和幹(まつしたたかよし)』選手(ロサンゼルス・オリンピックで4位)を破って初優勝....。

松下選手を大いに悔しがらせました....。

この事実は、私を更にアーチェリーにのめり込ませるきっかけとなったのです....。

ところが、アーチェリーの成績が上がれば上がるほど、学業の成績は下がっていったのでした…。

84 僕はガクインの学生？

「バシュッ!」「ボンッ!」

(クッてるかな、クッてないかな...!?)

「10・10・9かぁ～、惜しい...!」

ある朝の練習、自ら射った矢の的中箇所を確かめては一喜一憂する私でした...

さて、ここは何処でしょうか...?

「よしッ、もう1回点付けするぞ...!」

インカレ以来の私は、もっとアーチェリーの練習量を増やしたくて仕方ありませんでした...

「バシュッ!」「ボンッ!」

そこで、思いついた手段が...?

「チワース!!」

「こんにちは～っス!!」

「お早うございます...、お邪魔しています...。」

「構いませんよーMiyabiさん、自分達も練習始めるッスからー!!」

「一緒に射ちましょう、さてっ、ヤルか～っ!!」

「すまないね...。」

彼らはガクインの学生です...。

そう、ここは多賀城市の『東北学院大学工学部』なのです...。

「バシュッ!」 「バシュッ!」 「バシュッ!」

「ボンッ!」 「ボンッ!」 「ボンッ!」

『東北学院大学工学部』で練習する私...。

片道1時間半も掛かる自分の大学に行くより、歩いて10分の『東北学院大学』に潜入して練習した方が遙かに練習になることに気付いたのです...。

もう一度いいます...。

自分の大学に行かずに、ガクインに通ってアーチェリーの練習...(笑)。

「Aランチ下さい...。」

ガクインの学生食堂で昼飯を食べたり...。

「ムシャムシャ、Miyabiさん、どうしてムシャムシャ、30mあんなに当たるんスカー!?!」

「もぐもぐ...、それはだね、十字射型を守ったままでツマ先に重心をもぐもぐ...。」

「なるほどムシャムシャ、Miyabiさん、オレの射型ムシャムシャ、後で見てくださいませんかー!?!」

「いいよ、もぐもぐ...。」

「バシュッ!」「バシュッ!」「バシュッ!」

「ボンッ!」「ボンッ!」「ボンッ!」

連日、私はガクインに足を運んでアーチェリーに打ち込みました...

彼ら『東北学院大学』の連中と練習することで、常に刺激も受けるし...

この時期の私は、インカレ選手としての誇りと同時に、全国からみれば低いレベルであることを痛感したことが練習に掻き立てさせたのです...

また同時に、弓を当てるのが楽しくてなりませんでした...

「バシュッ!」「バシュッ!」「バシュッ!」

「ボンッ!」「ボンッ!」「ボンッ!」

そんなある日、私はいつものように『東北学院大学』に行きました...

ふと...

何気なく振り向くと、そこにある掲示板に目が止まったのです...

「ん...、アルバイト募集か...。」

『(有)M製作所』

[仕事内容：電子部品の組み立て 勤務時間：夕方から深夜にかけて]

所在地は大学のすぐ裏、この近辺です…。

ここのバイトならば、昼にアーチェリーの練習をしてから直ぐに働きに行けます…。

その求人は勿論、ガクインの学生への募集でしたが…、

私は、図々しくも交渉して、願わくば採用してもらおうと思ったのです…。

善は急げと云いますが…、

こういう事は、ピン来たら直ぐにトライすべきでしょう…。

すると、チャンスの神様が祝福してくれるものなのです…。

間もなく、大学内の公衆電話から連絡をとったのです…。

「もしもし…、あの…アルバイトの面接をお願いしたいのですが…。」

「一では、まず入らせて下さいー」

『(有)M製作所』 …。

そこには、運命の出会いが待っていました…。

「は、初めまして...!

東北工業大学電子科2年、Miyabiと申します...!」

「あれー

何でキミ、来たのー

東北学院大学工学部に、アルバイトを募集した筈なのにー」

「は、はい、ガクインの掲示板で見たんです...!

でも...。

僕、こちらで働きたいんです...!

一生懸命やりますから社長さん、ぜひ雇って下さい...!」

「んー

しょうがないなー、まあ、いいだろうー

早速、今日から働けるのかなー」

「は、はい...!

ありがとうございます...!」

半ば強引に頼み込んで、アルバイトに採用してもらった先は...、

『(有)M製作所』という、電子部品を製造する中小企業でした...。

ウィィィィィィィィィー————ン!!!!

キュルキュルキュルキュルキュル~~~~!!!!

壁の向こうから、何かを削っている様な音が聞こえてきます...。

物静かな社長さんは私について来るよう促し、間もなく案内されるがままに社内を見て廻りました...。

さして広くはない3階建ての内部は、大小幾つもの作業部屋に別れており、その1つ1つの部屋にユニフォーム姿の女性が何十名も居ました…。

彼女たちは、真剣な顔つきでしかも無言で作業に当たっており、そのどれもが如何にも細かい手仕事の様に見えます…。

建物の中は、金属や油の様な臭い、あるいは接着剤等の化学臭が漂っています…。

電子部品の製造…。

ここ宮城県多賀城市には、『ソニー』という大きな企業が有って、当時普及し始めた家庭用ビデオデッキを主流にフル生産していました…。

海外でメイドイン・ジャパンが、最ももてはやされた時代です…。

造っても造っても、世界中で飛ぶように売れる日本製の電化製品…。

その中核『世界のSONY』の工場が地元にある訳ですから、その下請け会社もこの近辺に幾社も軒を連ねていました…。

アルバイト先の『(有)M製作所』もその1社で、生産のほぼ100%を『ソニー』から請け負っていたようです…。

『(有)M製作所』は、女性の正社員とパート従業員が殆どを占めており、男性の正社員は数える程度しかいませんでした…。

「昼だけでは生産が追いつかないからー
君たち学生さん達に、夕方から深夜まで一
手伝ってもらいたいんだー」

「は、はい...!
社長さん、僕、よかったら昼も働きますよ...!」

「そうかい、それなら助かるな—
さて、夜の部の責任者がもうすぐ来るから—
挨拶しなさい—」

「は、はい...!」

夕方になって『(有)M製作所』の表に、黒塗りのクラウンが入ってきました...

スモークを貼ったガラスと、極太のタイヤの出で立ちは、見る者に嫌でも威圧感を与えています...

クルマから降りてきた男はサングラスを外して、作業服を羽織ると間もなく社屋に現れました...
。

「あー、Miyabi君—
課長が来たから挨拶しなさい—」

「は、はい...!
初めまして、今日から働くMiyabiと申します...!」

向かい側に立っている人物が、夜の部の責任者のようです...

恐る恐る顔を見上げた私は、相手を見て一瞬ビクッとなってしまいました...

「課長のKitazawaです。
ヨロシク。」

金髪ともチャ髪ともつかない様な色に染めたアタマの男性は、彫りが深い顔立ちの30代後半位の
チンピラみたいな人でした…。



ガチャリッ！

(バイト先『(有)M製作所』のタイムカードを押す音)

「こんにちは、今日も宜しくお願いします...。」

「こっちこっち～、お兄ちゃんこっち手伝ってちょうだい～!」

「は、はい...。」

いきなり女性に手招きされ、戸惑いながら入った先は、作業員が縦にズラリと並んだ部屋でした...

そこでは、女性達が椅子に座って黙々と作業工程に向かっていきます...

女性・女性・女性...

例えるなら、女戦士たちといったところでしょうか...

そこで私が与えられたのは、接着剤を塗って小さな部品同士を貼り付ける作業でした...

1箱に十数個も並んだ部品を、全て失敗無くやらねばならないのです...

エポキシ樹脂がはみ出さない程度に絞り出し、ずれない様に重ねていきます...

慣れない手つきで慎重に作業する私...

全く単純な軽作業なのに、たった1箱終わらすのに悪戦苦闘でした...

「ふう...。」

ふと隣を見ると、おばさん達は目も止まらぬ早さで、次々と何箱もこなしています...。

(うゝ わっ、きれいで正確でしかも何て早いんだろ...!?)

「どれどれ、見せてごらん〜？」

私を手招きした女性です...。

「コレは接着剤はみ出してる、コレは足りない、コレは手垢付いて汚ない、ほとんど出荷出来ないよ〜！」

「す、すいません...！」(赤面)

手先の器用さを自負していた私でしたが、優秀な女戦士たちを前にして、その自信は崩れ去りました...。

「初めてだから、慣れるまでゆっくり慎重にやりなよ〜！」

「は、はい...。」

指導してくれる彼女は、主任のYさんという方でした...。

気を取り直し、今度は落ち着いて丁寧に貼り付ける私...。

「いいんじゃない、お兄ちゃんその調子で〜！」

「は、はい...。」

Yさんは30代位の女性で、厳しさの中にも優しさを感じる人です...。

ジリリリリィーッ！

(午後5時の合図)

「はあー」

「やれやれーッ」

「ふうーっ」

作業を終えた女戦士たちは、次々と席を立ちます...。

「お疲れー」

「お先にー」

「また明日ねー」

そして、緊張から解き放たれホッとした表情で、各々帰宅していきました...。

残っているのは数名です...。

「あの、Y主任さんは帰らないんですか...？」

「うん、子供待ってるからホントは早く帰りたいけど～、アタシは社員だから夜勤のバイト君たち来るまで残業なのよ～！」

「そ、そうですか...。」

「お兄ちゃん、こっちも頼むわね〜！」

ガチャリッ！

ガチャリッ！

ガチャリッ！

ガチャリッ！

来ました、来ました...。

6時を過ぎた頃から、バイトの大学生がぞろぞろ集まって来ました...。

「よう新人、お前今日も昼からバイト入ったのかぁ!？」

「は、はい...。」

「頑張るなぁ、いっそココに就職しちゃえば!？」

「は、はは...。」

十数名の大学生らは社員に指示され各工程に分散しました...。

そして、今晚も彼が現れました...。

Kitazawa課長です...。

「オツカレ。」

あれッYさん、まだ居たのか。
早く帰らないとダンナ浮気するカモしんねエゾ。
それとも、俺のこと好きだから待ってたのかナ。
Yさん、色っぽいもんな。
汗で背中が濡れて、ブラが透けて見えるゾ。」

「ば〜か！」

「ハハハハハハハハハハ。」

淡々と作業をこなす私達でしたが、大人同士のやりとりが嫌でも耳に入ってきます…。

と、その後のことです…。

右隣のガクインの先輩が、私に何やら囁きました…。

ヒソヒソ声で彼が発した言葉は、何と…、

「いいか新人、Kitazawa課長にはくれぐれも気をつけろよ、何人も辞めてるんだからな!!」

「…!？」



昭和59年の秋、私は奇妙な学生生活を送っていました…。

午前中は、片道1時間半も掛かる自分の大学へは行かずに、徒歩5分の東北学院大学工学部にちゃっかり潜入してアーチェリーの練習をする…。

そこの学食で昼飯を済ませて…、

午後から深夜に掛けて、近所にある『(有)M製作所』でアルバイト…。

そのバイトの話の続きです…。

ガチャリッ！

(バイト先『(有)M製作所』のタイムカードを押す音)

「こんにちは、今日も宜しくお願いします…。」

「待ってたよ～、お兄ちゃん今日もこっち手伝ってちょうだい～!」

「は、はい…。」

作業の合間のことです…。

私は、抱いていた疑問を主任のYさんにぶつけてみました…。

「あの…、Y主任さん、
Kitazawa課長って、どんな方なんですか…?」

「Kitazawa課長のこと～!?

そうね～、あの人のこと、周りの皆はあんまり良くは言わないけどね～!

うん、確かにちょっと個性的だけど～、男らしいところがあって私は嫌いじゃないけどね～!」

「はあ...。」

「あのね、実はいろいろ訳アリなのよ～!

今、ある女性と同棲してるんだけど、ここで働いてた元パートよ～!」

「へえ...。」

「他にもKitazawa課長は、パートの娘に何人も手を出してるのよ～!

別れた奥さんとの間に、子供もいるのよ～!

それから、沢山の借金を抱えてるらしいのよ～!」

「えッ...。」

「でもね、社長の親戚なのよ～!

だから、大きな顔してここに居れるのよ～!」

午後6時を廻った頃、学生アルバイト達が集まる時間です...。

問題の彼、Kitazawa課長も現れました...。

「オツカレ。

Yさん、俺の顔見たくて待ってたのかァ。

惚れてもダメだゾ。

俺には今、メンコイ女が居るからサ。

夕べ、何回も愛し合ったから腰が痛エーよ。」

「ば～か!」

「ハハハハハハハハハハ。」

淡々と作業をこなす私達でしたが、刺激的な大人の会話が耳に入ります…。

と、その後のことです…。

「オーイ。
今夜これから、『ガンシン』をするからナ。
人が足りないから、お前も手伝えッ。」

「は、はい…。」

突然、Kitazawa課長から指名が掛かりました…。

『ガンシン』とは…!?

『(有)M製作所』の別棟、1階の隅に『ガンシン』の作業部屋がありました…。

その部屋に近づくにつれ、熱気と何やら酷い悪臭が漂ってきました…。

駆り出された私たち学生は、隣の控室でゴムガッパを羽織りマスクを被り、さらに2枚重ねの軍手をして待機させられました…。

「さて、そろそろ始めるとするかッ。」

Kitazawa課長を先頭にいよいよ『ガンシン』の作業部屋に入ると、そこはまるでサウナの様な熱い処でした…。

部屋の中央にはプールがあって、その中では高温で溶けた「ロウ」がグラグラ煮えたぎっています…。

私は、ものの数分もしない内に体中が熱くなって、額から汗がにじんできました…。

そして、高温で溶けた「ロウ」のキツイ臭いで吐き気を覚えたのです…。

ウィィィィー~~~~ン!!!!

ゴボゴボゴボゴボゴボッ~!!!!

「ロウ」のプールの中からせり出したのは、真っ白な蒸気がモクモクと上がる網状のカゴに乗せられた沢山の電子部品でした…。

私たちは、カゴが上がると次々に電子部品を捕まえては収納ケースに並べるのです…。

ところが熱いのなんの、2枚重ねの軍手を通して熱い「ロウ」がにじんでくるし、顔に飛び跳ねてアッチッチ…!

『ガンシン』作業自体は全く大したことはないのですが、次から次へと熱い電子部品を掴むので全身汗まみれです…。

そして最もツライのが、高温で溶けた「ロウ」のキツイ臭いでした…。

そして、とうとう…。

「ウッぷ…!

ウッぷッぷ…!!

ウッぷッぷッぷ…!!!

す・み・ま・せ・ん…Kitazawa課長、ち、ちょっと…、」

「隣で休んでろッ。」

我慢しきれなくなった私は、口を押さえたまま急いで作業部屋を出ました…。

「ゲボゲボゲボケボゲボゲボゲボッ～～、オーーエーーッ…!!!!」

「オーイ。
お前、大丈夫かッ。」

「は、はい…。」

控室で横になっている私を心配して、声を掛けてくれたKitazawa課長さんでした…。

「お前、この薬を飲めッ。
落ち着くまで、いいから休んでろッ。」

「は、はい…。」

「お前、『ガンシン』初めてだったナ。
一回は皆あれでヤラれるのサ、気にするナ。」

「あ、ありがとうございます…。」

(Kitazawa課長って、優しくて良い人みたいだけど…!?)

今日もまた、午後から(有)M製作所のアルバイトです…。

ところが、この日は何かいつもと様子が違っていました…。

何故なら、会社の入り口にKitazawa課長のクラウンが停まっていたからです…。

(課長、今日は昼間から出勤なのかな…?)

ガチャリッ!

(タイムカードを押す音)

「こんにちは、今日も宜しくお願いします…。」

「オツカレ。

お前のこと待ってたぞ。

コッチに来い。」

「は、はい…。」(緊張)

Kitazawa課長に呼ばれて入った部屋には、社長さんがいました…。

「Miyabi君、早速なんだが一

今から、課長とソニーに行ってもらいたいんだ一」

「は、はあ…!？」

社長の口から発せられた言葉から、何やら困っている様子が伺えました…。

「実は、大事な取引が有るのにー
社員が次々辞めてしまったのでー
しばらく、君に頑張ってもらいたいんだー」

「は、はい...!？」

「じゃあー
しっかり頼んだよー」

「は、はあ...!？」

こんなやり取りがあった数分後、私はKitazawa課長が運転するライトバンの助手席の人となっていました....。

ビュルルルルル〜ッ！
(ディーゼルエンジンの音)

「か、課長...!
あ、あの...、先日はご迷惑をお掛けしました....。」(緊張)

「キモチ悪いの治ったかア。
ガンシンはキツイからナ。」

「は、はい、もう大丈夫です....。」(緊張)

「カノジョにでも介抱してもらったかア。
いるのかお前、カノジョは。」

「い、いえ、いません....。」(赤面)

「ひよっとすると、童貞かア。
オンナと付き合ったことはあんのか。」

「い、いえ、ありません...。」(赤面)

「ハハハハハハハハハハ。

お前、男だろ。

情けねエなァ。

今度、俺がカノジョのつくり方教えてやるぜ。」

「...。」(赤面)

「そういえばお前、学院大じゃないんだってナ。
何で入ったァ。」

「は、はい、東北工大は遠いし...。
講義や実験は、全然つまらなくて...。
僕、本当の事を言うと...。
コンピューターより、機械や油まみれの方が好きなんです...。」

「ンじゃ、ウチの会社はピッタリだナ。
大学なんか辞めて、ウチで働けよ。
ま、キツイ仕事だけどナ。」

「そ、それはちょっと...。」

Kitazawa課長を前にすると萎縮してしまう私でしたが、この日を境に少し自然に接する事が出来る様になっていったのです...。

ビュルルルルル〜ッ！
(ディーゼルエンジンの音)

間もなく、目の前に巨大な建物が見えて来ました…。

宮城県多賀城市では最も大きな企業、『ソニー』です…。

2人が乗ったライトバンは門を潜って一旦停止、受付を済ませるとソニーの敷地内を直進しました…。

中では、ソニーの作業服を着た人々があちらこちらに見受けられます…。

きっと幾度も入って慣れているのでしょう、ほど無くしてKitazawa課長は迷う事無くクルマをある建物の前に停めました…。

「ジャ、入るぞ。」

「は、はい…。」

「～という訳です、何か御質問は有りますか～？」

「…。」

この日、ソニーの技術者に説明されたのは、家庭用ビデオデッキに使われるヘッドの加工方法でした…。

専用の機械を使い、ヘッドの表面を削って形を整える工程を依頼されたのです…。

シュルルルルル～ッ！

「～そうです、その要領でお願いします～！」

「は、はい…。」

シュルルルルル〜ッ！

(有)M製作所に、例の工作機械が2台搬入されました…。

それは大きさこそ家庭用ミシン並みですが、旋盤の様な形状をしたマシンです…。

「このチャックにヘッドを挟んだら、レバーを下げて固定して下さい…。」

それはビデオデッキに使われるヘッドの表面を、削って形を整える工作機械でした…。

「水に濡らした研磨ペーパーを、円盤に張り付けて下さい…。」

複数のパートの女性に説明する私です…。

当時は、家庭用ビデオデッキが急速に普及し出した頃でした…。

ソニーは右肩上がりで増産、それに伴い部品の供給も増産に迫られていったのです…。

「最後に、スイッチを入れます…。」

シュルルルルル〜ッ！

私は、ソニーの技術者に依頼された工程を、更に社内の人々に伝授しました…。

昼はパートの女性が、夜はアルバイトの学生がこのマシンを扱いました…。

「これで1個、完成です…。」

こうしてヘッド加工の仕事は、スタートしました…。

シュルルルルル〜ッ！

シュルルルルル〜ッ！

やがて、ヘッド加工の仕事量は日増しに増していき、増産に次ぐ増産…。

シュルルルルル〜ッ！

シュルルルルル〜ッ！

シュルルルルル〜ッ！

シュルルルルル〜ッ！

シュルルルルル〜ッ！

当初2台だったマシンは数を増やし10台に、さらに一度に何十個も加工出来る大型のマシンまで導入したのでした…。

「Miyabi主任、これはどうしたらいいですか!？」

「え、ええとですね…。」

私は、いつの間にか主任と呼ばれるようになっていました…。

たかだかバイトの分際で...(笑)。

そんなある日のことです…。

「オツカレ。

ちょっといいか、コッチに来いヨ。」

「は、はい…。」

手が空いた時間、誘われてKitazawa課長の言葉に耳を傾けたところ…。

「話が有るんだが。
お前、ベータマックス買わねエか。
ビデオデッキ持ってないって言ってたよなァ。」

「は、はあ...!？」
「〇十万円はどうだァ。
昼夜頑張ってるから大分稼いだんだろ。」

「...。」

何故Kitazawa課長が私にビデオデッキを売りたいのかは判りませんでした。これは何か善くない誘い話であるとは感じました...

さらに....

「金髪のオンナがアソコ丸出しの凄いビデオ観たくねエかァ。
ダビングしてやってもいいゾ。
お前、それ観たら失神するぞきっと。
ハハハハハハハハハハ。」

「...。
け、結構です...。」

と、何とかその場を逃れた私でしたが、心の動揺は隠せませんでした...



90 ビデオデッキ要りませんか？

(キンパツ....、キンパツ....、キンパツ...!)

「お、親父...。
ちょっと話があるんだけど...。」

「珍しいなー。
どうしたんだMiyabi、急にー？」

「う、うん...。
いや、そのつまり...。
あの、ウチにもそろそろビデオデッキなんかどうかなあ...、
なんて提案なんだけどさ...？」

「なんだそんな事かー。
それは、父さん達も考えていたよー。」

「えッ!?
そうだったの...!？」

「例えば、プロ野球中継観てる時にー、
母さんが観たい歌番組をビデオ録画出来れば、良いよなー。」

「そ、そうだよーね...!
実は、バイト先の課長からベータマックス買わないか勧められてるんだよ...!
価格は...。」

「そんなにするのかー!
うーん。」

(キンパツ....、金髪....、キンパツ....、金髪...!!)

その翌日....

「こんちわっす...！
M社長、ご無沙汰してます...。」

「Miyabi君、バイト頑張ってるそうだな！」

「ええ、そうなんです...。
近々、新しいアーチェリーの道具注文しに来ますから...。
ところでM社長、ベータマックス買いませんか...？
僕のバイト先、ソニー関連なんですよ...！」

「そうか、俺もビデオデッキそろそろ欲しいと思っていたところなんだ！」

「なんだ、そうだったんですか...!?
M社長、これがカタログです...。」

「ウ〜ン!?
結構、値段張るんだナ!?」

「ええ、まあソニーが誇る最新型の高性能ビデオデッキですからねえ...！」

「分かった、1台もらうことにスル！
買うから次来る時に、持ってきてくれッ！」

「ほ、本当ですか...!?
ありがとうございます、M社長...！」

(キンパツ...、金髪のおねえさん...、キンパツ...、金髪のおねえさん...!!!)

そのまた翌日....

「先輩...!

ビデオデッキ要りませんか...?」

「自慢じゃないけど僕、ソニーの工場に出入りしたりするんですよ...!」

「最新型のソニーのベータマックス買いませんか...?」

「ねえ、僕はソニーに顔が利くんだよ、自慢じゃないけどさ...!」

東北工大アーチェリー部のサークル棟で....

気が付くと....

顔を会わす仲間に、次々とビデオデッキを勧めていました....

ソニーの下請け工場でバイトしただけなのに、にわかセールスマンに変貌した私....

何故ビデオを勧めるのか...!?

その理由は....

Kitazawa課長からソニー製品を回してもらえば、お宝が手に入る可能性があるから....

です...(笑)。

(キンパツ....、金髪のおねえさんの裸....、キンパツ....、金髪のおねえさんの裸...!!!!)

ところが、事態は間もなく思いもよらない方へ向かって行ったのです…。

(キンパツ...、キンパツ...、キンパツ...!)

...キラッ!!!! ブロンドヘアーの女性の後ろ姿が見える...

(ウハッ...!

これはもしかして...、キンパツ...、金髪のおねえさんだッ...!)

...キラキラッ!!!! 振り向いた女性は、澄んだ青い瞳をしている...

(ウハッ...!

キンパツ...、金髪のおねえさんが...、ボクを見ているッ...。)

...キラキラキラッ!!!! 白人の女性は、少しずつ衣服を脱ぎ始めた...

(ウハッ...!

金髪のおねえさんが...、ボクを見つめながら...、肌をさらけ出したッ...。)

「Oh~!!

Oh~!!

Oh~!!
feels it~!!
Oh! my god~!!」

(ウハッ...!
金髪のおねえさんが...、ボクの目の前で...、全裸になってあんなことをッ...!!!」

チク・タク・チク・タク・チク・タク・チク・タク... (時計の音)

(ガバッ!!)
「なんだ...!!
ゆ、夢かあ...。」

翌日、私は早る気持ちを抑えつつ、一目散に(有)M製作所に駆けて行きました...。

門柱をくぐると、Kitazawa課長のクラウンが停まっていた...。

(やった...!
課長、今日は昼間から出勤しているぞ...。)

ガチャリッ!
(タイムカードを押す音)

「こんにちは、今日も宜しくお願いします...。」

私はいつも通り作業に取り掛かったのですが、どうも身が入りません…。

しかし、ほど無くして作業部屋にKitazawa課長が現れたのです…。

「オツカレ。」

「は、はい…。

か、課長あの…。

僕、ビデオデッキ買いたいんです…。」

緊張で、言葉にならない様な言葉で訴えた私です…。

「2台だナ、分かった。

直ぐ用意してやっからナ。1日待ってろ。」

「は、はい…。」

たったそれだけのやり取りでしたが、内心ニヤニヤした私でした…。

(やった…！

課長との危険な取引を成立させたぞ…。)

ところが、その日の晩の事です…。

こんな電話が来たのです…。

「Miyabi君かア？

アー、Mだがビデオデッキの件だがナー！」

掛けてよこしたのは、アーチェリー・ショップのM社長です…。

「悪いがァー、注文を取り止めたいー！

家電に詳しい者に、たまたま話したらァー、

Miyabi君の勧めたベータマックスは1つ前のモデルだと指摘されたゾ！
今回はナシにしてくれー！
そう言う訳ダ！
じゃあナー！」

「...!?!?」

啞然として、受話器を置いた後もその場に立ち尽くす私でした...

私は、M社長の話が俄には信じる事が出来ませんでした...

しかし、この後さらに親父からも同様のクレームが来たのです...

家電量販店で比較した親父は、我が家には低価格のVHSで充分と判断...

型が古いベータを、定価に近い金額で購入する必要は無いとの事でした...

と、いうことは...

Kitazawa課長に依頼した2台はキャンセル...!?

愕然とする私...

と、同時に罪悪感が襲ってきました...

そもそも、キンパツの裸が見たいという不純な動機で、先走って家族の同意を得ないままビデオデッキを注文した訳ですから...

とにかく、急いで注文の破棄を伝えねばなりません...

しかし、相手はKitazawa課長です…。

何と言って謝れば良いのだろう…!?

頭を抱える私に、親父は追い討ちを掛けてきました…。

「Miyabi、その課長の名前は何かというんだー。」

「…。」

「ひょっとすると、そいつはバイトの学生をに横流しした製品を売りつけて一、荒稼ぎしているのかも知れんぞー。」

「えっ…!？」

そして更に…。

「Miyabi、その課長の名前は何かというんだー。」

「…。」

名前は、Kitazawa ○○○さんだよ…。」

と、返答した瞬間…、

親父の顔色はみるみる変わっていきました…。

「Miyabi、そのKitazawaという男に関わるな一。
もう、接触するのを止めなさい一。」

「えっ...!？」

アルバイト先の上司の氏名を明かすと…、

親父は怖い形相で、私に忠告しました…。

「お前の課長の、Kitazawa〇〇という男はだな一、
この近くでは昔から有名な一、
〇〇の息子だぞ一。」

「えっ...!？」

「そこはだな一、
不動産など、色々と手を広げ一、
悪どい土地ブローカーを次々と繰り返して、破産したんだ一。
Kitazawa〇〇は、そいつの息子だ一。
カネに困って、何をするか判らんぞ一。」

親父の口から出てくるのは、どれもこれも悪い情報ばかりでした…。

そして更に…。

「Miyabi、とにかくKitazawaには関わるな一。
それから一、

そんな男のいるようなバイトは、さっさと止めなさいー。」

「...。」

昭和59年の秋、大学2年に始めた(有)M製作所のアルバイト...

そこで、主任とまで呼ばれるほどバイト先に馴染んだ私でしたが、思い掛けず襲ってきた最大のピンチでした...

黙って、ただ働いていれば良かったものを...

キンパツのビデオ見たさに、余計な問題を招いてしまった情けない自分を、ただただ責めました...

何はともあれ、注文したビデオデッキ2台を、直ぐにキャンセルしなければなりません...

よりによって、一癖も二癖もあるKitazawa課長にです...

しかし、相手がどんな人間であろうとも、迷惑を掛けてしまった以上は謝罪して契約破棄をお願いするしかありません...

(明日、直ぐに会って謝ろう...。)

こうして、私は決心をしました...

翌日、私は重い足取りでバイト先に向かいましたが…。

作業部屋に入ると、そこへ…、

「オツカレ。」

いきなりKitazawa課長が居たので、心臓が飛び出しそうになりました…。

そして、もっと驚いたのは…、

「ホレ、お前に頼まれたベータマックス2台だ。
ここに置いてたゾ。」

「…!?!?!?」
(ゲッ、お、遅かった…。)

「か、課長あの…。
じ、実は…。
都合悪くなって…。
ビデオデッキ買えなくなってしまったんです…。」

緊張で、言葉にならない様なシドロモドロ言葉でようやく訴えた私でした…。

「課長、ご免なさい…!!
謝ります…!!
申し訳ありません…!!
すみません…!!
ご免なさい…!!
謝ります…!!

申し訳ありません...!!

すみません...!!

許して下さい...!!」

「kitazawa課長…、
僕…、
都合悪くなって…、
ビデオデッキ買えなくなってしまったんです…!!
ご免なさい…!!
謝ります…!!
頼んでおきながら…、
勝手言って本当に申し訳ありません…!!」

床に膝を着き深ぶかと頭を下げたまま、私は涙ながらに訴えました…。

その時の私は、自分の非を認め言葉に代えるのが精一杯でした…。

とにかく迷惑を掛けた課長に対し、誠心誠意を見せようと謝りに謝ったのです…。

すると…!?

「・・・ツタク。
しょうがねエナー。
もう、いいからアタマ上げろ。
ベータマックスは誰かに売るからイイ。
いいから早く仕事シロ。」

「…!?!?!?」

危機一髪の状態から救われると、人間は思考が一時的に止まってしまうのかも知れません…。

課長に言われた意味を理解するまで、多少の時間が必要な私でした…。

鉄拳の一発を食らったとしても、全く不思議ではないシーンだったにも関わらず…。

あの、モンダイ課長kitazawaさんの意外性...!?

彼の寛大な措置によって、まさに命拾いしたのです...

チビリそうな悪夢の様な時間は、こうして過ぎ去りました...

kitazawa課長...

不思議な男です...

『Kitazawaという男に関わるなー。
接触するのを止めなさいー。』

と言っていた、親父の忠告を思い出します...

彼には、確かに多少の問題点もありますが...

しかしながら、ある一面だけで人を正当に評価する事は出来ないと思います...

人の性格には誰でも長所があれば、短所もありますが、その短所が目につきやすいものです...

そして、性格はその人の育ってきた環境が大きく影響するといわれます...

Kitazawaさんが、どのような家庭で育てられたかは判りませんが...

私にとって、彼は憎めない存在となりました…。

さらに後日、Kitazawa課長にまつわる驚くべき事実が明らかにされたのです…！

それは…!?

数日後の事でした…。

ガチャリッ！

ガチャリッ！

ガチャリッ！

ガチャリッ！

(タイムカードを押す音)

来ました、来ました…。

6時を過ぎた頃から、バイトの大学生がぞろぞろ集まって来るのです…。

「オツカレ。

誰だ、新車のホンダに乗って来たのは。」

Kitazawa課長が学生アルバイト達に声を掛けました…。

その時の私は、作業をこなしながら何気無く耳を澄ませて、彼らの会話を聴いていました…。

すると...!?

ある学生相手に、Kitazawa課長がクルマの話をしているではありませんか...!?

「俺のクルマっす〜!
親に負担してもらって買ったんっすよ〜!」

「CR-Xじゃねエか。
なかなかカッコいいナ。
エンジンはDOHCなのか。」

「違うっすよ〜!
俺のは、馬力低い方っすよ〜!」

「きっとパワーウェイトレシオが高いから、充分だゾ。」

意外でした....。

(Kitazawaさんって、クルマの知識が結構あるんだ....。
課長がクルマ好きだったなんて、意外だなあ....。)

彼らの会話が気になった私は、仕事の手を休めて2人の傍らに近づきました....。

会話は続きます....。

「お前、オンナにモテようと思ってCR-X買ったンだろ。
そうだろナ。」

「違うっすよ〜!

俺は、純粹に気に入ったからっすよ〜!」

「ハハハハハハ。

やっぱり、カッコいいクルマはスポーツカーだよナ。」

「Kitazawaさんだって、凄いスポーツカー持ってるじゃないっすか〜!？」

(...!?!?!?)

何だって...!?

あの、Kitazawa課長が...!?

凄いスポーツカーを持ってる...!?)

「あ、あの...、
ガクインの先輩...!
ちょっと聞きたいことがあるんですが...、
あの、いいですか...?」

「はあ〜!？」

2人の会話を盗み聞きした私は、どうしても例の件が気になってしまったのです...。

「先輩...!
先ほど...、
『kitazawaさんだって、
凄いスポーツカー持ってるじゃないですか』
...って話してましたよね...!?
それは本当なんですか...!？」

「はあ〜!？」

「先輩...!
教えてください...!
Kitazawa課長は...、
どんなスポーツカーを持ってるんですか...!？」

半ば強引に問い詰めたせいで、仕事の手を一瞬止めた学院大生は、訝しげに私の顔を見上げました...。

そして機械の電源を止め、ちょっと困った様子で椅子に座り直した先輩...。

しかし私の真剣さに気づき、まるで背中を押されたかの様に口を開き始めました…。

「そうか～、
新人君は、Kitazawa課長のスポーツカー～、
まだ見たこと無かったのか～？」

「は、はい…。」

「そう言えば～、
最近、ちっとも見かけないよな～？
しばらく、会社にあのクルマ乗っこないもんなあ～？」

「そうなんですか…？」

「ンでも、一回見たら忘れらんないカタチしてるんだぞ～！
とにかく何処にも走ってないんだ～！
凄いスポーツカーなんだぞ～！
見たらきっと驚くぞ～！」

しびれを切らした私は、更に突っ込みました…。

「そのクルマの名前は何なんですか…!?
国産ですか…!?
それとも外車ですか…!?
色は何色ですか…!?
先輩、お願いします…!
教えて下さい…！」

「え～っとお？
何んつう～名前だったっけかなあ～!?
忘れた～！」

「...。」

「ンでも外車だぞ〜!
色は真っ赤だぞ〜!」

「...!!!!!!!!!!!!!!」

(一回見たら忘れられないカタチ...。

何処にも走ってない...。

外車...。

真っ赤なスポーツカー...。

もしかしたら...、

ま、まさかあのクルマ...!?

Kitazawa課長が所有しているスポーツカーは...、

まさかあのクルマ...!?)

その時の私は、まるで雷に打たれたの如く衝撃が走ったのでした...。

学院大の求人で、たまたま見つけたアルバイト...。

その会社の上司、Kitazawa課長...。

モンダイ課長とはいえ、何故か憎めない男...。

そのKitazawaさんが、あのクルマの持ち主だとしたら...!?

こうなったら、本人に直接会って事実かどうかを確かめるしか有りません...。

その日の午後8時、夜勤食の時間です...。

休憩室の中では、食事を摂るアルバイト学生達に挟まれて彼は居ました…。

「やっぱり若いオンナの娘は、
肌がピチピチして綺麗なんだよなァ。
オレも若いカノジョと取っ替えてえナ。
ハハハハハ。」

相変わらず馬鹿話をしている彼…。

彼が、食事を終えて煙草を吸うのを見計らって…、

勇気を出して、私は尋ねたのです…。

「あ、あの…、
Kitazawa課長…!
噂を聞いたんですが…、
課長は…、
真っ赤なスポーツカーを持ってるそうですね…!？」

「フ～ッ、パッ。。。 (煙草を吸う音)
アア。
それがどうしたッ。」

「あ、あの…、
そのクルマは…、」

「フ～ッ、パッ。。。」

「そ、そのクルマは…、」

「。。。」

「Kitazawa課長...!

課長は....

真っ赤なスポーツカーを持ってるそうですね...!？」

「フ〜ッ、パッ。。。 (煙草を吸う音)

アア。

それがどうしたッ。」

「そ、そのクルマは....、」

「。。。」

「マーコスですね...!？」

そう問い掛けた瞬間....

Kitazawa課長は、一瞬表情を変えました....。

それは、明らかに驚いた顔でした....。

やがて、私にこう告げたのです....。

「お前。

何で知ってるンダァ。

確かに、マーコスだゾ。」

「...!!!!!!」

課長の言葉を聞いて、私は思わず嬉しさのあまり、飛び上がりそうになりました…。

(課長が…、

Kitazawa課長がマーコスのオーナー…!!!

子供の頃、憧れていた…、

あの謎の赤いスポーツカーの持ち主が…、

この人だったんだ…!!!)

私は、課長の目を見つめたまま、8年前の出来事を思い返しました…。

それは、小学6年生だったある日の午後のこと…。

多賀城市内を自転車でぶらぶらしていると、勇ましいエキゾーストノートがこだまして聞こえてきたのです…。

「ブロロロロロロ……!!!!」

音の主を捜しましたが、そのクルマは車高があまりにも低すぎてよく見えません…。

信号が替わると周囲の車両の間から、真紅のスポーツカーが姿を現しました…。

それが、マーコスとの初めての出会いだったのです…。

マーコス…。

それは、ロングノーズ&ショートデッキのいかにも速そうな流線型で、まさにスポーツカーを絵で描いたようなクルマ…。

マーコスを一目見るなり、私はそのカッコ良さにシビれてしまったのです…。

まさに初恋…。

マーコスのお尻…。

後ろ姿がまたカッコ良く、ボンキュッボンのウルトラマンのお尻の様にセクシーなのです…。

そのお尻に見とれているうちに、クルマはどんどん離れていく…。

私は、無我夢中でペダルを踏み追いかけたのです…。

マーコスとは、その後も度々遭遇したものです…。

学習塾に通う時間になると、背後から勇ましい音が近づいてくるので、必ず気付くのです…。

「ブロロロロロロロ……!!!!」

マーコスは、車高が非常に低くて、這いつくばっている様に見えました…。

正面からは、まるで深海魚が口を開けて襲いかかってくるような、気持ち悪い顔つき…。

マーコスの奇抜さ…。

真横から見ると、コックピットが病的に低くて、運転手はまるでバスタブに浸かっているかの如

く寝そべって、体が地面スレスレに見えました…。

自転車から見下ろすと、余計に低く見えたのです…。

マーコスに憑かれた私…。

私は、このクルマに出会う度に見とれていました…。

いつも後ろ姿を追いかけてペダルを踏んでは、見えなくなるまでいつまでも目で追いました…。

そして、私は心の中で誓ったのです…。

(いつか、いつか…。

大人になったらあの赤いスポーツカーに乗りたい…!!)

マーコス…。

(子供の頃、憧れていたあの謎の赤いスポーツカーの持ち主が、今私の目の前にいる…!!!

課長が、Kitazawa課長がマーコスのオーナー…!!!)

見たい…。

ずっと追いかけていた、あの謎の真っ赤なマーコスを、ぜひ目の前で見てみたいと思いました…

。

「か、課長...!
お願いがあります...!」

「。。。」

「か、課長...!
お願いがあります...!」

「。。。」

「ぼ、僕...、
マーコス見たいんです...!!!
是非、見せてくれませんか...!?
Kitazawa課長、お願いします...!!!」

「フ〜ッ、パッ。。。 (煙草を吸う音)」

気が付くと、私は無我夢中で課長に頼んでいました...

この時の私は、自分でも信じられない位に真剣になって説得していたのです...

それは、どうしてなのか...!?

恐らく、少年の頃に出会った真っ赤なマーコスに憧れながらも、現実には照らし合わせば夢を夢で終わらせなければならないように思い込んでいた8年間で...

今、そのクルマのオーナーを目の前にして、抑えていた気持ちが一気に弾け飛んだからでしょう...

物心ついた頃からクルマが好きだった私...

小学校時代は、将来はスーパーカーに乗りたいとか、レーサーになりたいと夢見ていました...

しかし、熱中していたスーパーカーが現実的ではないことに気付いたのです…。

雑誌には時々、スーパーカーの所有者のプロフィールが載りますが、そこには誰一人としてサラリーマンはいないのです…。

スーパーカーに乗れるのは、会社の経営者や、医者などの高額所得者ばかり…。

そもそも外車すら滅多に目にしない東北地方、ましてやスーパーカーなど夢のまた夢…。

大人になったらスーパーカーに乗る、その願望は現実の前にもろくも崩れ去っていったのです…。

小6の時に会って以来、真っ赤なマーコスも目撃する度に親近感が沸きましたが、現実の厳しさを知るにつけ、やはり私には遠い存在でしかなかったのです…。

その後、親友タツヤ君との悲しい別れがありました…。

高校受験を前にして、私はそれまで大事にしてきたものを全て処分しました…。

スーパーカーの雑誌、本、スーパーカーショーで撮った写真、プラモデル、ラジコン、ミニカー、サーキットの狼…。

親友タツヤ君との思い出と一緒に、クルマのグッズを捨てたのです…。

つまり、子供の頃に描いた将来の夢も捨てていたのです…。

大人になることは夢をあきらめること、どこかで聞いたセリフです…。

確かにそうかも知れません…。

年齢と共に世の中の現実打ちのめされて、人々はいつの間にか少年の頃の夢を忘れてしまうのでしょうか…。

たった一つ…。

クルマ関連で、唯一捨てないで保存していたものがあります…。

それは、日本メールオーダー社刊「モーターカー」誌の、P1261～P1280のページです…。

ここに、マーコスの記事が載っていたからです…。

ちなみに、当時マーコスはクルマ雑誌に採り上げられる事が無く、資料は皆無でした…。

唯一の手掛かりが、この冊子だったのです…。

「モーターカー」誌は、小学5～6年の頃に毎月一冊ずつ購入してはファイルに綴じてました…。

この雑誌は、毎回過去現在の世界のクルマが詳しく掲載され、私にとってはクルマ博士みたいな本でした…。

ほとんど捨てたのに、追いかけていたあのマーコスのページだけは大切にしておいたのです…。

この冊子を眺めては、私は心の中で誓ったのです…。

(いつか、いつか…。

大人になったらあの真っ赤なマーコスに乗りたい…!!)

マーコス…。

(子供の頃、憧れていたあの真っ赤なマーコスの持ち主が、今私の目の前にいる…!!!
課長が、Kitazawa課長がマーコスのオーナー…!!!)

見たい…。

ずっと追いかけていた、あの謎の真っ赤なマーコスを、ぜひ目の前で見てみたいと強く思ったのです…。

「Kitazawa課長、お願いします…!」

「。。。」

「僕、小6の時から課長の真っ赤なマーコスを…、
ずーっと憧れて見ていたんです…!!!
何度も何度も、自転車で追いかけて…、
いつもカッコ良いなーって、シビレてたんです…!!!
どうしても、真っ赤なマーコスをまた見てみたいんです…!!!
一度で良いから、見せてくれませんか…!?
課長、お願いします…!!!」

「。。。 (笑)」

この私の言葉に、何とKitazawa課長は笑顔になりました…。

間もなく、私にこう告げたのです…。

「お前。

そんなに前から、俺のマーコスのこと見ていたのかァ。
なァ、マーコスカッコイイだろゥ。」

「ええ、マーコスは...、
ぼ、僕にとってマーコスは...、
フェラーリよりもポルシェよりもカッコ良いし...、
大好きです...!!!」

「そうかァ、そんなにお前、俺のマーコスのこと好きだったのかァ。
分かった、マーコス乗って来てやるからナ。」

「ほ、ホントですか...!?!?!?」

その課長の言葉を聞いて、私は嬉しくて心臓が胸から飛び出しそうな気持ちになりました...

しかし...

「ンーン。
2、3日待ってろ。
お袋の家に置きっぱなしで、暫く動かしてないからナ。」
エンジン掛かるかなァ。」

「そうなんですか...。」

数日後、私の願いは叶いました...

真っ赤なマーコスとの再会の日がやって来たのです...

「お、親父...。
カメラ貸して欲しいんだけど...。」

「何を撮るんだ、Miyabiー？」

「う、うん...。
ちょっと...。」

「ー？」

たった1台の赤いスポーツカーとの出会いが...

私の人生を変えたと言ったら、笑われるかも知れません...

しかし、これは紛れもない事実なのです...

昭和59年、大学2年の冬...

アルバイト先の、(有)M製作所の事です...

ガチャリッ！
(バイト先のタイムカードを押す音)

「こんにちは、今日も宜しくお願いします...。」

(キョロキョロ！
課長のクルマ、停まってないなあ...。)

小学6年の時に出会った、謎の真っ赤なスポーツカー...

それは、イギリスの『マーコス1600GT』...!!!

マーコスは私にとって、初恋のクルマ...!!!

遭遇して以来、憧れていたものの遠い存在でした...

そして、ずっと私の心の奥に閉まっていました...

翌日…。

ガチャリッ！

(バイト先タイムカードを押す音)

「こんにちは、今日も宜しくお願いします…。」

(キョロキョロ！

今日も課長、マーコスに乗って来ないなあ…。)

当時、マーコスは国内に4台しかない非常に希少なクルマ…!!!

そのうちの1台、赤いマーコスを所有していたのがKitazawa課長だったので…!!!

何と、8年振りに初恋のクルマに再会する瞬間が近づいてきたのです…!!!

翌々日…。

ガチャリッ！

(バイト先タイムカードを押す音)

「こんにちは、今日も宜しくお願いします…。」

(キョロキョロ！

Kitazawa課長、僕にマーコス見せてくれる約束を忘れちゃったのかなあ…。)

いつも通りに作業を始めようと、準備をしていると…、

ブォン!!!!

ブロブロブロブロロロロ〜ッ!!!!

(来たッ…!!!

Kitazawa課長が、マーコスが来たッ…!!!!)

腹に響くその勇ましいエキゾーストがこだまするのが聞こえると、私は思わず小躍りしそうになりました…。

そしてカメラ片手に、急いで屋外に飛び出したのです…。

ブロボロボロボロボロボ～!!!!

その、真っ赤なスリークラインが突き刺さるように目に飛び込んで来た瞬間...

私は、思わず息を飲みました...

マーコス...!!!

真っ赤な『マーコス1600GT』が、今僕の目の前にある...!!!

少年の頃、追いかけていた謎のスポーツカーをついに捕らえた...!!!

ブロボロボロボロボロボ～!!!!

マーコス...

それは、呆れるほど背が低く...

膝下ぐらいの高さに、ベッタリ這いつくばって居座って...

まるで奇っ怪な爬虫類のようにヌメヌメして、しかもギョロリとこっちを睨んでいます...

とにかく異彩を放ったクルマです...

私は気が変になりそうな位に、ひたすら興奮したまま...

時間が停まったかの様に、いつまでもその姿を凝視していました...

カチャッ!

Kitazawa課長が、その狭いコックピットから降りてきました...

「オツカレ。
なァ、マーコスカッコイイだろウ。」

「は、はい...!!!」

「アー痛てェ。
コイツ運転すると腰痛くなるんだゾ。」

「そうなんですか...。」

よく見ると、8年振りに初めて直に見るマーコスは、かなり痛んでいました…。

ライトカバーは失われ、真っ赤な塗装はあちこちがボロボロに剥がれ落ちています…。

それでも、私は十分満足でした…。

マーコスに見とれているうちに、辺りが薄暗くなってきたので慌てて写真を撮りました…。

8年振り、初恋のクルマの再会はこうして終わりました…。

たった1日だけでしたが、私にとっては幸せな時間でした…。

この後…、

Kitazawa課長は、重大なことを打ち明けたのです…。





「Miyabi、俺のマーコスの座席をよく見てみる。
なァ、凄く低いだろゥ。」

「は、はい...!!!」

「コイツ運転する時はだなァ。
ワザと深く体を沈めて乗ると、カッコイイんだゾ。」

「は、はい...!!!」

「それからナ。
トラックの後ろに、ピッタリくっついて走ってヨ。
突然パッと出てきて追い抜くと、車高が低いから運ちゃんビククリするんだゾ。」

「は、はい...!!!」

マーコス...!!!

憧れの真っ赤なマーコスを目の前にして、夢心地の私に...

Kitazawa課長の、リップサービスは続きました....。

オーナーならではの興味深い話を聞かされ、私は益々マーコスが気に入ってしまったのです....。

マーコス...!!!

小6以来、ずっと後姿を追いかけていたマーコスを捕まえた...!!!

日本に4台しかないマーコス...!!!

こんな貴重なクルマを、こうして生で見られるなんて...!!!

嬉しい...!!!

ところが....。

「実はなァ、俺のマーコスもう直ぐ廃車にするんだ。」

「え、え...!?!?!?」

それは、思いもよらない衝撃的な一言でした....。

この、目の前の真っ赤なマーコスが...

もう直ぐ廃車...!?!?!?

思わず私は我が耳を疑いました...

Kitazawa課長の釈明は続きます...

「車検が切れるんだァ、11年目だから車検が1年毎だしナ。
部品も無いし、カネ掛かるから仕方ないんだ。」

「そ、そうなんですか...。」

そして更に...

「そうだ、お前。
俺のマーコス買わねェかァ。
Miyabiだったら、200万円でいいぞォ」

「え、え...!?!?!?」

それは、またもや衝撃的な一言でした...

Kitazawa課長の真っ赤なマーコスが200万円...

真っ赤なマーコスが200万円...

マーコスが200万円...

200万円...

...

次の晩のことです...

「お、親父、カメラありがとう...。
それと、ちょっとお願いがあるんだけど...。」

「どうしたMiyabi、
何の話だー？」

「う、うん...。
いや、そのつまり...。
この写真を見てよ...。
実はこの赤いスポーツカー、Kitazawa課長のなんだけどさあ...、
小6の時から憧れていたクルマだったんだ...!
マーコスっていうんだよ...!
日本に4台だけの希少車さ...!
それを、200万円で譲ってくれるって言うんだけどさ...?
親父、お願い...!
バイトして少しづつ返すからさ...、
マーコスを買ってくれないかな...!
出世払ってことで...、」

「お前は何を考えているんだー!
冗談も、ほどほどにしなさいー。」

「やっぱり...。
駄目かなあ...。」

「学生の分際で、そんなクルマをー?
お前の学費に、どれだけ注ぎ込んでいると思ってるんだー!
父さん母さん2人で働いて、大変なんだぞー。」

「...。」

「それからMiyabi、まだあんな男に関わっていたのかー?
父さん言った筈だぞー!
Kitazawaには、もう接触するのを止めなさいー。
そしてそんな男のいるようなバイトは、さっさと止めなさいー。」

「...。」

「それからMiyabi、おばあちゃんに聞いたぞー。
日中は、アーチェリーとバイトばかりしてるらしいなー?
お前、ちゃんと大学に行ってるのかー?
講義に出てるのかー?
落第したらどうするんだー？」

「...。」

こうして....

憧れていた真っ赤なマーコスの再会という、夢のようなひと時は儚い僅かの時間で終わりました....

数枚の写真に納めた真っ赤なマーコス....

チラリと覗く度に、あの日の興奮した時のことが蘇ります....

しかし、所詮は憧憬、やっぱり夢物語なのです....

そして....

私が撮った、真っ赤なマーコスの写真は....

マーコスの資料、「モーターカー」誌の冊子と共に....

机の奥へと追いやられました....





「Miyabi、Miyaちゃんヤ〜!
そろそろ起きたら、どうだい〜?」

「ファーあああ...。
まだ眠いよ...。」

「Miyaちゃんヤ〜!
もう、11時だヨ〜!
大学は何時に行くのオ〜?
いい加減起きないと、ご飯片付けるヨ〜!」

「ファーあああ...。
おバアちゃん、分かったよ...、
今、起きるよ...。」

「ンじゃ、温めとくヨ〜!」

「うっ、さ、寒ッ...。
あ〜あ、何だか行きたくないなあ...。
講義もバイトも休んじゃおうかなあ...。」

「お代わりはア〜?」

「要らない...。
ムシャムシャムシャ...。
今日は出掛けないからね...。」

「どうしたの、Miyaちゃん～？
元気なことオ～！
タベ、何かあったのかイ～？」

「う、うん...。」

何かとお節介を焼きたがる、僕のおバァちゃん...。

共稼ぎの両親に代わり、我が家の家事の一切を任されていましたが...

私ら孫を、愛情たっぷりに可愛いがり...

且つ、生まれた時から我が子の如く厳しくしつけてくれました...。

「Miyabi、Miyaちゃんヤ～！
バァちゃんの肩揉んでちょうだい～！」

「いいよ...。
クイツ、クイツ、クイツ、クイツ、クイツ！」

「ああ～、気持ち良いねエ～！」

「トンッ、トンッ、トンッ、トンッ、トンッ！」

小学生の頃から、私はおバァちゃん専属の肩揉み係りでした...。

大好きな、おバァちゃん...。

物心ついたとき、いつもおバァちゃんがついている安心感...。

特に、悩みや相談事等何にでも応えてくれて...、

私にとって祖母は、父母より大きな存在でした...。

「200万円のスポーツカー～？
Miyaちゃん、ソレそんなに気に入ったのかイ～？」

「う、うん...。
クイツ、クイツ、クイツ、クイツ、クイツ！
おバァちゃんには買えるの...？」

「馬鹿タレ～！
おジィちゃん生きてた頃だって、恩給そんなに貰えないヨ～！」

「...。
トンッ、トンッ、トンッ、トンッ、トンッ！」

「ンだけど、Miyabi～！
社会人になって稼ぐようになれば、好きなクルマ買えるンだヨ～！
焦なくなつて、スポーツカーにそのうち乗れッから、きっとオ～！
諦めッ事ないヨ～！」

「そ、そうだよね、おバァちゃん...！
クイツ、クイツ、クイツ、クイツ、クイツ！」

諦めなければ、いつかマーコスに乗れるよね...!」

物静かで内気な私...

そんな私は、幼い頃から常々祖母に励まされて生きてきました...

そして、男とはこうあるべきだという指針を...

おバァちゃんに刷り込まれたのです...

「Miyaちゃんヤ〜!

大学あわないんなら、男らしくさっさと辞めてエ〜!

就職したっていいんだヨ〜?」

「えッ...!?

トンッ、トンッ、トンッ、トンッ、トンッ!」

「ンだけどオ、本当は〜、

学生の今しか出来ないことオ、一所懸命やるのも男なんだヨ〜!」

「う、うん...!?

クイツ、クイツ、クイツ、クイツ、クイツ!

学生の今しか出来ないこと...?」

「ンだ、スポーツカーよりも今一番大事なのはア〜?

Miyaちゃん、何ヤ〜?」

「えッ...!?

そうか...!

そ、そうだよね、おバアちゃん...!

トンッ、トンッ、トンッ、トンッ、トンッ!」

こうして私は、おバアちゃんのをかりて迷いを払うことか出来たのです...

「Miyabi、Miyaちゃんヤ～!
バアちゃんの肩叩きしてちょうだい～!」

「はい...。
トンッ、トンッ、トンッ、トンッ、トンッ!」

「ああ～、気持ち良いねエ～!」

物心ついたとき、いつも傍にいて面倒をみてくれた、おバアちゃん...。

祖母の優しい顔と、キリリとした眉毛と、これまたキリリとした瞳...。

常に大きな声でハキハキしっかりとした、祖母の言葉使いが思い起こされます...。

そして、薄れ掛けたおぼろげな記憶を辿ると....、

昔幼かった頃の、様々な思い出が蘇ってきました....。

例えば、学校から帰ってくると....、

「Miyaちゃんヤ～!
今日は小学校どうだったのォ～?」

「う、うーん...。」

「Miyaちゃんヤ～!
給食、残さないでちゃんと食べたのオ～?」

「は、はい...。」

「Miyaちゃんヤ～!
宿題やったのオ～?」

「ま、まーだ...。」

「Miyaちゃんヤ～!
時間割見て、早めに明日の用意しなさいヨ～!」

「う、うーん...。」

「Miyaちゃんヤ～!
忘れ物ないか、もう1回ランドセル見てみなさいヨ～!」

「う、うーん...。」

何かとお節介を焼きたがる、僕のおバアちゃん...。

姉・妹に挟まれた私は、3人きょうだいの真ん中で....、

何かにつけ、男なんだから...と、祖母は私には特に愛情を注いでくれました...。

「Miyaちゃんヤ～!

ご飯は～、一粒残さず全部食べなさいヨ～!」

「えっ ーッ...!
ムシャムシャムシャ...。」

昔はどこの家でもそうだったように、我が家も田んぼ・畑があって自給自足に近い生活でした...

。

そして毎日の様におバアちゃんが畑に出ては、野菜や果物を育てていました...。

キャベツ・白菜・大根・じゃがいも・さつまいも・とうもろこし・人参・玉ねぎ・長ねぎ・大豆
・ごぼう・トマトetc...。

畑から採ったばかりの自家製の野菜が食卓に上り、朝からこんなに食べなきゃいけないの?という食事内容でした...。

「おかずも味噌汁も～、全部食べないと大きく成らないんだヨ～!
勿体無いから～、残さず全部食べなさいヨ～!」

「えっ ーッ...!
ムシャムシャムシャ...。
ごちそうさまでした...!」

降り返ってみれば、成長期に毎日新鮮な栄養を摂取出来たのですから、健康的である意味実に贅沢な幼少時代の食生活だった訳です...。

私が今こうして健康で丈夫なのは、祖母が苦勞して野菜を作って食べさせてくれたお陰だと思
います…。

「Miyabi、Miyaちゃんヤ～!

おジィちゃんに～、お風呂そろそろ沸くよって、教えてちょうだい～!」

「はい…。」

「Miyaちゃんヤ～!

おジィちゃんの部屋に行って～、お膳を下げてきてちょうだい～!」

「はい…。」

「Miyaちゃんヤ～!

おジィちゃんのベッドの、ヘルストロンのスイッチ消してきてちょうだい～!」

「はい…。」

一方、祖父は戦争から帰って間もなく脳溢血で倒れた、左半身麻痺の障害者でした…。

ロレツが回らないので言葉数は少なく、物静かなおジィちゃん…。

不自由ながらも、杖をつけばゆっくり歩くことが出来ました…。

そんな祖父をもって、おバァちゃんは何かと苦勞していたのです…。

「フンガー—!!! フンガー—!!!」

「何ヨ～!!! バカタレ～ッ!!!」

「フンガー—!!! フンガー—!!!」

「早くクタバレッ～!!! ジジィ～ッ!!!」

「あッ、また...!?

おジィちゃんとおバァちゃんの喧嘩が始まった—...!

それ逃げろッ—...!」

ギ〜コ!ギ〜コ!ギ〜コ!ギ〜コ!ギ〜コ!ギ〜コ!ギ〜!

「おジィちゃん、木を切って何作ってるの...?」

「フンガー(笑)。」

「...?」

ギ〜コ!ギ〜コ!ギ〜コ!ギ〜コ!ギ〜コ!ギ〜コ!ギ〜!

「何だろ...!?

あッ!? 船だね...!？」

「フンガー(笑)。」

ある日....

祖父は、木工細工の「船」を私に作ってくれたことがありました....。

それは構造は粗末で、しかも荒削りな仕上げの「船」でした....。

しかし、左側が不自由な身体で精魂込めて、こしらえてくれたのです....。

彼は、私ら孫を大変可愛がってくれました....。

私も、おジィちゃんが大好きでした....。

ロレツが回らないので言葉数は少なく、オットリとして物静かなおジィちゃん…。

不自由ながらも、杖をつけばゆっくり歩くことが出来ました…。

一方…、

口八丁手八丁、頭が切れて男勝りの、勝気なおバァちゃん…。

この対照的な2人ですから、ウマが合わなかったのでしょうか…？

「フンガー—!!! フンガー—!!!」

「何回言ったらわかるの～!!! ジシィ～ッ!!!」

「フンガー—!!! フンガー—!!!」

「何ヨ～!!! バカタレ～ッ!!!」

「また、今日も…!?

おジィちゃんとおバァちゃんの喧嘩が始まった—…!

それ逃げろッ—…!」

祖父母の夫婦喧嘩は、ほぼ毎日の様に起きるので、嫌でも慣らされたものです…。

おジィちゃんのベッドには、『ヘルストロン』が据え付けられていました…。

私は、このおジィちゃんのベッドに寝転ぶのが好きでした…。

スイッチを入れて、ベッドから手を伸ばすとブルブル振動が伝わってきます…。

「ねー、おバァちゃん…？」

どうしておジィちゃんは『ヘルストロン』掛けてるの…!？」

「そりゃ〜、ジィちゃんはタカッタからだヨ〜!」

「ふーん…。」

『ヘルストロン』というのは、交流高圧電界を発生する電気治療器で…、

昭和30年代当時、国が初めて認可した電気治療器なのです…。

この『ヘルストロン』は、主に祖父の様な肢体麻痺や、リウマチなどの医者に見放された様な難病患者に使用されていたようです…。

「ジィちゃん倒れてから、タカッタのに効くからって教えられてエ〜、求めたンだっチャ〜!」

「そうだったんだ…。」

残念ながら、電気を掛けて麻痺が完治する訳ではありませんが…、

『ヘルストロン』のベッドに寝ていた祖父は、食事も風呂も自分で何とかなる位は出来ていたのです…。

亡くなる直前近くまで、おジィちゃんが元気だったのは…、

ひょっとすると、この『ヘルストロン』のお陰だったのではないか…？

…と、私は思っています…。

「空襲警報のサイレンが、ウ~~~~!!
と鳴ったらァ、そのまんま兎に角逃げんのさァ~!」

「フンガー。(うなずく)」

「え` ...!？」

「雲の上から、B29が何機も降りてきてェ~、
モタモタしてると、アタマの上から爆弾落とされんのさァ~!」

「フンガー。(うなずく)」

「え` ...!？」

「防空壕に隠れて息殺してェ~、
外が静かになるまで待つてんのさァ~!」

「フンガー。(うなずく)」

「え` ...!？」

時折....

祖母と祖父は、戦時中の苦労話を…、

何度も何度も、繰り返し…、

小学生の私に話して聞かせてくれました…。

「敗戦後、焼け野原で何にも無くなったんだヨ～!
兎に角、何にも無いんだからア～!
それから、生きていくのみんな大変だったんだヨ～!」

「フンガー。(うなずく)」

「…。。。。。(うなずく)」

「ンでも、何とかしてエ生きなきゃなんないからア～、
負けてらんないって気合入れてエ～、
仕事して、田んぼや畑を耕して、働いて働いて働いたツチャア～!」

「フンガー。(うなずく)」

「…。。。。。(うなずく)」

「食べるだけでも精一杯でエ～、
贅沢なんて何にも出来なかったんだヨ～!」

「フンガー。(うなずく)」

「...。。。。(うなずく)」

「だから、私ら大正生まれはア～、
あの頃の苦勞を思ったらア～、
負けてらんないって、大抵のことは我慢できるンだヨ～！」

「フンガー。(うなずく)」

「...。。。。(うなずく)」

「Miyaちゃんヤ～!
今の若いヒトはホントに幸せなんだヨ～!
私らの若い頃は、戦争で何にも楽しむこと出来なかったンだヨ～！」

「フンガー。(うなずく)」

「...。。。。(うなずく)」

「Miyaちゃんヤ～!
Miyabiは男の子なんだから、強くなんなくちゃ駄目なんだヨ～!
そして、私らが例えば死んだ後も～、
長男として、この家を守っていくンだヨ～！」

「フンガー。(うなずく)」

「ふんが...。。。。(うなずく)」

あれは、小学3年の時だったでしょうか...

ある日の下校時間のことです...

私は同じクラスのヤンチャな男の子に、ちょっとしたイジメを受けたことがありました...

「オイッ、Miyabiーッ!!

オマエ、いつも同じジャイアンツの帽子被ってやがるンだなァーッ!!」

彼はからかいながら、私の頭から野球帽を取上げました...

「あっ...!？」

「ヤーイヤーイ、Miyabiーッ!!

悔しかったら捕まえてみろーッ!!」

「ま、待ってよ...!!」

いくら追いかけても、すばしっこい彼には追いつきません...

いい位もて遊ばれた拳句、私の帽子を道路に投げ捨て...

彼は逃げて行きました...

「え～ン...(涙)。。。。。
え～ン...(涙)。。。。。」

「Miyaちゃんや、どうしたのオ～!?
何があったのオ～!？」

「え～ン...(涙)。。。。。
え～ン...(涙)。。。。。」

「Miyaちゃんや、どうしたのオ～!?
学校で何かあったのかイ～!?
おバァちゃんに何があったのか話してごらん～!？」

「え～ン...(涙)。。。。。
実は...(涙)。。。。。」

事件の顛末を打ち明けた私ですが…。

それを聞いた祖母は、間もなく意外な反応を示しました…。

「何だってエ〜!?

Miyaちゃん、その男の子にイジメられたのかい〜!？」

「え〜ン...(涙)。。。。。

え〜ン...(涙)。。。。。」

「野球帽を、そいつに捕られたンだってエ〜!?

道路に投げ捨てられたってエ〜!？」

「え〜ン...(涙)。。。。。

え〜ン...(涙)。。。。。」

帰宅した私は、おバァちゃんに事の経緯を涙ながらに訴えました…。

すると…!?

彼女のキリリとした瞳が一段と険しくなって…、

しっかりとした大きな声で、私にこう告げました…。

「Miyabi〜!!

お前は何でヤラレっぱなしで、メソメソ逃げ帰って来たンだい〜!!

ツたく情けないねエ〜!!

「え〜ン...(涙)。。。。。
え` ...!？」

「ッたく腰抜けだねエ〜!!
どうして、その場でそいつにバチンと食らわせなかったンだい〜!!
Miyabi〜!!」

「え〜ン...(涙)。。。。。
え` ...!？」

「男の子なんだから、強くなくちゃ駄目なんだヨ〜!!
Miyabi〜!!
イジメられてお前、口惜しくないのかいッ〜!!」

「え` ...!？」

「口惜しいの、口惜しくないの、どっちなのッ〜!？」

「え` ...!?
く、くやしい...。」

優しく慰めてもらおうと甘えてすがったのに....、

祖母は慰めるどころか、私に喧嘩を奨励したのでした....。

しかも...!？」

「Miyabi〜!!

本当に口惜しいンなら、あした学校に行ったら～、
その男の子に仕返ししなさいッ～!!」

「え` え` ッ...!？」

「おバァちゃんが仕返しの作戦、教えてやるからッ～!!
まず明日朝、誰よりも早く教室に入ってエ～、
掃除用具入れからホウキを持ち出してエ～、
それから……………」

「…。。。。(うなずく)」

「Miyabi～!!

お前は男の子なんだから、強くなくちゃ駄目なんだヨ～!!
やれば出来るンだからッ～、
明日、そいつをトッチメておやりよッ…!!
頑張って仕返ししておいでッ…!!」

「うん…!!!!!(うなずく)」

こうして私は、励まされ勇気付けられた上で…、

おバァちゃんにレクチャーを受けた通り…、

仕返し作戦を遂行したのです…!!!!!!

翌朝....

一番に登校した私は、クラスの誰も来ないうちに教室に潜み....

柄の長いホウキを片手に、男の子を待ち伏せしました....。

ドキ・ドキ・ドキ・ドキ・ドキ...!!!!

やがて、彼が現れました...!!!!

「ウワァァァァァァ!!!!」

「Miyabiー!？」

「ウワァァァァァァ!!!!

この野郎ッ...!!!!

パシンッ!!! パシン!!! パシンッ!!! パシン!!! パシン!!!」

「いッ痛てーッ、痛ててーッ!!」

私は無我夢中で、イジメっ子のお尻をホウキで何度も何度も叩きのめしました...!!!!

さらに、彼の被っていた帽子を捕って床に投げつけてやったのです...!!!!

「キャーッ!!」

「キャーッ!!」

「この野郎ッ...!!!!
パシンッ!!! パシン!!! パシンッ!!! パシン!!! パシン!!!」

「いッ痛てーッ、痛ててーッ!!
参ったッ、参ったッ、勘弁してよーッ!!」

「先生ーッ!! 先生ーッ!! 止めて下さいーッ!!
Miyabiくんがーッ!!」

「キャーッ!!」

「キャーッ!!」

「Miyabi君ッ!? 一体どうしたのッ!?
止めなさいッ!! 止めなさいッ!!」

普段は物静かでおとなしい私の暴発で、教室は大騒ぎになりました…。

こうして、小3のある日…、

おバァちゃんの仕返し作戦は、大成功に終わりました…。

「イタッ、アイタタッ〜!」

「おバアちゃん、大丈夫...!?
痛むの...!?!」

「アア〜、痛いねエ〜!
立ち上がる時、両ひざが〜、
針でも刺すように痛いんだヨ〜!」

「...。」

喧嘩の仕方をレクチャーするほど男勝りで勝気の、何かと頼りになるおバアちゃん...

小学校6年間の授業参観には、毎回の様に祖母が見に来てくれました...

どこの家庭でも、学校の行事に母親が参加するのに...

どうして、ウチはおバアちゃんなんだろう...?

...とったりもしましたが。

でも、私はやっぱり祖母が大好きでした...

「Miyabi、Miyaちゃんヤ〜!
バアちゃんの肩揉んでちょうだい〜!」

「いいよ...。」

クイツ、クイツ、クイツ、クイツ、クイツ!」

「ああ～、気持ち良いねエ～!」

「トンツ、トンツ、トンツ、トンツ、トンツ!」

ストーリーは、再び大学2年の冬に戻ります…。

祖父が他界した頃、私達孫はもう手が掛からない年齢になっていました…。

それでも、おバァちゃんは何かとお節介を焼いてくれたのです…。

そして…、

大学をサボってばかりの私に、退学を勧めたのは祖母でした…。

「Miyaちゃんヤ～!

何で大学なんか入ったのォ～?

一体、これからどうするつもりなんだい～?」

「えッ…!?

クイツ、クイツ、クイツ、クイツ、クイツ!」

「Miyaちゃんヤ～!

Miyabiは将来どうなりたいのォ～?

一体、どんな仕事したいんだい〜?」

「う、うん...。

トンツ、トンツ、トンツ、トンツ、トンツ!

時々考えているけど...、

何がしたいのか、自分にも判らないんだ...。」

「私らの年代は、小学校しか出てない人が多いんだヨ〜!

ンだけっと、おバァちゃんと同級生には偉くなった人もいるんだヨ〜!」

「えッ...!?

クイツ、クイツ、クイツ、クイツ、クイツ!」

「Miyaちゃんヤ〜!

小学校しか出てなくたって、社長になった同級生だっているんだヨ〜!

もし、大学辞めて働きたいのなら〜、

おバァちゃんと同級生に、就職を世話してもらっても良いんだヨ〜?」

「...!?!?!?

トンツ、トンツ、トンツ、トンツ、トンツ!」

しかし結局...、

優柔不断な私の、決断力の無さと...、

両親の反対により、大学は続ける方向となったのです...。

懐かしいおバァちゃんの思い出...。

某日....

心に突き刺さった、祖母の発したある一言が耳から離れません....。

それは....

「イタッ、アイタタッ〜!
アア〜、ひざ痛いねエ〜!」

「おバアちゃん、歩けるの...!?
大丈夫...!？」

「アア〜、ひざ痛いねエ〜!
とくに立ち上がる時、痛いんだヨ〜!
この辺りが、針でも刺すように痛いんだヨ〜!」

「...。」

「ひざ、どうなってるのかしら〜、
ここから切って、中を見てみたいヨ〜!
あんまり痛いもんだからサ〜、
包丁で、足を切ってモイデしまおうかしらネ〜!」

「...(滝汗)。」

この心に突き刺さった、おバアちゃんの残酷なセリフは....、

どんな言葉よりも、ショックでした....。

いつか....

いつか、祖母のひざを何とかしてあげたい....。

と、私は心からそう思いました....。

「ハーツ、ハーツ...。」

「バシュッ!」「ボンッ!」

ここは、『東北工業大学』のアーチェリー場です...。

「ハーツ、ハーツ...。」

「バシュッ!」「ボンッ!」「ガシャッ!!」(的に刺さっている矢に、射った矢がぶつかる音)

「よしッ...!」

見渡す限り、練習場は辺り一面どこもかしこも真っ白な雪が積もっています...。

唯一、雪を掃ったシューティングラインに立つのは私1人...。

「ハーツ、ハーツ...。」

ううッ...、さ、寒ッ...。」

「バシュッ!」「ボンッ!」

引き手の指先に息を吹きかけるものの、直ぐに冷えてかじかみます...。

「ハーツ、ハーツ...。」

ぶるぶるぶるぶる...。

しかし、寒みいーなあ...。」

「バシュッ!」「ボンッ!」「ガシャッ!!」(的に刺さっている矢に、射った矢がぶつかる音)

「よっしゃ...!」

寒い季節になると、アーチェリーの練習をする者は極端に減ります…。

じっと立ったままで行う競技ですから、寒い日に射つのはツライからなのです…。

そして東北地方であることを、嫌でも思い知らされるのです…。

冬季に学生主催のインドア競技が、唯一1試合あるのですが…、

それが終わると翌年の4月まで、ほぼシーズンオフ状態なのです…。

しかし…、

昭和59年の私は、寒さを蹴飛ばすかのように燃えていました…。

「ハーツ、ハーツ…。」

「バシュッ!」「ボンッ!」「ガシャッ!!」(的に刺さっている矢に、射った矢がぶつかる音)

「やったッ…!」

インカレ出場以来、とくに短距離の種目に自信がついた私…。

この好調のまま、来年の春の公式試合に臨みたいと目論んでいました…。

みんながシーズンオフしている間にも…、

毎日、アーチェリーの練習を続け…、

みんなが遊んでいる間にも…、

毎日、まとまった本数を打ち込んでおけば…!?

きっと勝てるのではないか…!?

そう睨んだのです…。

冬は最大のチャンスなのです…!!

「親父、クルマ借りるからね…。」

「ああー。」

ブルルルルルルル～!!

カリカリカリカリカリ～!!

毎週土曜の夜、父親のこげ茶色のカローラを駆って…、

スパイクタイヤを掻き鳴らしながら、向かった先は…、

「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」

「こんばんは…!

お邪魔しまーす…!」

「ヤア!

おニイちゃん、来たのか!」

「また練習させて下さい...!」

顔を出したのは、M社長に紹介された『身体障害者センター』の体育館です...。

週に一度ですが....、

私は十数人の障害者アーチャー達に交じって、ここで練習したのです...。

暖房完備だから冬でも快適で、とても良い練習になりました...。

「バシュッ!」 「ボンッ!」 「ガシャッ!!」 (的に刺さっている矢に、射った矢がぶつかる音)

「バシュッ!」 「ボンッ!」 「ガシャッ!!」

「バシュッ!」 「ボンッ!」 「ガシャッ!!」

「おニイちゃん、凄いなア!

大したモンだなア!」

「い、いや、それほどでも...。」

こうして寒さの厳しい季節も、充実した練習で乗り切ったのです...。

当面の目標は....、

春の、東北王座戦(リーグ戦)の個人優勝...!

「親父、今日もクルマ貸してね...。」

「ああ、気を付けて行けよー。」

ブルルルルルルル〜!!

カリカリカリカリカリ〜!!

厳寒の今夜もまた、父親のカローラに乗って....、

アーチェリーの練習に向かった私....。

「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」

ここは、M社長に紹介された『身体障害者センター』の体育館です....。

屋内に入ると早速、足の底から暖房の温かさが伝わってきました....。

「こんばんは...!

お邪魔しまーす...!」

「ヤア!

上手なおニイちゃん、また来たのか!」

「また一緒に練習させて下さい...!

この中は、いつも暖かいですね...!」

「アア!

ここは年中プールだって入れるし、快適だゾ!」

私は、冬でも室内練習可能なこの『身体障害者センター』が気に入っていました…。

来春の王座戦に勝つ為には、冬の期間も充実した練習を続けたい…。

なるべく射つ本数を減らさないで、シーズンオフを乗り切りたい…。

その希望を叶えてくれたのが、ここの体育館だったので…。

「バシュッ!」「ボンッ!」「ガシャッ!!」(的に刺さっている矢に、射った矢がぶつかる音)

「バシュッ!」「ボンッ!」「ガシャッ!!」

「バシュッ!」「ボンッ!」「ガシャッ!!」

「うーん、、、君上手だね、、、
悪いんだけどさ、、、
ちょっと僕の射型を見てくれないかな、、、」

「は、はい…。
いいですよ…。」

T氏との出会いは、こんなやり取りからでした…。

『身体障害者センター』では、常に十数人の障害者アーチャー達が洋弓を楽しんでいました…。

彼もその1人です…。

「ええと…。

押し手の肩がこの位置なら、ひじは無理に返さない方が…。
それからですね…。」

「こーかい、、、うーん、、、
あ、、、こうかな、、、」

「あ、そうですね…。
ええ、そうですそうです…。」

「バシュッ!」「ボンッ!」

アーチェリーの素晴らしいところは、上半身が使えれば足腰が不自由な方でも競技出来ること
です…。

そして、健常者と同一のルールの競技、全くの同じ試合にエントリー出来て…、

健常者と障害者が、お互いに競い合えるのです…。

1984年開催の『ロサンゼルスオリンピック』では、オーストラリアの「ネロリ・フェアホール」
という女性選手が、オリンピック至上初めて車椅子で出場しました…。

彼女は、下半身麻痺というハンデを持ちながら国内予選を勝ち抜き、見事同国の代表に選ばれ…
、

ロス五輪の開会式では、国旗を持ってオーストラリア選手団の先頭で入場したことで有名です…
。

「バシュッ!」「ボンッ!」「ガシャッ!!」(的に刺さっている矢に、射った矢がぶつかる音)

「バシュッ!」「ボンッ!」「ガシャッ!!」

「バシュッ!」「ボンッ!」「ガシャッ!!」

『身体障害者センター』の障害者アーチャー達は、全員が男性…。

車椅子の方が半数、残りは義足を着けている方々…。

私が仲良しになったT氏は、切断した足に義足を着けていました…。

「バシュッ!」「ボンッ!」

「Miyabi君、また指導してくれないかな、、、
僕、、、もっと当たる様になりたいんだよ、、、」

「わかりました…。
また、来週も来ますから…。」

不自由な身体で、精一杯取り組んでいる彼ら…。

彼らが熱心にスポーツに打ち込んでいる姿を見ていると、何故か励まされます…。

身体が五体満足なだけで、本当は凄く幸せなことなのです…。

世の中、不平不満を愚痴にする人はいますが、果たして障害者の気持ちになって考えたことがある方はどれほどいるのでしょうか…。

とくに、口先だけで何をやっても中途半端な人間は、彼らを見て恥ずかしくないのでしょうか…。

間もなく…。

私は、ここで知り合ったT氏に大きな影響を受けました…。

寒い季節も充実したアーチェリーの練習を続けたいと....

冬の間、私がマメに足を運んだ『身体障害者センター』という施設...

そこで知り合ったのが、T氏です...

「バシュッ!」「ボンッ!」「ガシャッ!!」(的に刺さっている矢に、射った矢がぶつかる音)

(Tさん、結構当たる様になったんだ...!?)

初めて彼を見たときは、いかにも初心者といった射ち方をしていました...

しかし最近では、なかなかの上達ぶりです...

「M i y a b i 君、今度リムをポンドアップしたいんだけど、、、
90m当たるように僕、、、45ポンドにしようと思うんだが、、、」

「え`え`っ、45ポンドですか...!?
そんなに強くするんですか...!？」

「やっぱり、、、強すぎるかな、、、
まだ早いかな、、、」

「い、いえ....
引けるんなら、構わないと思いますけど...。」

「僕、、、腕の力を使う仕事だから、、、」

「そうだったんですか...。」

(障害者なのにTさんって、何てパワーがあるんだろう...!?
普段、彼はどんな仕事をしているのかな...!?)

次第に私は、T氏の事が気になる様になりました...。

T氏は片足が義足ですが、上半身はガッチリして腕は筋肉隆々...。

まだアーチェリー歴数ヶ月とはいえ、恵まれた肉体はその浅いキャリアを跳ね返す勢いがありました...。

そんな彼の職業は...!?

あるアーチェリーの試合の帰り道のことです...。

私はT氏にクルマで送ってもらいました...。

「Tさん、コレ...!?
新発売になったばかりの、『スプリンター・カリブ』じゃないですか...!?)」

「このカタチが気に入ってさ、、、試乗もしないで直ぐ頼んだんだよ、、、」

「新車いいですね...。
ところでTさんって一体、何の仕事されてるんですか...!?)」

「いやあ、、、1人で小さく商売やってるんだよ、、、」

「1人でですか...!?

1人でも、社長さんなんですね...!?

「まあね、、、僕の名刺あげるよ、、、
Miyabi君、、、今度見に来てごらん、、、」

「はい...!
一度、Tさんの仕事場に見学に行きます...!」

T氏に頂いた名刺の表書きには...

『〇〇〇〇印刷所』という文字が書かれていました...

代表=T氏...

障害者アーチャーT氏の本職は、印刷業だったのです...

私は彼が語った”1人で小さく商売やってるんだよ”という響きがとても印象に残っていました...

1人で出来る職業...

身体が不自由なのに...!?

印刷業という職業は、障害者でもたった1人で独立して仕事出来るものなのだろうか...!?

居ても立ってもいられなくなった私は、とにかく行ってみたくなりました…。

後日、T氏の名刺を片手に彼の街に向かったのです…。

仙台市の某場所…。

古いアパートや住宅の立ち並ぶ一角に、彼の印刷所がありました…。

『〇〇〇〇印刷所』兼住居の出入り口に近づくと、何やら賑やかな音が聞こえてきました…。

「シャッカ～!!! シャッカ～!!! シャッカ～!!! シャッカ～!!! シャッカ～!!! シャッカ～!!!」

T氏の住居兼作業場に潜入すると…、

入り口には山積みの印刷物やダンボール箱、それに台車などが所狭しと並んでいて…、

油やインキの臭いが漂っています…。

さらに奥へ進むと、見たこともない機械が私の視界に飛び込んできました…。

「シャッカ～!!! シャッカ～!!! シャッカ～!!! シャッカ～!!! シャッカ～!!! シャッカ～!!!」

音の主は、オフセット輪転機でした…。

「シャッカ～!!! シャッカ～!!! シャッカ～!!! シャッカ～!!! シャッカ～!!! シャッカ～!!!」

その機械は、建物のほぼ中央に陣取っており、軽快な音を立てながら動いています…。

よく見ると、作業服姿のT氏が真剣な目つきで機械を操っています…。

「こんにちはー…!」

邪魔しまーす…!」

「シャッカ～!!! シャッカ～!!! シャッカ～!!! シャッカ～!!! シャッカ～!!! シャッカ～!!!」

「あの一…!」

Tさん、見に来ました一…!」

「シャッカ～!!! シャッカ～!!! シャッカ～!!! シャッカ～!!! シャッカ～!!! シャッカ～!!!」

(騒音で聞こえないのかな...?)

「シャッカ〜!!! シャッカ〜!!! シャッカ〜!!! シャッカ〜!!! シャッカ〜!!! シャッカ〜!!!」

『身体障害者センター』のアーチェリーの練習で知り合ったT氏...。

彼は不自由な身体にも関わらず、1人で印刷所を営んでいました...。

「やあ、、、Miyabi君よく来たね、、、」

「Tさん、僕、印刷業を見るの生まれて初めてです...!
これで刷るんですか...?」

「大きな出版物やチラシなどは、、、このオフセット輪転機で刷るんだよ、、、
名刺や小さいのは、、、そっちの活版印刷機を使うのさ、、、」

「印刷機にも種類があるんですね...!
あれは何の機械ですか...?」

「断裁機だよ、、、紙をカットするのさ、、、
隣は結束機、、、あの奥は写植機だよ、、、」

「へえ...!
色んな機械が揃ってるんですね...!」

突然の訪問にも関わらず、T氏は私が顔を出したことを喜んでくれました...。

そして、作業所内の設備を興味深げに眺める私に....、

知られざる印刷業の世界を、紐解いてくれたのです...。

「Tさん、印刷の仕事って...、
たった1人で出来るものなんですか...?
どうして始めたんですか...?
やっぱり、どこかで修行したんですか...?
難しいんですか...?」

「ああ、、、印刷業は1人でも出来る仕事なんだよ、、、
足が不自由でも、、、やる気なら誰だって出来るのさ、、、
大手の印刷会社で、、、働きながら腕を磨いて、、、
それから独立したんだよ、、、」

「やる気なら誰だって出来る...!？」

「印刷業というのはね、、、
いくらでも需要があるんだよ、、、
オフィスに学校それに役所、、、
町内会に商店、、、
折り込みチラシに会報や名刺に年賀状、、、
必ず印刷物が必要になるからね、、、
それに、、、
大手の印刷会社から仕事を請け負うテもあるし、、、」

「そうなんですか...。」

私はT氏の話を食べるように聞いていました...。

「印刷業というのはね、、、
版下製作、、印刷、、製本加工と、、
得意な分野だけを請け負うことも出来るんだよ、、、
だから、、
独立のチャンスがいっぱいあるんだよ、、、」

私は、この”独立のチャンスがいっぱいあるんだよ”という言葉が胸に突き刺さりました...。

『印刷業』...イコール...、

『1人で出来る職業』...!?

印刷業という職業は、僕にもたった1人で独立して仕事出来るものなのだろうか...!?

T氏は何千枚もある紙を両手で掴んだかと思うと、それを給紙部に載せました...

そして、私の目の前でオフセット輪転機を動かし始めました...

「ウィィィィ〜ン!!!」

「シャッカ〜!!! シャッカ〜!!! シャッカ〜!!! シャッカ〜!!! シャッカ〜!!! シャッカ〜!!!」

1枚1枚紙が押し出されたかと思ったら、それが次々に輪転機のゴムロールの間に運ばれて...

鮮やかに絵柄が再現された印刷物となって、次々と吐き出されました...

「シャッカ〜!!! シャッカ〜!!! シャッカ〜!!! シャッカ〜!!! シャッカ〜!!! シャッカ〜!!!」

私は時間を忘れたかのように、何時までもその光景を眺め続けました...

「シャッカ〜!!! シャッカ〜!!! シャッカ〜!!! シャッカ〜!!! シャッカ〜!!! シャッカ〜!!!」

真っ白だったコート紙が、瞬間的に運ばれたかと思ったら....、

ブランケットと呼ばれるゴムロールとゴムロールの間に挟まれ....、

しかも、イエロー、マゼンタ、シアン、ブラックの4つの胴間を、あっという間に移動して行き...、

4色刷りのポスターとなって吐き出されます....。

T氏は刷り上がった1枚を掴むと、虫メガネ越しに覗き込んで機械を調整していました....。

「シャッカ〜!!! シャッカ〜!!! シャッカ〜!!! シャッカ〜!!! シャッカ〜!!! シャッカ〜!!!」

(こ、これだッ...!!)

生まれて初めて目の当たりにした、オフセット印刷....。

私は大いに刺激を受けました....。

(僕が探していた職業が、ついに見つかったかも...!?)

「M i y a b i 君はどうして独立したいの?、 、 、 何故1人で仕事したいんだい?、 、 、 」

「ええとー...!

そ、そのですねー...、 いわゆる...。」

「?、 、 、 ?、 、 、 」

私は彼に笑われる覚悟で、ある理由を打ち明けたのです...。

「Tさん、僕...、

子供の頃から憧れのクルマがあるんです...!

『マーコス1600GT』という英車なんです...、

将来そのクルマに絶対に乗りたいんです...!

でも、サラリーマンじゃ無理だと思うんです...。

だから経営者になって、その夢を実現させたいんです...!

僕でも印刷業になれますか...!?!?!?」

「うーん、 、 、 、 、 、 」

またまた考え込んだT氏でしたが...、

やがて、こう告げたのです...。

「M i y a b i 君、 、 、 確かに印刷業は、 、 、

私みたいに足が不自由でも、、、1人で独立して出来る仕事さ、、、
だけど、、、相当熟練した技術が要求されるんだよ、、、
それから、、、」

「それから...?」

「たった1人で仕事をするというのは、、、本当に厳しいぞ、、、
誰も助けてくれないから、、、すべて自己責任の世界さ、、、」

「自己責任...?」

「実は、、、この印刷所は親父が起したんだよ、、、
私は大手の印刷会社を辞めてから、、、
親父が亡くなるまで2人でやってたんだよ、、、」

「そうだったんですか...。」

「高校出てすぐ修行に行かされたんだけど、、、
本当は印刷業イヤだったんだよ、、、
Miyabi君、、、せっかく大学に入れたんだから、、、
今はしっかり勉強するべきじゃないかな、、、
そして、、、ちゃんとした会社に就職した方がいいと思うよ、、、」

「...。」

この後も、T氏には何かとお世話になりました...。

「バシュッ!」「ボンッ!」

ここは、『東北工業大学』のアーチェリー場です…。

「バシュッ!」「ボンッ!」「ガシャッ!!」(的に刺さっている矢に、射った矢がぶつかる音)

(よしッ…!)

年が明けて、気温が緩む日が少しづつ増えてきた頃です…。

アーチェリーの練習に取り組む私は、自信がみなぎっていました…。

何故なら…、

皆んながシーズンオフしている冬期間にも、ほぼ毎日休まずアーチェリーの練習を続けていたからです…。

当面の目標は…、

4月の、東北王座戦(リーグ戦)の個人優勝です…!

「バシュッ!」「ボンッ!」「ガシャッ!!」(的に刺さっている矢に、射った矢がぶつかる音)

(やったッ…!)

ところが...!?

昭和60年の春、大学をサボってばかりの私に天罰が下りました...

留年です...

これまで2年間の単位が足りなくて、大学3年生に上がれなかったのです...

(り、りゅ、留年...!?)

大学からその旨の通知が届いたときは、身体力が抜けると同時に...

アタマの中が真っ白になってしまいました...

その晩のことです...

当然のことながら、親父にお灸を据えられました...

「Miyabiー、
お前、どうする気なんだー!」

「う、うん....。」

「だから言っただろー!
講義に出ないでー、
アーチェリーとバイトばかりしてるから、こんなことになるんだぞー!」

「...。」

「お前の学費に、どれだけ注ぎ込んでいると思ってるんだー!
父さん母さん2人で働いて、大変なんだぞー!」

「...。」

「Miyabiー、
来年は必ず3年に上がるようー、
これからは講義に必ず出席しなさいー!」

「...。」

「とにかく、大学を続けなさいー!
卒業するまで頑張りなさいー!」

「...。」

そして4月の新年度が始まりました...。

同じ学部の同級生達が3学年に上がったのに....、

私はというと、また再び2学年のまま...。

「エエ〜、

で、あるからしてエ～、
公式を当てはめると、このようになる訳でありますウ～、」

重い腰を上げて、講義に足を運んでも…、

(キョロキョロ…。)

周りをいくら見渡しても、顔見知りは何も居ませんでした…。

(知ってる人は誰一人も無し…。

孤独…。)

授業は1人ぼっち…。

休憩時間も1人ぼっち…。

学食の昼食も1人ぼっち…。

(孤独…。)

留年とは…、

(孤独…。)

『○○○○○○○○、次の者はレポートを再々提出するように』

(あ～あ、又だあ...!
モウ、嫌だなあ...。)

掲示板に自分の学籍番号を見つけて、溜め息を洩らす私でした...。

(全く...、コンピューターなんて面倒くさいモノ、誰が創ったンだあ...!?)

頭を掻きむしりながらフローチャートを書き直し、プログラミング室で入力を済ませて待つこと
数分...

出力された紙には....、

『^kfl;d]sk@md[]@][][][[[fpfjdk*:dgf}Fef@[otpg@g!.....?????Error (バ～カ!)]』

(シュン...。)

「バシュッ!」「ボンッ!」

再び、アーチェリー場です...。

「バシュッ!」「ボンッ!」「ガシャッ!!」(的に刺さっている矢に、射った矢がぶつかる音)

(それッ...!)

「バシュッ!」「ボンッ!」「ガシャッ!!」(的に刺さっている矢に、射った矢がぶつかる音)

(いいぞッ...!)

あ～あ、もうつまらない講義なんか出るよりも...、
こうやって、アーチェリー射ってた方がよっぽど楽しいや...。)

こんな悶々とした日々のままで...

いよいよ、昭和60年の東北王座戦(リーグ戦)が開幕したのです...

「こうだ〜い!!! ファイツ!!! オーッ!!!」

『東北工業大学』に入学して3年目の春...

私にとって3度目の、リーグ戦への挑戦が始まりました...

昭和60年の『東北学生アーチェリー王座決定戦』が開幕したのです...

「ピーッ!!」(ホイッスルの音)

咲き始めたばかりの桜の花を横目に...

グラウンドの左右一杯に並んだ学生アーチャー達が、一勢に矢を放ちます...

「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」

「こうだ〜い!!! ファイツ!!! オーッ!!!」

振り返れば、初挑戦の1年目は「カキーン病」に悩まされて散々な結果に終わり...

2年目は、高校経験者の割には鳴かず飛ばずの地味な成績しか出せない始末でした...

しかし、今回は違っていました...

「バシュッ!」「ボンッ!」

(それッ...!)

「バシュッ!」「ボンッ!」

(もう一丁ッ...!)

「バシュッ!」「ボンッ!」「ガシャッ!!」(的に刺さっている矢に、射った矢がぶつかる音)

(よしッ...!)

昨年のインカレ出場によって掴んだ、確かな手応えと....、

冬の間も練習量をこなしてきた自信が、私のシューティングに現れていました....。

「ピーッ、ピッピーッ!!」(ホイッスルの音)

「矢取り〜ッ!!!」

「ハイ〜ッ!!!!!!!!!!」

ラッキーだったのは....、

昨年までの常勝『東北学院大学』に、全体を牽引する様な高得点をマークする選手が居なかった事でした....。

男子個人に、各大学に飛び抜けて優秀な選手が無いダンゴ状態....。

事実、途中経過の成績は僅差で並んでいました....。

調子次第では、誰にでも優勝が転がってくるチャンスがあったのです…。

「ガクイ〜〜〜ン!!!!!!! ファイト!!!!!!! オ〜〜〜ッ!!!!!!!」

「ナイショ〜ッ!!!!!!!」

会場一杯に轟くひととき大きな雄叫びを上げるのが、部員数が最も多い『東北学院大学』です…。

「こうだ〜い!!! ファイツ!!! オーッ!!!」

一方、私の『東北工業大学』はスタメン8名組むのがギリギリです…。

団体の成績では、毎年最下位を争う貧弱さ…。

その弱小大学の中から…、

まさか、まさかの奇跡が起きたのです…。

「バシュッ!」 「ボンッ!」

(それッ…!)

やや苦手の、前半の50m競技で出遅れても…、

「バシュッ!」「ボンッ!」

(もう一丁ッ...!)

後半、絶対の自信がある得意の30m競技で追いつき...

「バシュッ!」「ボンッ!」「ガシャッ!!」(的に刺さっている矢に、射った矢がぶつかる音)

(よしッ...!)

誰が呼んだか、『30mのMiyabi』...

その勢いは、誰にも止められなかったのです...

「それでは～、最終成績を発表しま～す!!!
男子団体第10位～、『東北工業大学』～!!!」

そして...

「続きまして～、
男子個人第1位～、『Miyabi選手(東北工業大学)』～!!!」

「おお～ッ!!!!」「ざわざわざわ～!!!!」(どよめき)
「パチパチパチパチパチパチパチパチ～!!!!!!!!!!!!!!」

それは、スターが誕生した瞬間でした...

居合わせた誰しものが、恐らくマグレだと思ったかも知れません...

何故なら、『東北学生アーチェリー王座決定戦』の男子個人で…、

弱小大学の『東北工業大学』の選手が制覇したのは、初めてだったからです…。

「ヤッター、Miyabiィー!」 「頑張ったなァ!!」 「オメデト〜!」

「このこのこのーっ!!」 「よくやった。」 「おめでとうッ!!」

「帰ってから打ち上げだぞォ〜!」 「おーッ!!!!!!!!!!!!!!」

大学の公式試合で初優勝した私…。

仲間と、喜びの美酒に浸ったのは言うまでもありません…。

「ムッフ...。」

(『王座決定戦』の男子個人を制したぞ...!!)

「エエ～、

右図に示す回路においてエ～、

抵抗 R_0 に矢印のような電流が流れているとするとオ～、」

「ウヒヒ...。」

(僕はついに初優勝したんだ...!!)

「エエ～、

以上のことからキルヒホッフの第二法則を用いると～、

$E_2 + E_1 - (VR_2 + VR_1) = 0$ となりますのでエ～、」

「クックック...。」

(東北では学生No.1のニューヒーローさ...!!)

アーチェリーを始めて6年目...

一つの目標だった、春のリーグ戦で個人優勝を果たした直後の私は...

いわゆる天狗になっていました...

2学年をやり直しの留年ですから、身を入れて勉強を頑張らなくてはいけないのに...

退屈な教授の声など、全く耳に入らない始末...

アーチェリーの試合で勝ったことに自己陶醉していたのです...

居ても立っても要られなくなった私は、例によって講義をサボって八木山を下り…、

お世話になっているM社長に会いに、アーチェリー・ショップに顔を出しました…。

ここに来るとホッとします…。

「Miyabi君、よく頑張ったなァ!」

「はい…!

M社長お陰様です、僕とっても嬉しいです…!」

すると…!?

「Miyabi君、6月の『全日本学生東西対抗戦』に選抜されるんじゃないのかァ!？」

「えッ…!？」

「オレも中京大の主将の頃、東海地区で優勝して一回出たんだゾ!」

「そうだったんですか…。」

「『全日本学生東西対抗戦』に出れるのは、各地区の優秀者だからインカレ出るより難しいんだゾ!」

「えッ…!？」

「だがなァ、会場まで行っても成績悪くて補欠になると恥ずかしいんだゾ!
でもスタメンで良い点射てば、一躍有名人さァ!
あれはシングルラウンドだから、今から長距離の練習しておかないとイカンぞォ!」

「わかりました…!」

また別の日のこと....、

アーチェリー・ショップに東北学院大のOBら社会人達が、たまたま幾人が居合わせていました...
。

私の顔を見るなり、こんな事を告げたのです...。

「お前かあ？」

今年の『王座決定戦』で勝った、工大のMiyabiって?」

「は、はい...。」

「オマエー、50m・30mの短距離の試合で勝ったぐらいで自慢すんなヨー!」

「...。」

「そうだそうだ〜!

やっぱりアーチェリーは、90m・70m・50m・30mのシングルラウンドだよな〜!

夏の『個戦』で優勝しなけりゃ、東北学生チャンプとはいえないぞ〜!」

「...。」

その後も、同輩からも試合のレベルが低かったからだとか、マグレだったんだ等の屈辱的な指摘を度々受けたものです...。

今回の春の大会では確かに....、

私の成績は平凡な得点で、しかも僅差で優勝が転がり込んだものです...。

しかし、大勢を押さええて一位になったのは紛れもない事実なのです…。

恐らく、今まで目立たなかった者が急にヒーローになった事があまり面白くなかったのでしょう…。

しかしながら、周りの批判が…、

私の、次の目標を明確にするきっかけとなったのです…。

新たな目標…。

それは、シングルラウンドも制すること…!!

すなわち、8月の『東北学生個人選手権大会』の優勝です…!!

そしてその前に、6月の『全日本学生東西対抗戦』にスタメン出場することです…!!

「バシュッ!」 「ボンッ!」

「バシュッ!」 「ボンッ!」

「バシュッ!」 「ボンッ!」

当面の目標が定まった私は、迷うことなくひたすら練習に打ち込んでいました…。

そんなある日のことです…。

またまたアーチェリー・ショップに居た午後のこと…、

ドアの向こうから、どこかで聞いたことのある元気な声が聞こえてきました…。

「こんにちは～。
失礼しま～す。」

「おッ、いらっしゃイ!」

「…。」

それは、くりくりとした愛らしい瞳の女の子…、

短めの黒髪に、キュートな小ぶりの顔…。

彼女は、宮城学院女子大2年のYちゃんです…!!

「M社長さん、今日は矢の修理に来ました～。
宜しくお願いま～す。」

「Yちゃん、頑張ってるナー!」

「…。」

「あ、東北工大のMiyabi先輩～。
いらしてたんですか～。」

「えッ...!？」
(ドキリ...!!
Yちゃんが真正面から僕を見つめてる...!?
ど、どうしよう、お、落ち着け...!!)

宮学のYちゃん...

彼女を初めて見掛けたその日から...

私はYちゃんに、ほのかに恋心を抱いていました...

「Miyabi先輩～。

『王座決定戦』優勝おめでとうございます。

流石ですね～。」

「え、まあ...。」

お世辞にも新しいとはいえない雑居ビルの、これまた古ぼけたワンフロアに陣取った、東北唯一のアーチェリー専門店...。

その狭い空間に、チョッピリ感謝する私でした...。

何故なら、『宮城学院女子大』2年のYちゃんが私の目の前で...

ドキリとするほど至近距離で、ひざを突き合わせる様に真正面に座っているからです...。

Yちゃんは、『宮学』アーチェリー部のメンバーで揃えたブルー&アイボリー色のスタジャンを脱ぐと...

女性らしい、少しポッチャリした体付きをしていました...。

そして愛らしい瞳を輝かせながら、私にこう切り出したのです...。

「Miyabi先輩～。

ぜひ、私たちの大学にアーチェリーの指導に来てもらえませんか～。」

「えッ...!？」

「また東北学院大に負けて悔しいんです～。

私たち、アーチェリーもっと上手になりたいんです～。

ねえMiyabi先輩、お願いします～。

ぜひ教えに来て下さい～。」

「で、でも...!？」

カキッ、カキカキカキッ、クイッ!!!!!! (曲がった矢をアローストレーナーで修正する音)

「よしッ、これで全部真っ直ぐに直ったゾ！」

「M社長さん、ありがとうございます。」

「Miyabi君、今度の土曜にでもお前、
『宮学』に教えに行ってやったらいいんじゃないかア？」

「で、でも...!？」

「Miyabi先輩、お願いします～。
ぜひ来て下さい～。」

「宮城県アーチェリー協会から来たとして、届け出ればいいんじゃないかア？」

「なるほど名案ですね～。
それでは、ご指導お願いしま～す。」

「え、まあ...。」

こうして私は、Yちゃん達の指導の為に....

『宮城学院女子大学』へ潜入することとなったのです...!!!

某日の午後....、

親父のカローラを駆った私は、目的の場所に差し掛かりました....。

ブルルルルルルル〜!!

周囲をぐるりと取り囲む、赤茶色のブロック塀が視界に入ったかと思うと....、

やがて、間もなくそこに到着しました....。

(ドキドキドキドキ...!!

ホントに『宮学』に足を踏み入れることになるなんて...!?

もしも守衛さんに怒られたらどうしよう...!?

ど、どうしよう、お、落ち着け...!!)

しかし、その心配は無用でした何故なら....、

「Miyabi先輩こんにちは〜。

お待ちしていましたよ〜。

大学側には許可取っておりますから〜。

さあどうぞ〜。」

「Yちゃん...!」

守衛室脇の来客用駐車場に停めると、私はアーチェリーケースを片手にクルマから降りました...

。

「先輩、こっちですよ〜。」

「は、はい....。」

彼女と歩調を合わせ進む、夢のような女子大の内部潜入は...!?

創立100年以上の歴史を誇る『宮城学院女子大学』は、仙台市青葉区桜ヶ丘に所在します…。

上品な落ち着いた雰囲気のある建物と、芝生の植わった女性だけのキャンパスは…、

見渡す限りどこもかしこも、女子大生・女子大生・女子大生・女子大生・女子大生…、

当たり前か...(笑)。

その内部を、恥ずかしさで顔を赤らめたまま、Yちゃんの後を付いて行く私…。

「先輩、こっちですよ～」

「は、はい…。」

『宮学』は北日本では最も古い私立女子大で、しかも北日本では唯一の音楽科があります…。

それから、ここは大高中の一貫教育のタイプなので、いわゆる…、

お嬢様学校なのです…。

「ここは、カフェテラスなんですよ～。

そしてこの奥が、私たちのアーチェリー場で～す。」

「へえ…。」

「コンニチハー!!」 「こんにちはーッ!!」 「こんにちはわぁ!!」 「こんにちは〜!!」
「こんにちはわーア!!」 !!」 「こんにちは〜!!」 「こんちわぁ〜!!」 「コンニチハー!!」

「ど、どうも...(汗)。」

Yちゃんの案内で辿り着いた先には、『宮学』アーチェリー部の面々が待ち構えていました…。

Yちゃんの依頼により潜入した『宮城学院女子大学』で、私がまず最初にしたのは…、

『宮学』アーチェリー部メンバー9名の前で、射って的に当ててみせることでした…。

「バシュッ!」「ボンッ!」

「バシュッ!」「ボンッ!」「ガシャッ!!」(的に刺さっている矢に、射った矢がぶつかる音)

「わーッ!」「スゴッ!?!」

論より証拠といいますが、指導する者が手本を示すのは当然のこと…。

彼女らの目の前で正確無比なシューティングをしてみせれば、誰しものが納得する筈です…。

「バシュッ!」「ボンッ!」「ガシャッ!!」(的に刺さっている矢に、射った矢がぶつかる音)

「バシュッ!」「ボンッ!」「ガシャッ!!」(的に刺さっている矢に、射った矢がぶつかる音)

「バシュッ!」「ボンッ!」「ガシャッ!!」(的に刺さっている矢に、射った矢がぶつかる音)

「すごーい!!」「へえー!」

「パチパチパチパチパチパチパチパチ～!!!!!!!!!!」

得意の30mの距離から、アローをガシャガシャとぶつけながらのグルーピングは効果絶大でした…。

やがてそこに居合せた女性たち全員が、尊敬と羨望の眼差しを向けてきたのです…。

「すごいですね、Miyabi先輩～。

流石に『王座決定戦』で優勝なさっただけありますね〜。」

「私にコーチしてくださいーい!」「指導お願いしますう。」「コーチあたしにも〜!」

「教えて下さいッ!!」「コーチ私にも一、」「お願いしまーす!」

「は、はいはい...。」

こうして次に、『宮学』アーチェリー部9名一人一人の技術指導が始まりました...。

女子大生達を一人占め...!

アーチェリーをやっていて本当に良かったと、心の中でニヤニヤする私でした...。

が...

この後、想像以上に大変な作業となってしまったのです...。

「バシュッ!」「ボンッ!」

「どおーですかあ、コーチ?」

「うーん...。

押し手の支え方がちょっと...、ええと...、」

「私の弓、射った後にヘンな音がするんですヨ〜、」

「は、はいはい...。」

「バシュッ!」「ボンッ!」

「TFCのネジが緩んでガタついているみたいだね...、
ストリングハイトが低過ぎてるし...、ええと...、」

「コーチ、あたしクリッカー上手く落とせないんですがー、」

「は、はいはい...。
見てるから射ってみて...?」

「カチン、バシュッ!」「ボンッ!」

「かんでるみたいだね、もう一度...、」

「私のも見てくださーい!」

「は、はいはい...。」

「ノッキングポイントの位置はここで良いんですかー?」

「アタシの射型もコーチ、見て下さい!」

「は、はいはい...。」

「この矢は曲がってますか?」

「は、はいはい...。」

「アンカーの位置は、ここでおかしくないですかー?」

「は、はいはい...。」

「コーチ私にもー、」

「は、はいはい...。」

「お願いしまーす!」

「は、はいはい...。」

「コーチ!」

「は、はいはい...。」

「コーチ!」

「は、はいはい...。」

「Miyabiコーチ～。

今日は私たちの大学に～、

アーチェリーの指導に来て下さってありがとうございました～。

また是非近いうちに又いらして下さいね～。

本当にありがとうございました～。」

「ありがとうございましたー!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「い、いえ、どういたしまして...。

ではまたね...。」

ブルルルルルルル～!!

Yちゃんをはじめとする『宮学』メンバー全員に見送られながら、カローラを出す私です...。

こうして、初の『宮城学院女子大学』潜入は無事終了しました...。

ウレシはずかし、女子大生への技術指導...。

その後も、依頼を受ける度に『宮学』に足を運びました…。

しかしこの事が、私の周辺に不協和音を生み出してしまったのでした…。

四面楚歌...!?

【意味】 四面楚歌とは、周りを敵や反対者に囲まれて孤立し、助けのない状態のたとえ。孤立無援。

「バシュッ!」 「ボンッ!」

ここは、『東北工業大学』のアーチェリー場です…。

平日の真っ只中だというのに、講義をサボって1人で練習する私…。

「バシュッ!」 「ボンッ!」

留年した私は、今年は再履修の雨アラレですから…、

単位取得に向け、もっと焦って勉強しなければならない筈なのに…?

1人で練習、昨日も1人で練習、今日もまた1人で練習…。

「バシュッ!」 「ボンッ!」 「ガシャッ!!」 (的に刺さっている矢に、射った矢がぶつかる音)

(よしッ…!)

この頃の私は、頭の中にアーチェリーのことしかありませんでした…。

(もっと、もっと上手になりたい…!)

何故なら、栄えある『東西対抗戦』のメンバーに選出されからです...!

東北学生から唯一選ばれた私...

その『東西対抗戦』に向け意気揚揚と取り組みたいところでしたが...!?

「バシュッ!」「ボンッ!

1人で練習、昨日も1人で練習、今日もまた1人で練習...

何故か....

我が『東北工大』アーチェリー一部の中で孤立していました...

四面楚歌...!?

原因は、『宮城学院女子大学』へ教えに行っていることにありました...

どうやら、部員の殆どは私の行動が面白くなかった様です...

周りから無視される日々が続きました...

孤独....

そんな状態のまま、6月の『東西対抗戦』出場の日がやって来ました...

プオオオオ〜ン!!! (普通列車『八甲田号』の警笛)

「Miyabi先輩、東北地区代表として頑張ってきて下さいー!!!」

「健闘お祈りしていまーす!!!」

「ありがとう...。」

列車に乗り込んだ私は、ドア越しに手を振りました...。

ガッタン〜ガッタン〜ガッタン〜ガッタン〜ガッタン〜ガッタン!!!

その晩、仙台駅のホームまで見送ってくれたのは、後輩のたった2人だけでした...。

昨年の『インカレ』出場の際は、皆が祝ってくれたのに...。

四面楚歌...!?

ガッタン〜ガッタン〜ガッタン〜ガッタン〜ガッタン〜ガッタン!!!

走り出した列車の中で、私は窓の外を眺めていました...

そして、暗闇の中を流れていく幾つもの灯りを目で追いながら思いました...。

(仲間に認めてもらうには、『東西対抗戦』で誰もが納得する結果を出すしかない...!)

そこには、並々ならぬ覚悟を決めた私がありました...。

ガッタン～ガッタン～ガッタン～ガッタン～ガッタン～ガッタン!!!

東京都世田谷区の『都立駒沢オリンピック公園』で開催の『全日本学生アーチェリー東西対抗戦』、ここへ全国の選りすぐりの学生がやって来ました…。

東軍そして西軍、各11名の勇者達…。

顔を合わすなり、我が東軍男子はお互い自己紹介をしました…。

「北海道地区代表、〇〇〇で一す!!」

「東北地区代表、Miyabiです…!!」

「関東地区代表、山本 博です!!」

「東海地区代表、△△△デス!!」

…etc。

「君は東北の雄だね、お互い頑張ろうぜ!!」

「は、はい…!!」(え`ッ…!?)

彼にそう呼ばれた、『東北の雄』の言葉を私は忘れることが出来ません…。

告げたのは、言わずと知れた『ロス五輪』銅メダル獲得の日体大4年『山本 博(やまもとひろし)』選手です…。

その彼と同じ東軍チームとして選ばれた私…。

晴れの舞台へ憧れの選手と共に出場出来ることに、緊張すると同時に大きな感動を覚えました...
。

「♪ブッブーーーー!!」(ブザーの音)

「東軍ー!!
ファイト、オーッ!!」

「オーーーーー!!!!!!」

「バシュッ!」「バシュッ!」「バシュッ!」「バシュッ!」「バシュッ!」
「ボンッ!」「ボンッ!」「ボンッ!」「ボンッ!」「ボンッ!」

昭和60年6月、シングルラウンド競技によって争われる『全日本学生アーチェリー東西対抗戦』が、ついに始まりました...。

四方が壁に取り囲まれた『駒沢公園』の多目的広場…。

横風の影響が少ないので、アーチェリー競技に適した会場とされています…。

昨年出場の『インカレ』もここで開催されたので、私にとっても射ちやすい場所です…。

「東軍ー!!
ファイト、オーッ!!」

「オー————!!!!!!」

今回は、学生アーチャー憧れの『東西対抗戦』…!

この大会で活躍すれば、本当に『東北の雄』と呼ばれるのは夢ではない筈です…!

男を上げるまたとないチャンス…!?

『EASTAN』というロゴが入ったお揃いのユニホームに袖を通した東軍の男達が、次々と矢を放っていきます…。

「バシュッ!」「バシュッ!」「バシュッ!」「バシュッ!」「バシュッ!」
「ボンッ!」「ボンッ!」「ボンッ!」「ボンッ!」「ボンッ!」

長時間に渡って行われる競技、アーチェリー…。

弓の強さに長時間耐えられるスタミナと、これまた長時間途切れない集中力が必要なのです…。

東軍の牽引役は、何とんでも『山本 博(やまもとひろし)』選手です…。

彼の存在は本当に頼もしい限りです…。

他を圧倒する高得点を積み上げていきました…。

「バシュッ!」 「バシュッ!」 「バシュッ!」 「バシュッ!」 「バシュッ!」
「ボンッ!」 「ボンッ!」 「ボンッ!」 「ボンッ!」 「ボンッ!」

私はというと…、

例によってスタートの90mでは出遅れましたが…、

射つ度毎に、序々に落ち着いて射てるようになっていき…、

前半の長距離は、何とか大きくつまずくことなく乗り切ることが出来ました…。

後半の短距離に入ってから、順調にスコアを伸ばしました…。

50mでは…、

「1的————ッ!!」 「42点〜っ!!」 「ガンバー————ッ!!!!!!!!!!!!!!」

「2的————ッ!!」 「47点〜ん!!」 「ガンバー————ッ!!!!!!!!!!!!!!」

「3的————ッ!!」 「56点〜ッ!!」 「ナイショ————ッ!!!!!!!!!!!!!!」

「4的————ッ!!」 「50点〜ン!!」 「ナイショ————ッ!!!!!!!!!!!!!!」

「5的————ッ!!」 「51点...!!」 「ナイショ————ッ!!!!!!!!!!!!!!」

...etc。

最後の30mは、私が最も得意とする距離です…。

「バシュッ!」 「ボンッ!」

(もっと当てたいッ...!)

「バシュッ!」 「ボンッ!」 「ガシャッ!!」 (的に刺さっている矢に、射った矢がぶつかる音)

(もっと、もっと当てたいッ...!)

「バシュッ!」 「ボンッ!」 「ガシャッ!!」 (的に刺さっている矢に、射った矢がぶつかる音)

(もう一丁ッ...!)

「バシュッ!」「ボンッ!」「ガシャッ!!」(的に刺さっている矢に、射った矢がぶつかる音)

(よしッ...!)

そして....

「♪ブブブーーーー!!」(ブザーの音)

「パチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチ~!!!!!!!!!!!!!!」

西軍に大きな差を付けて、我が東軍の見事な勝利でした...!

「東軍ー!!

ファイト、オーツ!!」

「オーーーーーー!!!!!!!!!!!!!!」

ギリギリとはいえ、私は....

スターティングメンバーのまま、最後まで射つことが出来ました...!

「夏の『インカレ』でまた会おうぜー!!」

「は、はい...!」

「またねッー!!」

「はい、また...!」

東軍のメンバー同士、こんなやり取りを交わして....、

お互いの健闘を称え合いながら、再会を誓いました....。

学生アーチャーの祭典、栄えある『東西対抗戦』はこうして幕を下ろしました....。

私は、この大会のメンバーに選ばれたことを誇りに感じると同時に....、

試合で最後まで力を出せたことで、より大きな自信を付けることが出来ました....。

「ムフフ...。」

(僕は、『東西対抗戦』のスタメン果たしたんだぞ...!!)

「エエ～、
先に掲げた球の表面積と体積を求める計算でエ～、
半径を1から2刻みで10まで変えて計算する事を考えるとするとオ～、」

「ウヒヒ...。」

(山本 博さんが、「君は『東北の雄』だね」だって...!!)

「エエ～、
これを短くかつ見易いプログラムにするにはア～、
サブルーチンというプログラムのパーツを使いましてエ～、
ReturnとEndで終わるのが約束でありますウ～、」

「クックック...。」

(僕は、アーチェリー界では『東北の雄』さ...!!)

憧れの一つだった、『全日本学生東西対抗戦』の出場を果たした直後の私は...、

またもや天狗になっていました...。

今度こそ、本気で勉強を頑張らなくてはいけないのに...、

退屈な教授の声など、ちっとも耳に入らないノーテンキさです...。

この時は、かなり重症のアーチェリー・きちがいになっていたのです...。

「それでは発表一、
男子第1位、Miyabiさんー!!」

「ムフ...。」

学生のローカル試合でも、ことごとく優勝し....、

「成年男子の成績です～。
第1位はMiyabiさん～。」

「ムフフ...。」

宮城県の国体予選も、堂々の優勝し....、

「男子優勝は、
東北工大のMiyabiさん～!!」

「ムフフフ...。」

続く、『東北学生フィールド選手権大会』でも、初優勝を成し遂げました...。

かなり重症のアーチェリー・きちがいの私…。

こんな調子ですから、大学の勉強はサッパリ…、

一向に身が入りません…。

そんなある日、嬉しいニュースが飛び込んできました…。

8月の夏合宿の件です…。

何と!!

我が『東北工業大学アーチェリー部』と、『宮城学院女子大学アーチェリー部』が合同で…、

夏合宿をすることになったのです…!!

理由は、『宮学』構内工事の為に合宿所が使えない為でした…。

我々は毎年、『泉ヶ岳スキー場のグラウンド』で夏合宿をしているのですが…、

お互い部員が少ないので、設備や費用を考えると一緒にやった方がメリットがあるからなのです…。

女子大と合同合宿…!?

何かが起こりそうな予感が...

「エエ～、
それでは～試験を始めますウ～。
試験用紙を書き終えた者から～退席するようにイ～、
それでは～始め～ッ。」

「...。」

(目標は、個戦の優勝...!!
いや、そんなことより試験中だぞ...!!)

チクタクチクタクチクタクチクタクチクタクチクタク...、(時間が刻々と過ぎていく)

「...。」

(目標は、個戦の優勝...!!
その前に、『宮学』と一緒に夏合宿かぁ...!!
ヒヒヒ...。)

チクタクチクタクチクタクチクタクチクタクチクタク...、(時間が刻々と過ぎていく)

「...(冷汗)。」

(目標は、個戦の優勝...!!
合宿で、Yちゃんと...。
嗚呼ッ、いかんいかんッ...!!
そんなことより早く、この問題を解かなくちゃ...、
う`う`う`ッ...、

でも、その前に...!?

ちよっと集中力を掻き乱されそうなのが...

我が『東北工業大学アーチェリー部』と『宮城学院女子大学アーチェリー部』合同の...

夏合宿...!!

女子大と一緒に、夏合宿だなんて...!?

この年、我が『工大』部員は9名...

『宮学』も部員が9名でした...

ミーーーーーン! ミン! ミン! ミーーーーーン! (セミの鳴き声)

「ちわー」「こんちわーッス!!!!」「チワ〜ッス!!!!」「コンチワあーす!!!!」

「こんにちはー。」「お早うございま〜す、」「今日はあー」「よろしくねえ〜!」

こんな挨拶で遂に始まった、夏合宿...

「手分けして畳を運んで下さーい!!!!」 「OK!!」 「お願いしまーす!!」 「ヨイショッ!!!!」

「はーい。」 「よいしょっと～、」 「私達も手伝いまーす!」 「あ、これもね?」

手間の掛かって面倒な射場設置も、何故か楽しく出来ました...(笑)。

夏合宿の舞台は、仙台市の『泉ヶ岳(いずみがたけ)』です...。

仙台駅前からクルマで1時間ちょっとの、街から比較的近距離にあるこの山は...、

夏はハイキング、冬はスキーが楽しめ、大自然が満喫できる仙台市民にとってお馴染みの憩いの場所ですが...。

ここのスキー場のゲレンデ奥に在るグランドを借りて、アーチェリーの練習をするのです...。

ザァァァァー——————ッ!!!!!!! (沢水の流れる音)

「バシュッ!」 「ボンッ!」 「バシュッ!」 「ボンッ!」 「バシュッ!」 「ボンッ!」 「バシュッ!」 「ボンッ!」

「バシュッ!」 「ボンッ!」 「バシュッ!」 「ボンッ!」 「バシュッ!」 「ボンッ!」 「バシュッ!」 「ボンッ!」

「キャッ!」 「はははははは!」 「へえ～ッ。」
「プッ!!」 「ハハハハッ～!!!」 「うふふふふ。」

まるで、まるで違うのです...、

男性だけでする合宿とは雰囲気、まるで違うのです...。

男女18名と一緒に練習すると、それはそれは明るく楽しいムードでした…。

ただ、私だけは…!?

「バシュッ!」「ボンッ!」

(目標は、個戦の優勝…!!)

「バシュッ!」「ボンッ!」

(目標は、個戦の優勝…!!)

「キャッ!」「はははははは!」「へえ〜ッ。」

「プッ!!」「ハハハハッ〜!!!」「うふふふふ。」

このアットホームな合宿でも、つられてダラけない様に心掛けました…。

とにかく、私の心の中は(目標は、個戦の優勝…!!)が、あるのみでした…。

ミーーーーーン! ミン! ミン! ミーーーーーン!
ジジジジジジジジジジジーーーーッ! (セミの鳴き声)

「バシュッ!」 「ボンッ!」

(目標は、個戦の優勝...!!)

「キャッ!」 「はははははは!」 「へえ〜ッ。」
「プッ!!」 「ハハハハッ~!!!」 「うふふふふ。」

「...。」

(気が散るなあ...。)

「バシュッ!」 「ボンッ!」 「バシュッ!」 「ボンッ!」 「バシュッ!」 「ボンッ!」 「バシュッ!」 「
ボンッ!」

「バシュッ!」 「ボンッ!」 「バシュッ!」 「ボンッ!」 「バシュッ!」 「ボンッ!」 「バシュッ!」 「
ボンッ!」

木陰を探すのに苦労する様な夏の日差しが降り注ぐ、『泉ヶ岳(いずみがたけ)』...

狙うターゲットの向こうには、私たち男女18名を見守るかの様に....

青い空に緑の山々がそびえ立っています…。

ミ————ン! ミン! ミン! ミ————ン!
ジジジジジジジジジジジ————ツツ! (セミの鳴き声)

中腹まで繋がったリフトがゆっくりと上下に動いていて…、

頂上付近には、白い雲がポッカリ浮かんでいます…。

それは、まるで絵葉書にでも描いた様な素晴らしい風景です…。

「バシュッ!」 「ボンッ!」

(目標は、個戦の優勝…!!)

この絶好の行楽地で…、

我が『東北工大』と『宮城学院女子大』のアーチェリー部は…、

5泊6日を共にしたので…。

「...(ムッ)。」

彼女が、ウチの男連中と談笑しているとチョット気になります…。

何だか正直、面白くありません…。

「きゃはは～。」

またYちゃんの笑い声が聞こえてきます…。

「...(ムッ)。」

別に、気にすること無い筈なのに…。

それより、自分は真剣に射つことだ…!

「バシュッ!」 「ボンッ!」

(目標は、個戦の優勝…!!)

「Yちゃんー、この前こんな事があってサー?」

「きゃはは～。」

「...(ムッ)。」

(気が散るなあ...。)

「バシュッ!」「ボンッ!」

「チラッ...。」

(それにしても...、

Yちゃんって...、

可愛いなあ...。)

「バシュッ!」「ボンッ!」

「チラッ...。」

(Yちゃんって...、

おっぱいが結構大きいなあ...。)

「バシュッ!」「ボンッ!」

「チラ、チラッ...。」

(バカバカッ...!

何考えてるんだ...!

目標は、個戦の優勝...!!)

ミーーーーーン! ミン! ミン! ミーーーーーン!

ジジジジジジジジジジジーーーーッ! (セミの鳴き声)

「Miyabiコーチ～。

調子は如何ですか～、

もし良かったら後で、私達の打ち方を見てもらってもいいでしょうか～。」

「えッ...!?

は、はいはい、はいはい、勿論勿論...。」

昼食後、突然Yちゃんに...

そう尋ねられてシドロモドロになった私でした....。

ザァァァァーーーーッ!!!!!!! (沢水の流れる音)

「疲れたー!」「ふう～!」「へえ～ッ。」

「暑かったねえ～!!」「ハハハハッ～!!!」「うふふふふ。」

初日の練習を終え、私達は宿泊の『泉ヶ岳ロッジ』に入りました....。

ここは主に冬季の間、スキー客が利用する施設です....。

暖房設備は完備ですが、扇風機一つ無いので夏季はチョット....。

4名あるいは3名→1部屋に分散した私達は....、

それぞれの部屋で一旦一服した後、間もなく食堂に集合しました…。

夕食です…。

「いただきまーすッ!」「頂きま〜す!」「いただき〜ッ。」

「頂きます!!」「いただきます〜!!!」「イタダキマス。」

ミーーーーーン! ミン! ミン! ミーーーーーン!
ジジジジジジジジジジジーーーーッ! (セミの鳴き声)

「バシュッ!」「ボンッ!

(目標は、個戦の優勝...!!)

ミーーーーーン! ミン! ミン! ミーーーーーン!
ジジジジジジジジジジジーーーーッ! (セミの鳴き声)

「アッチッチッチィーッ!」「しっかしい、今日も暑いなあ。」
「休憩だなーッ!」「そうすっかあ、俺も休憩っ。」
「ゴクッ、ゴクゴクッ!!」「あああ、冷たい水は美味えなあ。」
パタパタパタパタパタパタ〜ッ!! (団扇を仰ぐ音)

「...。」

(気が散るなあ...。
目標は、個戦の優勝...!!)

ミーーーーン! ミン! ミン! ミーーーーン!
ミーーーーン! ミン! ミン! ミーーーーン!
ミーーーーン! ミン! ミン! ミーーーーン!
ミーーーーン! ミン! ミン! ミーーーーン!
ミーーーーン! ミン! ミン! ミーーーーン!
ミーーーーン! ミン! ミン! ミーーーーン!
ミーーーーン! ミン! ミン! ミーーーーン!
ミーーーーン! ミン! ミン! ミーーーーン!
ミーーーーン! ミン! ミン! ミーーーーン!
ミーーーーン! ミン! ミン! ミーーーーン!

ジジジジジジジジジジジーーーーッ!

ジジジジジジジジジジジーーーーッ! (セミの鳴き声)

「とほほ...(汗)。」

(コリヤ駄目だあ、僕も休憩しよッと…。

今日はやる気起きないなあ…、

射つの疲れたなあ…。)

昭和60年の8月は天候に恵まれ、夏らしい晴れの日が続きました…。

今日も、お山の上は燦燦と太陽が降り注いでいます…。

お楽しみの、『工大』『宮学』合同の夏合宿…、

連日ジリジリとした暑さがこうも続くと…、

さすがに集中力が途切れてきます…。

この暑さと疲労で、テンションはドンドン下がる一方…。

休憩の居場所は、いつの間にか男女それぞれに分かれ出し…、

気が付いた時には、我々の誰もが無口になって…、

女の子に話し掛けることすらしなくなりました…。

「きゃはは〜。」 「キャッ!」 「うふふふふ。」 「ほほほほほー!」

「…。」

(しかし女の子は元気だなあ…。

それに比べ、男連中はグッタリしているけど…?)

ミーーーーーン! ミン! ミン! ミーーーーーン!

ジジジジジジジジジジジーーーーッ! (セミの鳴き声)

そんなある時です…。

「ちわー」 「こんちわーッス!!!!」 「チワ〜ッス!!!!」 「コンチワあーす!!!!」

「こんにちはー。」 「今日はあー」 「はじめましてえ〜!」 「こんにちは。」

「ヤァ〜、皆んな元気でやっているかなァ〜?

どうだMiyabiィ〜、調子の方はァ〜?」

「は、はい、何とか...!」

夏合宿の様子を伺いにお山の上まで足を運んでくれたのは、4年生の先輩達でした....。

とにかく、女子大と一緒に合宿するなど前例が無かったので....、

物珍しさも手伝ってのことでしょうか、幾人もの先輩方が入れ替わり立ち代り顔を出しました...
。

更には、社会人のOBも来てくれました....。

そして、あり難いことに彼らは様々な差し入れをくれるのです....。

「ホレ、差し入れのビールだ、打ち上げで飲めよ!」

「ゴチで一す!!!!!!!!!!」 「ありがとうございますま〜す!!!!!!!!!!」

「頑張れよッー、飲み物置いていくかなァー!!」

「ゴッチャンで一す!!!!!!!!!!」 「ありがとうございますま〜す!!!!!!!!!!」

そんな中、あるOBの先輩からは…、

「オーイ!!

これは、俺らの代3人からだー!!

打ち上げの夜に、皆で使えよー!!」

「ありがとー、ござー、?????」

それは、大きなダンボール箱に入った沢山の花火でした…。

「けらけらけらけらけらけらっ!!!!!!!」

当初は戸惑いもあった、女子大と一緒にの夏合宿も…、

いつの間にか打ち解け、練習に切磋琢磨出来たのです…。

そして最終日の夜を迎え、皆が安堵の表情を浮かべています…。

「ハハハハハハハハハーッ!!!!!!!」

「ふふふふふっ!!!!!!!」

しかし、時間の経過と共に…、

男も女も、だんだんと静かになりました…。

連日の暑さと疲労のせいでしょうか…。

酔いも早く回ったようです…。

「シー——ン。。。。。。。」

「シーン。。。。。。。」

コロコロコロ～、、、コロコロコロ～、、、

スウ～イッチョン、、、スウ～イッチョン、、、(虫の鳴き声)

「ヨーシ!!

そろそろ、花火でもやるかー!!」

「やろうぜー!!」

「私も花火した～い!!」

「花火～!!」

「ワーッ!!」

「下の駐車場に皆で行こうぜーッ!!」

スウ〜イッチョン、、、スウ〜イッチョン、、、
リリリリリ〜ツ、、、リリリリリ〜ツ、、、(虫の鳴き声)

いよいよ夏合宿のお楽しみ、花火です…。

私達は屋外に移動し…、

ロッジ下にある大駐車場で、全員で遊ぶことにしました…。

「ヨシッ、この大きいの点けるぞーッ!!」

「こっちも打ち上げるゾ〜!」

「キャ、こわい!」

「花火〜!」

「ワーッ!」

ドドドドドドドドドドドドドドドドドド〜ッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

びゅるるるるるるる〜っ!!!!!!!!!!パンッ!!!!!!!!!!(花火の音)

ほろ酔い気分で花火に興じる、『工大』『宮学』の男女18名…。

花火に着火し、手元や足元から上がる大小色とりどりの炎に…、

ぼうっと映し出される彼ら彼女らの姿…。

「ハハハハハー!」

「キャッ!」

「ワーッ!」

ドドドドドドドドドドドドドドドドドド〜ッ!!!!!!!!!!

びゅるるるるるるる〜っ!!!!!!!!!!パンッ!!!!!!!!!!(花火の音)

しかし火が消えると、辺りは何処もかしこも真っ暗闇です…。

ロッジから漏れる僅かな灯りの他には外灯が無いのです…。

遥か遠くには、美しい仙台市街の夜景が浮き上がって見えてとても綺麗です…。

びゅるるるるるるる〜っ!!!!!!!!!!パンッ!!!!!!!!!!

パチパチパチパチ〜ツツツ!!!!!!!!!!!!!!!!!!(花火の音)

真っ暗で、隣にいるのが誰なのかよく見えません…。

と、その時…!?

パチパチパチパチ～ツツツ!!!!!!(花火の音)

「きゃはは～。」

「えッ…!?’

暗闇に紛れて、私の右腕に…、

何と…、

Ｙちゃんが腕を組んできたのです…!

パチパチパチパチ～ツツツ!!!!!!(花火の音)

「きれいね～。」

「…!?’

Ｙちゃんの柔らかい手と腕が…、

他の人に気付かれないようにしながら…、

私に絡み付いてる…!

チロチロチロチロジジジジ……(花火の音)

「線香花火って、かわいいね～。」

「…!?’

あまりの突然の事に、言葉を失った私でした…。

でも…、

嬉しかった...

それは短い間でしたが、至福のひとつきでした...

「...!?!」
(ひょっとしたらＹちゃん、僕のことが好きなのかな...!?)

パチパチパチパチパチパチ〜ツツツ!!!!!!!!!!!!!!

ドドドドドドドドドドドドドド〜!!!!!!!!!!(花火の音)



122 個戦でアクシデント!?

ミーーーーーン! ミン! ミン! ミーーーーーン!
ジジジジジジジジジジジーーーーッ! (セミの鳴き声)

大学3年目、昭和60年の夏...

3度目の挑戦となる、『東北学生アーチェリー個人選手権大会』...

その日がやってきました...

(目標は、個戦の優勝...!!)

アーチェリーの選手にとって最大の名誉は、オールラウンドで勝つこと...

すなわち、90m・70m・50m・30mの全ての距離の合計得点で勝る者こそが、ホンモノの王者と云えるのです...

今春、50m・30mの短距離のみで競われる『王座決定戦』で優勝した私でしたが...

やはり『個戦』を制してこそ、自他共に認められるチャンプになれるのです...

(目標は、個戦の優勝...!!)

振り返れば...

『個戦』初挑戦の1年目は、不幸にも新調したばかりの弓が盗難に遭い不調に終わりました...

2年目は自己新を更新し4位の座を得たものの、レベル的にはもう一つ...

しかし、今回は違います…。

これまでより、技術的にも精神的にも一回りも二回りも成長を遂げて…、

自身満万、堂々とターゲットを狙う私がありました…。

(目標は、個戦の優勝…!!)

ところが…!?

まさか、まさかのアクシデントが起きたのです…。

ミ————ン! ミン! ミン! ミ————ン!

ジジジジジジジジジジジ————ツツ! (セミの鳴き声)

会場となったのは、仙台市の『秋保森林スポーツ公園』です…。

オールラウンドを2日間で2回、すなわち『インカレ』と同じダブルラウンド競技で行う『個戦』…。

その初日…、

競技が開始される直前に、ウォーミングアップする私でした…。

その時です…。

何気なく、両手を大きく回す体操をしたら…、

グサッ!

「...!?!」

それは一瞬の出来事でした…。

何と、腕を振った勢いで、腰に下げた矢筒のアローに手が刺さったのです…。

正確には、『ノック』(矢の後端、弦をつがえる溝の部分)に、右手薬指の指先の先端部分が深く刺さったのです…。

ドクドクドクッ〜!(傷口から血が溢れ出てくる様子)

「...!?!」

右手薬指といえば、弦に掛ける3本指の一つで重要な部分です…。

私は流れ出る血を抑えるのに手間取り、間もなく後輩からテーピングを借り受け急いで巻いて止血したものの…、

予想だにできなかったアクシデントに、思わず気が動転してしまいました…。

ジーンン!(傷口の痛み)

「...!?!」

果たしてこれで射てるだろうか...!?

いつものショットが可能か、『サイト』(照準器)の位置が微妙に変化して正確にグルーピングできるだろうか...!?

気掛かりな事柄が次々と頭に浮かんできました...

これでは優勝を狙うどころか、まともに射てるかどうかさえ怪しい状態です...

動揺を隠し切れない私...

しかし無情にも、間もなく競技が開始されたのです...

「♪ブブブブブブ!!」(ブザーの音)

スタートは90m競技です...

雲が殆どない青空に、朝から陽が照りだして...

暑く長い一日を予感させるような外気温を感じながら...

「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」

グラウンドの左右一杯に並んだ学生アーチャー達が、一勢に矢を放ち始めました...

「バシュッ!」

「ボンッ!」

(痛ててッ...!!)

私の苦手とする90m、射ったアローはまるで天井サーブの如く高い山なりに飛んで行ってようやく標的に到達します…。

深く裂けた薬指は、弦を引いている時よりも放つ時が痛いのです…。

意識すると緊張から引き手に力みが入り、苦しいショットが続きました…。

「バシュッ!」

「ボンッ!」

(痛ててッ...!!)

結局、今一つ振るわない得点で初日の90mを終えました…。

ジーーーーン!(傷口の痛み)

ジーーーーン!(傷口の痛み)

その痛みは、矢を放つ度ごとに増していきました…。

(バカバカバカッ…!!!!)

よりによって…、

何で、こんな大事な試合で指をケガしてんだよッ、俺はッ…!!!!)

偶然とはいえ、不注意によって起きた突然のアクシデント…。

不幸にも、アーチャーにとって大変重要な引き手の薬指に深い傷を負った私…。

90m競技終了の合図が鳴っても、弓を抱えたままシューティングライン上に茫然と立ちすくみ…、

血で真っ赤に染まったタブと自分の指先を見つめながら、自分の不甲斐なさを責める私でした…

。

(まずい、まずい、まずいッ…!!!!)

このままじゃ、最後まで射てるかどうかさえ危ういぞ…!?)

ミーーーーーン! ミン! ミン! ミーーーーーン! ジジジジジジジジジ

ジジーーーーーッ! (セミの鳴き声)

動揺し続ける私には、眩しく照り返す灼熱の太陽も、そこら中から飛び交う虫たちの雑音も全く気になりませんでした…。

この日のように風が全く吹かない『秋保森林スポーツ公園』は又とない好条件ですから、普段ならば気分良く射っていた筈です…。

それが…。

速報ボードに自分の名前が掲載されたのを気付いても、下位の目立たない順位である事に腹を立てたりしながら…、

またも恨めしい右手の指先を睨めつけました…。

ふと見ると、ある選手が休憩時間の合間にノッキングポイントを修理していました…。

そして彼は、そこに『瞬間接着剤』を一滴垂らしたのです…。

(そうだ、その手段があった…!!)

何故、そのアイデアを直ぐ思い浮かばなかったのだろう…？

私は心の中でそう思いながら、思わず笑い出しそうになりました…。

そうです、『瞬間接着剤』作戦です…。

苦肉の策とは、こういう事を指すのでしょうか…。

怪我の程度は、その範囲は狭いとはいえ本来なら直ぐに病院に駆け込んで縫合して止めるような裂傷でした…。

私は思いきって、切れた指先に『瞬間接着剤』を多めに塗って傷口を塞いでみたのです…。

すると、切り口は問題なく固まって止血されたではありませんか…!

(おや…!?)

やった、これなら何とかいけそうだッ…!!)

「♪ブブブーーーー!!」(ブザーの音)

引き続き、70m競技の開始です…。

「バシュッ!」

「ボンッ!」

(よしッ、リリース出来るぞッ…!)

とにかく、薬指が痛くないのです…。

傷口はガッチリ接着され、これなら普段のように問題なく指が動かせるのです…。

「バシュッ!」

「ボンッ!」

(よしッ、いけるぞッ…!)

「バシュッ!」

「ボンッ!」

(よしッ...!)

一時は絶望の淵に立たされ、自信を失いかけていた私でしたが....、

『瞬間接着剤』という秘策によって調子を取り戻し....、

後半に入ってからショットする指に問題は無く、得意の短距離競技に入ってからシューティングにゆとりも生まれ....、

その後も順調にスコアを重ねていきました....。

「バシュッ!」

「ボンッ!」

(目標は、優勝...!!)

これまでのところ、男子の暫定首位は青森大1年のM選手です....。

私は得意の30mで高得点を連発し、じわじわと彼に追いすがっていきました....。

ミーーーーーン! ミン! ミン! ミーーーーーン! ジジジジジジジジジ
ジジーーーーッ! (セミの鳴き声)

ミーーーーーン! ミン! ミン! ミーーーーーン! ジジジジジジジジジ
ジジーーーーッ! (セミの鳴き声)

「アッチッチッチーッ! 「あっち」
「ふーっ。今日も暑っついよなあ〜。」

『ダブルラウンド競技』で争われる、昭和60年の『東北学生アーチェリー個人選手権大会』その最終日…。

グラウンドに居る全ての者が、真っ黒に日焼けした顔でじっとターゲットを睨んでいます…。

額や背中から、時折ポタッと…、

塩汗がしたたり落ちてくる…。

今日も朝から無風で、しかも蒸し風呂の様な暑さです…。

「バシュッ! 「ボンッ!」
「バシュッ! 「ボンッ!」
「バシュッ! 「ボンッ!」
「バシュッ! 「ボンッ!」
「バシュッ! 「ボンッ!」
「バシュッ! 「ボンッ!」

アーチェリーの数ある種目の中で、最も長時間に渡って競われるのが『ダブルラウンド競技』です…。

屋外にて1日に90m・70m・50m・30mの距離から各36本ずつ放ち、それを2日繰り返す…。

2日間合わせた総本数が288本という、いわばマラソンみたいな長丁場の競技で…、その合計得点の一番高い者が、真の「東北チャンピオン」に輝くのです…。

「バシュッ!」

「ボンッ!」

(目標は、優勝...!!)

初日を通じて男子のトップは、青森大1年生のM選手です…。

私はまたも長距離で出遅れてしまい、必死に追いつけた前日の貯金が無くなりかけていました…。

指の状態はまずまずなのですが、得点にどうも伸びがありません…。

例によって、得意の短距離で巻き返しを図るしかないようです…。

「バシュッ!」

「ボンッ!」

(目標は、優勝...!!)

何としても獲りたい、念願の『個戦』のタイトル…。

その私の前に、立ちはだかる敵は…?

ミ————ン! ミン! ミン! ミ————ン! ジジジジジジジジ

ジジーーーーーッ! (セミの鳴き声)

「ハーッ、」 「暑いナー!」 「ふー。」

「...。」

暫定トップのM選手は、高校時代インターハイで優勝したこともある実力者でした...。

その鳴り物入りの男が、この年に青森大学へ入学したのです...。

ところが...。

「バシュッ!」

「ボンッ!」

1日目は長距離で圧倒的な得点を叩き出した彼でしたが、長距離で何故か平凡な得点に終わっていました...。

「ハーッ、」

「...。」

M選手の不調の原因は、実はこの暑さだったのです...。

その事は後から判ったのですが、彼は長距離でダントツの得点をマークしながらも、短距離に入ると凡ミスを犯していたのです...。

ともかく、そのM選手に追いつき追い越さなければ『個戦』タイトルは私の手に入りません…。

「バシュッ!」

「ボンッ!」

(目標は、優勝…!!)

ミ————ン! ミン! ミン! ミ————ン! ジジジジジジジジジ
ジジ————ツツ! (セミの鳴き声)

「バシュッ!」 「ボンッ!」

「バシュッ!」 「ボンッ!」

「バシュッ!」 「ボンッ!」

「バシュッ!」 「ボンッ!」

「バシュッ!」 「ボンッ!」

「バシュッ!」 「ボンッ!」

午後になると、太陽の強い日差しがひととき強くなりました…。

的を狙っていると、光が眩しくてしかも暑さで頭がポーッとします…。

体中に、汗が次から次へと流れていきます…。

「ハーッ、」

「…。」

気がつくと、シューティングラインに立つ者が幾分減っていました…。

暑さに負けて、1人また1人とリタイヤする者が続出していたからです…。

その様子は、まるでサドンデス状態…。

「バシュッ!」

「ボンッ!」

(目標は、優勝…!!)

そんな中、気を吐く私は得点を連発し…、

じわじわと青森大のM選手に追いすがっていききました…。

チャンスは、いつも突然訪れるものなんですね…。

「0点!」「0点!」「0点!」

「ハーッ、」

目標とする青森大1年生のM選手は、30Mで失点を重ねるとい信じられないミスで自滅していました…。

ミーーーーーン! ミン! ミン! ミーーーーーン! ジジジジジジジジ
ジジーーーーッ! (セミの鳴き声)

原因はタオルでした…。

汗を拭う為にぶら下げたタオルが、ショットの際に弦に接触してしまったのです…。

その影響で有らぬ方向に飛んでいった彼のアローは、得点帯を大きく外れ…、

突如起きたトラブルの原因に気付くまで、何射も捨てる羽目になった様です…。

これで集中力を欠いたM選手には、もはやトップに返り咲こう、あるいはしがみつこうとする気力も貪欲さも残っていませんでした…。

「バシュッ!」

「ボンッ!」

(目標は、優勝...!!)

一方、M選手の脱落を知らぬまま、理想のショットを求めて自分の世界に入り続ける私...

ところが必死に努力を重ねるものの、思うように得点が伸びません...

でも最後の288本目まで気を抜かないように注意しながら、ただひたすら耐えに耐え偲び射ちました...

私がアーチェリーを通じて学んだことは、沢山ありますが...

その一番は、『簡単に投げ出さないこと、最後の最後まで努力を惜しまないこと』です...

(最後の1本ッ...!!)

「バシュッ!」

「ボンッ!」

(よしッ...!!)

チャンスの神様がいるとすれば、それは最後まで決して諦めないで辛抱強く努力し続けた者にだけに微笑むのではないのでしょうか...?

この時は、まさにチャンスの神様が私に微笑んでくれたと思うのです...

ミ————ン! ミン! ミン! ミ————ン! ジジジジジジジジジ
ジジ—————ッ! (セミの鳴き声)

「それでは～、
東北学生アーチェリー個人選手権大会の～、
最終成績を発表しま～す!!!
男子第1位～、
『Miyabi選手(東北工業大学)～!!!』」

「パチパチパチパチパチパチパチパチ～!!!!!!!!!!!!!!」

それは、ついに念願の東北『個戦』優勝を果たした瞬間でした…。

自他共に認められる、本物の『東北の雄』が誕生した瞬間です…。

「Miyabiィー! オメデトー!」 「先輩、おめでとうございます!!」
「やったな～ッ、Miyabi～!」 「おめでとうございます、やりましたね。」

「あ、ありがとう…!」

指の怪我という思わぬハプニング、そして逃げ出したくなるような灼熱の太陽…、

それを乗り越え、この手で掴んだ勝利…。

成績としては平凡な総得点でした…。

それにライバルの自滅があったとはいえ、結果的には文句なしの優勝でした…。

でも、困難に諦めず勇気を振り絞ってチャレンジし続けた私の手には、間違いなくチャンスが巡ってきたのです…。

しかし、そのチャンスを捕まえられるかどうかは…、

結局、己にその勇気があるかどうかではないでしょうか…？

チャンスは、いつも突然訪れるものなんですね…。

まさに熱く燃えて、暑かった夏休みが終わり…、

後期授業が始まって直ぐの、ある日の夕方です…。

例によって、仙台駅前のアーチェリー・ショップに顔を出しました…。

お世話になっているM社長に、『個戦』優勝の報告をするためです…。

「こんにちは…!」

「Miyabi君、聞いたゾ!

よく頑張ったなァ!」

「はい…!

M社長お陰様です、僕とっても嬉しいです…!」

すると...!?

「ところでMiyabi君、コレを預かってたゾ!

「は...?」

手渡されたそれは....、

1通の手紙でした....。

その手紙を受け取った瞬間から、私のハートはキュンとなったままになりました…。

アーチェリー・ショップを後にしたその晩…、

帰宅するなり、まるで隠れるように息を殺し足音を立てずに廊下を歩き、そおっと自分の部屋に入って…、

家族の誰からも見らない様に、扉がしっかりと締まっていることを確認してから…、

ようやく…、

それを慎重にカバンから取り出しました…。

すると…、

部屋の照明の薄暗い灯りの下に見えたのは…、

可愛らしい絵柄の封筒です…。

その表には…、

ブルー色のペンで書かれた、これまた可愛い字体の宛名がしたためてありました…。

『Miyabiコーチへ』

差出人は....、

『Y』

(Yちゃん...!?)

それは紛れもなく、あの娘からの便りでした....。

Yちゃん....。

宮城学院女子大学2年のYちゃんは、夏合宿の花火で....、

暗闇に紛れてそっと腕を組んで以来....、

顔を合わせても、お互い全く会話が無いままだったのです....。

(やっぱり、Yちゃん僕のことを好きなのかな...!?)

思えば....、

あ後の私は、試合のことばかり頭にあって....。

彼女のことを考える余裕も無かったのです....。

そして今日、この手紙…。

中には何が書かれているのか…。

(Yちゃんから、また宮学のコーチの依頼かな…!?)

宮学のYちゃんは山形県出身で…、

聞いた話では、大学の近くのアパートに独り暮らししているという噂です…。

その彼女が、何故この私宛てに手紙を託したのか…。

一体、何を伝えたかったのだろう…。

(ま、まさか…!?)

Yちゃんからのラ、ラ、ラ、ララララララララララ…、

ラブレターじゃないよね、ま、まさか…!?)

震える手で封筒を掴んだまま私は…、

深呼吸をして気持ちを落ち着かせてから、ハサミで丁寧に開封しました…。

そして間もなく中から折り畳まれた便箋を取り出し…、

開くなり、ブルー色で書かれた文面に目を落としたのです…。

すると…!?)

Miyabiコーチへ

Miyabiコーチのことが好きです。

私のお兄さんになって下さい。

お願いします。

電話待ってます。

Yより

TEL xxx-xxxx-xxxx

(はひ—————ッ!!!!!!)

その手紙を受け取った瞬間から、私のハートはキュンとなったままになりました…。

「エエ～、
次の課題では様々に異なる形式に書かれておりますが～、
それがどの様に変化するか単位系ごとに調べなさいィ～」

「ムフフ...。」

(僕は、『個戦』で勝って真の東北チャンピオンなんだぞ...!!)

今年最大の目標だった、『東北学生個人選手権』で優勝を果たした私は...

またもや天狗になっていました...

後期授業に入って、今度こそ今度こそ、本気で勉強を頑張らなくてはいけないのに...

「エエ～、
これらから導き出されます法則のいくつかを示しますが～、
電荷に関するクーロンの法則で解きますと次の様にィ～」

「ウヒヒ...。」

(昨日、Yちゃんからラブレターもらったんだぞ...!!)

そんな墮落しきった私に、更に追い打ちを掛けたのが...

大好きな宮学のYちゃんからの手紙でした...

「エエ～、

その後も、大学構内の公衆電話で幾度掛けても彼女には繋がらず…、

八木山を降りてから、仙台駅の公衆電話でも繋がらず…。

(Yちゃん、まだアパートに帰らないの…?)

仕方なしに、その日は帰宅することにしました…。

(Yちゃん、一体どうしたんだろう…。)

とっくに陽は落ちて、真っ暗な街の中を走るローカル電車に揺られながら…、

私は左右へ次々と流れていく家々の灯りや、クルマの明かりを虚ろに眺めていました…。

そして思い浮かべるのは、大好きな宮学のYちゃんの笑顔…。

「はあ…。」

(Yちゃん、やっぱり僕のことを嫌いになっちゃったのかなあ…?)

多賀城駅のホームを降りて、暗闇の中をさまよい歩きながら頭に思い浮かぶのは、やっぱりYちゃんの笑顔です…。

天真爛漫という言葉がありますが、ケラケラと笑う時のYちゃんの表情は、正にその言葉がピッタリと当てはまります…。

彼女の屈託のない笑顔と明るい性格には、周りの人間をも自然に元気にさせる様な魅力があったのです…。

可愛らしい顔立ちに、性格の明るいYちゃん…。

考えてもみれば、何と魅力的な娘なんだろう…。

きっと男だったら誰しものが可愛い女の子だなと、異性を感じる筈では…!?

そんな彼女を誰かに奪われたりでもしたら…!?

そんな妄想が、頭の中をグルグルと回って…、

気が付いた時には、私は狭い路地の暗がりを見知らぬ人に無意識に駆け出していました…。

(逢いたい…。)

電話が繋がらなかったことで、ますますYちゃんに逢いたいという願望が増していったのでした…。

そして、出来ることならば…、

Yちゃんの笑顔を、この僕が独り占めしてみたい…。

(Yちゃん、君が....、

スキだ....。)

そんな募る思いをぜひ、彼女に伝えたい....。

もう、居ても立っても居られなくなった私です....。

そして止む終えず、自宅から電話を掛け直す決意をしました....。

昭和60年は、携帯電話など勿論無かった時代です....。

ですから、我が家の茶の間に設置した唯一の電話機から女の子に電話を掛けるなどと....、

とても勇気のいる行為だった訳です...(笑)。

当然の如く、家族が寝静まった夜遅くを狙って....、

恐る恐る、Yちゃんにダイヤルしました....。

♪プルルルーー、プルルルーー、プルルルーー、

(ドキドキドキドキドキ...!!

Yちゃん、お願い出て...!)

♪プルルルー、

カチャッ!!!!

(繋がったッ...!)

「もしもし〜。」

「Yちゃん、ぼ、僕だけどさぁ...(汗)！」

「Miyabiコーチですか〜？
こんばんわ〜。」

「Yちゃん、こ、こんな遅い時間にゴメンね...!」

「いえ、気になさらないで下さい〜。
電話もらえて、私とっても嬉しいです〜。」

「ぼ、僕も手紙もらえて嬉しかったよ...!
ぼ、僕さあ....、
あ、あのさあ...(汗)!」

「ねえ、コーチ〜？
明日、大学終わってから一緒にお茶しませんか〜。」

「う、うん、うん、そうだね...!
そ、そうそう、街で逢ってゆっくり雑談でもするのでしょうか...!」

「待ち合わせは、アーチェリー屋さんで如何でしょうか〜。」

「うん、そうだね...!
じゃ、明日待ってるからさ...!」

「約束ですよ〜。」

「うん、必ず...!」

こんなやりとりがあってから、私は受話器を置くか置かない内にニヤけた顔でバンザイ・ポーズをとっていました...。

(やった、やった...!)

ついにやった...!

明日はいよいよYちゃん的笑顔を、この僕が独り占め出来るんだぞ...!

興奮を抑えきれない私でした...。

そして、翌日....、

夢が実現する、その瞬間が訪れたのです...。

「オイ今日はどうしたんだ、Miyabi君!？」

私の様子が、余ほどいつもと違って見えたのでしょうか...。

カチン...!コチン...!カチン...!

「い、いえ....、別に...。」

挙動不審の私に、不思議そうに声を掛けるM社長でした...。

と、そこに...!?

「失礼しま〜す。」

「オッ、Yちゃんいらっしやイ!」

カチン...!コチン...!カチン...!

「こ、こ、こんにちは...。」

何だか照れくさくて、Yちゃんを直視できない私です...。

「では参りましょう、Miyabiコーチ〜。」

カチン...!コチン...!カチン...!

「は、は、はい...。」

「ン、お前達どうしたんだ、ーン!?!」

「打ち合わせですよ〜。」

カチン...!コチン...!カチン...!

「そ、そうですM社長、その、打ち合わせなんです...。」

「ーン!?!」

「きゃはは〜。」

カチン...!コチン...!カチン...!

「...。」

アーチェリー専門店をそそくさと出た2人は、南町通りを行き交う人々の群に混じり....、

秋陽が傾きやや長めの影が差す、雑踏の中を歩き出しました....。

「ウチの1年がこんなドジして、とっても笑っちゃったんですよ〜。」

カチン...!コチン...!カチン...!

「は、はは、そっかあ...。」

(宮学のYちゃんと私...。

今、2人っきりで街を歩いている...。

で、デート...!?!

夢が叶って嬉しい...。

女の子とデートは...、生まれて初めて...(赤面)。

女の子と2人っきりで歩くのも初めて...(赤面)。

この後、ど、どうしよう...!?)

きれいに整備されたアーケードに移ってからも、私はいつもより歩くペースを下げたまま彼女の歩調に合わせて進んでいました...

歩む2人の間には、常に約30cmほどの空間があり...

互いに体が触れ合うことはありません...

「きゃはは〜。」

カチン...!コチン...!カチン...!

「...。」

宮学のYちゃんは、次々と楽しい話題を振りまいてはケラケラと笑っています...

一方、私の方はというと...

彼女が興味を沸くような話題が、さっぱり提供出来ません...

Yちゃんと知り合ってこの1年と少しの間、漠然とではありましたが好意を抱いていたのは事実です...

本日、こうして初デートの日を迎えた2人でしたが...

そこには、微妙な距離感が存在したのです...

カチン...!コチン...!カチン...!

女の子とお付き合いなどしたことのない私は、どうして良いか判らなくなってしまいました...。

でも男として、女の子をリードせねばならないと....

私は勇気を出して一つ、彼女にある提案をしました....。

「Yちゃん、スパゲッティ(この頃はパスタとはまだ呼びません)でも食べようか...?
じ、実はこの近くに、美味しい店があるんだよ...?」

「オッケー〜。」

(...ホッ。)

繁華街のネオンが灯る時間に入って、辺りがどんなに暗くなっても....

まるでその一角だけが、パアッとスポットライトが浴びせられたかの如く....

向日葵のように明るい女性....

出された食事に舌鼓を打ちながら聞き惚れる、愛おしいYちゃんの弾むように響く声が....

洒落た店内に心地良くこだまして、料理が一層美味しく感じられます....

「Miyabiコーチの物まねで〜す。

『ぼ、僕、Miyabiです...。』

きゃはは～。

これね、宮学アーチェリ一部で大ウケなんですよ～。」

「は、はは、そっかあ...。」

細かい毛を織り込んだクリーム色のカーディガンに、しっかりとした生地で誂えた紺色のスカート
トを纏ったYちゃん...

ブティック・ランプの間接照明によって浮かび上がったエンジ色のカーテンを背景に、真正面に
腰掛ける彼女の上半身は...

まるで私の両の眼に突き刺さってくる位に、キラキラ眩しく光っています...

「きゃはは～。」

「ははは...!」

こうして時間の経過と共に...

2人の距離が、少しずつ、少しずつ縮まっていくのが...

あるいは微妙な違和感が、薄紙を剥がす様に消えていく手応えが...

私にもはっきりと感じられました...

濡れているかの様にツヤツヤと真っ黒に光っている短めの髪…。

イキイキと活力に満ちた黒い瞳、そして少し垂れた瞼がとても愛らしく…、

顎がほっそり少し小さめの唇…。

その顔が微笑む度に、とってもチャーミングに映る不思議な魅力がある人…。

(Yちゃん、何て君は愛おしいんだ…。

Yちゃんの顔を、こんなに接近して見られてウツトリ出来るなんて…、

僕は何て幸せなんだろう…!)

時間が経つにつれ落ち着きを取り戻した私は、彼女の前でだいぶ自然に振る舞えるようになってきました…。

そんな時です…。

「Miyabiコーチ～。

私のお兄さんになってもらえませんか～。」

「…。」

「私、2人姉妹の上なんですけど～。

小さい頃から～、

落ち込んだりした時があると～、

年上の兄がいれば良かったのになって、ずっと思ってたんです～。」

「そ、そうなんだ…。」

「初めて会った時から～、
Miyabiコーチって～、
とっても落ち着きがあって～、
しっかりした年上の人だなって～、
理想の兄みたいな人だなって思ってたんです～。」

「そ、そうなんだ...。」

「だから、Miyabiコーチに私の悩みや困りごとを～、
相談したり、いつも聞いてもらえたら～、
どんなに良いだろうな～って、
ずっと思ってたんです～。」

「そ、そうなんだ...。」

「だからMiyabiコーチ～。
私のお兄さんになってもらえますか～。
いいですか～。」

「う、うん、勿論...。」

そして、間もなく楽しかった初デートのひとときは終わりの時間を告げたのです...。

会計を済ませた私は、Yちゃんを店の外に誘導しました...。

さらに、彼女の乗るバス停の近くまで見送りながら....、

そこで思い切って告げました...。

「Yちゃん、今日はとっても楽しかったよ...。
また近い内に遊びに行こうか...?」

「えっ～。」

Miyabiコーチ、良いんですか～。
じゃ、また逢いましょうね～。」

「うん、そうだね...!
じゃ、家の電話を覚えておくからさ...!」

「約束ですよ～。」

「うん、必ず...!」

あれから数日後のことです…。

私は、どうしてもまた彼女に逢いたくなり…、

家族が寝静まったのを見計らって、深夜のTEL…。

愛しのYちゃんに、デートを申し込んだのです…。

その訳は…？

(初デート以来、僕の頭の中は寝ても覚めても君の事しか浮かんでこない…！

君に、もう夢中さ…！

あの声が聞きたい、美しい姿が見たい…！

そしてYちゃんの笑顔を、また僕が独り占めしたいのさ…！

そうだ…！

彼女をドライブに誘おう…！)

♪プルルルーー、プルルルーー、プルルルーー、

(Yちゃん、お願い早く出てよ…！)

♪プルルルーー、カチャッ!!!!

(良かった、繋がったッ…！)

「もしもし〜。」

「Yちゃん、ぼ、僕だけどさあ...!」

「Miyabiお兄さん、こんばんわ〜。
こんな時間に、どうなさったんですか〜。」

「Yちゃん、じ、実はさ...、
君の声がどうしても聞きたくなって掛けたんだよ、ゴメンね...!」

「困ったヒトですね〜。
でも、私もお兄さんの声が聞けて嬉しいですよ〜。」

「ほ、本当...!?
嬉しいなあ...!
実はさ、Yちゃんを今度...、
八木山の『ベニーランド』に誘おうかな...、
何て考えてたりしてたんだけど...!?
い、忙しいなら、無理にとは言わないけどさ...!?
ど、どおかな...!」

「わかりました、行きましょう〜。
でも、日曜日は用事があるし〜。
一体、いつ行けるかしら〜。」

「休講とかさ、平日に早く帰れる曜日はないの...!?
Yちゃんの都合に、僕が合わせるからさ...!」

「次の木曜日なら、午前で終了ですけど〜、
それじゃ、Miyabiお兄さんの大学が〜。」

「ば、僕なら平気さ...!

まあ、たまに1回ぐらい出席しなくたって大丈夫だよ...!

「わかりました〜。

待ち合わせは、またアーチェリー屋さんで如何でしょうか〜。」

「うん、そうだね...!

じゃ、当日はクルマを出すからさ...!

Yちゃんを『ベニーランド』に乗せていくよ...!

「え〜、お兄さんのクルマなんですか〜。」

「ま、まあね...!

ではYちゃん、木曜日お楽しみに...!

「約束ですよ〜。」

「うん、必ず...!

こんな調子で、半ば強引にドライブ&デートの計画を立てたのですが...

「親父、お願いがあるんだけど...。」

「どうしたー、Miyabiー?」

「木曜日、アーチェリーの練習があるからクルマ貸して欲しいんだ...。」

「駄目だなー、父さんもその日は使うんだよー」

「え`え`ッ...!？」

結局、クルマが手に入らないままデートの当日を迎えてしまったのです…。

「オイ今日はどうしたんだ、Miyabi君!？」

「い、いえ…、別に…。」

平日の真っ只中から、大学をサボってアーチェリー・ショップに居座る様子が、余ほど不自然に見えたのでしょう、不思議そうに声を掛けるM社長でした…。

と、そこに…、

「失礼しま〜す。」

「オッ、Yちゃんいらっしやイ!」

「では参りましょう、Miyabiコーチ〜。」

「ン、お前達どうしたんだ、ーン!？」

「M社長、そ、その…、打ち合わせなんです…。」

「ーン!？」

本来ならば、憧れのYちゃんとの再会を果たし、笑顔一杯の筈だったのですが…、

ドライブ計画の変更を余儀なくされ、心から喜べなかったのです…。

店を下りるなり、弁解を早速する私でした…。

「Yちゃん、じ、実はさ…、
クルマを出そうとしたんだけど、急に故障しちゃってさ…、
そ、それで今日は…、
『ベニーランド』まで仙台市営バスで行こうと思うんだけど…、
いいかな…、ゴメンね…!？」

「あら、それじゃ仕方ないですね～。
私はバス通好きだから、平気ですよ～。」

「ほ、本当…!?
良かったあ…!
実はさ、僕の通ってる大学『東北工大』前行きと同じ方向のバスに乗ればね…、
八木山『ベニーランド』まで30分だから、あっという間に着くのさ…!」

「わかりました、ではバスに乗りましょう～。」

「え、ええと、どれだっけかな…。
あ、あれかな…?
『緑が丘三丁目』行き…?」

♪プオオオーン!!!!!!!!!!

仙台駅バスターミナルを、定刻通り出発した仙台市営バスに揺られ…、

私とYちゃんは、八木山へと向かいました…。

座席は既に満杯だった為、仕方なしに立ったままの乗車となった2人は、隣同士並んで…、

吊革や手摺り棒に掴まったまま、乗り合いバス特有の上下左右の振動に耐えていました…。

バスの不快なエンジン音や車内の雑音、開いた窓から飛び込んでくる街の騒音で、会話もままならず、2人の無言の時間が続きました…。

やがて、バスが向山の坂を登り始めた頃、Yちゃんが声を上げました…。

♪プオオオーン!!!!!!!!!!

「ど、どしたのッ...!？」

「Miyabiお兄さん～、やっぱり私～、
『ベニーランド』より『八木山動物園』の方に行きたいの～。」

私を見つめながら、両の瞼をちょっとだけ深く閉じたYちゃんは...

眉間にしわを寄せたままの表情で訴えました...

「ホント言うと、『ベニーランド』はお友達と来たことあるの～。
でも『八木山動物園』は入ったこと無いよ～。」

「えッ...!?
あ、ああ...、いいよ隣だから...!
Yちゃんの行きたい所ならオーケーさ...!？」

「私ね～、絶叫ジェットコースターよりも～、
可愛い動物を～、触ってみたいの～。」

「あ、ああ...、そうか、それも良いよね...!?
Yちゃん、もうちょっとでバスが着くからね...!」

♪プオオオーン!!!!!!!!!!

意外でした...

活発なYちゃんは、遊園地が好みだとばかり想像していたものですから...

仙台市太白区八木山にある、遊園地『ベニーランド』と仙台市営『八木山動物園』は、道路を挟んで隣同士に所在します...

どちらも行楽シーズンには土日・祝日は大勢の人々でごった返す、家族やアベックの格好の人気スポットなのです…。

(『八木山動物園』で、大好きなYちゃんと手を繋ぎラブラブで園内をのんびりするの悪くないぞ…!)

おめでとう私は、恥ずかしいことに不純な事ばかり連想していたのです…。

ふと、車外を覗くと…、

「あれッ…!?

このバス、見たこと無いところを走ってるぞッ…!?’

「え～。」

♪プオオオーン!!!!!!!!!!

気付いた時、2人を乗せたバスはいつものコースを逸れて、坂をどんどん下っていました…。

「しまった…!!

この『緑が丘三丁目』行きは、『ベニーランド』と『八木山動物園』の前には行かないヤツだ…!!

「え～。」

数分後、バスを下車した私と彼女は…、

住宅が建ち並ぶ見慣れない景色を横目に、急坂をひたすら歩いて目的地に向かうことにしました…。

「はあ、はあ、はあ...、
Yちゃん、はあ、間違えちゃって、はあ、ゴメンね...!？」

「は～、困ったヒトですね～。
は～、は～、でも仕方ないですよ～。」

罰が悪い私は、彼女の少し前をトボトボと行きます...

恥ずかしさで下を向き、うなだれた恰好のままで...

前日の雨で出来た水たまりを避けながら、歩道の表面のブロックを辿る様にして登ったのでした...

息を切らし汗を垂らして、ようやく急坂を登り切った先に『八木山動物園』が在りました...

「はあ、はあ、やっと着いたッ...!!」

「は～。」

数分後、園内に入るなり...

先ほどまでの苦労をすっかり忘れさせる様な、明るい声が私の耳に聞こえてきました...

「きゃはは～。
これ、これ見て～、可笑的い～。」

「へえ、はははッ...!!」

動物園の人気者を前にして、はしゃぐYちゃん…。

「きゃはは～。

かわいい～。

これ、Miyabiお兄さんこっちも見て～、かわいいよ～。」

「へえ、ほんとだッ…!」

私には、キリンやライオンを観察するよりも…、

女性らしく少しポッチャリして魅力的な、Yちゃんの姿を眺めていたいのですが…。

園内をゆっくりと散策する夢は実現したのですが…、

2人は常に30cmほど離れたまま、お互い体に触れることはありません…。

(ああ…、本音はYちゃんの手を握りたいんだけどなあ…。)

「きゃはは～。

やっぱりチンパンジーってバナナの皮を3枚に剥くのよね～。

人間が食べるときは、4枚よね～。」

「そうなのッ…!?

僕はバナナ、確か皮を3枚に裂くけど…!？」

「え～。

じゃMiyabiお兄さん、お猿さんと同じね～。

きゃはは～。」

「ははははは…!!」

この日、動物園の力を借りて…、

徐々に徐々に、2人の距離は縮まっていきました…。

「かわいい～。

こっちはメーメー羊さんたちね～。

お兄さん、羊のコーナーは餌付け出来るみたいよ～。」

「へえ、ほんとだッ…!」

「私、餌あげてみたいの～。」

「じゃ、そうしょうか…!」

この後、とんでもないことになったのです…。

前日、夜遅くまで降り続いた雨で…、

この日の『八木山動物園』の施設の中は、あちらこちらが泥土になっていました…。

私とYちゃんは、靴が汚れないように足元に気を付けて園内を回ったのですが…、

まさか、あんな事が起こるとは…!?

「きゃはは～。

これ見て～、食べてる食べてる～。

きゃはは～。

これ、Miyabiお兄さん見てみて～。

ほら、Yの手から食べてるのよ～。」

「へえ、ほんとだッ…!」

「かわいい～。

こっちのメーメー羊さんたらね、もっと欲しがるのよ～。

ホントに食いしん坊なんだから～。

よしよし、キミにもあげるよ～。

「へえ、はははッ…!」

羊の餌付けに夢中のYちゃんです…。

そのコーナーには、数頭の羊が飼われていて…、

お客さんが餌を、低めの柵越しに直接与えることが出来たのです…。

「Miyabiお兄さん、楽しいわよ〜。」

「じゃ、今度は僕が餌あげてみようかな...。」

と、言うか言わない間に...

私の持った餌をめがけて、1頭の羊が私に飛び掛かって来るではありませんか...!?

バシンッ!!!!!!

「わ° わ° ッ...!？」

「え〜。」

それは、あっという間の出来事でした...!!

羊は、一瞬にしてジャンプしながら私の上半身に覆い被さってきたので...

その両足と胸ぐらで、汚らしいドロドロの泥土を....

私の上半身にベツトリと付けたのです...!!

気付いたときには、私の頭も顔も、そして着ていたポロシャツも泥まみれになっていました...。

「え` え` ッ...!？」

「きゃはは〜。」

その後は....

木陰のベンチに仲良く並んで腰を下ろし....

巨大なゲージに飼育された色とりどりの沢山の野鳥たちが、楽しそうに飛んだり跳ねたり、さえずったりするのを眺めながら....

ソフトクリームをほおぼる2人がいました....

「ペロッ、Miyabiお兄さん、さっきは笑ったりして～。
ペロッ、気にしてないですか～。」

「いいんだよYちゃん、ペロッ、どうせ僕はドジなんだからさ....。」

「私が、ペロッ、洗濯機で洗ってあげるんだけどな～。」

「え`え`ッ...!?
い、いや、ペロッ、こんなの平気だよ....。」

「ペロッ、だいぶ汚いですよ～。」

「ペロッ、ははははは...(汗)!!」

西の空に落ちて行く太陽が、雲の中にすっぽり覆われると....

少しヒンヤリした風が吹いきて、『八木山動物園』を取り囲むように立つ樹木の葉や枝が揺れてザサザワと鳴りました....

今日は、まだ2回目のデートです....

でも私は、お互いの呼吸が合ってきたという手応えを感じていました....

きっと2人の距離が縮んだのかも知れません…。

何故なら、Yちゃんが身の上話をし出したからです…。

「Yのね、お父さんとお母さんは教員なの～。
だから、私にも教員になれって言うのよ～。」

「…。」

「私、親を見ていて先生なんか絶対なりたくない、ずっと思ってたの～。」

「そ、そうなんだ…。」

「高校は県外に行きたいって、駄々こねたこともあったわ～。」

「どうして…?」

「だって子供の頃から～、
こうしろ、ああしろってウルサイだもん～。」

「…。」

「大学受験の時も、親が地元を勧めるんだけど～。
私、反対押し切って仙台の宮学に入ったんだ～。」

「そ、そうなんだ…。」

「特に、うちのお母さんは妹に甘くて～、
私には凄く口うるさいの～。」

今、遠く離れて清々してるわ〜。」

「...。」

「だってね、Yは2人姉妹のお姉さんなんだから〜、お嬢さんもらって、家を継ぎなさいだって〜。」

「なるほど...。」

「そんなのイヤ、だから家を飛び出してきたの〜。卒業したら仙台で暮らしたいの〜。」

「...。」

「早く結婚して、子供育てたいの〜。だって赤ちゃん、かわいいもの〜。」

「ふ、ふん...。」

意外でした...。

活発なYちゃんが、本当は早く結婚して家庭を持ちたいというのが夢だったとは...。

復路の市営バスを利用して仙台駅のバスターミナルを降りた時には、空には夕焼けが出ていました...。

帰宅を急ぐ男女が大勢すれ違うペDESTリアンデッキを、2人でゆっくり歩いてから....、

Yちゃんが乗るバス停に辿り着きました...。

楽しかった『八木山動物園』のデートもここまでです...。

「Yちゃんまたね...!」

「Miyabiお兄さん、またYを連れてってね〜。」

「今度はクルマで遊びに行くからね...!

「約束ですよ〜。」

「うん、必ず...!」

「じゃね...!」

「バイバイ〜。」

キラッ!!!!

小さめの顎、小さめの顔、真っ黒で光沢のある艶やかな髪の毛…。

「…!!!」

(宮城学院女子大のYちゃんが、僕を見つめているッ…。)

キラキラッ!!!!

ちょっぴり下がった目尻と、真っ黒でくりくりとしたつぶらな瞳…。

「…!!!!!!」

(Yちゃんの可愛らしい顔が、ボクの顔に大接近してるッ…。)

「ねえ、Miyabi兄さん～。
私、あなたのことが大好きなの～。
キスしてもいいかしら～。」

「…!!!!!!!!!!」

キラキラキラキラッ!!!!

彼女のその少し小さめの唇が、僕の唇にみるみる迫ってくる…。

「…!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ガバッ!!

チクタクチクタクチクタクチクタク…、(目覚まし時計の音)

(なんだあ、夢かあ…。

あッ!?

いっけねエ、すっかり寝坊しちゃった…!?

あーあ、今日も大学を休んじゃえ…!!)

昭和60年10月、私の大学生活はすっかりダラケきっていました…。

個戦優勝という一大目標を成し遂げた後は、アーチェリーの練習にも身が入らない毎日…。

鳥取県で開催の『秋季国体』出場も控えているというのに…。

あの頃は、脳味噌の中が『女の子』のキーワードばかりだったのです…(笑)。

(今度こそ、クルマでドライブするぞお…!!)

寝ても覚めても、Yちゃんのこと頭が一杯の私は…、

またしても講義をサボって、彼女を3回目のデートに誘ったのでした…。

ブルルルルルルルルル〜!!(カローラの音)

我が家に所有する唯一のクルマを駆り出して、ようやく念願のドライブに…!

ついに、我が愛しのYちゃんを迎えに行く日がやって来たのです…。

待ち合わせ場所に指定されたは、彼女の住まいにほど近い仙台市泉区桜ヶ丘の、とある一角です…。

ブルルルルルルルルル〜!!(カローラの音)

地図を片手に運転する私は、付近の路地をゆっくりと進ませながら…、

クルマを止める場所を慎重に選びました…。

その時の私は、興奮を抑え切れなかったのです…。

(この間近に、Yちゃんの一人暮らしのアパートがあるのかぁ…!!)

チッカチッカチッカ～、(ハザードランプの音)

来ました来ました、建物と建物の間からひょっこり姿を現したYちゃん…。

彼女は一瞬キョロキョロと辺りを見回したかと思うと、照れ臭そうな表情でカローラの助手席に乗り込んできました…。

バタンッ!!(ドアを閉じる音)

「こんにちは～。」

「やあYちゃん、遅くなってゴメンね…!？」

「ぜんぜん～。」

「道に迷いそうになっちゃってさ、この近くなの…!？」

「そうなんです～。
ウチの大学の子が多いから、見つからないようにしなきゃ～。」

「そ、そうだよね…。」

ブルルルルルルルルル～!!(カローラの音)

「このカローラに、Yちゃんを初めて乗せたね…!
僕、ドライブに誘えてとっても嬉しいよ…!」

「私も、Miyabiお兄さんと出掛けることが出来て嬉しいですよ～。」

「ほ、本当…!?
嬉しいなあ…!
Yちゃん、実はさ…、
先日の『八木山動物園』じゃ、失敗ばかりだったから…、

今度こそ君とドライブがしたくてさ...、
それで無理に誘ったんだよ、ゴメンね...!？」

「困ったヒトですね～。
でも、私もお兄さんといろんな話が出来て嬉しいですよ～。」

「実はさ、Ｙちゃんを今日は...、
松島町の『松島水族館』に誘おうかな...、
何て考えてたりしてたんだけど...!？」

「そうだったんですか～。」

ブルルルルルルルルル～!!(カローラの音)

「このクルマ、ちょっとボロなんだ...。
あっちこっち傷だらけだし、ボディカラーがね、ブラウンだし...、
Ｙちゃんを乗せるの、実はちょっと恥ずかしいんだ...。」

「気にしないで下さい～。
だって、クルマって乗っていると室内しか見えないじゃないですか～。
外の色は何色だって、走れば良いんですよ～。」

「そ、そうか...!
確かにそうだよな...!」

「あ、そうそう...、
一応、音楽もあるんだけどさ...!」

カシャッ!!(カセットテープをセットする音)

♪～♪～♪～♪、♪～♪～♪～♪、♪～♪～♪～♪

「お兄さん、これ何の曲ですか～。」

「『太田弘美』だよ...!

LPレコードからダビングしたんだ、良い曲でしょ...!？」

「え～、ええ、まあ～。」

2人を乗せた茶色のカローラは、順調に幹線道路を進行し....、

目的地の『松島海岸』へと向かって行きました....。

♪～♪～♪～♪、♪～♪～♪～♪、♪～♪～♪～♪(カセットテープに録音された『太田弘美』の曲)

「ねっ、感動するでしょ...!?!」

「え～、ええ、まあ～。

Miyabiお兄さん、他にはどんな音楽を聴くんですか～。」

「えッ...!?!」

他は...、ええと...、『みなみらんぼう』とかフォークソング...、あとは...、」

「ぷっ～。

きゃはは～。」

「ねえ、Yちゃん何で笑うのさ...!?!」

「だって～。」

ブルルルルルルルルル～!!(カローラの音)

「じゃ、Yちゃんの好みの歌手は誰なの...!?!」

「そうね～、Yが大好きなのは『プリンセスプリンセス』よ～。

毎日聴いてるの～。

最近は、『バービーボーイズ』が気に入ったの～。

『CCB』もカッコいいけど～。」

「ぷりんすぷりんす...?

ば、ばーぴー人形...?」

「『バービーボーイズ』だってば～。」

今度、お兄さんに聴かせるね〜。」

「う、うん...。」

ブルルルルルルルルル〜!!(カローラの音)

3回目のデート、念願のドライブ...。

(Yちゃんに、僕がこんなにクルマの運転上手だってことを見せなきゃ...!!)

前回のデートでは、散々だった私でしたが...

ハンドルさばき、アクセルワーク、ギアチェンジ...

クルマを操る今日の私は、まるで水を得た魚のようです...。

彼女にいささかも不安を与えることなく、カローラを超スムーズに走らせていました...。

松島町の『松島水族館』へ、いざ...!!

(動物が好きなYちゃんを、あそこに連れて行けば...

きっと大喜びだろうな...!!)

ブルルルルルルルルル〜!!(カローラの音)

2人が乗った茶色のセダンは、薄暗いトンネルを潜ってさらに進み...

暗闇から抜け出すと、右手に『松島湾』が見えてきました...。

「海よ～。」

若い男女をまるで出迎えるかの様に、太平洋の青い海が顔を覗かせたのです…。

太陽の光が海に反射してウィンドウに差し込み、カローラの車内がより一層明るくなりました…。

「もう着くよ…!」

キュ～! キュッキュ～!(ウミネコの鳴き声)

日本三景『松島』は、その湾の美しさで全国に知られております…。

その特徴は、大小さまざまなユニークな形をした松の木が生えた島々が、『松島湾』一杯に広がる独特の景観を持ちます…。

島々を観光船に乗って見るのもよし、海岸から眺めるのもよしです…。

絶景をひとめ観ようと、一年を通じて大勢の観光客が足を運びます…。

Yちゃんと私が訪れたこの日も、クルマと人で一杯…。

あと一歩というところで渋滞になり、なかなか前に進みません…。

「混んでるのね～。」

「ど、何処に停めようかな…!?!」

滞る原因は、前方のクルマの1台1台が、幾つか在る既に満車に近い状態のパーキングに入ろうと

するからです…。

私はハンドルに添えた指を上下に動かし、気を揉みながら前が進むのを待っていました…。

しかし、クルマの列はちょっと進んでは停止、またちょっと進んでは停止…。

いわゆる足踏み状態で、事態は一向に好転しません…。

「もう…!

何でこんなに混んでるんだよッ…!!

速く前、進めよッ…!!」

「あ～あ。

Miyabiお兄さん、ぷつつんしちゃった～。」

「ご、ごめん…、つい…。」

焦る気持ちからついカッとなって、取り乱した姿を彼女の前でさらけ出してしまった私でした…。

「Y、後であそこのお土産屋さんにも寄りたいの～。」

(あーあ…、

とっととパーキングに入れて…、

早くYちゃんを『松島水族館』に連れて行きたいなあ…!

館内はきっと薄暗くてちょっと怖いから…、

彼女は僕にピッタリくっついてくる筈…!

そ、そこで彼女の手をギュッと握って…、

そ、そして、そして…、

チュチュッとお…、)

「ねえ、聞いているの～。」

「えッ、何だっけ...?」

「もう〜。」

ブルル〜!!(カローラの音)

ようやく1つ目のパーキングに入れたのですが、探せど探せど一向に空きスペースが見つかりません…。

「ちえッ、一杯だ...!」

やむ終えず、隣のパーキングに移動しました…。

ブルル〜!!(カローラの音)

狭い通路を苦労して移動して、2つ目のパーキングに入ったものの…、

「こっちはどうだ...!?

あッ、あそこが空いてるぞ...!」

見つけた場所が、他のクルマに目の前で奪われる始末…。

「あッ、先越されたッ、クソッ...!」

(早くしないと…、

『松島水族館』のアシカのショーが始まっちゃうじゃないか...!

イライライライライライライライライラ...!)

家族連れなど、多くの観光客が訪れる『松島海岸』…。

その町営駐車場には、連日大量のクルマがひしめき合う様に停まっているのです…。

「あ、あったッ…!!」

その中で、空きスペースをようやく確保しました…。

(早く、早く降りて、Yちゃんを『松島水族館』に…!!)

バタンッ!!(ドアを閉じる音)

「あゝ、あゝ くれッ…!？」

「どうしたんですか〜。」

「キー付けたまま、ドアロックしちゃった…!？」

「え〜。」

キュ〜!キュッキュ〜!(ウミネコの鳴き声)

ルルルルルルルル〜!!(カローラの音)

「も、もしもし....、
あ、あの、JAFですか...!?
え、ええと....、
『キーの閉じ込み』をしてしまったんです...!!
僕、会員では無いんですが....、
直ぐに来て、開けてもらえませんか...!?
場所は、『松島海岸』の町営駐車場なんです...!!
は、はい....、
ええ、そうです...!!
ここで待ってますから、お願いします...!!」

カチャン!チーン♪(公衆電話を切った音)

(シュン....。)

「え〜。」

アホウ〜!アホウ〜!アホウ〜!(カモメの鳴き声)

3回目のデート、念願だった宮学のYちゃんと初ドライブ...

その最高の舞台となる筈だった『松島海岸』へ到着した直後に....、

カローラにキーを付けたままドアをロックしてしまうという....、

信じられない様な失態を犯してしまった私....。

(シュン....。)

「え〜。」

ザザァ〜〜〜ッ! ザザァ〜〜〜ッ!(岸壁に打ち寄せる波の音)

木陰のベンチに腰掛け、海を見ながらただひたすらJAFの救援を待つ2人…。

うっかりミスとはいえ、大事なデートにあるまじき出来事です…。

私は当初、自分のした事が直ぐに理解できずに、ただ途方に暮れていました…。

間もなく、重大なミスに気付いたのです…。

顔から火が出る位に恥ずかしくなりました…。

(シュン…。)

「え〜。」

♪一間もなく一松島湾島巡りの一観光船が一出航致しますー
ーご乗船のーお客様はーお早めにーお乗り下さいー♪ (アナウンス)

今朝、ハプニングを起こしていなければ、『松島水族館』をはじめ観光船で島巡りや周辺への散策をとっくにしている筈でした…。

穴があったら入りたい気持ちです…。

解決方法は、JAFを呼ぶしかないと決断したのですが…、

そう思い付くまでに、暫く掛かってしまったのです…。

私とYちゃんは殆ど会話も無いまま....。

そして、ただ時間だけが刻々と過ぎていきました....。

(シュン...。)

「え〜。」

ルルルルルルルルル〜!!(カローラの音)

JAFの救援を要請してから、かれこれ2時間以上は経過したでしょうか....。

ようやく1台の青白色の特殊な車両が、クルマの列を掻き分けるようにして『松島海岸』の町営駐車場に滑り込んできました....。

大きく手を振り、JAFのトラックを招き寄せる私....。

「お待たせしました。」

「このクルマです...、
お、お願いします...!!」

酷い渋滞の為に、ここまでの移動は手間取ったようですが....、

JAFの隊員は直ちに、特殊な工具を駆使した解錠作業に取り掛かりました....。

チャカッ、チャカチャカッ、ガチン!!

「ハイ。
ドライバーさん、扉が開きましたよ。」

見事、私のカローラの運転席側のドアは、5分も掛からずにロックが解除されたのです…。

「よ、良かったぁ…!!」

(ホッ…。)

ギョーン(カローラのエンジンを切った音)

「『キーの閉じ込み』の代金は、非会員様ですので、xx,xxx円となります。」

(シュン…。)

「え〜。」

「しかし、珍しいね、エンジン掛けたまま『キーの閉じ込み』したドライバーさんは、初めてだったよ。

では、安全運転をお願いします。」

(シュン…。)

「え〜。」

アホウ～!アホウ～!アホウ～!(カモメの鳴き声)

「Yちゃん、ゴメンね...。」

「困ったヒトですね～。

Miyabiお兄さん～、

そそっかしいと、ミスし易いんですよ～。

何事も焦らないで行動して下さいね～。

しっかり落ち着いてやれば、きっと大丈夫ですから～。」

「は、はい...。」

(シュン...。)

「あ～、つい言い過ぎたかしら～。

気にしないで下さい～。」

「は、はい...。」

(シュン...。)

この後2人は、いよいよお待ちかねの『松島水族館』に入りましたが...

建物内部の薄暗くした部屋の、展示してある深い水槽のように...

私の気持ちは、まっ暗になったまま...

深い深い海の底に沈んだままでした...

しかし、その私の心を救ってくれたのは、やはり....、

Yちゃんでした...。

「きゃはは～。
これ、これ見て～、可笑的い～。」

「...(無視)。」

夜の闇の如く灯りを落とした、まるで洞窟の穴ぐらの様な雰囲気館内を歩くと...

その薄暗さとは対照的に一際明るく目に飛び込んでくるのは、エメラルドグリーン色に照らし出されたアクリルガラス製の水槽群です...

「あら、こっちは綺麗よ～。
これ、これ見て～。」

「...(シュン)。」

海水がたっぷり仕込まれたそこには、水槽ごとに異なる品種の魚介類が泳ぎ回って私達の目を楽しませてくれます...

タイやヒラメ、アジなどの日本の食卓でお馴染みの魚や、南米やヨーロッパの海で生息する貴重な種族の魚たちも居ます...

「きゃはは～。
何これ、気持ち悪い～。
Miyabiお兄さんこっちも見て～、ちょっとグロいよ～。」

「...(無視)。」

「困ったヒトですね〜。」

「...(シユン)。」

愛しいYちゃんとペアで、お待ちかねの『松島水族館』に入館しても....

冬の冷たい海水の様に冷え切った私の気持ちはくすぶってしまい、晴れるまで暫く掛かりました....

彼女の問いかけにも尋常に対応出来なくなって....

まるで駄々っ子みたいに、Yちゃんを困らせる始末....

その訳は、今朝の『キーの閉じ込み』事件を引きずってしまい、彼女との3回目のデートを素直に楽しめなかったからなのです....

「きゃはは〜。

ラッコよ〜、貝を叩いてるわ〜。

かわいい〜、Yラッコ気に入ったわ〜。」

「...(無視)。」

「Miyabiお兄さん〜、

元気出して下さいよ〜。

お〜い、大丈夫か〜。」

「...(シユン)。

僕なんか、どうせドジ男さ....

何やっても失敗ばかりのダメ人間さ....。」

気が付くと、彼女は下を向いたままの私を気遣って....

「あらら～。
アーチェリーで東北学生チャンピオンの～、
あのMiyabi選手は、どこに行っちゃったのかしら～。
Yは、自信满满で正確にシューティングする格好いいお兄さんが～、
大好きなんだけどな～。」

「...(ハッ)!!」

『松島水族館』を1周するあいだ中、彼女はあの手この手で私を励ましてくれていたのです…。

「きゃはは～。
あれ見て～、アシカが並んでお辞儀してるの～。
可らしい～。」

「ははははは…!!」

2階の食堂で食事を済ませてから、最終回のアシカのショーを見学する頃には…、

Yちゃんのお陰で、自然な精神状態に回復した私でした…。

「国体選手に選ばれるなんて凄いじゃないですか～。
Miyabiお兄さん、大丈夫～。
自信を持って下さいよ～。」

「ありがとうYちゃん…!
僕、頑張るよ…!!」

「よかった〜。」

「うん...!」

一時はドン底まで落ち込んだ私でしたが...

明るい笑顔と天真爛漫な性格のYちゃんの、献身的な励ましによって...

次第に元気が湧いていったのです...

そしてこれがきっかけで、Yちゃんをますます大好きになっていったのです...

(君となるべく一緒にいたいなあ...。)

楽しいひとときは、瞬く間に過ぎるものですね...

もう、陽が傾きかけています...

大幅に遅れて入った『松島水族館』で時間を費やしてしまった為に、その後は『瑞巖寺』の見学が精一杯でした...

しかし、まだ物足りなさを感じた私は...!?

キュ〜! キュッキュ〜!(ウミネコの鳴き声)

「ねえ、Ｙちゃん...、
あの『赤い橋』を渡って見ないかい...?」

「え〜。」

海の向こうに見える、『赤い橋』を2人で渡ってみたくなったのです...。

(あそこの上を、Ｙちゃんと2人で歩いたらとってもロマンチックだろうな...!?)

ところが、彼女の口から予想外の言葉が返されたのです...。

「松島の『赤い橋』を渡ったアベックは〜、
別れてしまうそうよ〜。」

「えッ...!？」

ザザァ〜〜〜ッ! ザザァ〜〜〜ッ!(足下から聞こえてくる波の音)

あちらこちらに真っ赤なトンボが飛び交い、お日さまが西の空の隅へ追いやられる時刻に....

私と宮学のYちゃんは、海風がやや強めに吹きさらす『橋』の上を歩いていました....

時折すれ違う、反対方向から歩いてくる観光客もまばらです....

ヒュルルルルルルッ〜〜〜〜!(欄干や手すりに当たって聞こえる海風の音)

その『橋』の向こうには、小さな『島』があるらしいのです....

目的地に渡るには数百メートルはありそうな結構な長い距離を、ひたすら進まねばなりません...
。

歩む2人の中には常に約30cmほどの空間があり、互いに体が触れ合うことはありませんでした...
。

時々、会話を試みますが....

「つ、強い....、強い風だねえ...!?!」

「何ですか〜、聞こえません〜。」

向かい風で煽られる髪の毛や衣服を、飛ばされないように両手で押さえながら行く私とYちゃん...
。

ザザァ〜〜〜ッ!ザザァ〜〜〜ッ!(足下から聞こえてくる波の音)

これが『松島海岸』にある、渡ったアベックが別れるという伝説の『赤い橋』です…。

その時の私は、そんな噂など全く気にしませんでした…。

『赤い橋』の入り口で通行料を支払う際、「あと1時間で閉める時刻なので、それまでに戻ってきて下さい。」と忠告されました…。

『赤い橋』のジंकスだろうが何だろうが、そんなのはお構いなしに…、

ともかく、彼女と一緒にいる時間を作りたい一心で、この『赤い橋』を渡ることを選んだのです…。

ヒュルルルルルルッ〜〜〜〜!(欄干や手すりに当たって聞こえる海風の音)

陽が落ちてくる頃、やっと『赤い橋』を渡りきって『島』に上陸した2人…。

どこもかしこも松の木が鬱そうと生い茂り、やや陰気くさい地形で…、

その為か、この『島』全体が余計に薄暗く見えます…。

しかし樹木の中では海風が遮られて、ほど良い静寂が待ち構えていたのです…。

会話がようやく可能になって、まず私の口から出たのは謝罪でした…。

「き、今日は色々と迷惑掛けちゃって…、
Yちゃん、ゴメンね…。」

「Miyabiお兄さん、気にしないで下さい〜。」

湿り気が多くてどこことなく潮臭い『島』の遊歩道は、クルマ1台分ほどの幅しかなく....、

整地されていない代わりに、土が踏み固められています....。

そこを左右に並んでゆっくりと歩く2人....。

相変わらず、2人の間には約30cmほどの隙間が開いたままでした....。

「何にもない所ですね〜。」

「そ、そうだね....。」

私とYちゃんは、たわいのない話を交わしながら....、

とくに宛がある訳でも無いのに、ただ何となく『島』の奥へ奥へ進んでいきました....。

「ちょっと歩くの疲れました〜。」

(あーあ....、

本当は、Yちゃんの手をギュッと握って歩きたいんだけど....、

僕は、それがどうして出来ないんだろう...!?

この『島』の奥の薄暗い所で....、

そ、そして、そして....、

チュチュツとお....、)

「ねえ、聞いてましたか〜。」

「えッ、何だっけ...?」

「もう〜。」

外灯の明かりが煌々と照らされる頃、2人は『島』の最奥の場所に辿り着きました…。

そこにはレストハウスが在りましたが、表の扉は閉じられて営業をしている様子は伺えません…。

手前の古ぼけたベンチに、どちらからともなく黙って腰を下ろしました…。

そこでは暗くて、お互いの顔がよく見えません…。

何気なく始めたYちゃんの話、静寂の中で聞いていました…。

Yちゃんの逞しさの秘密は、彼女の中高生時代にあったのです…。

「Yはね、ずっと女子バレーボール部に所属していたの〜。」

「そ、そうだったんだ…。」

「中学までバレーボールは本当に大好きだったのよ〜。

でも、高校はキツかったな〜。」

「高校は、本格的な競技になるからね…。」

「そうなの〜。

県で1、2を争う強い高校のキャプテンを務めていたわ〜。

監督が、とっても厳しくて〜。」

「そ、そうだったんだ…。」

「出来ない、平気でビンタする先生だった〜。

皆んな、泣いたり辞めたりしたけど〜、

チームを何とかしようと、私は最後まで頑張ったわ〜。」

「そ、そうだったんだ...。」

『松島水族館』では、落ち込む私を献身的に励ましてくれたYちゃん...。

明るく元気な彼女が傍らにいと、不思議と元気が湧いてくることに気付きました...。

初めて会った頃は、可愛い顔立ちで愛嬌がある女性というのが印象でしたが...、

次第に、勇気と希望を与える強い女性のイメージを感じていきました...。

実は、その強さの裏側には、高校バレーボールの存在が浮き彫りになったのでした...。

彼女はそこで、練習の厳しさに耐え、団体競技で人間関係に苦しんだ経験があったのです...。

「Yちゃんって、宮学のアーチェリー部でも本当によく頑張っているよね...!

メンバー全体のレベルアップを考えて、練習方法を工夫したり...、

他の子と取り組み方が違うので、いつも感心していたんだよ...!

学院大に勝ちたいとか、悔しがったりしてさ...、

スポーツを深く理解してるんだよね...!」

「コーチ〜。」

「ぼ、僕さ...、

実を言うと、アーチェリーショップでYちゃんと初めて会った時から...、

君のこと好きだったんだよ...!

可愛いなあってさ...!

でも、今は違う...。

スポーツで本当に頑張ってきた、素晴らしい女性だと判ったよ...!」

「Miyabiお兄さん～、
そんな風に見ていてくれてY、嬉しいです～。」

「Yちゃん...!」

「お兄さん～。」

と...!?

私は、ある大事なことを思い出しました...

「ま、まずいッ...!!
『赤い橋』が閉じられる時刻を、とっくに過ぎてるッ...!？」

「え～。」

バタバタバタッ!(暗闇の中を野鳥が羽ばたく音)

小さな『島』の最奥で、つい長居をしてしまった私と宮学のYちゃん…。

腕時計の針は、約束の時刻を大幅に過ぎた位置を指していたのです…。

2人は、来た道を急いで戻ることになりました…。

「Yちゃん、早く『島』を出よう…!!」

「え〜。」

もう既に真っ暗な遊歩道を、急ぎ足で帰る私とYちゃん…。

しかし、道はまるで蛇の様にうねりながら長く続くアップダウンの連続なので、抜けるまで時間が掛かるのです…。

「はあ、はあ、はあ…、

Yちゃん、はあ、ウツカリしていて、はあ、ゴメンね…!?!」

「は〜、困ったヒトですね〜。

は〜、は〜、でも仕方ないですよ〜。」

進行方向をふと見ると…、

つづら折り状の道を逸れて草むらの斜面を一気に下れば、最短距離になることに気がきました…

。

「ここを...、はあ、はあ...、
Yちゃん、ここを下れば近道だよ...、
降りてみようか...!？」

「え〜。」

私は半ば強引に斜面を降りて、下の遊歩道に辿り着いてみせました...

「Yちゃん、ほら...!
大丈夫だよ、ここまで下ってごらんよ...!!
気を付けて...!!」

「わかったわ、降りるわね〜。」

そう言って彼女は、両手を広げてバランスを保ちつつ小刻みな歩幅で、急な角度で繋がる斜面を降りてきました...

ところが、勢いが付き過ぎです...

「きゃあ〜。」

「Yちゃん...!!」

両手でとっさに、抱きしめる様に彼女の体を受け止める私...

♪♪♪〜♪♪♪♪〜♪♪♪♪〜♪♪♪〜♪♪♪♪〜♪♪♪♪〜♪♪♪♪〜♪♪♪〜(映画のテーマ曲)

ヒュルルルルルルッ~~~~!(欄干や手すりに当たって聞こえる海風の音)

小さな『島』を抜け出した2人は、また再び伝説の『赤い橋』を渡りました…。

相変わらず、強い海風がまともにぶつかって来ますが…、

復路の私達には、そんな事は決して気になりませんでした…。

何故なら、そこから見ると『松島湾』のライトアップされた夜景がとてもロマンチックだったのと…、

2人は、仲良く手を繋いで歩いていたので…。

「綺麗だね…。」

「きれいね〜。」

ザザァ~~~~ッ! ザザァ~~~~ッ!(足下から聞こえてくる波の音)

昭和60年10月、鳥取県で開催の『秋季国民体育大会』(わかとり国体)の1週間が始まりました…。

この年、アーチェリー競技の宮城県成年男子の代表選手に選ばれた私は、初の『国体』出場に少し興奮気味でした…。

郷土の代表選手として試合に臨む訳ですから、プレッシャーがあるかといえど勿論あるのですが…、

「も、もしもし...、Yちゃん...!?
僕だけど、うん、鳥取からだよッ...!
うん、『国体』頑張るよ...!
今、何していたのッ...!?
あ、そう、じゃね...!」

と、そこに....。

「ーン!?
Miyabi君、誰に電話してたンダァ!？」

「あ、M社長...!」

アーチェリー専門店を営んでいるM社長は、腕も確かで『国体』の常連です....。

毎年、宮城県の代表選手にトップの成績で選ばれる優秀な選手だったのです....。

彼とは、私が高1で弓を始めて以来の付き合いです....。

そのM社長と共に『国体』のメンバーに選ばれたことは、本当に嬉しいことでした....。

その日、M社長と私は缶ビール片手にいろいろな話をしました....。

私は酔った勢いで、Yちゃんと付き合っていることをつい暴露してしまったのです....。

「ナンダ、やはりそうだったのかァ!
お前ら、何だか怪しかったモンなァ!」

「M社長、バレてましたか....。」

「ところでMiyabi君、お前、大学の方は大丈夫なのかァ!?
今回もこんなに休んでるんだゾ!？」

「ちょっとヤバいんですよ...。」

「女の子とデートもいいがァ、後で困るんじゃないのかァ!？」

「...。」

「ま、帰ってから勉強も頑張れナ!
今日は飲むゾ!」

「僕も飲みます...!」

「よーし、カンパーイ!」

「乾杯...!」

県の代表で参加したことも忘れ、夜遅くまでノンキに酒を酌み交わす私...

しかし後日、心配していたことが現実になったのです....。

—続きまして、宮城県選手団の入場です—

—団長〇〇、選手・役員、計〇〇〇名です—(場内アナウンスの声)

ダッタッ、、、、ダッタッ、、、、ダッタッ、、、、ダッタッ、、、、(選手団の足音)

「...!!!」

ワー!!! ワー!!! ワー!!! ワー!!! ワー!!! ワー!!! (観客のざわめき)

♪~!!! ♪~!!! ♪~!!! ♪~!!! ♪~!!! ♪~!!! ♪~!!! ♪~!!! ♪~!!! ♪~!!! (大音響で響く行進曲)

ダッタッ、、、、ダッタッ、、、、ダッタッ、、、、ダッタッ、、、、(選手団の足音)

「...!!!」

ワー!!! ワー!!! ワー!!! ワー!!! ワー!!! ワー!!! (観客のざわめき)

会場いっぱいに響く、大勢の観客のざわめきと楽団の演奏による行進曲の中を...

まるで軍隊の様に手足の動きを合わせて...

お揃いの黄緑色のユニフォームを身に付けた私達、宮城県の選手団が...

ここ鳥取県の『国体』総合開会式の会場に入場して行きます...

♪～!!!♪～!!!♪～!!!♪～!!!♪～!!!♪～!!!♪～!!!♪～!!!♪～!!!(大音響で響く行進曲)

会場の中は、既に先に入った他の県の選手団が見事にズラリと並んでいて…、

メインスタンド席は、見渡す限りどこもかしこも満席…、

手に手に、スタンドごとに色分けされた大きな団扇を振りながら…、

皆笑顔で、人・人・人…。

超満員の観客が、我々『国体』の選手団の行進を出迎えるではありませんか…。

ダッタッ、、、、ダッタッ、、、、ダッタッ、、、、ダッタッ、、、、(選手団の足音)

何せ、鳥取県で開催の『秋季国民体育大会』(わかとり国体)に参加する全国47都道府県の全種目の選手並びに役員が、この開会式に集結している訳です…。

宮城県だけで150名以上、それが全国の参加者を合わせたら途方もない人数が顔を合わせることに…。

背中に各都道府県名がプリントされた、赤・青・黄、色とりどりの『国体』のユニフォーム姿が、ずうっと続いています…。

ワー!!!ワー!!!ワー!!!ワー!!!ワー!!!ワー!!!(観客のざわめき)

今朝は各競技会場からバスに分乗して移動、それも何百台も停まった臨時駐車場に降ろされて…

、

そこから何十分も歩かされてこの運動場に到着し....、

県ごとに集まって入場行進のリハーサルをしてから、各自分散。

そこからは、自分の県の入場する時刻まで弁当を食べたり、『国体』のお土産を買いあさったりして過ごしました...。

♪~!!!♪~!!!♪~!!!♪~!!!♪~!!!♪~!!!♪~!!!♪~!!!♪~!!!(大音響で響く行進曲)

とにかく、『国体』の何もかもが巨大・ビッグ....。

運動場の大きさも、人の数も、テントの大きさも、仮設トイレの数も....、

人が多くて何度も迷子になりそうになったり...(笑)。

『国体』の規模、そのスケールの大きさに、私は最初から最後まで圧倒されっぱなしでした...。

ダッタッ、、、、ダッタッ、、、、ダッタッ、ピタッ!(所定の位置に着いて整列)

全国47都道府県が全員入場するだけで、途方もない時間が掛かるのです...。

行進を終えた後は....、

最後の県が入場し終えるまで、直立のまま整列した姿勢で飽きるほど待たされるのです...。

これが辛いのです...。

炎天下でずっと立ったままだから、立ち眩みしそうになります...。

スポーツ選手なのに、座り込んだりしゃがんだり、しまいには倒れる者まで現れます…。

—会場の皆様、ご起立願います—

—脱帽の上、国旗掲揚—(場内アナウンスの声)

♪き～み～が～よ～お～は～ち～よ～に～や～ち～よ～に～♪(「君が代」斉唱)

♪わ～か～い～ち～か～ら～と～か～ん～げ～き～に～♪(「若い力」合唱)

—選手宣誓—(場内アナウンスの声)

『国体』2日目、その贅沢なスケジュールは、この総合開会式に参加で丸一日終わりです…。

「…。」(疲れたァ…。)

宿に帰ったその晩に…、

「も、もしもし…、Ｙちゃん…!?

僕だけど、うん、鳥取からだよッ…!

うん、今日は『国体』の総合開会式だったんだけどさぁ…!

それが、とってもツラかったんだよッ…!

今、何していたのッ…!?

あ、そう、じゃね…!]

と、そこに…。

「ーン!?

Miyabi君、今日もまた彼女に電話かァ!？」

「あ、M社長...!」

「明日は、自由練習日だからナ!
今日も飲むゾ!」

「僕も飲みます...!」

「よーし、カンパーイ!」

「乾杯...!」

またもM社長ら県代表メンバーと、夜遅くまでノンキに酒を酌み交わす私でした...。

「あたた...、あたたたッ...。」

アマチュアの競技者にとって憧れの、『国民体育大会』という年に1度のスポーツの祭典...

それは各地の予選に於いて凌ぎを削り勝ち残った、各都道府県の代表選手すなわち『国体選手』のみが出場出来ます...

『国体選手』という、ネームバリューは高く....、

例え、ど田舎のおじいさんおばあさんにでも「『国体選手』は大したもんだ」と、モテはやされます...

不祥事を犯すと、報道には「元『国体選手』のxx」と載ります...(笑)。

そんな名誉ある代表選手に選ばれた私でしたが....。

開催地の鳥取県に乗り込んでから3日目の朝は、最悪でした....。

「う、ううう〜う....。

オ、オエエツ...!!」

「ナンダ、Miyabi君どうしたんだア？」

「M社長....、

僕、気分悪くて動けないんです...。」

「馬鹿かア、お前二日酔いかア？」

「夕べは、ちょっと飲み過ぎたみたいですよ...。」

「今日の自由練習、大丈夫なのかア？
実は練習する前に、皆んなで「鳥取砂丘」を見に行くんだゾ！」

「えッ、そうだったんですか...!?
あたた...、あたたたッ...。」

「いいから、お前は寝てろッ！
じゃあナ！」

「そ、そんなあ...。」

朝食を済ませるなり、我が宮城県の『国体』アーチェリー競技のメンバーは出掛けて行ってしまいました...。

宿泊場所に、1人取り残される私でした...。

「大丈夫ですかなー？」

「あッ、おじさん...、ご免なさい...。
大したことないですから、ちょっと寝てれば治ります、きっと...。」

布団で寝込む私を気遣ってくれたのは、我々宮城県の選手団の「民泊」を引き受けてくれた、この屋敷のご主人です...。

『国体』の特徴の一つに、「民泊」があります…。

「民泊」というのは、一般家庭に『国体選手』を泊めることをいいます…。

全国から各競技ごとに47都道府県の選手・役員がやって来る訳ですから、その途方もなく大人数の人々を受け入れる地元は大変なのです…。

その大勢の人間を、『国体』開催中は長期宿泊させる必要がありますから…。

旅館やホテルが足りない場合、「民泊」を導入するという訳なのです…。

「何かあったら遠慮なく言って下さいねー?」

「あッ、はい…、おじさん…、ご免なさい…。」

『国体』の種目を開催する市町村は、何年も掛けて準備を整えています…。

地元の開催で、出来れば地元優勝を…、

そして、全国から当地を訪れる全国の選手・役員に少しでも良い思い出を作ってもらおうと…、

『国体』を大成功に導こうと…、

見えない所で、それはそれは涙ぐましい努力を重ねているのです…。

この年、我々アーチェリー競技は鳥取県の「東郷町」という場所で開催されたのですが…、

「東郷町」に到着した初日、我々を駅まで出迎えてくれたのがこの屋敷のご主人でした…。

決して立派とは言えない屋敷ですが、広い部屋を幾つか与えられました…。

このご家庭は「民泊」の為に、わざわざ家屋を増築して我々を受け入れる準備をしてくれたのだそうです…。

『国体』開催の1週間は、毎日朝夕の食事は予め定められたレシピがあり、「民泊」であってもその献立をご家庭でこしらえて提供されます…。

こちらのご家庭では、近所の女性達が手伝って作っていました…。

ところが…、

実際には、『国体』メニュー以外にも豪勢な料理が出されたり、お酒や飲み物もドンドン振る舞われ…、

その結果が…、

「あたた…、あたたたッ…。」

郷土を代表する『国体選手』なのに、このザマです…(笑)。

「Miyabi君、二日酔いどうだァ？」

「M社長...、
な、何とか...。」

「みんなで、「鳥取砂丘」見てきたゾ!
とっても綺麗だったゾ!」

「試合終わった後に、僕も見てみたいです...。」

「馬鹿言え、終わったら帰るだけダ!
寄る時間はもう無いゾ!」

「そ、そんなぁ...。」

その晩....、

「も、もしもし...、Yちゃん...!?
僕だけど、うん、鳥取からだよッ...!
うん、今日は「鳥取砂丘」見てきたんだけどさぁ...!
それが、とっても綺麗だったんだよッ...!
今、何していたのッ...!?
あ、そう、じゃね...!」

と、そこに....。

「ーン!?!」

「M社長...(ドキッ)。」

「明日は、公式練習日だからナ!

今日も飲むゾ!

「僕は、今夜は遠慮しておきます...。」

「そうか、よし、カンパーイ!

「お休みなさい...。」

141 湖のほとり鳥取国体

昭和60年開催『秋季国民体育大会』(わかとり国体)、その贅沢なスケジュールの4日目は公式練習日です…。

「宮城県の選手の皆さん、本日の練習一、
頑張ってきて下さいねー!」

「おじさん、おばさん、それでは行って来ます…!」「行って来ます」
「行ってきます!」「行ってきま〜す。」「行って来ます!」

『国体』の小旗を振って見送る「民泊」先のご家族を後にし、バスに乗った我々は出発しました…。

アーチェリー競技を開催したのは、鳥取県「東郷町」という町です…。

町内には、要所要所に『わかとり国体』の看板や旗が飾られ、きれいに整備されていました…。

道端には色とりどりの花が植えられ、『国体』ムードをいやが上にも盛り上げます…。

さらに、嬉しいことに…、

道行く先々では、地元の方々が我々のバスに向かって『国体』の小旗を振ってくれました…。

それを見た私は、『国体』とは、町を挙げた本当に特別な行事なのだと感激しました…。

そして間もなく会場入りです…。

この町を象徴するのが、町内にある「東郷湖」と呼ばれる湖です…。

今回のアーチェリー競技は、まさにその「東郷湖」のほとりが競技会場となっていました…。

蒼々と美しく光る小さな湖のほとりに、これまた美しく育った緑の芝が敷き詰められたアーチェリー会場がありました…。

そこには大型のテントがびっしりと並んで設置され、中にはゆったり掛けれる椅子にテーブルが用意されていました…。

そこは私にとって、これまで参加したことのある試合のどの会場よりも素晴らしいものでした…。

。

「二十世紀梨をどうぞ～。

さあ、召し上がれ～。」

選手を迎え入れるなり待っていたのは、地元で採れる梨を配る女性たちでした…。

彼女たちは他にも、飲み物類を手渡してくれたり、会場の案内など選手たちの世話をしてくれるのです…。

また、ここには地元の特産品や『国体』グッズの販売、救護施設に、お茶室まで揃っています…。

。

郷土を代表する『国体選手』らの活躍を一目見ようと、会場には手に手に『国体』の小旗を手にした大勢の一般の人々も続々と駆け付けて来ます…。

美味しい梨を頬張りながら、最高の気分で練習準備を整える我々でした…。

「ドウダMiyabi君、『国体』は凄いだろウ!」

「ほ、本当に...、
『国体』は凄いですね...!」

「アーチェリーやっていて良かったらう、『国体』に出れて良かったらう!」

「ホント、その通りですね...!
皆、『国体』に憧れる訳ですね...!」

この頃の『国体』アーチェリーはハーフラウンド競技、すなわち50m・30mを各36本ずつ合計72本射った合計得点で順位を決めていました...

多くの本格的な公式試合では90m・70m・50m・30mで競うものが殆どなのですが...

当時はアーチェリーというスポーツの普及を目論んで、『国体』は50m・30mの短距離のみで開催されていたのです...

天候の影響を受けやすい長距離の場合は、弓の威力がある方がやや有利であると考えられています...

しかし、50m・30mの短距離のみの試合ならば、腕と度胸があれば『国体』優勝は誰にとっても全く不可能では無いのです...

『国体』のユニフォームに身を包み、シューティングラインを跨いで愛用の弓を構える私...

昨日の様に二日酔いの醜態をさらした姿は、もうどこにも有りません...

「バシュッ!」 「ボンッ!」

晴れの舞台に少し緊張しながらも、身体の方も道具も調整を無難にこなしました…。

「おう、山本ウ！」

「M社長、久しぶりですね!!」

「こ、こんにちは…!!
宮城のMiyabiです…!!」

「ようっ!!
君も出てたんだね、お互い頑張りようぜ!!」

「は、はい…!!」

M社長と共に、声を掛けた彼は…、

6月の「全日本学生東西対抗戦」で同じチームで戦って以来お会いする、『ロス五輪』銅メダルの『山本 博(やまもとひろし)』選手(神奈川県)です…。

山本 博選手に、「君は東北の雄だね」と…、

そう呼ばれた彼の言葉を、私は忘れることが出来ません…。

あの言葉で勇気もらった私は…、

以来、私は大きな自信と誇りを胸に今日まで戦ってきたのです…。

そのご褒美が、今回の『国体』だったのかも知れません…。

その晩....

「ドウダMiyabi君、『国体』は凄いだろう!」

「ほ、本当に....、
『国体』は凄いですね...!」

「アーチェリーやっていて良かっただろウ、『国体』に出れて良かっただろウ!」

「ホント、その通りですね...!
皆、『国体』に憧れる訳ですね...!」

「明日は、自由練習日だからナ!
今日も飲むゾ!」

「僕は、今夜は少し飲もうかな...!」

「そうか、よーし、カンパーイ!」

「その前に、Yちゃんに電話しなくちゃ...!」

「ーン!?!」

(ドキドキドキドキ、ドキドキドキドキ...!)

『鳥取国体』5日目の夜...

山陰地方の10月は、夜7時を回っても外は明るくて...

まるで夏の陽気の如く、蒸し暑くジッとしています...

夕食を終えた辺りから、私は顔がちょっとだけ引きつるような感覚に襲われました...

多分それは、緊張感から起こったのだと思います...

『国体』に乗り込んで5日も経った今頃になって...

県の代表に選ばれて来たという重圧が、のし掛かってきたのです...

私は休憩室で仰向けにゴロ寝し、部屋の天井を焦点が合わない状態で見つめたまま...

日中に見た、印象的なシーンを繰り返し思い出していました...

パタパタパタパタッ~!!

日本海側から運ばれて来るやや強い風で、アーチェリー競技会場の旗がなびいています...

ピカピカと反射しながら「東郷湖」の水面も波を打っています...

ワー!!! ワー!!! ワー!!! ワー!!! ワー!!! ワー!!!

仮設スタンドにぎっしりと詰めかけた、観覧席の人々のざわめき…、

♪～!!!♪～!!!♪～!!!♪～!!!♪～!!!♪～!!!♪～!!!♪～!!!♪～!!!

大音響の演奏に合わせて行進する、我々選手一同…、

—会場の皆様、ご起立願います—

—脱帽の上、国旗掲揚—(場内アナウンスの声)

♪き～み～が～よ～お～は～ち～よ～に～や～ち～よ～に～♪(「君が代」斉唱)

『秋季国民体育大会』(わかとり国体)の、アーチェリー競技の開始式です…。

♪わ～か～い～ち～か～ら～と～か～ん～げ～き～に～♪(「若い力」合唱)

—選手宣誓—(場内アナウンスの声)

～宣誓!!

我々選手一同は…!!～

ドーン!!!!!! ドンッ、ドーン!!!!!!(花火の大きな音)

数え切れない数の色とりどりの風船が、「東郷町」の空に舞い上がっていきます…。

ワー!!! ワー!!! ワー!!! ワー!!! ワー!!! ワー!!!(観客のざわめき)

そして、女子の試合の見学です…。

きれいに手入れされた緑の芝生の上に、整然と配置されたブレザー姿の審判員たち…。

無言で信号旗を振ると、各県の女子選手らが弓を抱えて立ち上がりました…。

間もなく彼女たちはシューティングライン上にズラリと並び、やがて緊張の一瞬が訪れます…。

(ドキドキドキ、ドキドキドキ…!)

「♪ブブブブブブ!!」(試合開始のブザーの音)

合図が鳴ると共に、彼女たちの手から矢が次々と放たれていきます…。

「バシュッ!」「バシュッ!」「バシュッ!」「バシュッ!」「バシュッ!」
「ボンッ!」「ボンッ!」「ボンッ!」「ボンッ!」「ボンッ!」

東京都、北海道、地元鳥取県など都道府県名がプリントされたユニフォーム姿の女性選手たち…
、

どの選手にも、背中に緊迫感が漂っています…。

「バシュッ!」「バシュッ!」「バシュッ!」「バシュッ!」「バシュッ!」
「ボンッ!」「ボンッ!」「ボンッ!」「ボンッ!」「ボンッ!」

勿論私達は、我が宮城県の女子選手を応援しているのですが、入場出来るのは一般人と変わらぬ
ある一角までで…、

試合が始まると、選手と監督以外は試合会場内に立入禁止となるのです…。

(ドキドキドキ、ドキドキドキ…!)

しかし、選手たちの直ぐ背後に高く設置された仮設スタンドのお陰で、彼女たちの一喜一憂する様子が手に取るように伝わってきました…。

さらに、矢を6本射つ毎に得点がコンピューターに即刻打ち込まれるので…、

会場の右後方にある大型の得点ボードに途中経過が随時掲示されると同時に、観客席内に設置された箱に印刷された速報が届けられ…、

誰しものが、試合の状況が把握できる仕掛けになっていました…。

「バシュッ!」「バシュッ!」「バシュッ!」「バシュッ!」「バシュッ!」
「ボンッ!」「ボンッ!」「ボンッ!」「ボンッ!」「ボンッ!」

試合の内容は前半、地元の鳥取県が苦戦していました…。

いやが上にも優勝の期待が掛かる地元の女子チームですから、大変なプレッシャーが彼女たちの肩に乗っていることでしょう…。

私は引き込まれるように試合に見入ってしまい、宮城県の選手より鳥取県の選手がつつい気になってしまいました…。

そして、まるで自分が射っている様な気持ちになっていたのです…。

(ドキドキドキ、ドキドキドキ…!)

この『鳥取国体』の為にわざわざ設置された、「東郷湖」のほとりのアーチェリー競技場…。

それは、ここで競技する者が日頃の実力を十分発揮出来るように、練られ配慮がよく行き届いていました…。

見事なまでの会場設備と、文句の付けようがない完璧な試合運営…。

そもそも…、

たった72本の矢を放つ為に…、

全国から選りすぐりの選手たちが…、

飛行機や列車を乗り継ぎ、遠路遙々この山陰地方に乗り込んで来て…、

1週間も掛けたスケジュールをこなしている訳なのです…。

『国体』とは、なんという贅沢なイベントなのでしょうか…。

「♪ブブブーーーー!!」(試合終了のブザーの音)

ワー!!! ワー!!! ワー!!! ワー!!! ワー!!! ワー!!! (観客のざわめき)

パチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチ~!!!!!!!!!!!!!!(拍手)

最終結果は、地元鳥取県が辛くも勝ち星を獲得しました…。

私は、女子の試合の見学で自分でも信じられない位に興奮してしまいました…。

(ドキドキドキドキ、ドキドキドキドキ…!)

いよいよ、明日は男子の試合…!

自分の番なんだ…!

ここで射つんだ…!)

午後の自由練習にて、真剣そのもので調整する私…。

やれることはやりました…。

もう何処にも逃げ出すことは出来ません、明日の本番に淡々と望むだけです…。

(今夜は、早く寝よう…。)

昭和60年開催『秋季国民体育大会』(わかとり国体)、その贅沢なスケジュール6日目の朝を迎えました…。

大会期間中ずっと晴天に恵まれ続けた開催地、鳥取県「東郷町」…。

本日はいよいよ男子の試合、泣いても笑っても本番に望むのみです…!

「宮城県の選手の皆さん、本日の試合一、
頑張ってきて下さいー!
あとで応援に向かいますからねー!

「おじさん、おばさん、それでは行って来ます…!」

会場行きの送迎バスに乗車した我々を前に、「民泊」先のおじさんは鉢巻きを締めて唐突に声を張り上げました…。

「ふうーれえー!ふうーれえー!みいーやあーぎいー!
それっー、
ふれっふれっ宮城いー!ふれっふれっ宮城いー!

『国体』の小旗を両手で振りながら気合いの入ったエールを送ってくれる、実に人情味のある素敵なおじさんでした…。

「行って来ます!」「行って来ます」「行ってきます!」
「行ってきま〜す。」「行って来ます…!」

ほんの数日の間に、『国体』アーチェリー競技を開催した鳥取県「東郷町」という小さな町の風

情が、印象強く私の心に刻まれました…。

色とりどりの花が植えられ、きれいに整備された町内には、至る所に『わかとり国体』の看板や旗が飾られ…、

沿道では手に手に『国体』の小旗を振って応援してくれる地元の方々のお陰で、それはもう『国体』ムード一杯でした…。

そして更に印象的な、湖のほとりのアーチェリー競技会場…。

ドーン!!!!!! ドンッ、ドーン!!!!!!(花火の大きな音)

ワー!!! ワー!!! ワー!!! ワー!!! ワー!!! ワー!!!(仮設スタンドにぎっしりと詰めかけた、観覧席の人々のざわめき)

パタパタパタパタッ~!!(日本海側から運ばれて来るやや強い風でなびく旗)

ピカピカ、ピカピカ!(「東郷湖」の水面が反射している)

美しく光る小さな湖のほとりに、美しい緑の芝が敷き詰められた『国体』アーチェリー会場…。

大量の大型テントと、ゆったり座れる広い選手席…。

「二十世紀梨をどうぞ～。
さあ、召し上がれ～」

選手側にも観客側にも配慮が行き届いた、素晴らしい『国体』会場…。

申し分のない天候も揃って…、

これだけお膳立てが整えば、あとは選手が結果を出すだけという訳です…。

『わかとり国体』アーチェリー競技最終日、男子の試合本番です…!

「よーしッ、気合い入れていこうぜッ!」

M社長が声を掛けました…。

「OK～。」

「そ、そうですね…。」(ドキドキドキドキ、ドキドキドキドキ…!)

宮城県『国体』男子チームは、私とM社長ともう1人の計3名です…。

団体とはいえ、たった3名ですが…、

たった3人だからこそ、誰も足を引っ張ってはいけないのです…。

ここまで来たからにはベストスコアを出して、少しでも上位の成績を上げたいところです…。

ところが…!?

「…。」(ドキドキドキドキ、ドキドキドキドキ…!)

赤いブレザー姿の審判員たちが無言で旗を振ると…、

私たち選手はシューティングライン上にズラリと並び…、

やがて緊張の一瞬が訪れます…。

「♪ブッブーーーー!!」(試合開始のブザーの音)

ついに始まりました…。

合図が鳴ると共に、矢が次々と放たれていきます…。

「バシュッ!」「バシュッ!」「バシュッ!」「バシュッ!」「バシュッ!」
「ボンッ!」「ボンッ!」「ボンッ!」「ボンッ!」「ボンッ!」

北海道、青森、秋田、山形、そして宮城と、都道府県名を背負ったユニフォーム姿の全国47県の精鋭たち…、

背中に緊迫感が漂っています…。

(ドキドキドキドキ、ドキドキドキドキ…!)

「バシュッ!」
「ボンッ!」

当時の『国体』はハーフラウンド競技、すなわち50m・30mの距離を各36本ずつ合計72本の得点で競われ…、

団体はチーム3名の合計点…。

より高い点を出した県の順位という、実に単純明快な試合でした…。

前半は50m競技です…。

(ドキドキドキドキ、ドキドキドキドキ...!)

「バシュッ!」

「ボンッ!」

「オイ、どしたMiyabi!
お前、あがってんのかア?」

「だ、大丈夫です...。」

矢を6本射つ毎に即刻途中経過が速報されるので、それを見ながら同僚の様子に喝を入れるM社長です...。

「よーしッ、落ち着いていこうぜッ!」

M社長が声を掛けました...。

「OK～。」

「そ、そうですね...。」(ドキドキドキドキ、ドキドキドキドキ...!)

(普段通り射てばいいんだ...!
普段通り射てばいいんだ...!)

「バシュッ!」

「ボンッ!」

(あッ、しまった...!?)

「バシュッ!」

「ボンッ!」

(落ち着け、落ち着け...!)

「バシュッ!」

「ボンッ!」

(うゝッ、やっちゃった...!?)

これが、『国体』の怖いところなのでしょうか...

何故か、いつもの調子に射てないのです...

思うように、体も心もコントロール出来ない私でした...

144 国体に悔し涙した日

ワー!!! ワー!!! ワー!!! ワー!!! ワー!!! ワー!!!(仮設スタンドにぎっしりと詰めかけた、観覧席の人々のざわめき)

「...。」(ドキドキドキドキ、ドキドキドキドキ...!)

アーチェリー競技を始めて6年にもなるのに....、

幾多の試合で経験を積んでいるのに....、

東北学生チャンピオンを捕った男が....、

緊張してガチガチになる...。

それが『国体』なのです...。

(ドキドキドキドキ、ドキドキドキドキ...!)

か、体が震えて....、

サイトピンが、と、止まらない...!?)

「バシュッ!」

「ボンッ!」

(あッ、しまった...!?)

「バシュッ!」

「ボンッ!」

(えい、くそっ...!
またやっちゃった...!?)

「バシュッ!」
「ボンッ!」

(シュン...。)

普段通りに射てばいいのです...。

そんなこと判りきっています...。

ところが、何故か普段通りに射てない...。

それが『国体』なのです...。

「オイMiyabi、いいかァ!
手のひらに『人』という字を書いて、
それをだなァ、飲む真似するンだヨ!
そうすると緊張が解けるゾ!」

「や、やってみます...。」

不自然な私の様子を、見るに見かねたM社長が...

様々なアドバイスをしてくれました...。

ワー!!! ワー!!! ワー!!! ワー!!! ワー!!! ワー!!!(仮設スタンドにぎっしりと詰めかけた、観覧席の人々のざわめき)

「お前、スタンドの観客が気になるンだろウ?」

「は、はい...。」

「こんなに観衆がいると気が散るしなァ!
大体、普段の試合は誰も見てない場所でやるからなァ!
実は俺も、『国体』初めて出たときは動揺したヨ!」

「そうだったんですか...。」

「いいかァ、Miyabi!
どうせ、お前の射ってるところなんかァ、
誰も見てないから、心配するなァ!
スタンドの観客はだなァ、
畑に並んだカボチャだと思えばいいンだァ!
そう思えば楽だろウ?」

「なるほど...!」

M社長のこの言葉で、気がだいぶ楽になった私です...。

「バシュッ!」

「ボンッ!」

ワー!!! ワー!!! ワー!!! ワー!!! ワー!!! ワー!!!(仮設スタンドにぎっしりと詰めかけた、観覧席の人々のざわめき)

相変わらず、背後から聞こえる沢山の観客のざわめきは絶え間なくありますが...

『国体』には全国47都道府県も選手がいる訳ですから、自分はどうせ誰からも注目されないと開き直ったことで....、

次第に普段のショットが出来るようになってきたのです....。

「バシュッ!」

「ボンッ!」

気持ちが、だいぶ落ち着いてきた頃....、

途中経過の速報に目を落としました....。

すると...!?

(ゲッ...!?)

参加選手141名中、下から十数番目に自分の名前が載っているではありませんか...!

しかも、宮城県男子チームの中では3番目の成績....、

つまり、私がチームの足を引っ張っていたのです....。

(ま、まづい...!?)

「バシュッ!」

「ボンッ!」

(えい、くそっ...!)

「バシュッ!」

「ボンッ!」

(それっ、チェッ...!)

それからまるで尻に火がついたようになって、慌てて追い上げを試みる私でしたが...

大人数で競うのに、たった72本の試合では差を詰めるどころか、ちょっとミスしただけで直ぐ順位が入れ替わるシビアさ...

もがけば、もがくほど冷静さを失ってしまい...

「バシュッ!」

「ボンッ!」

(うゝッ、やっちゃった...!?)

シュン...。)

「♪ブブブー——!!」(試合終了のブザーの音)

ワー!!! ワー!!! ワー!!! ワー!!! ワー!!! ワー!!! (観客のざわめき)

パチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチ~!!!!!!!!!!!!!!(拍手)

「...。」

(シュン...。)

全行程に1週間も掛けた贅沢なスケジュールで望んだ、年に1度の華やかなスポーツの祭典...

昭和60年、鳥取県「東郷町」開催『秋季国民体育大会』(わかとり国体)...

その本番は、あっけなく幕を下ろしました...

結局私は最後まで調子が出ないまま、不本意な成績で『国体』を終えました...

実力を出せなかった不甲斐なさに、自分自身に腹が立ちました...

そして、自分の甘さに気付きました...

パタパタパタパタッ~!!(日本海側から運ばれて来るやや強い風でなびく旗)

ピカピカ、ピカピカ!(「東郷湖」の水面が反射している)

美しく光る小さな湖のほとりに、美しい緑の芝が敷き詰められた『国体』アーチェリー会場...

私は、悔し涙を流しながら...

キラキラと光る「東郷湖」の水面を、いつまでも眺めていました...

厚手のコートを羽織った女性が足早に行き交う、10月の一番町通り…。

半袖姿で過ごせたほど温かった『国体』開催地の鳥取県から、一週間ぶりに帰宅すると…、

仙台は、木枯らしの舞う肌寒い季節になっていました…。

『国体』から帰った翌日、私は宮学のYちゃんを街へ誘いました…。

彼女にお土産を手渡したかったからです…。

しかし、本音を言えば…、

『国体』という大舞台で、かつて経験したこともないほど緊張し実力を発揮で出来なかったことを、彼女に慰めて欲しかったのです…。

県の代表という重圧から久々に解放され、Yちゃんにとにかく甘えたくなったのでした…。

ところが…。

「こんにちは～。」

「やあ…!」

彼女はいつもの笑顔で待っていました…。

今日のYちゃんは、『宮学』アーチェリー部のメンバーで揃えたブルー&アイボリー色のスタジャン姿です…。

たった数日なのに、『国体』参加期間がやたら長く感じました…。

それだけに、愛しいYちゃんに逢うのは胸ときめき心躍る心境です…。

私はチョッピリ照れながらも、彼女と手を繋いだまま歩き…、

間もなく、ある喫茶店に入りました…。

「『国体』お疲れさまでした～。

Y、久しぶりにMiyabiお兄さんに逢えて嬉しいです～。」

「僕も逢いたかったよ…!

Yちゃん、ハイこれ…!

鳥取で買った『国体』グッズのお土産だよ…!」

「わあ、何かしら～。」

「ヤマハのポーチだよ、気に入ってもらえるといいな…!」

「ありがとうございます～。

私からも、プレゼントあげます～。」

「えッ…!?

これ…、ばーびー…、」

「Yの好きな『バービー・ボーイズ』のカセットテープなんです～。

お兄さん、聴いてみて下さいね～。」

「うん、必ず聴くよ…!」

ツヤツヤと濡れているみたいに光る、真っ黒の髪....

活力に満ちた黒い瞳、愛らしい少し垂れた瞼....

小さめの顎、小さめの唇....

そして、まるで周りを明るく照らす様な魅力ある微笑み....

湯気が立つコーヒー・カップを挟んで、向かい合わせのまま談笑するあいだ中、私はYちゃんの顔にウットリしていました....

(Yちゃん、何て愛おしいんだ....)

君の笑顔を独り占め出来る僕は、何て幸せなんだろう...!)

やがて、『国体』のアーチェリー競技の話題になりました....

すると....

「ところでMiyabiお兄さん〜。

『国体』の試合はどうだったんですか〜。」

Yちゃんは目を一層輝かせながら、尋ねてきたのです....

「そ、それがさ....

試合に飲まれちゃってさ....

いつもの点が出せなかったんだ....

下から数えた方が早い順位さ....。」

「そうだったんですか〜。」

「宮城県チームの足を引っ張ってるのに気づいて...、
かえって動揺しちゃってさ...、
最後は投げやりに射ってしまったよ...。
僕って、ダメだよなあ...。」

「困ったヒトですね〜。」

「...。」

「Miyabiお兄さんらしくないですね〜。」

「いやあ、あの時は緊張しちゃってさ...、
初めて『国体』出場だったからね...。
いや、あれはきっと誰もなると思うよ...。」

「あらら〜。」

「『50m+30m』の試合だから、ちょっと油断しちゃってさ...、
ついお酒を飲み過ぎたり...、
練習不足もあったかな...。」

「ふ〜ん。」

「僕なんか、どうせドジ男さ...。
何やっても失敗ばかりのダメ人間さ...。」

「悔しくないんですか〜。」

「えッ...!？」

「自分に負けて悔しくないんですか〜。」

「も、勿論悔しいよ...!」

「『国体』に出たんだから〜、
何故もっと頑張らなかったんですか〜。
最後まで諦めないで射ったんですか〜。
それに、大学を何日も犠牲にしたんですよね〜。」

「う、うん...。」

「だったら、尚さら努力を惜しまずトライしないと〜。
チャンスはそう何回も無いんですよ〜。
さっきから、言い訳ばかり〜。
Y、もっと頑張ってきたお兄さんに逢いたかったな〜。」

「...。」

Yちゃんの指摘は鋭く、まさに的を射ていました...。

私は暫し、冷めたコーヒーを見つめたまま俯いていました...。

彼女はスポーツに対し常に純粋で、アーチェリー競技は他の誰よりも真剣に取り組んでいました...。

さすが高校時代に、山形県内で1、2を争う女子バレーボール部のキャプテンを務めてきた女性だけのことはあります...。

しかし、Yちゃんの指摘の理由は、それだけではなかったのです…。

「私、Miyabiお兄さんとお付き合いさせてもらって～。
気付いたんですけど～。
何か思っていたのと違う～。」

「えッ…!?!」

「私、Miyabiお兄さんって、常に冷静で落ち着いて行動するタイプだと思っていたの～。
でも、何だか意外と気が短くて、時々自分のことしか見えなくなる人だった～。」

「えッ…!?!」

「でも、優しいところは好きよ～。」

「...(ホッ)。」

そして、この後Yちゃんは…。

信じられない事を言いました…。

ブルー&アイボリー色のスタジャンを傍らに置いたまま、トレーナー姿のYちゃんは…、

もうすっかり冷め切ったコーヒーの、カップに描かれた絵柄を見つめるようにして…、

述べたのです…。

「いままで付き合っていた彼と、今年の夏休みに別れてきたの～。」

「えッ...!？」

ガァ-----
ーンンンンンンンンンン(余韻)!!!!!!!

奈良の東大寺や法隆寺にある由緒ある梵鐘が、どの位の大きさがあるのか判りませんが...

あの釣り鐘の中に入って、思っきり叩かれたかの様に...

私の脳味噌が砕け散った瞬間でした...

(Yちゃんに、つ、付き合っていた男性がいたなんて...!?!?!?!?!
嗚呼、神さま、仏さま...!!!!!!)

動揺を悟られないように、精一杯に平静を装う私でしたが...

彼女の話を、最後まで尋常に聞いてられるか自信がありません...

膝の上に乗せた両手の拳を、強く握りしめたままジッと耐えるのがやっとでした...

「Yが付き合っていた彼はね、小さい頃からの幼馴染みのよ〜。」

「...。」

「ところが2人仲良しだったんだけど、だんだんイヤになっちゃったの〜。」

「...。」

「その理由はね、彼は私に甘えたり、頼ることが多くて〜。
何か違うのよね〜。
私は、男性にリードして欲しいのよ〜。」

「...。」

「何ていうのかな〜。
Yは、しっかりしている人に〜。
器の大きい男性に、心から支えてもらいたいよ〜。」

「...。」

窓が無いので外の様子は伺い知れませんが、喫茶店に入ってかれこれ1時間は経ったでしょうか...
。

その間、盛り上がった序盤のムードは一転し...

「〜。」

「...。」

とうとう、2人の会話は途絶え...

晩秋の空に舞う風の如く、私と宮学のYちゃんの間がヒンヤリしていました...

(ま、まずいッ...!
このままだと、Yちゃんに捨てられるッ...!)

雲行きが怪しくなった2人の関係に、危機感を覚える私でした...

ここは一つ...

彼女が理想とする『器の大きい男』を演技するしか手立てが無さそうです...

Yちゃんに嫌われたくない一心で、私は一か八か賭に出ました...

「わ、Yちゃん、ぼ、僕はねえ...、
僕はねえ...!
君のことを本当に好きなんだよ...!
だから、真剣に君のことを思ってる...!
た、確かにちょっと...、
そそっかしい所はあるけれど...、
ぼ、僕はねえ...!
Yちゃん、君のことを本当に好きなんだよ...!
朝から晩まで君のことを思ってる...!
だから、
だから...!」

真剣さが伝わったのでしょうか...

Yちゃんは、そのくりくりとした瞳をさらに大きくさせ...

表情が変化したのが判りました...

私の目を見ながら、小さく頷きながら最後まで聞いていました...

きっと、私の思いを受け止めてくれた筈です...

その日の晩は、興奮して寝れませんでした...

頭の中では、Yちゃんが打ち明けた言葉が繰り返し浮かんできます...

何故ならYちゃんに最近まで彼がいたという事実を、なかなか受け入れることが出来なかったからです...

しかし、これは現実なのです...

私は、心の奥で叫びたい気持ちで一杯でした...

ふと思い出して、Yちゃんがくれた『バービー・ボーイズ』のカセットテープを聴いてみました...

。

すると...

初めて聴いた『バービー・ボーイズ』は...

男女2人のヴォーカルから絞り出される声が、2人ともハスキーヴォイスで...

実にセクシー...

甲高いサックスの音色が印象的に絡む流暢な曲に乗って...

まるで男女の応酬会話の様な、オトナの歌詞に...

鳥肌が立つように、ぞくぞくと私の耳に迫ってきました...

宮学のYちゃん...

(彼女はオトナだあ...)

それに比べて、僕は情けないなあ...

純情過ぎやしないかあ...?

しっかりしろー!!

男だろー!!

Yちゃんが惚れ直す、器の大きい男になれッ...!!

でも、器の大きい男って、何をすればなれるのかな...?)

間もなく私は、大胆な作戦に出ました...

私たち以外は、誰も居ません…。

薄暗くなった砂浜に立ったまま、海を見つめていても…、

白く冷たい11月の波しぶきが、2人の男女に向かって打ち寄せるだけ…。

しかも、冷たい風が2人を煽るのです…。

ザザザザザザザザザザザザザザサ—————ッ!!!!!!!!!!!!!!

バツシャ—————ッ!!!!!!!!!!!!!!

ぴゅるるるるるるる—————ッ!!!!

「あ、Yちゃん…、
こんなに手が冷たくなっちゃって…?」

「Miyabiお兄さん、
握って温めてよ〜。」

ふと触ったYちゃんの右手の甲が、やたら冷えていることに気付いた私は…、

左手でしっかりと握りしめました…。

ところが、それでも彼女の手が冷たいままなのです…。

すると...!?

Yちゃんは自分の左手の袖をすくめて、私の右手を握りしめてきたのです…。

私は一瞬ドキリとしました…。

2人は向かい合わせのまま、お互いの両手を繋いだまま立っています…。

スタジャンの袖とスタジャンの袖で繋いだ両手は、温かく…、

心臓の鼓動が伝わってくるようでした…。

ザザザザザザザザザザザザザザサ—————ッ!!!!!!!!!!!!!!

バツシャ—————ッ!!!!!!!!!!!!!!

ぴゅるるるるるる—————ッ!!!!

「～。」

「…!」

沈みゆく太陽に背を向けた私は、Yちゃんの両手を握りしめたまま…、

ほのかに照らされる明かりで、彼女の愛しい顔を見つめていました…。

彼女もまた、私の顔を見つめていましたが…、

やがて両目を閉じたのです…。

「～。」

「…!」

ザザザザザザザザザザザザザザザサ—————ッ!!!!!!!!!!!!!!

バッシャ—————ッ!!!!!!!!!!!!!!

ぴゅるるるるるる—————ッ!!!!

瞼を閉じた彼女の何とも言えない可愛らしい顔に…、

ウツトリしながら…、

私は…、

チュッ!

口づけしたのでした…。

ザザザザザザザザザザザザザザザサ—————ッ!!!!!!!!!!!!!!

バッシャ—————ッ!!!!!!!!!!!!!!

ぴゅるるるるるるるー——ッ!!!!

それから間もなく、2人に...

夢のような、ラブラブな期間が訪れました...

ある日のことです...

「もしもし～。
Miyabiお兄さん～。
今度、Yの部屋を模様替えしたいのよ～。
本棚が欲しいから、一緒に選んで欲しいのよ～。」

「も、勿論OKさ...!」

いつものように待ち合わせした2人は、カローラに乗って量販店へ家具を見に行きました...

本棚以外にも、日用雑貨をあれこれ買い求めるYちゃん...

「何だか、私たち夫婦みたいじゃない～。」

「えッ...!？」

「あ～あ。
早く結婚したいな～。
Yね、もう山形に帰りたくないの～。
卒業したら、このまま仙台で暮らしたいの～。」

「...。」

「そしてね、早く子供を産みたいの～。
だって赤ちゃんって可愛いんだもん～。」

「そ、そうだね...。」

買い物が一段落した後、レストランで飲み物を口にしながら何気ない会話をする2人...

この頃は、彼女との付き合い方のコツが掴めてきた私です...

しかし、突然の次の言葉に...

意表を突かれました...

「Miyabiお兄さん～。
私のことを本当に思ってくれているなら～。
Yと～、
Yと結婚してちょうだい～。」

「えッ...!?!?!?!?!?!?!?!」

「Miyabiお兄さん～。
私のことを本当に思ってくれているなら～。
Yと～、
Yと結婚してちょうだい～。」

「えッ...!?!?!?!?!?!?!?!」

(け、けけけけ...、け...、
け・っ・こ・ん...!?!?!?!?!?!?!?!)

プッシュー—————ッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!(血圧が上昇している様子)

不意を突いて投げ掛けられた、Yちゃんからの『求婚』...!!!!

愛しの彼女の、必殺の一言に...、

私は動揺してしまい、直ぐに反応することは出来ませんでした...、

それは、当時の若い私にとって、これ以上ない喜びと感動の瞬間だったのです...。

そして間もなく出した答えは、当然...、

「も、勿論OKさ...!!!!
け、結婚しようよ、Yちゃん...!!!!」

「約束ですよ～。」

「う、うん...!!!!

必ず...!!!!」

興奮のあまり、口にした飲み物の味など全く判らなくなった私....、

そのとき頭の中では、Yちゃんと私の新婚ラブラブシーンが....、

まるでドラマの1カットを見ているかの様に、もの凄い勢いで浮かんでは消えていました....。

「Yちゃん...!!!!」

(僕とYちゃんが、一緒に生活をする...!?!?!?!?)

まるで....、

まるで、岡崎友紀主演のTV番組『なんたって18歳』シリーズの、『おくさまは18歳』みたいに...

、

学生同士で、夫婦生活を送れるのかな...!?!?!?!?)

宮学のYちゃんに、密かに好意を寄せ続けてきた1年半....、

こんな信じられない希望に満ちたチャンスが訪れて来るとは....。

まさに夢見心地でした....。

「...!!!!」

「あの～。
Miyabiお兄さん、大丈夫ですか～。」

「え`ッ...!?
い、いやその...、起きてますよ...!」

「困ったヒトですね～。
結婚は～、
Yが卒業してから～。
私が大学終わるまで、私を待っていて下さいね～。」

「え`ッ...!?
そ、卒業してからのッ...!?!?!?!?!」

「そうですよ～。
だってお兄さんの方が、学年上なんだから～。
先に社会人になる訳ですよ～。」

「う、うん...。」

「そしたら～。
その後、Yと結婚してちょうだいね～。」

「う、うん...!!!!」

「約束ですよ～。」

「う、うん...!!!!
必ず...!!!!」

この時の私は、留年していることを彼女に隠していたのです...

しかし、思い掛けない2人の急接近と大きな展開があって...

この日、若い男女は結婚の約束を交わしたのです...

結婚の約束をしたのです...

そう...

結婚の約束をしたのです...

遅かれ早かれ、私とYちゃんの結婚は来るべき日にすれば良いわけです...

私と憧れのYちゃん、2人の結婚...!?

夢...!?

いえ、現実です...

これは夢じゃないだろうか、何度頬をつねったことか...(笑)。

この日の帰り際、レストランを出る時刻...

またしても、Yちゃんが必殺の一言を投げ掛けて来ました...

「ねえ、Miyabiお兄さん～、
このまま、買った本棚を～、
Yのアパートまで運んでくれないかしら～。」

「も、勿論OKさ...!」

(えッ...!?!?!?!?!?)

Yちゃんに通っている宮城学院女子大学、その所在地にほど近い仙台市の「桜ヶ丘」という地域に彼女のアパートがありました...

Yちゃんの1人暮らしの部屋...

その禁断の扉が開かれるというのか...!?

彼女を乗せた私は、淡々とカローラを走らせ...

冷静なふりをしていましたが...

本当は、徐々に近づいてくるその目的地に思いを馳せるごとに興奮が高まっていました...

2人が待ち合わせして出掛ける際は、主に仙台駅前周辺が落ち合うスポットでした...

ですから、入るのは勿論見るのも初めてです...

Yちゃんに指示されるまま、ハンドルを切って進むと...

そこは、山を切り開いて造成した比較的新しい団地の…、

住宅がびっしりと建ち並んだ、ある一角に所在していました…。

「ここですよ～。」

「…!」

(ドキドキドキドキドキ…!!!!)

新築されてから年数がまだ浅いそれは、薄緑色の外壁をした清楚な感じの2階建ての建物で…、

中央の駐車場を取り囲む様に、コの字型に建っていました…。

「Miyabiお兄さん、ちょっと待ってね〜。」

と言って、カローラから先に1人降りたYちゃんは…、

慎重に左右を見渡してから、私に手招きしました…。

「このアパートに入居出来るのは、うちの女子大生だけなの〜。」

「えッ、そうなんだ…!？」

トランクから急いでダンボール詰めの本棚を降ろし、それを抱えてYちゃんの後を追う私…。

愛しの彼女の1人暮らしの部屋は、1階の中央付近にありました…。

(ここがYちゃんの部屋かぁ…!!)

開錠と同時に部屋の明かりを灯されると…、

夢にまで見た、女子大生の禁断の世界が見えてきました…。

「どうぞ～。」

「…!」

(ドキドキドキドキドキ…!!!!)

「へえ…!」

「恥ずかしいわ～。」

そこは、いわゆる1Kと呼ばれる決して広くはないキッチン付きの、こじんまりとした1フロアの部屋で…、

カーペット敷きの上にベットとテーブル、それにテレビとオーディオが…。

いかにも女性の1人暮らしらしく、清潔感が漂っていました…。

ぬいぐるみやキャラクターグッズが少し…。

女性向けのコミックが少々並んでいます…。

「今、お茶を出すからね～。」

「う、うん…」

私はダンボールを開けて、本棚を組み立てながら....、

キッチンに立つ、Yちゃんの後姿を見て幸せな気分になっていました....。

「本当に僕、入って大丈夫なの...?」

「この部屋に、男の人はお父さん以外入ったこと無いのよ〜。
だから、隣にバレたら大変〜。
きゃはは〜。」

照れ臭そうに笑う彼女、でもとても嬉しそう....。

私も、こうしてYちゃんの部屋に居ることが何だか信じられない思いです....。

「このテーブルクロス、気に入ったの〜。」

「へえ...!」

「突っ張り棒は、ここに使おうと思ったのよ〜。」

「なるほど....。」

「Miyabiお兄さん、本棚はこっちにお願いします〜。」

「は、はいはい....。」

暫しの間、2人で部屋の模様替えをした後です…。

「今日は、Yが晩ご飯作ってあげるからね～。
食べてってね～。」

「えッ…!?
いいの…!?
そりゃ、楽しみだなあ…!？」

こうして今夜は、Yちゃんが料理を振る舞ってくれることになりました…。

私はテレビやマンガ本を読むふりをしながら…、

今度はエプロンを纏ってキッチンに立つ、彼女の後ろ姿を眺めていました…。

(Yちゃん、まるで奥さんみたいだなあ…!!)

昔話の、浦島太郎が招かれた竜宮城…、

(僕は、幸せだなあ…!!)

そこで出会った乙姫様に、飲んだり食べたりの豪勢な接待を受けたエピソードと…、

今の自分を重ねる私…。

(まさか、夢じゃないよね…!?)

「Miyabiお兄さん、お待たせ～。
今夜は温かいシチューですよ～。
さ、どうぞ～。」

「わあ、嬉しいなあー!!
Yちゃんの手作りが食べられるなんて...!!
頂きまーす...!!」

「お味は、どうかしら～。」

「うん、とってもウマイよ...!!
Yちゃんって、料理上手なんだなあ...!!」

「あら～、
おだてたって、ダメですよ～。」

「だって、ホントに最高さあ...!!
Miyabi、感激い...!!」

「困ったヒトですね～。」

「ははは...!!」

まるで、湯気が立つアツアツの作りたて料理の様に....、

今夜の若い2人の男女は、誰にも止められないほどアツアツでした....。

何故なら....、

(ひょっとして、この展開だと...!?)

ま、まさか...!?)

ウソ...!?)

Yちゃんが....

こんなことを言いました....。

「Miyabiお兄さん～、
今夜、ここに泊まっていきなよ～。」

「えッ...!?!?!?!?!?!?!?!」

時刻は、午前3時を少し回ったばかり…。

日中の喧噪が消え、静寂に世間の人々が寝静まり返る頃…、

こげ茶色のクルマが、国道の真っ黒な直線を凄い勢いで飛ばしています…。

ブルルルルル～!!(カローラの音)

「うおおおおーッ…!!!!」

訳もなく大声を上げる私…。

ルームミラーに映る情けない男の顔は、うつろな目をしています…。

「馬鹿ッ、馬鹿だッ、俺はッ…!!!!」

ブルルルルル～!!(カローラの音)

「はあ～ッ…。。。。」

やがて、溜息しか出てこなくなりました…。

そして1人、クルマを宛ても無いまま、ただひたすら何処までも…、

闇の続く街道を走らせていました…。

ブルルルルル～!!(カローラの音)

それは、男として実に情けない夜でした....。

夕べは愛しのYちゃんの....、

禁断の1人暮らしのアパートに招かれて....、

夢にまで見た、ラブラブな夜に...!!

何と!! 泊まったのですが....、

その後は....、

ベッドの中で、手を握っただけ....。

「アホ....、馬鹿ッ....、マヌケ~!!
お前は、何をやってるんだッ...!!!!!!」

私はハンドルを叩きながら、何度も自分を責めました....。

結局、朝まで居たらマズイので、周りに気付かれないうちに退散となったのです....。

「はあ〜ッ…。。。。。」

ブルルルルル〜!!(カローラの音)

その日は....、

家族に顔を合わせると気まずいので、散々時間を潰してから....、

お昼近くに家に帰りました....。

すると....、

大学から、私宛の郵便物が届いています....。

『東北工業大学』の学生課からでした....。

(何々....、

前期試験の結果....、

ほとんど赤点....。

後期に履修される科目の単位を全て取得しても....、

留年となります...!?!?!?!?!?

担当教授に相談して下さい...?

は!?

何これ...!?!?!?!?!?

2回目の留年になるの...!?!?!?!?!?)

グシャグシャグシャッ!!!!!(成績通知書を破り捨てる音)

(こ、こんなものッ...!!!!

成績....

成績だけで人間の価値が決まるものかッ...!!

ば、僕はアーチェリーで東北学生チャンピオンなんだぞッ...!!!!

チクショウ...!!!!)

「うおおおー——ッ...!!!!

馬鹿ッ、馬鹿だッ、俺はッ...!!!!」

訳もなく大声を上げる私...。

自分の部屋の物を、手当たり次第に掴んでは投げつけ....、

バンッ、ガッシャー——ン!!!!

蹴飛ばしたテレビのガラスが、粉々に吹っ飛びました...。

半狂乱になった男は、うつろな目をしたままクルマに乗って....、

また、宛てもなく走り出しました...。

ブルルルルル〜!!(カローラの音)

天国と地獄とありますが...

彼女と過ごしたラブラブな昨日は天国で、一夜明けた今日は地獄...

勿論、それは誰のせいでもありません...

全て自分が招いているのです...

自業自得...

アーチェリーと女の子の事ばかり頭にあって...

肝心の勉強が疎かなまま、時間の浪費をしてきた天罰が下ったのです...

(もしも...

もしも、Yちゃんが知ったら...!?

2度も留年という僕のアホさに呆れて...

キライになっちゃうんじゃないかな...!?)

「はあ〜ツ...。。。。。」

ブルルルルル〜!!(カローラの音)

(シユン...。)

どこの町かも判らない街道…。

おもむろにカローラを止め、シートに横になって道端の林を眺めたままボウツとする私…。

ふと、Yちゃんがくれた『バービー・ボーイズ』のカセットテープを聴いてみました…。

すると…、

特徴的な2人から絞り出されるセクシー・ヴォイス…。

語るようなセリフ、男女のオトナの会話…。

甲高いサックス音と共に、私の心を揺さぶってきます…。

(そうか…!!

どんな状況になっても、本気で相手を好きなら…、

関係ないんだ…!!

だって、僕とYちゃんは…、

結婚の約束をしたんだもの…!!)

『バービー・ボーイズ』の音楽に励まされたカタチで、少し自信を取り戻した私…。

(遭いたい…。

やっぱり彼女に逢いたい…。

遭って、2人の愛を確かめたい…。)

公衆電話からTELする私…。

しかし、繋がりません…。

プーップーップーップーップーッ!

何度も何度も、掛け直す電話...

プーップーップーップーップーッ!

幾度試してみても、繋がりません...

プーップーップーップーップーッ!

気持ちだけが焦っていく私...

(きょう、今日こそ...!

いや、今夜こそ...!)

夕方、Yちゃんが帰宅する時間になりました...

すると...!?

「もしもし〜。」

「Yちゃん、ほ、僕だけどさあ...!」

「Miyabiお兄さん〜?」

「Yちゃん、タベはありがとう...!

君の声がどうしても聞きたくなって掛けたんだよ、ゴメンね...!？」

「一体、どうなさったんですか〜?」

「Yちゃん、じ、実はさ...、

どうしてもまた遭いたいんだよ、また今夜も遊びに行ってもいいかな...!？」

「困ったヒトですね〜。

でも、いいですよ〜。」

「ほ、本当...!？」

嬉しいなあ...!

じゃあ、今から向かうね...、

あ、何か食べ物を買っていくからね...!

待っててね...!」

こうして私はこの日、再び...、

半ば強引に、彼女のアパートに押し掛けたのです...。

それは何故か...。

再び留年が発覚した腹癒せでしょうか...?

男として不甲斐ない昨夜の顛末を挽回したいが為か...。

きっと、そんな事より....、

一番は、結婚の約束をした愛しいYちゃんと....、

心も体も、結ばれたかったから.....。

「Yちゃん、今日は押し掛けちゃってゴメンね...!？」

「まったく困ったヒトですね〜。」

「実はさ....、

ちょっとショックな事があってさ....、

でもこうしてYちゃんと、この部屋で....、

またご飯食べられるなんて、僕は幸せだなあ...!」

「そうですか〜。

Yは、寂しがりやさんだから〜、

この部屋に独りぼっちはどこか寂しいのよね〜。」

「そうだったんだ...。」

「Miyabiお兄さんと、2人で居るとホッとするな〜。」

「本当...!？」

僕もだよYちゃん...!

いつまでも、こうして2人で居ようよ...!」

「いいですよ〜。」

「...!」

「～。」

こうして、彼女のアパートにて…、

私とYちゃんの、2人っきりの夜が…、

今夜も訪れました…。

♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～

(ラジカセから流れる『バービー・ボーイズ』の曲)

夕飯を食べた後…、

先にお風呂に入って、部屋で音楽を聴きながらくつろぐ私…。

やがてYちゃんは…、

恥ずかしそうにしながら、お風呂場に行きました…。

そして数十分後…。

「...!!!!!!」

「～。」

薄明かりの下....

バスタオル1枚だけで胸を覆ったYちゃん...。

その素肌からは、ホカホカッと湯気が立ち昇っています...。

「...!!!!!!」

「～。」

Yちゃんの水々しい素肌が、薄ぼんやりとした部屋の灯火に照らし出されて見えました...。

「...!!!!!!」

「～。」

そして気が付いた時には、お互い腕と腕を絡ませていたのです...。

私とYちゃん、2人抱き合いながら....

ベットに沈み込んでいきました...。

心も体も天国へとでも昇っていくような夢心地でした...。

(みんなのうたの時間です)

♪ステレオ途切れたら 言葉につまづいた
どこかで聞こえてる 子供の笑い声

うかつに動けない 手も出せない
見つめ合うだけの Face to Face

誰かに来て欲しい この部屋二人きり
不思議と夜遊びの 誘いが今日もまだ

明かりも消せずに 決めかねてる
見つめ合うだけの Face to Face

チャンス到来 露わになった
背中にMoonlight

チャンス到来 恥ずかしかった
うなじがStan-by

チャンス到来 転がりこんで
秘密のジェスチャー♪

♪誰にも邪魔されず 二人でいたいのに
隣で聞き耳を たててるやつがいる

うかつに動けない 手も出せない
見つめ合うだけの Face to Face

チャンス到来 露わになった
背中にMoonlight

チャンス到来 恥ずかしかった
うなじがStan-by

チャンス到来 転がりこんで
秘密のジェスチャー♪

♪明かりも消せずに 決めかねてる
見つめ合うだけの Face to Face

チャンス到来 露わになった
背中にMoonlight

チャンス到来 恥ずかしかった
うなじがStan-by

チャンス到来 転がりこんで
秘密のジェスチャー♪

(『チャンス到来』うた：バービー・ボーイズ)より

ガバッ!!(布団をめくる音)

「ハッ...!？」

チクタクチクタクチクタク...!(時計の針は、朝の4時過ぎを指している)

(しまった、もうこんな時間か...。)

「～。」

(Yちゃんの寝顔って、何て可愛いんだろう...。)

「～。」

(彼女を起こさないように、そーっと...。)

カチャリ...!(なるべく音が立たないように、静かにドアを開けた私)

(またね、Yちゃん...。)

ブルルルルルルルル...!!(カローラに乗り込んでYちゃんのアパートを後にした音)

その日の夕方...。

「どうして～、
Miyabiお兄さん、どうして黙って帰っちゃったんですか～。」

「い、いや、その...。」

「朝起きたとき～、
Y、1人ぼっちなんて寂し過ぎます～。
帰るなら、私を起こしてキスしてからにして下さい～。」

「えッ...!?
ご、ご免なさい...。」

「困ったヒトですね～。」

「は、はい...。」

意外でした...。

Yちゃんに迷惑を掛けないように配慮したことが、かえって彼女を傷つけてしまったのです...。

(デリケートだなあ...。
Yちゃんって、ホントに寂しがり屋なんだあ...。
それにしても、女性って欲が凄いなあ...。)

などと、ちょっとぐらい大人になっただけなのに急に、にわか女性評論家気どりの私でした...。

「Yちゃん...!!」

「Miyabiお兄さん～。」

こうして私はいつの間にか...、

彼女のアパートに上がる回数が増えていったのです…。

「…!」

「～。」

そんな日々が続いた、ある日曜日のことです…。

都合で実家に一時帰宅した彼女を…、

私がクルマで迎えに行きました…。

ハラリ～、ハラリ～、(公園の落ち葉が舞い落ちる様子)

ここは山形県米沢市…、

宮学のYちゃんの生まれ故郷です…。

ルーールーールーッ、ガチャッ!(公衆電話を掛ける音)

「どちらさまですかーっ。」

「あ、あの…、僕…、
東北工大のMiyabiと申しますが、Yさんをお願いします…!」

「はー?

ちょっとお待ちをーっ。」

数分後…、

「お待たせ〜。」

「Yちゃん...!!」

「Miyabiお兄さん〜。
遠いところ、迎えに来てくれてありがとうございます〜。」

「いや、僕は何ともないよ...!!」

「バスはもう飽きちゃったから〜、
仙台までお兄さんのクルマで帰れるなんて、嬉しいな〜。」

「さっきの電話だけどさ...、」

「あ〜。
Yの嫌いな、あのヒトが出たのね〜、
ボーイフレンドに乗せてもらうのって言ったら〜、
お母さん、凄い顔してたのよ〜。
きゃはは〜。」

「は、はは....、
だ、大丈夫なのッ...??」

「いいの〜。
だってMiyabiお兄さんと一緒になるんだもの〜。」

「Yちゃん...!!」

(デリケートだと思っていたのになぁ...。

Yちゃんって、突然、大胆に振る舞うよなぁ...。

そこが魅力的な女性なんだよなぁ...。)

などと、生まれて初めて女の子と付き合ったくせに、にわか女性評論家気どりの私でした...。

ブルルルルルルルル...!!(カローラの走行音)

カローラに彼女を乗せた私は...

クルマも人通りもまばらな晩秋の、JR米沢駅の周辺をゆっくりと回った後...

米沢牛の看板を掲げた飲食店に停めました...。

そこで、お腹を空かせた私は米沢牛のステーキを一人前...

一方Yちゃんは、そばを食べました...。

初めて足を運んだここは...

愛しい人の生まれた町...。

そこに、今こうして恋人同士で、2人でのいる...。

それは、何だかくすぐったくなるような、何とも言えない嬉しさでした...。

ブルルルルルルル...!!(カローラの走行音)

「～。」

今日のYちゃんは終始上機嫌です…。

きっと、仙台に戻れることが嬉しいのです…。

母親に拘束される家庭環境から脱出したかったと、彼女がいつか打ち明けたことがあります…。

だから、早く結婚相手を決めて、自分の家庭を作りたいのかも知れません…。

それを裏付ける出来事が、この後ありました…。

米沢市を抜け出した2人のクルマは、国道を北上して上山市に入りました…。

そこには、上山城という小さなお城がありました…。

私たちは、そこを休憩がてら見学することにしたのです…。

城の内部は狭く、展示してある江戸時代の資料を観ても一回りすればあっという間でした…。

退屈しのぎに、長椅子に腰掛ける私とYちゃん…。

「かわいい～。」

「え…?」

「ほら、あそこの2人組、腕に赤ちゃん抱っこしてるのよ～。

いいな～。」

「う、うん…。」

そして彼女は言いました…。

「ねえ、Miyabiお兄さん～。
Y、お願いがあるのよ～。」

「な、何なの…?」

「私達、結ばれる約束したのよね～。」

「う、うん…。」

「シルバーリング、Yにプレゼントして～。」

「し、し、シルバーリングって…??」

「困ったヒトですね～。
銀の指輪のことですよ～。」

「は、はあ…?」

「結婚前からシルバーリングを薬指にはめると～。
その女性は、一生幸せになれるのよ～。」

「そうなんだ…!」

ブルルルルルルル…!!(カローラの走行音)

山形県と宮城県の県境、笹谷峠を越えて…。

長い長いトンネルを抜けると…、

そこは仙台…。

「～。」

疲れたのか、クルマに揺られたまま寝ているYちゃんの横顔…、

カローラの助手席はすっかり、Yちゃんの指定席になりました…。

運転しながらチラリと覗く私…。

(Yちゃんの寝顔って、何て可愛いんだろう…。

シルバーリングかぁ…。

よし、彼女にプレゼントして喜ばせてあげよう…。)

Yちゃんの指に、銀の指輪をはめて…、

結婚の約束を確実なものにしようと、私は決意したのです…。

長い長い笹谷トンネルから出ると、既に陽が落ちて辺りは真っ暗でしたが…、

眼下に広がる仙台の街の光が、ピカピカと輝いてとても綺麗です…。

それが見えた瞬間…、

暗くて長かった私のトンネルから、抜け出せそうな気がしました…。

ブルルルルルルルル...!!(カローラの走行音)

ここは、東北工業大学の構内です…。

「エエ～、
g77 heikin.f -o heikin でコンパイルしたら～、
./heikin < tensuu.d のように実行してみなさい～。」

(Yちゃんの寝顔って、何て可愛いんだろう…!
もう、僕が一生独占してやるぞッ…!)

「エエ～、
次に画面に表示される実行結果を～、
kekka.out というファイルに出力したい場合についてはア～、」

(Yちゃんの体つきって、ムッチリしてて何てセクシーなんだろう…!
誰が何と言ったって、彼女を離すもんかッ…!)

「エエ～、
./heikin < tensuu.d > kekka.out のように打ちますとオ～、」

(シルバーリングかぁ…!
指にはめてあげたら、Yちゃん喜ぶだろうなァ…!)

殺伐とした意匠の全く色気のないプログラミング室で、まるで腑抜けの如くボーッとしたアタマ真っ白のままフローチャートを書いている…、

目に浮かぶのは、愛しい宮学のYちゃんの姿ばかりです…。

入力を済ませて、待つこと数分…。

出力された紙には....

『?w?,?y~b1w/d.m~,,0m:~?/:w.g~/da~!.....?????Error (バ~カ!)』

(...ったく!

コンピューターなんて、こんなくだらないモン....

誰が創ったんだア...!)

グシャグシャグシャッ、ポイツ!!

(もう、こうなったら決断するしかないッ...!

よしッ、僕はモウ決心したぞッ...!)

『学籍番号〇〇〇〇〇〇〇〇、次の者はレポートを再々提出するように』

掲示板に自分の学籍番号を見つけても、もう何とも感じません....。

(もう、こんなのどうだっていいんだッ...!

こんな大学なんか、クソくらえだッ...!)

学生課の窓口足運び....

ある書類をもらって、大学を後にする私....。

(僕はモウ決心したぞッ...!

僕には、僕には....

Yちゃん意外は、もう必要なんか無いんだッ...!)

八木山を下り、名掛丁で立ち食いそばを食べたり....、

デパートの中にある書店に立ち寄ったりしながら....、

早めに帰宅した私....。

そして....、

「ただいま...!

おバァちゃん、おバァちゃん...!

話があるんだけどさ...!」

「お帰り、Miyaちゃんヤ〜!

今日は、やけに帰りが早いねエ〜?

一体、どうしたンだい〜?」

「じ、実はさ....、

いろいろ悩んだけど....、

僕、大学を辞めて....、

直ぐに働きたいんだよ...!

そして、直ぐ結婚したいんだよ...!」

「え` え` ッ〜!

びっくりさせないでおくれ〜、

Miyaちゃんヤ〜!

最近、朝まで帰らないと心配してたらこれだものオ〜!」

「僕、決心したんだ...!

賛成してくれるよね、おバアちゃん...!
退学届けを、明日にでも出すつもりさ...!」

「Miyaちゃんヤ〜!
おバアちゃんに任せなァ〜!
お父さんお母さんには、私が強く言い聞かせるからァ〜!」

「ありがとう、おバアちゃん...!」

私と祖母との会話は続きます...

「Miyaちゃんヤ〜!
大学辞めた後はァ〜、
直ぐ結婚したいってホントかい〜?」

「じ、実はさ....、
いつか連れてきたガールフレンドの....、
宮城学院女子大のアーチェリー部の....、
Yちゃんなんだけどさ....、
じ、実はさ....、
2人で結婚の約束したんだよ...!」

「ンまあァ〜!」

「Yちゃんはぼ、僕のことには夢中だし....、
ぼ、僕もYちゃんを、とっても気に入ってるし....、
ホントは、今直ぐにでも結婚したい位なんだ...!」

「アラララララァ〜!」

「か、Yちゃんの希望は....、
僕が先に社会人になって、その後....、
彼女が卒業したら、直ぐに結婚して欲しいって...!」

「Miyaちゃんヤ〜!

おバアちゃんは18歳で、おジイさんと結婚したんだヨ...!

だから、ちっとも早くないからア〜、
その人のことを本気で好きだったらア〜、
今直ぐにでも結婚しちゃうア〜!」

「え` え` ツ...!」

「Miyaちゃんヤ〜!

おバアちゃんに任せなア〜!

お父さんお母さんには、私が強く言い聞かせるからア〜!」

「ありがとう、おバアちゃん...!」

私と祖母との会話は、まだまだ続きます...

「Miyaちゃんヤ〜!

大学辞めた後、直ぐ働きたいのはア〜、
その人と、結婚したいからなのかい〜?」

「じ、実はさ....、

Yちゃんは、結婚したら直ぐに赤ちゃんが欲しいんだって...!
だから....、
僕は一日でも早く仕事に就いて、お金を稼ぎたいんだよ...!」

「Miyaちゃんヤ〜!

で、何の仕事をするつもりだい〜?
バイトなんかじゃ、一生食っていけないヨ〜!」

「じ、実はさ....、

アーチェリーやってる障害者の方で....、
1人で印刷業をしている人に憧れていたんだよ....。」

「へエ〜!

印刷屋さんねエ〜?」

「僕も将来独立して、印刷業を1人でやりたいと思ってるんだ...!

だから、印刷屋さんに就職して技術を学びたい...!」

「Miyaちゃんヤ〜!

さすが男の子だねエ〜!

おバアちゃんに任せなァ〜!

私らは小学校しか出てないけど〜、

社長になった同級生いっぱいいるからァ〜!

どこか良い印刷屋さんに、就職お願いしてもらおうからァ〜!

お父さんお母さんには、私が強く言い聞かせるからァ〜!」

「ありがとう、おバアちゃん...!」

ピコッ♪ピッ♪ピッ♪ピコッピコッ♪

(今だッ!行け行けッ!それッ...!)

「はあ...。」

(俺は一体何やってんだ...、
しかし、何で大学なんかに入ったんだろう...。)

「ふう...。」

(大学の講義についていけなくて、2度目の留年決定...。
結局、3年通ったのに退学するんだったら...、
最初から、入らなきゃよかったんだ...。)

ピコッ♪ピッ♪ピッ♪ピコッピコッ♪

(今だッ!行け行けッ!それッ...!)

「はあ...。」

(昨日、おバアちゃんには勢いで言っちゃったけど...、
大学を中退していいのかな...、
これで本当にいいのかな、自分でもよく判らないや...。)

ピコッ♪ピッ♪ピッ♪ピコッピコッ♪

(今だッ!行け行けッ!それッ!あーあ...。)

「ふう...。」

(アーケードゲームに小遣い全部使っちゃった...、
今頃Yちゃんは、宮学の講義を真剣になって受けてるんだろうな...。
それに比べて、僕は何てだらしない男なんだろう...。)

「はあ...。」

(チェツ、つまんないなあ...。)

厚手のコートを着込んだ女性達が行き交うアーケードの中を、充てもなくさまよい歩く私...。

立ち並ぶ商店街は、既に年末の商戦の活気溢れる様相を見せており...

よく見ると、綺麗に飾り付けられたショーウィンドーや、各店頭にはクリスマス関連の商品が陳列されています...。

「来月は、クリスマスか...。」

その時、私の頭の中には...

もう残り少ない昭和60年のカレンダーの残り日数と、もう残り少ない大学生活とが重なっていました...。

考えてみれば、大学生としてYちゃんと過ごす貴重な時間は、もうあと僅かなのです...。

(そうだ...!

クリスマス・イヴの晩に...

Yちゃんに、シルバーリングを渡そう...!)

中央通りを奥に奥に進むと、ジュエリー専門店が幾つか有ります...。

その店舗のどれもが、表に面したガラス越しにカウンターがこちらを向いていて…、

いかにも高級そうに眺めた、貴金属が並んでいます…。

(何だか、僕が入るのは場違いだなあ…?)

でも…、

一体、シルバーリングはどの位するのかな…?)

私は店の前で立ち止まるものの、なかなか入る勇気が沸きません…。

一つ、また一つとジュエリー専門店を通過したあげく、Uターンして戻ってまた素通り…。

気を落ち着かせ、ようやく一つの店に入る決心を固めました…。

(バカッ、意気地なし、は、入るぞッ…!)

「いらっしゃいませー」

「あ、あの、その…、」

「何か贈り物でしょうかー」

「あ、あの、今日はお金が無いんだけど…、
し、シルバーリングは何円するんですか…?」

丁寧な対応で、陳列された指輪の一角を示す店員は…、

私に、幾つかの種類のシルバーリングを見せてくれました…。

(け、結構高いけど...、
あと半月もすれば、バイト代で買えるぞ...!
クリスマス・イヴの晩に...、
Yちゃんに、シルバーリングを渡すんだ...!
それまで彼女に内緒にしておこう...!)

ジュエリー専門店を後にした私は...

充てもないままブラブラした挙げ句、結局いつもの市バスに乗って八木山へ...

私はもう二度と受けることのない講義を、やっている最中の...

東北工大に行きました...

カンッ、カンッ、カンッ、カンッ、カンッ(サークル棟の階段を上がる音)

(実験や講義は全然つまらなかったけど...、
アーチェリーは、楽しかったなあ...。
先輩や仲間と頑張ったし...、
アーチェリーが思う存分出来たし...、
やっぱり大学に入って良かったなあ...!)

バタンッ!!(アーチェリー一部の部室を開ける音)

「チワース!!

Miyabi先輩、久しぶりッス!!」

「ち、チワース...!

や、やあ...!」

「先輩、最近ちっとも弓射ってないッスね!?

バイトばかりしてないで、

俺達の練習も、たまには見て下さいよ!!」

「ん....、

そ、そうだったね....。」

部室のテーブルを、ふと見ると....、

そこに、ある試合の実施要項が置いてありました....。

『第1回東北学生アーチェリー・インドア選手権大会』と書かれています....。

「えッ...!?

『東北学生インドア』...!?

こんな試合が出来たの...!?)」

「今年、初めて開催らしいッス!!

きっと、冬場になると全然練習しなくなるヤツが、多いからじゃないスかね!?)」

「....。」

(『東北学生インドア』か....、

で、出たい…。)

「Miyabi先輩も、勿論エントリーしますよね!?
12月の二週目に、仙台市秋保の体育館ッすよ!？」

「う…、」

(もし…、

もし、今年一杯まで中退しなければ…、

まだ大学を辞めなければ…、

これが、大学最後のアーチェリーの試合になるかも…!?)

3年間の大学生活に未練が無いと言えば、嘘になります…。

もっと真面目に授業に出席すれば良かったかも知れません…。

しかし、時間を巻き戻すことは出来ません…。

今更どうすることも出来ないのです…。

しかし、工大に入って良かったことも間違いなく有ったのです…。

それは、アーチェリーにトコトンのめり込んだという充実感でした…。

1日中アーチェリーのことだけを考えて過ごせるなどという時期は、恐らく一生の間でもう二度と無いでしょう…。

考えてもみれば、何と幸せな時代を過ごせたのでしょうか…。

そして…。

工大でアーチェリーをやっていたからこそ…、

宮学のYちゃんと、出逢えたのです…。

(アーチェリーで仲間が出来たし、
何より、Yちゃんと巡り会えて…、
結婚の約束まで出来たし…、
やっぱり大学に入って良かったなあ…!)

その後…、

Yちゃんと逢うなり、早速『東北学生インドア』の話題が持ち上がりました…。

「Yちゃん…!
じ、実はさ…、
実は君に、言っておきたい大事な話が…、」

「『東北学生インドア』のことですね～。」

「あ、いや…、
その…、」

「Miyabiお兄さん、お願いがあります～。」

『東北学生インドア』絶対優勝して下さい〜。」

「えッ...!？」

「あたし、男子は絶対Miyabiコーチが勝つから〜。
って、ウチの女の子たちに言っちゃったんです〜。
きゃはは〜。」

「そしたら、Miyabiコーチは〜、
Y先輩にメロメロでダメじゃんなんて言うのよ〜。
ひどいでしょ〜。」

「はッ...!？」

「そんなことないわよね〜。
だからMiyabiお兄さん、お願い〜。
『東北学生インドア』絶対優勝して下さい〜。」

「...。」

チッ、チッチッチッ! チュッ、チュチュン!(すずめの鳴き声)

「Miyabiお兄さん、Miyabiお兄さん〜。」

「...。」

「Miyabiお兄さん、夜が明けてしまいましたよ〜。
朝ですよ、早く起きて下さい〜。」

「ふあああああああ...。
も、もう少し寝かせてよ...。」

「困ったヒトですね〜。」

ジャーッ、パチパチパチッ!!(目玉焼きを調理する音)

「Miyabiお兄さん、Miyabiお兄さん〜。」

「...。」

「Miyabiお兄さん、もう8時近いですよ〜。
早く起きないと、イチコマ目(1講時目)に間に合わなくなってしまいますよ〜。
大丈夫なんですか〜。
起きて下さい〜。」

「ふあああああああ...。
Yちゃん、僕...、
今日は...、
今日は、大学を休むよ...。」

「一体どうしたんですか〜。」

体調でも悪いのかしら～。」

「ふあああああああ...。

い、いや....、

その....。

とにかく、今日は行きたくないんだ...。

ずっと、ずっとYちゃんの部屋に居たい...。」

「困ったヒトですね～。」

パクパク...、モグモグ...、(Yちゃんがこしらえた朝食を食べる音)

「Miyabiお兄さん～、

あたしは、もう出ますからね～。

お昼は、このパンを食べて下さいね～。」

「う、うん....、

行ってらっしゃ...」

「それからMiyabiお兄さん～。

昼間この部屋から、絶対に外に出ないで下さいよ～。

もし、男の人を入れてる事が～、

お隣にバレちゃったら大変ですから～。」

「う、うん....、

行ってらっしゃ...」

「絶対に、約束ですよ～。」

カチャリ、パンッ!(ドアの音)

Yちゃんが通う宮城学院女子大学、その目と鼻の先の距離に有る彼女の1人暮らしのアパート…。

男子禁制のこの部屋に、とうとう居座ってしまった私です…。

♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～
(ラジカセから流れる『バービーボーイズ』の曲)

この日は、ゴロゴロと横になって音楽を聴いたりTVを観たり…、

ただボーッとしたりして…、

Yちゃんの帰宅を待っていました…。

(Yちゃん…。)

振り返ってみれば、私の大学3年間は、アーチェリーとバイトに明け暮れる日々でした…。

その間、いろいろな葛藤を感じながら生活してきました…。

自分は何の為に生きているのか、本当はどうなりたいのか、これから将来どうしたいのか…。

その答えを求めて独りで悩み、もがき苦しんできた気がします…。

(Yちゃん…。)

そんな中で、明るい気持ちにさせてくれたのがYちゃんだったので…。

気が付くと、いつも彼女に励まされ、元気になっていく私がありました…。

そして今では、私にとってかけがえのない存在となったのです…。

ところが…。

(Yちゃん…。)

彼女の優しさに、ついつい甘えてしまい、だらしなくなって…。

しかも、肝心の件が…、

言えないままだったのです…。

(ええいッ、しっかりしろッ…!

もっと男らしくッ…!

Yちゃんに、本当の事を告げないと…。)

よしッ…!

『東北学生インドア』で勝ってみせるッ…!

彼女の目の前で、男を上げてやるぞッ…!)

静かに闘志を燃やす私でした…。

ブルルルルルルル～!!

カリカリカリカリカリ～!!(カローラのスパイクタイヤの音)

「Ｙちゃん、帰宅して早々に連れ出したりしてゴメンね...。」

「困ったヒトですね〜。」

「すっかり、忘れてたんだけどさ...、
実は、夜にアーチェリーの練習が出来る体育館があるんだよ...!
そこで、Ｙちゃんと一緒に射てたらいいな...!
なんてね...!」

「わがままですね〜。
あたし、明日出すレポートが溜まってるんですよ〜。」

「Ｙちゃんゴメンね...。
部屋に送ったら、今夜は帰るからさあ...。」

寒い季節になると、アーチェリーの練習をする者は極端に減ります...。

じっと立ったままで行う競技ですから、寒い日に射つのはツライからなのです...。

ここが東北地方であることを嫌でも思い知らされます...。

そこで、暖房完備の室内練習場の登場となるのです...。

「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」
「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」

「こんばんは...!
お邪魔しまーす...!」

「こんばんは〜。」

「オオッ?」「ヤア!」

「おニイちゃん、久しぶりだな!」

「春以来ですね...!

また練習させて下さい...!」

「はじめまして〜。」

「可愛いねーッ?」「ヤア!」

「おネエちゃん、一緒に射とうよ!」

「...。」

「〜。」

2人で訪れたのは、以前M社長に紹介された『身体障害者センター』の体育館です....。

快適な環境のこの場所を、常に十数人の障害者アーチャー達が利用しているのです....。

その全員が男性でした....。

「バシュッ!」「ボンッ!」「ガシャッ!!」(的に刺さっている矢に、射った矢がぶつかる音)

「よしッ...!」

「おニイちゃん、凄いなア!

大したモンだなア!」

「い、いや、それほどでも...。」

一方....

「バシュッ!」「ボンッ!」

「きゃはは〜。」

「おネエちゃん、カッコいいなア!」

「いやー、若い娘ッコはいいねー、」

「ンだねえ」

Yちゃんの様なピチピチ女子大生が練習に参加することなど、滅多にないでしょう....

女性が1名加わっただけで、何だかそこにいる皆が嬉しそうでした....

「バシュッ!」「ボンッ!」(Yちゃんが射つ音)

(Yちゃん....)

シューティングラインを挟んで、前後に並んで2人立っています....

私の目の前には、愛しいYちゃんが弓を引いています....

「バシュッ!」「ボンッ!」(Yちゃんが射つ音)

1本射つ度に揺れる、彼女の短めの真っ黒な髪を真後ろから見つめる私....

(Yちゃん....)

「バシュッ!」「ボンッ!」「ガシャッ!!」(的に刺さっている矢に、射った矢がぶつかる音)

「バシュッ!」「ボンッ!」「ガシャッ!!」(的に刺さっている矢に、射った矢がぶつかる音)

「バシュッ!」「ボンッ!」「ガシャッ!!」(的に刺さっている矢に、射った矢がぶつかる音)

「よしッ...!」

(やっぱり、アーチェリーはいいなあ...!!)

私が弓を握るのは鳥取国体以来でしたが、むしろ新鮮な気持ちで射つことに集中出来ました...

そもそも、インドア競技(25mと18m)の様な短距離は、得意中の得意です...!

私は、久々に汗をかいた満足感と同時に、Yちゃん共にアーチェリーの練習が出来た幸福感に包まれながら....

上々の仕上がりで、この日の練習を終えることが出来ました...

そして....

帰り道、クルマの中でした...

私は、とうとう告げたのです...

ブルルルルルルル〜!!

カリカリカリカリカリ〜!!(カローラのスパイクタイヤの音)

「Ｙちゃん...!
じ、実はさ....、
実は君に、言っておきたい大事な話があるんだ...!」

「何ですか〜。」

「ゴ、ゴホン...!」

クルマを横付けにして停めた私は、仏舎利塔と呼ばれる仙台市街の綺麗な夜景が見下ろせる丘の上で....、

遠くの街の灯りが反射して、車内がボンヤリとほのかに照らされる中....、

Ｙちゃんの眼を見つめながら、私は....、

心の中に思い描いていたことを、洗いざらい言いました...。

「じ、実はさ....、
今年一杯で....、
僕、大学を辞めることにしたんだ...!!!!
本当は留年していたんだ...。
今まで隠していてゴメン...。」

「え〜。」

「ぼ、僕はね....、
元々、クルマとか機械が好きだったんだ...。
電気とかコンピューターなんてモンは、むかなかったんだ...。
それは入学したとき直ぐに気付いた...。

こりゃ、全然ダメだってこと...。」

「え〜。」

「でも、本当にやりたい仕事が見つかった...。
年が明けたら、印刷会社に就職する...!!!!
僕、印刷屋さんになりたいんだ...!!!!
一流の技術を身に付けて...、
1人だけの小さな会社をやるんだ...!
そして、一生懸命働いて...、
カッコいいクルマに乗るんだ...。」

「え〜。」

「実は、どうしても乗りたいクルマ...、
小6の時に会った赤いスポーツカー...、
マーコス1600GTという...、
日本で4台しかないクルマが、どうしても欲しい...!!!!
200万円なら譲ってくれる人がいるんだよ...。」

「え〜。」

「僕は先に社会人になって...、
君が大学卒業するのを待ってる...、
そしたら、君と結婚する...!!!!」

「え〜。」

「それから...、
『東北学生インドア』で勝ってみせるッ...!!!!
大学最後の試合を...、
Yちゃんのために、頑張るから...!」

「え〜。」

ハーッ、ハーッ、ハーッ、(冷たい指先に、息を吐いて温めている私)

「バシュッ!」「ボンッ!」「ガシャッ!!」(的に刺さっている矢に、射った矢がぶつかる音)

白い雪がチラホラと舞う、東北工大のアーチェリー場…。

ここは、3年間に渡って仲間と共に汗水垂らして練習した、ホーム・レンジなのです…。

そこで1人黙々と、40cmの小さなターゲットに向かう、昭和60年12月の私…。

「バシュッ!」「ボンッ!」「ガシャッ!!」(的に刺さっている矢に、射った矢がぶつかる音)

「よしッ…!」

(絶対に、『東北学生インドア』で勝ってみせるッ…!

Yちゃんのために、優勝してみせるぞッ…!)

いよいよ来週は、大学最後の試合なのです…。

(優勝のプレゼントの後は、クリスマスがやって来る…!

そこでYちゃんに…、

シルバーリングをプレゼントするんだッ…!)

「バシュッ!」「ボンッ!」「ガシャッ!!」(的に刺さっている矢に、射った矢がぶつかる音)

「よしッ…!」

練習が終わった夕方のことです…。

いつものように、Yちゃんのアパートに電話を掛けました…。

♪プルルルーー、プルルルーー、プルルルーー、

(…。)

♪プルルルーー、プルルルーー、プルルルーー、

(…。)

♪プルルルーー、プルルルーー、プルルルーー、

(Yちゃん、まだ帰ってないか…。)

その後、幾度掛けても彼女には繋がらず…、

八木山を下って、国道沿いの公衆電話でも繋がらず…。

(Yちゃん、まだアパートに帰らないの…?)

仕方なしに、その日は帰宅することにしました…。

(Yちゃん、一体どうしたんだろう…。)

その晩、自宅からTELを何度も試みましたがダメでした…。

♪プルルルーー、プルルルーー、プルルルーー、

(え` …!?)

♪プルルルーー、プルルルーー、プルルルーー、

(何故出ないの…!?)

♪プルルルーー、プルルルーー、プルルルーー、

(Yちゃん、何かあったのかな…?)

その夜はよく寝られませんでした…。

頭に浮かぶのは、Yちゃんのことばかり…。

(Yちゃんの、弾むように響く明るい声が聞きたい…、

活力に満ちた黒い瞳、愛おしい少し垂れた瞼…、

チャーミングな少し小さめの唇…、

ああ…、君の微笑む顔が見たい…。)

次の日の夕方、再びYちゃんのアパートに電話を掛けてみました…。

♪プルルルーー、プルルルーー、プルルルーー、

(ウソ…!?)

♪プルルルーー、プルルルーー、プルルルーー、

(Yちゃん、何かあったのかな...?)

♪プルルルーー、プルルルーー、プルルルーー、

(Yちゃん、ま、まさか僕のことが嫌いになっちゃったのかな...!?)

居ても立ってもいられなくなった私は、カローラを駆ってとにかく彼女の元へと急ぎました...

桜ヶ丘にあるYちゃんのアパートは、建物の中央が駐車場になっています...

彼女の部屋が見える位置にクルマを停めて、私は車内からYちゃんの様子を伺うことにしました...

。

(Yちゃん、外出したままなのかな...!?)

これまで何度もお邪魔したYちゃんのアパート、その部屋の窓が真っ暗なのです...

ということは、やはり留守...!?

もし彼女が帰宅すれば、部屋の窓に灯りが灯る筈です...

寒いのでエンジンを掛けたまま、じっと窓を見つめながらYちゃんの帰宅を待ちました...

ところが、深夜になっても帰ってくる様子が無いのです...

(ま、まさか居留守...!?)

チクショウ...!!

Yちゃん、きっと僕のことを嫌いになっちゃって...、
避けているに違いない...!?)

ひよっとすると....

先日の身障者センターの帰り道、退学の件など事実を打ち明けたことがきっかけで....

2人の間に亀裂が生じてしまったのではないかと....

そう思った瞬間から、焦りや不安、そして途方もない絶望感、虚脱感が私を襲ってきました....

(でも....、どんな状況になっても....、

本気で相手を好きなら、関係ない筈だ...!!

だって、僕とYちゃんは....、

結婚の約束をしたんだもの...!!)

クルマから飛び降り、走って近くの公衆電話からTELする私....

♪プルルルーー、プルルルーー、プルルルーー、

(...。)

しかし、繋がりません....

(遭いたい....

やっぱりYちゃんに逢いたい....

遭って、2人の愛を確かめたい....。)

チッ、チッチッチッ! チュッ、チュチュン!(すずめの鳴き声)

とうとう朝になりましたが、彼女とは逢うことが出来ませんでした…。

ブルルルルルルル〜!!

カリカリカリカリカリ〜!!(カローラのスパイクタイヤの音)

「うおおおおーッ…!!!!!!」

訳もなく大声を上げる私…。

夜明けとともにハンドルを握った私は…。

小雪が降る国道を、山形方面に向かって凄い勢いで飛ばしました…。

(ま、まさか、実家に帰った…!?)

チクショウ…!!

Yちゃん、きっと僕のことを嫌いになっちゃって…、

米沢に帰っちゃったんだ…!!)

ブルルルルルルル〜!!

カリカリカリカリカリ〜!!(カローラのスパイクタイヤの音)

(Yちゃん、どうして帰っちゃったんだよ…!!

チクショウ…!!

今から、迎えに行くぞ...!!)

「うおおおおー———ッ...!!!!!!」

ルームミラーに映る情けない男の顔は、うつろな目をしています…。

山道に入った頃から、雪が強くなってきました…。

私は相変わらず、彼女に対する不信感と淡い期待が入り交じったままで…、

正常な精神状態とはいえないまま運転を続けていました…。

ブルルルルルルル〜!!

カリカリカリカリカリ〜!!(カローラのスパイクタイヤの音)

途中、真っ白な雪の中に停車しているクルマを数台見掛けました…。

彼らは、沿道でタイヤチェーンを装着しているのです…。

宮城県側は大したことない雪でも、山形県側はそうはいきません…。

ゴオオオオオオオオオオオオオオオ———ッ!!!!!!!!!!!!!!(トンネル内にこだまするクルマの音)

暗くて長い長い笹谷トンネルを進み、ようやく出口が見えてきたと思ったら…、

そこに見えたのは、分厚い雪で覆われた真っ白な白銀の世界でした…。

ブルルルルルルル～!!

カリカリカリカリカリ～!!(カローラのスパイクタイヤの音)

ノロノロノロノロノロノロ～、

山形県に入った途端、降ってくる雪の粒も量も違うのです…。

しかもここから山形市まで、ずっと下り坂が続きます…。

前に行くトラックや乗用車は、慎重に進んでいるのか軒並みノロノロ運転…。

まるで亀のように、スローペースなのです…。

ノロノロノロノロノロノロ～、

(Yちゃん、どうして帰っちゃったんだよ…!!

チクショウ…!!

今から、迎えに行くぞ…!!)

「どけどけどけどけーーーッ…!!!!!!」

反対側車線へカローラを飛び出させた私は…、

積雪の下り坂を一気に加速し、前方のトラックや乗用車を次々に抜き去りました…。

(ここは、ど、何処だッ...!?
わ、判らない...!?)

米沢市は山形県でも有数の豪雪地帯です...

チェーン未装着の私のカローラは、行けども行けども雪に阻まれスタック...

何度も脱出しながら進みますが、道に迷ってYちゃんの実家に辿り着かないのです...

ズルズルズルズルズルズル〜!!(カローラのスパイクタイヤが雪で滑る音)

(チクショウ...!!
Yちゃんの実家は、ど、何処なんだッ...!?
絶対見つけて、連れて帰るぞッ...!!)

ズルズルズルズルズルズル〜!!(カローラのスパイクタイヤが雪で滑る音)

ところが、無情にも時間は刻一刻と過ぎていき...

とうとう陽が暮れてしまいました...

ズルズルズルズルズルズル〜!!(カローラのスパイクタイヤが雪で滑る音)

自力で見つけることが不可能と感じた私は...

止む終えず、Yちゃんの実家に電話してみることにしました...

ここは米沢市内、恐らくそう遠くない場所に....

愛しのYちゃんが、きっと居る筈です....。

公衆電話を探して....、

深呼吸をして....、

TELする決心をした私....。

(お願い、Yちゃん出てっ...!!)

♪ルーールーールーールーールーッ、(公衆電話を掛ける音)

ガチャッ!

「どちらさまですかーっ。」

「あ、あの....、僕....、
東北工大のMiyabiと申しますが....、
Yさんのお母様ですか...?
こんにちは...!
あ、あの....、
Yさん、そちらに帰ってますか...!?
Yさんを....、
Yさんをお願いします...!!!」

「あのですねー!
Yは、体調を崩して休んでおりますのでー、
お断り致しますー!」

「えッ...!？」

「あ、あの...、僕...、
どうしても、Yさんと話がしたいんです...!
Yさんのお母様、お願いします...!!
僅かの時間で構いませんから...!!!
Yさんと話をさせて下さい...!!!!
お願いします...!!!!」

「あなた一、
困ったヒトですねー!
仕方ないわねー、
じゃ1分だけですよー!」

「ありがとうございます...!!!!」

そして....

「もしもし〜。」

「Yちゃん、良かった...!!
僕だよ...!!
Yちゃん、体、大丈夫なのッ...!?!」

「だいぶ治ったの〜。」

「Yちゃん、良かった...!!
落ち着いたら、また仙台で逢おう...!!
話がしたいんだよ...!!
約束してくれるかな...!?!」

「わかりました〜。
私も、Miyabiお兄さんにお話があります〜。

2・3日したら逢いましょう〜。」

「じゃね...!!」

「失礼します〜。」

(ホッ...。)

ズルズルズルズルズルズル〜!!(カローラのスパイクタイヤが雪で滑る音)

彼女の指定席、つまり助手席には誰も乗っていません...

愛しいYちゃんと、一緒に仙台に帰ることは出来ませんでした...

彼女の声を聞けただけでも一安心出来たというのが、正直な気持ちです...

(ホッ...。)

私は1人、来た道に戻って行きました...

ズルズルズルズルズルズル〜!!(カローラのスパイクタイヤが雪で滑る音)

心配していた雪は止みました...

しかし12月の山形の山岳地帯の雲は、行く先々でどす黒い闇の中にドンヨリと立ち込めていて...

、

不吉な予感がしました...

約束通り、宮学のYちゃんのアパートに電話が繋がったのは数日後の晩でした…。

「Yちゃん、体、大丈夫なのッ…!?
僕、心配しちゃったな…!!」

「もう、大丈夫です～。」

「じゃあ…、
また、遊びに行ってもいいかな…!？」

「ダメです～。」

「えッ…!？」

「もう、ダメなんです～。」

「えッ…!?
Yちゃん、一体どうしたのッ…!？」

「もう、あたしダメなんです～。
Miyabiお兄さんと、もう無理なんです～。」

「Yちゃん…、」

「ごめんなさい～。
自分の気持ちをいろいろ考えたんですけど～。
今までの様に、もう出来ないんです～。」

「Yちゃん…、」

電話じゃ、何だから、明日そっちに行くからさ...、
逢って話そう...!？」

「ごめんなさい～。
それも、出来ません～」

「そ、そんな...!!
僕は逢いたい...!!
Ｙちゃんに逢って、話がしたい...!!!
逢おう...!!!!
じゃ、今直ぐ行くから...!!!!!!」

「困ったヒトですね～。
わかりました～。
でも、部屋には入らないで下さい～」

「じゃ、今直ぐ行くから...!!!!!!」

ブルルルルルルル～!!
カリカリカリカリカリ～!!(カローラのスパイクタイヤの音)

私は彼女に告げられた言葉が、にわかには信じられませんでした...

ともかくＹちゃんに一刻も早く逢って、言葉の真意を掴むしかありません...

夜の仙台を、矢のように飛ばす私...

ブルー&アイボリー色のスタジャンを羽織ったＹちゃんは、薄緑色の建物の陰からゆっくりと現れ...

白い息を吐きながら、私のカローラに乗り込みました…。

「～。」

「…。」

ブルルルルルルル～!!

カリカリカリカリカリ～!!(カローラのスパイクタイヤの音)

薄暗い外灯の光が照らす、人影のない公園のそばに停めたクルマの中で…、

会話する若い男女の間に、夏の頃の様な輝きは失っていました…。

「もう、ダメなんです～。」

「えッ…!?

Yちゃん、一体どうしたのッ…!?

「もう、あたしダメなんです～。

Miyabiお兄さんと、もう無理なんです～。」

「Yちゃん…、」

「ごめんなさい～。

自分の気持ちをいろいろ考えたんですけど～。

今までの様に、もう出来ないんです～。」

壊れたエンドレステープの様に、同じセリフを繰り返す2人…。

会話は平行線を辿ったままです…。

長い沈黙の後....、

私はふと、呟きました....。

「Ｙちゃんのことが心配で....、
実はあの時、君の実家の近くから電話したんだ....。」

「え〜。」

「雪が凄くてさ....、
チェーンも無しで走ったら、スピンして崖から落ちそうになった....。」

「わざわざ雪の中、来たんですか〜、
困ったヒトですね〜。」

「僕なんか、どうせドジ男さ....。
何やっても失敗ばかりのダメ人間さ....。
だけど、Ｙちゃんのことは誰よりも大好きなんだ...!
一日中、君のことばかり考えてる...!」

「ホントに困ったヒトですね〜。
もし大怪我したら、どうするつもりだったんですか〜。」

「えッ...!？」

「私、Miyabiお兄さんって〜、
常に冷静で落ち着いて行動するタイプだと思っていたんです〜。
でも、意外と気が短くて〜、
時々自分のことしか見えなくなる人だった〜。」

「...。」

「Miyabiお兄さんは、わがままです～。
自分の思う通りにならないと～、
何するか判らない、ホントに困ったヒトです～。」

「...。」

「大学も面白くないからって、真面目に行ってなかったし～、
皆、頑張ってるのに、言い訳ばかり～。
Miyabiお兄さんは、わがままです～。
努力を惜しまずトライしないと～。
学生時代はもう無いんですよ～。」

「...。」

「将来のことだって、夢ばかり見て～、
スーパーカーに乗りたいとか～、
勉強も出来ないヒトが、どうして社長になれるんですか～。
現実は大変なことだらけなのに～、
無計画すぎます～。」

「...。」

「今は学生なんだから、しっかり勉強して～、
テストで良い成績をあげて～、
良い会社に新卒で採用されて～、
高いお給料を貰うから、
しっかり家庭が守れると～、
あたしは、それが一番良いと思います～。」

「...。」

Yちゃんの指摘は鋭く、まさに的を射ていました…。

私はもう彼女に反論する気は無くなっていました…。

彼女の真剣な目つきに圧倒されたままで、黙って聞いていました…。

そして…、

「あたし、自分の気持ちをいろいろ考えたんですけど～。
Miyabiお兄さんとは、もうお付き合いすることが出来ません～。
元通りの関係にさせて下さい～。」

「えッ…!？」

「Miyabiお兄さんを誘ったあたしにも責任があります～。
でも今度は、私のわがママを許して下さい～。」

「け、結婚の約束は…、」

「ごめんなさい～。
そのことは、もう忘れて下さい～。
私のわがママを許して下さい～。」

「ぼ、僕は君のことを…、
Yちゃんのことを忘れることなんか出来ないッ…!!!!!!」

「もう、あたしダメなんです～。
Miyabiお兄さんと、もう無理なんです～。」

「Yちゃん…、」

「きっとMiyabiお兄さんには～、
もっと相応しい女の人が出来ると思います～。」

だから私のことは、もう忘れて下さい～。

ごめんなさい～。」

「...。」

その日のあとのことは...、

よく覚えていません...。

宮学のYちゃんと初めて出会った時、周りを一辺に明るくしてしまう笑顔と....

その天真爛漫さが魅力の、本当に可愛い女の子だと思いました....

ところが、いざ付き合ってみると行動力や考え方は私より大人で、しかも実に懐が深い女性でした....

気が付くと、私とYちゃんの上下関係は逆転し....

彼女に励まされたり、リードされていたのです....

彼女の私に対する評価は厳しいものがありましたが、こんな私でも面倒を見てくれたYちゃんは...

、

母親にも匹敵する、実に心の優しい女性だったのでしょ...

何故なら....

数日後、こんなことがあったのです....

諦めきれない私は....

何度か電話を掛けました....

しかし2人の会話は、同じところを行ったり来たりするだけでした....

私は、たまたま自宅にあったある絵本に目が留まりました…。

それは、世界的影絵作家『藤城清治』氏の写真入りの絵本でした…。

私は小さい頃から時折、目にする彼の作品に惹かれていたのです…。

『藤城清治』氏の光と陰が織りなす素晴らしい作品は…、

誰しものが心の中に眠っている童心が、くすぐられる不思議な魅力に満ちています…。

それを見ていると、幼かった頃の自分に出逢えるような気がしてならないのです…。

私は、無意識に『藤城清治』氏の作品を真似て作ってみたくなりました…。

文房具店に行って、幾種類も色とりどりのセロファンを買ってきて…、

ハサミで切りながら、ボール紙に貼り付けていったのです…。

出来た作品は、海の中で楽しそうに泳ぐ人魚と魚たちの影絵でした…。

裏から電灯の明かりをかざすと、きれいな色が写りました…。

こんなへたくソ手作りの作品でも、Yちゃんはきっと受け取ってくれるのではないかと思ったのです…。

Yちゃんが指摘した通りだとすれば、私はたいそう、わがままな男なのです…。

確かに、いつも自分の思う通りに生きようとしています…。

無計画なことは確かにあります…。

それが周りから見れば、危なっかしく感じるのも頷けます…。

でも…、

果たして、世の中の大人たちは、本当に計画的に生きていけるのでしょうか…？

むしろ、計画通りにいかないことだらけではないのでしょうか…？

計画通りに進めようとするから、本当の自分の気持ちを押し殺して生きてはいないのでしょうか…？

本当にしたいこと、やりたいことを隠している人は不幸だと思います…。

私は違います…。

たぶん、自分の気持ちになるべく素直に生きたいのです…。

一度、『藤城清治』氏の作品を見て、童心を思い出してみてください…。

好きだったクルマのおもちゃは、今はどこにありますか…？

捨てたのは、おもちゃだけではない筈です…。

そう、子供の頃に描いた将来の夢も捨てている人が多いのです…。

大人になることは夢をあきらめることは、どこかで聞いたセリフです…。

確かにそうかも知れません…。

年齢と共に、世の中の現実に打ちのめされて、大人たちは少年の頃の夢を忘れてしまうのでしょうか…。

人生はまるで行き先の決まっていない旅のようなもの…。

私は、私らしく生きていきたいのです…。

『藤城清治』氏の作品を真似て作った影絵は、ある日Yちゃんのアパートに持っていきました…。

彼女は、どうしたと思いますか…？

それが、小説ではこんな展開はあり得ませんよね…(笑)。

「Yちゃん、今日は押し掛けてきちゃってゴメンね...?
でも、どうしてもコレを君にプレゼントしたくてさ...!」

「コレなんですか〜。」

「僕の好きな、『藤城清治』氏の作品を真似て作った影絵だよ...!
夕べ、一晩で仕上げたんだ...!
この部屋に飾ってくれないかな...!」

「え〜。」

「もう、これ以上迷惑掛けない...。
僕、もう社会人になるんだしさ...。
少しは、しっかりした大人にならなきゃね...。
そして、君は学生だから、学生らしい生活しなきゃね...。
だ、だから...、」

「あたし〜。
ホントはMiyabiお兄さんのこと、嫌いになった訳じゃないんです〜。
でも〜。」

「うん、ありがとう...。
いつまでもズルズルは良くないし...、
僕ももう、ここには来ないよ...。」

「きっと、私が迷惑掛けたかも知れません〜。
でも、さよならしないと〜。」

「シルバーリングもあげることが出来なかったし...、
だから、コレを置いていくから...、
せめて...、
時々、僕のことを思い出して...、」

「わかりました〜。
貰っておきます〜。」

「ありがとう...。」

「Miyabiお兄さん、さよなら〜。」

「Yちゃん、今までいろいろ有り難う...。
さよなら...。」

...とお別れの挨拶して、その日は何故かYちゃんの部屋に朝まで...

「〜。」

可愛らしいYちゃんの寝顔を、朝までずっと眺めていました...

(優しいYちゃんのこと、僕は一生忘れないよ...。
さ・よ・な・ら...。)

カチャリ...!(なるべく音が立たないように、静かにドアを開けた私)

ブルルルルルルルル...!!

(みんなのうたの時間です)

♪知らぬ間に 肩が離れ〜
サヨナラを 言い終えたら〜
最後は 残ることも〜
戻ることも〜
出来ない はず〜

足音が 消えてくのを〜
立ち尽くし 見送るだけ〜

最後に 解けない謎～

解けない謎～

その まま～♪

(『ラストキッス』うた：バービー・ボーイズ)より

「う、う、う、う、う、う、う...。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。」

ここは仙台駅前の朝市と仙台アメ横などが立ち並ぶ繁華街を、人混みをかき分けて行った先にあるビルの3階...。

東北唯一のアーチェリー・プロショップの狭い部屋の中で、人目もはばからず泣き声を上げるのは....、

私....。

「そうだったかァ、宮学のYちゃんと上手くいってるのだと思っていたがなァ!」

多少苦笑いの表情ではありますが、失恋した私を慰めているのはこのM社長です...。

「う、う、う、う、う、う、う...。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。」

「Miyabi君、人生には色々なことがあるモンダ!
今は悲しいだろうが、きっと後で良い思い出になる筈だゾ!」

高校入学と同時に始めたアーチェリー、偶然にも同じ年にこの店が開店しました...。

以来、M社長は今日まで私の青春時代を見届けてくれた訳です...。

彼には、何かとお世話になりました...。

「う、う、う、う、う、う、う...。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。」

「Miyabi君、今度の日曜日は絶対ガンバレヨ!
お前にとって、大学最後の試合なんだろう?
在学中は今年一杯、東北学生チャンピオンなんだからなァ!
恥ずかしくないショットしろよッ!」

「う、う...。。
『東北学生インドア』、が、頑張ります...。」

そうです、もう二度と無い学生時代のフィナーレに最後まで精一杯力を出し切って...、
後は、青春時代に悔いを残さないことだけなのです...!

まさに、ラスト・ショット...!

クリスマスを一週間後に控えた昭和60年の冬...、

この年、『東北学生インドア選手権大会』が初開催されたのは...、

久々に青い空が見える清々しい朝の、仙台市太白区秋保町の屋内体育館です...。

ここで繰り広げられようとしているラスト・ショットの舞台に...、

いつものように、茶色のカロラで乗り込んできた私...。

ブルルルルルルル〜!!

カリカリカリカリカリ〜!!(カロラのスパイクタイヤの音)

勿論、助手席は空白です...(笑)。

ガヤガヤガヤガヤガヤガヤガヤガヤ～!!!!
「チワー!!」 「こんにちはあ」 「ちわっすー」
「こんちわーッス!」 「今日は～」 「チワー!!」

体育館の中に入ると、集まってきた学生達で既に一杯でした…。

私は、ある一角に腰を下ろして弓を組み立てながら…、

これから始まる試合の、独特の緊張感に身構えていました…。

ところが…。

(チラッ…!)

(チラチラッ…!)

あ、Yちゃんがあそこに居たッ…!)

やっぱり気になるのが、宮学のYちゃんの様子です…。

「きゃはは～。」

数十メートル先で仲間と談笑しているYちゃんの声に気付いて振り向くと、そこには彼女の懐かしい横顔が見えました…。

(ムッ...!)

本当は嬉しい筈なのに、何故かしら腹が立つ私...

嬉しいのと悔しいのが、複雑に混じって感情がおかしくなりそうです...

やがて出てくるのは....

溜息....

「はあ。。。。。。。」

つい数週間前までは、2人ラブラブだったのに....

彼女を失ったことに、改めて切なさを感じる私でした....

学生最後の大切な試合なのに....

こんな調子では、集中出来そうにありません....

自分でも情けなくなってきました....

「こうだ〜い!!! ファイツ!!! オーツ!!!」

いよいよ、『東北学生インドア』試合開始時間です....

東北工業大学に入学して3年…。

不本意ではありますが、中退を選択した私にとって最後の最後に望む、ラストショットが始まりました…。

「ピーッ!!」(ホイッスルの音)

秋保町体育館の入り口側に左右一杯に並んだ学生アーチャー達が、一勢に矢を放ち始めました…。

「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」

試合の前半は、25m競技です…。

振り返れば、この3年の間に私のアーチェリーの技量は確実に成長し、同時に試合の成績も格段に向上しました…。

その裏には、実はお世話になった先輩をはじめとする多くの友人や仲間が存在があり…、

そして何より家族の支えがあったからこそ続けられた、ということを忘れてはいけないと思います…。

「バシュッ!」「ボンッ!」

(それッ...!)

「バシュッ!」 「ボンッ!」

(くそッ...!)

「バシュッ!」 「ボンッ!」

(あちゃッ...!)

私にとって得意のはずの短距離、あるインドア大会ではオリンピック選手を破った経験も有りますが、何故がショットが安定しません…。

3本射ちを5回繰り返す、たった30本ですから、油断できないのですが…、

思うようにブル(10点、9点)が獲れないのです…。

結局、平凡な得点で前半戦の25m競技を終えてしまいました…。

間もなく集計結果が発表されましたが、私は上位にいるものの、暫定トップの選手から10点以上離されています…。

このままでは、優勝は厳しいかも知れません…。

少し弱気の私が、そこにはありました…。

後半の競技が始まる前の休憩時間…。

2回のギャラリー一席から入り口に向かって降りる際…、

偶然、宮学のYちゃんが階段を上ってきました…。

階段上ですれ違いざまに、顔を合わせる2人…。

「… (チラッ!) 。」

「～ (チラッ!) 。」

ついこの間までアツアツだった若い男女は…、

横幅2mほどの、この空間で一瞬だけ遭遇しました…。

私とYちゃんは、間もなく交差して…、

立ち止まることなく、お互いの距離がどんどん離れていきました…。

(ムッ…!)

Yちゃんと顔を合わすことが出来て本当は嬉しい筈なのに、何故かしら腹が立つ私…。

嬉しいよりも…、

悔しい…!

(クソッ…!!)

僕に、何か一声掛けてくれたっていいのにッ…!!)

と、思った直後でした....、

「Miyabiコーチ～、
優勝目指して午後も、頑張ってください～。」

一瞬、通り過ぎた後で....、

私の背中に向かって投げ掛けた、Yちゃんの弾むような明るい声の激励に....、

私はチョットびっくりしましたが、やっぱり嬉しくなりました....。

そして、言葉を返すのがやっとでした....。

「う、うん...!
わ、Yちゃんもね...!」

たった、たったそれだけでしたが....、

いつか彼女が、最後までベストを尽くすことの重要性を説いたことがあったのを思い出しました....。

そうなのです....。

ダメだと決めているのは自分自身の弱さなのです....。

自分の未来は自分で掴む...!

誰だって自信がある訳ではありません...

そこに必要なのは、勇気...!

勇気を出して、前へ進むことなのです...!

何事も、最後の最後まで諦めてはいけません...!

(よーしッ、勇気を出して前へ進もう...!!!!)

諦めないで、頑張ろう...!!!!)

強く優しいYちゃんのメッセージが、私を奮い立たせたのです...

「ピーッ!!」(ホイッスルの音)

試合後半、18m競技です...

「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」「バシュッ!」「ボンッ!」

たった40cmの大きさの標的の、ど真ん中の直径が僅か4cmの10点の得点帯...

それっぽっちの小さな黄色い円を狙って...

勇気を振り絞って射つ私...

本当に、これがラスト・ショット...

「バシュッ!」「ボンッ!」

「バシュッ!」「ボンッ!」「ガシャッ!!」(的に刺さっている矢に、射った矢がぶつかる音)

「バシュッ!」「ボンッ!」「ガシャッ!!」(的に刺さっている矢に、射った矢がぶつかる音)

「よしッ...!」

「バシュッ!」「ボンッ!」

「バシュッ!」「ボンッ!」「ガシャッ!!」(的に刺さっている矢に、射った矢がぶつかる音)

「バシュッ!」「ボンッ!」「ガシャッ!!」(的に刺さっている矢に、射った矢がぶつかる音)

「よしッ...!」

前半戦の形勢を逆転した私は、怒濤の勢いで飛ばし続け...

「ピーッ、ピッピッピーッ!!」(試合終了のホイッスル)

ついに...!!

「それでは～、最終成績を発表しま～す!!!

男子個人第1位～、『Miyabi選手(東北工業大学)』～!!!」

「おお～ッ!!!!」 「ざわざわざわ～!!!!」 (どよめき)

「パチパチパチパチパチパチパチパチ～!!!!!!!!!!!!!!」

この瞬間、私は....、

史上初の....、

春の、東北王座決定戦(ハーフラウンド競技)、個人男子優勝....、

夏の、東北学生個人選手権(オールラウンド競技)、個人男子優勝....、

秋の、東北学生フィールド選手権(フィールド競技)、個人男子優勝....、

そして....、

冬の、東北学生インドア選手権(インドア競技)、個人男子優勝....、

と....、

前人未踏の4タイトルを制覇(昭和60年度の公式試合に於いて)という、伝説を残したのですが....。

実はその偉業達成の陰に、Yちゃんとのロマンスをはじめ若い故に起こる様々な悩みや葛藤があったのです....。

戦いが終わって....、

私は弓を納めたケースを抱え、体育館の出口に向かうと....、

そこに宮学のYちゃんが立っていました....。

自販機コーナーの前に佇む、ブルー&アイボリー・スタジャン姿のYちゃん....。

あの懐かしい愛らしい眼が、私を掴まえました…。

「やあ、Yちゃん…!」

「Miyabiコーチ～、優勝おめでとうございます～。」

「どうも、ありがとう…!」

「あたし、コーチが勝つこと信じてました～。
会社でも頑張ってください～。」

「Yちゃん、ありがとう…!
社会人になっても頑張るよ…!」

自分の未来は自分で掴む…!

誰だって自信がある訳ではありません…。

そこに必要なのは、勇気…!

勇気を出して、前へ進むことなのです…!

何事も、最後の最後まで諦めてはいけません…!

(よーしッ、社会に出てからも勇気を出して前へ進もう…!!!!)

どんな事でも諦めないで、最後まで頑張ろう...!!!!)

それは、未来へ繋がるラスト・ショット...

こうして、私の少年時代が幕を下ろしました...

【完】